

攝	河	宀
𠂔	攝	𠂔
精	精	𠂔

II



財団法人 大阪府文化財センター

撰 河 泉
発掘資料精選
Ⅱ



財団法人

大阪府文化財センター

センターの歩みを語る精選に

昭和40年代に入ると国土開発は急速に進展、その中核となった事業は基幹道路の造成にあった。大阪府と和歌山県を結ぶ第二阪和国道もそうした事業の一環。この路線が和泉国を代表する堺市の四ツ池遺跡、和泉・泉大津市に跨る池上曾根遺跡を南北に縦貫する事実が判明。保存運動が起こる中、府は京都大学水野清一先生の肝いりで調査を主担する第二阪和国道内遺跡調査会を設置。1億2千万円の所要経費で調査に入った。調査規模に目を見張りその経費に驚愕したことは今も記憶に鮮やか。日本考古学始まって以来、最大規模、最大予算、空前絶後かと思えた。調査手法は安定せず、寄せ集め部隊に近い組織、加えて人の和乏しく調査は難航、進展せず苦渋の日々。もしこれが今日であればこの程度の面積ならば、安定したスピード、少ない人数、少ない費用、少ない日時で取り組むことは十分可能。より詳細、より整然たる成果を生み出すことができるであろう。

第二阪和国道内遺跡調査会は調査事業の終了とともに解散。その組織を改め、「財団法人 大阪文化財センター」が設立された。言い換えれば、今日の大規模開発に取り組むノウハウは、この大阪文化財センターが創造発展しつつ誕生させた申し子と言えるであろう。その後、関西国際空港建設に先立ち、その発掘調査を主担するべく「大阪府埋蔵文化財協会」が設立され、その責を終えた1995年にセンターと統合し、一層規模を大きくした「大阪府文化財調査研究センター」が生まれた。そして本年4月には「大阪府博物館協会」と統合し「大阪府文化財センター」と装いを改め、一層内容を充実させた。この間30年、本年は財団設立30周年の記念の年にあたる。

この30年間、調査を担当する考古学徒は調査現場である遺跡に足をしっかりと踏み凝らし、危機に瀕する遺跡を前に戦う学徒として真摯に調査に取り組んだ。支える事務局が早朝から夜遅くまで膨大な積算、管理運営に取り組み、確固たる基盤を持つセンターを創り出し、強固な組織力、前向きの調査姿勢でもって府民に貢献できる調査成果を挙げてきた。その躍進、充実の背景には初代理事長加藤三之雄先生、二代理事長坪井清足先生の高い理念、広い視野、鮮明な旗色が常に息づき、藤沢一夫、堅田直理事など、設立時以来、慈護の眼で見守って下さる理事会、評議員会の諸先生方の励まし、教導があった。

本年、大阪府文化財センターは設立以来30年を迎える。その間、地道に積上げてきた調査は膨大な数に上る。調査と共に見出される遺物は到底一ヶ所に収まる状況ではなく数ヶ所の収蔵施設を設置し保管管理している。学術的価値の極めて高い文物、美しく華やかな芸術的文物、新聞や雑誌などに常々掲出される話題性のある文物、心を癒し力を与える文物、そうした文物はいまや千々萬々、今後、弥生文化博物館、近つ飛鳥博物館での公開計画を推進する一方、多くの府民や研究者に冊子として精華の程を公刊してはとの声が挙がり、1995年の統合に際して発刊された『摂河泉発掘資料精選』に倣い、設立30周年時の本年、その第2集を刊行することとなった。激務の中、執筆・編集と骨身を削り務められる職員の努力で見事な本冊が世に出ることとなった。各機関、研究者にとどまらず広く社会に活用される。それは最高の喜びである。センターが一層の努力で将来、再度こうした書冊を刊行される喜びの日を持ちたいものである。

財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野正好

目 次

I 部 調査概要

(財)大阪府文化財調査研究センターの調査体制	1
北部調査事務所の調査	2
中部調査事務所の調査	6
南部調査事務所の調査	10
遺跡分布図	14

II 部 発掘資料精選

旧石器時代	16
縄文時代	18
弥生時代	28
古墳時代	54
古代	88
中世	123
近世	142
近現代	154
文献目録	156
遺跡索引	161
INDEX (英文目録)	164

例 言

- ・本書刊行は(財)大阪府文化財センターの設立30周年記念事業のひとつとして行われたものである。
- ・本書は、(財)大阪府文化財センターの前身である、(財)大阪府文化財調査研究センターの行った発掘調査の概要をI部に、代表的な出土品の紹介をII部に収めた。
なお、II部には(財)大阪府文化財調査研究センターの前身である、(財)大阪府文化財センターの成果も一部含めている。
- ・執筆者については、それぞれの文末に表記したほか、図版準備、編集者とともに巻末に示した。

北部調査事務所

箕面市今宮3丁目19番2号

TEL (072) 728-6021

FAX (072) 728-5313



中部調査事務所

東大阪市長田東1丁目9番16号

TEL (06) 6785-3921

FAX (06) 6785-3515

南部調査事務所

堺市南田出井町1丁目1番10号

TEL (072) 227-6001

FAX (072) 227-6101



I 部 調査概要

(財)大阪府文化財調査研究センターの調査体制

(財)大阪府文化財調査研究センターは、1995年4月に発足し、それまでの(財)大阪文化財センターが中河内方面、(財)大阪府埋蔵文化財協会が泉州方面を中心として展開してきた調査事業を継承しながら、府下全域の調査事業に対応するため調査体制の整備を行った。調査部に調整課を置き、全体的な調整機能と工事設計・施工管理を受け持たせ、現地調査は北・中・南調査事務所が実施する。北部調査事務所では、淀川より西側の地域、中部調査事務所では、淀川と大和川の間地域、南部調査事務所では、大和川より南側の地域とする。いずれの調査事務所も写真撮影と現像・焼き付け等の処理、遺物の整理と資料・遺物の収蔵を併せ持つ施設とし、特に中部調査事務所には遺物の保存処理施設と専門職員を配置している。また、各調査事務所には、調査を担当する係を配置し、事業量に合わせて係や係員配置を適時変更できる体制とする。調査に係わる事項で事業者との事前協議や契約以外の調査実務については、調査事務所長が管理運営することとし、現地での調査指導、作業管理、職員の出勤管理、非常勤職員の雇用・出勤管理、調査に必要な消耗品の管理、その他事務所の維持管理を行うこととする。これらの専門性の高い業務をこなすために、所長には技術職員を配置している。統合後すぐには事務所を設置できなかった北部調査事務所は、茨木市横江に仮事務所を設置し、1年後に箕面市今宮に事務所を移す。南部に於いては、統合前から事務所の移転が計画されていたが借地交渉等で改装工事が遅れて12月に移転を行う。また事業の集中に応じて分室を適時設置し、調査の効率的な進捗を図ることを意図する。

埋蔵文化財の調査は、引き続いて大阪府教育委員会の指導のもとで調査を行う。事業としては国際文化公園都市建設事業、恩智川治水緑地公園建設事業、

南河内道路建設事業、竜華地区区画整理事業を始めとして大和川高規格堤防建設事業、大阪空港整備事業、府都市計画道路事業、府営住宅建て替え事業、府庁周辺整備事業と、過去に現地調査を実施した遺物整理事業等を行う。その後は第二京阪道路建設事業、吹田操車場整備事業、恩智川治水緑地公園建設事業(第二期事業)、竜華水処理施設建設事業等を実施することになった。また、史跡整備事業に関しても積極的に受託することとし、最初の事業として、和泉市と泉大津市に跨る国史跡池上曾根遺跡の第一期史跡公園整備事業を和泉市から受託した。この整備事業は和泉市、泉大津市、大阪府教育委員会が一体となって実施しているものである。当センターが調査を行った大型建物跡を始めとして数棟の建物などが復原されることになり、3ヶ年の期間をかけて復原工事を施工した。整備事業自体は6年間の継続事業となり2001年3月で終了したが、第二期整備に向けての発掘調査を2001年度末から受託した。

さらに当センターの調査機能の拡大を図るために茨木市安威川ダム建設に伴う総合調査・泉佐野市日根荘の総合調査以外に国際文化公園都市建設事業地周辺の総合調査を手がける。調査の結果、地理地質、石造美術、歴史環境、キリシタン遺物等に多くの成果を得ることが出来た。これからも大規模な開発により周辺環境が大きく変化する恐れのある地域に関しては、埋蔵文化財の調査と併せて地域の歴史環境の復原と継承に取り組んで行く必要がある。

当センターは2002年4月に(財)大阪府博物館協会と統合し、新たに(財)大阪府文化財センターとしてスタートを切った。今後も大阪府内の文化財の調査・研究・保存・活用・普及啓発並びに生涯学習の場を提供する機関としての役割を果たしていきたい。

(井藤 徹)

北部調査事務所の調査概要

1995年以降の調査事業として北部では5事業がある。先ず住宅都市基盤整備公団が行う国際文化公園都市の発掘調査である。箕面市東部から茨木市北部にかかる北摂丘陵で計画面積が約742.6haを測る膨大なものであった。1992年から2000年まで行った調査面積は約18万㎡であった。調査前には周知の遺跡として佐保の石槽が知られるのみであったが、多くの遺跡の存在が確認されるに至った。

旧石器時代では粟生間谷遺跡で7箇所の石器製作跡や礫群が確認され、約3,000点もの石器が検出された。石器はサヌカイト、チャート、鉄石英等の材が使用され、特にチャートの利用が目立つ。接合資料は複数認められる。礫群は従来考えられている性格とは異なり、人頭大の石を環状に、しかも2重に配されている事が確認された。配石の点数は630点である。石材の分布ではサヌカイトとチャートの集中箇所に分かれる事も本遺跡の特長である。石器はナイフ形石器、スクレイパー、角状石器等がある。

縄文時代では川合裏川の左岸段丘上に、石器や土器の存在が確認された。粟生間谷遺跡では後期～晩期の土坑やサヌカイト埋納遺構が検出され、突帯文土器やサヌカイト製石核・石器等が認められた。徳大寺遺跡では晩期の竪穴住居・炉・柱穴が確認され、土器の他に垂飾石製品も出土している。

古墳時代から古代は栗栖山南墳墓群の古墳と古墓がある。古墳は6基、木棺墓が1基で7世紀後半で

ある。古墳は1基のみが竪穴系小石室である。また付近には8～9世紀の火葬墓や焼土壙群が存在する。火葬墓では焼骨が納められた土師器甕が確認された。

古代の遺構では、奈良三彩が出土した粟生間谷遺跡南側で奈良時代から平安時代の掘立柱建物が数棟確認され、特に大型建物付近では銭貨が埋納されたピットが検出された。平安後期から中世にかけては川合裏川の右岸で建物群と土壙墓が確認され、土壙墓には刀子や松喰鶴文鏡等が副葬されていた。

中・近世の墓地としては先の栗栖山南墳墓群が存在する。調査は尾根の斜面、約2,800㎡の面積に約600余りの墓と火葬所が確認された。墓には火葬墓と土葬墓がある。火葬墓は、土壙で火葬して即埋骨されるものと、別の火葬所で火葬し、骨・灰を納めるものに分かれる。前者はその土壙が火葬所と火葬墓の兼用である。これらの土壙の上部施設として方形や円形の石組遺構、石仏・五輪塔の石造物が設けられる墓が存在する。また施設のない墓も存在する。更に上部施設が在っても下部に土壙のない墓も存在し、墓の構造は多彩である。火葬墓の土壙では被熱痕跡が認められ、煙道を持つものも存在する。なお2基の墓に烏帽子が納められていた事は注目される。本遺跡は今後惣墓や郷墓、両墓制の視点からも検討していく必要があるだろう。

栗栖山砦跡は栗栖山南墳墓群の北側、丘陵の頂上部に位置する。調査前より山城跡として知られており、石垣や竪堀等が認められた。砦は周囲が急斜面



粟生間谷遺跡 旧石器出土状況



栗栖山南墳墓群

を成す要害の地である。また亀岡に至る2つの街道に挟まれ、西国街道を見下ろせる要衝の地である。調査では曲輪・通路・塹堀・出入口・土塁・石積等が確認された。曲輪では礎石と柱穴が検出され、3棟の建物が推測された。1棟は庇付建物で木舞の痕跡がある被熱した土壁が認められた。砦の時期は15世紀末から16世紀中葉で、短期間の中で曲輪等の変遷が見られる。出土遺物も青磁や白磁、備前・丹波・瀬戸美濃焼の日常雑器、短刀・鎌の武具、鎌・釘・銭貨等の金属製品と豊富である。本砦は文献には記録されていないが、周辺には多くの戦国時代の城跡が残されており、当時の緊迫した状況が窺える。近年、城跡の調査は珍しくないが、完全に調査された遺跡は数少ない。

古代から中世にかけては、徳大寺遺跡の梵鐘鑄造遺構がある。時代は10世紀後半である。1辺約2m、深さ約1.1mの方形土坑の底部で、鑄型底部と井桁の痕跡が確認され、梵鐘鑄造型も検出された。梵鐘鑄造土坑は大阪府では2例目であった。本遺跡では同時期の鍛冶炉や炭焼窯も在り、鍛冶炉からは鍛鉄片が確認されている。

近世では「徳大寺」寺院遺構が在る。鑄造遺構が検出された同丘陵に位置し、尾根の先端頂上部を平坦にして建立された。調査前より宝篋印塔、墓石等が在り、瓦等も散乱していた。創建年代は不明であるが、『摂津国絵図』（1605年）に村の名が見え、1698年に黄檗宗萬福寺の僧了翁が再興した。幕末に住職の尼僧が殺害され閉寺となり、その後廃寺となる。調査では柱穴、土坑、溝、池等が確認され、「徳大禪寺」の文字瓦が検出された。



栗栖山砦跡

整備公団の事業として他に総持寺遺跡と溝咋遺跡がある。総持寺遺跡は1994～1997年に約25,530㎡を調査した。遺跡は西国三十三箇所霊場第二十二番目札所、総持寺の北側に位置し、古代から中世にかけての集落が検出されている。特に奈良時代の掘立柱建物は約70棟も検出され、最盛期であった。柵、井戸、土坑、溝等の遺構も多く確認されている。遺物は巡方や風字硯、円面硯、墨書土器、緑釉陶器が見られ注目される。墨書は土師器杯底部に「周防」と書かれたもので、井戸からの出土である。

中世では掘立柱建物以外に7基の墓が確認され、2基の土壙墓には烏帽子と小刀が納められていた。烏帽子の出土は北摂地域では初めてであった。副葬品では小刀、青磁碗、瓦器椀等がある。大阪府教育委員会の調査地点に於ても平安時代の建物が少なく、中世で多くなるのは同様である。

本遺跡の立地する安威川と女瀬川に挟まれた富田台地上には、太田茶臼山古墳（伝継体天皇三島藍野陵）、今城塚古墳、太田廃寺跡等が所在し、また郡家川西遺跡（島上郡衙推定地）と郡遺跡（島下郡衙推定地）のほぼ中間に位置する等、古墳時代から古代・中世にかけて政治的に重要な地域であった。

溝咋遺跡は1995年～1999年度に調査が行われ、面積は17,923㎡を測る。遺跡は茨木学園町に所在し、安威川の左岸沖積地に立地しており、弥生時代中期から近世にかけての複合遺跡である。弥生時代では前期の河川より古・新段階の壺や甕が検出され、中期では足跡・石庖丁・プラントオパールが、中期末・後期では木棺墓・土器棺墓が確認された。木棺墓は底板のみであった。隣接した土坑には鋤が埋納



総持寺遺跡 土壙墓

されていた。土器棺の棺身は総て壺で、鉢や高杯で蓋がされていた。脂肪酸分析ではヒトと確認された。遺物で特筆されるものに円環型銅釧がある。

古墳時代前期は集落域と水田域が明らかになり、竪穴住居、掘立柱建物、柵、井戸等が確認されている。遺物は多量に出土し、人面線刻土器、鳥形土製品、土製勾玉、小型仿製鏡、石臼、石杵、鉄製手鎌、鉄製鑿等が見られる。小型仿製鏡は柱穴から出土したものである。土器は他地域のものが多く見られる。木製品も多量に出土しており、鋤・鍬のほか大足、腰掛、形代、琴と多彩である。水田は集落の南側の低い所に広がる小区画水田である。大畦畔の中には埋甕、枝、樹皮等が確認され、棒が甕の口縁から底部を貫通するものも在り、農耕祭祀の一端を窺うことができた。集落は自然堤防の微高地上に立地し、水田は集落の南側の低地である。

中期から後期では水田域はそのままで変わらないが、集落が水田を挟んだ南側にも新たに展開する。遺物量は前期に比べて減少する。遺構としては竪穴住居、掘立柱建物、河川、水田等が検出された。住居には作り付け竈がある。遺物は製塩土器、韓系系土器、初期須恵器、滑石製品、滑石未製品、滑石原石、玉砥石、銅製耳環等が検出され、土師器の樽形甕は注目される。木製品では下駄が出土している。

古代では遺構、遺物共に急激に減少するが、河川から「奈肱□」と墨書された土器が検出された。奈良時代である。平安時代の水田面では銅鈴が、鎌倉・室町時代では坪境溝で板塔婆が認められた。また中世～近世では方形の溝に囲まれた1×1間の掘立柱建物が確認された。溝咋神社上の宮の跡である。



溝咋遺跡 古墳後期水田

近世では人間の頭蓋骨や、梵字・偈文・真言・戒名・「為道春禪定□」と墨書された卒塔婆がある。

住宅関係では玉櫛遺跡と東奈良遺跡があり、何れも大阪府建築部の事業である。玉櫛遺跡は茨木市玉櫛に所在し、元茨木川左岸の沖積地に立地する。調査は1995・1997年に3,200㎡を、2000～2001年は3,234㎡を行った。掘削深度は大凡1.8～2.7mである。遺構面は7～9面で、時代は弥生中期～室町時代である。特に中世の遺構が顕著であり、遺構は掘立柱建物と溝が確認された。溝は堀と推測され、溝の内側に主屋と思われる2棟の大型建物が存在する。遺構では桶棺墓・箱棺墓・火葬墓等の墓が近接して在り、特に箱棺墓の1基は1辺約0.5mを測る、竹を編んだ行李状の棺である。内部には毛髪、金属片、漆器碗、銭貨6枚、炭化玉6個が副葬されていた。出土遺物では輸入陶磁器、漆器・下駄・箸・曲物・卒塔婆等の木製品、山吹双鳥文鏡・銭貨・刀子の金属製品がある。以上の調査から中世荘園村落の在り地有力者層の姿が窺える。

2000～2001年の調査では古墳時代中期の柵状遺構や掘立柱建物が確認され、中世では水田・自然流路が検出された。流路内では水制杭が打設されていた。遺物では特に蘇民将来札や人形、墨書・墨画された土師器小皿が注目される。

東奈良遺跡は1994～1997年に2回の調査が行われ、1次調査で弥生中期から古墳時代の方形周溝墓等と、舟形・把頭土製品、鋤鍬の未成品、鋤先等が検出された。2次調査では銅鐸形土製品が認められた。

大阪モノレール整備事業では、1992～1996年に豊中市蛸池宮の前遺跡、蛸池東遺跡、麻田藩陣屋跡、蛸池遺跡、蛸池南地区の13,820㎡を調査した。宮の前遺跡は弥生時代後期の密集土坑群、蛸池東遺跡は古墳時代中・後期の掘立柱建物・竪穴住居が確認された。特に中期の建物は大型で5棟検出され、難波宮下層の大型建物に次ぐ例である。麻田藩陣屋跡は古墳～明治時代の遺構が検出され、特に江戸時代の陣屋を巡る堀は現存する絵図面と一致し、外堀であ

る事が判明した。遺物は麻田藩時代の陶磁器類が主である。蛭池遺跡では古墳～奈良時代の密集土壙群の数箇所より高等動物の脂肪酸が認められ、墓の可能性が大きくなった。

蛭池南地区は後期旧石器の国府型ナイフ・翼状剥片等が単純包含層から確認された。

麻田藩陣屋跡は市街地再開発に伴って1999～2001年にも調査を行った。陣屋は大坂夏の陣後に造られ、17世紀に整えられる。藩祖青木一重から14代廃藩置県まで続く。調査は絵図の重臣屋敷の箇所である。遺構は近世、古代、古墳が確認され、特に麻田藩時代は屋敷境溝・井戸・土坑の他、外堀・土塁・大溝等が確認された。屋敷境溝・土塁は絵図と一致する。大溝は絵図に見えず、初期の堀の可能性もある。遺物は17～19世紀ものが主で、「洲浜」を家紋として用いた隅瓦、「麻」名磁器、焼接ぎの中国製磁器皿、ヨーロッパ製磁器皿、青磁溶着匣鉢、トチン等が見られる。窯道具の出土は藩窯の存在も推測される。

都市計画道路の調査では、庄田遺跡・宿久庄西遺跡が在る。庄田遺跡は1997年に9,800㎡が調査され、奈良時代を中心とした掘立柱建物、塀等が検出された。遺物は陶硯、墨書土器、緑釉・灰釉陶器、銅鈴、九州産製塩土器がある。宿久庄西遺跡は2000～2001年に12,900㎡が調査された。奈良時代を中心とした掘立柱建物、木組井戸等が検出され、鞆羽口、鉄屑、円面硯が有る。平安末期のピットより犁先が出土した事は興味深い。両遺跡は隣接しており、奈良時代に同一の集落を成していたと考えられ、勝尾寺川対

岸の粟生間谷遺跡との関連も想起される。

明治の森国定公園北西部の丘陵に計画された「水と緑の健康都市」の調査は、箕面市下止々呂美小畑遺跡の3,020㎡で、火葬墓を含む石組墓、石仏列・長方形区画、石積が確認され、中世の墓地と判明した。石組墓は203基も在り、墓坑上に石が方形に組まれる。壙内では被熱痕・炭・人骨が認められた。人骨は総て火葬され、短刀等が副葬されるものも有る。

J R吹田操車場跡地の調査は1998・2000年に行われ、古代～中世の集落跡が確認された。古墳時代前期溝、平安時代条里型水田が検出された。遺物は須恵器大甕、土馬、墨書土器、転用硯、灰釉陶器等がある。

大阪国際空港内の航空施設整備事業では、2000・2001年に住吉宮の前遺跡646㎡と勝部遺跡2,562㎡が調査された。前者は特に古墳時代後期の大溝が確認され、後者は弥生時代後期から中世の遺構が検出された。弥生時代後期は水田・河川、古墳時代前期は溝・土坑、中世は木枠井戸・溝等が確認され、多量の土器も出土し、中に初期須恵器も認められる。

(小野)



麻田藩陣屋跡 全景



勝部遺跡 溝

中部調査事務所の調査概要

1995年以降に中部調査事務所が担当した主な調査は、恩智川治水緑地事業に伴う池島・福万寺遺跡、府庁周辺整備事業に伴う大坂城三の丸跡、府営住宅建替えに伴う志紀遺跡、陸上自衛隊八尾駐屯地内の田井中遺跡、都市基盤整備公団八尾住宅地内の小阪合遺跡、JR久宝寺駅南の区画整備に伴う久宝寺遺跡、近鉄奈良線連続立体交差事業に伴う瓜生堂遺跡、第二京阪道路建設に伴う打上遺跡・高宮遺跡・大尾遺跡と範囲確認調査である。

池島・福万寺遺跡

1984年から大阪府教育委員会によって本格的に始まった池島・福万寺遺跡の発掘調査はその後当センターが引き継ぎ、2002年1月に第1期工事区分の現地調査を終了した。長期にわたった調査では、平安時代以降の整然とした条里遺構の堆積過程や氾濫痕跡について緻密な検討が積み重ねられ、水口の発見や畦に埋められた可能性のある銅鈴なども見つっている。

弥生時代前期から古墳時代以前の地層においても、わずかな高低の変化を反映した水田の検出や流路に沿って起こった洪水の跡、建物跡や方形周溝墓状の墳墓などが検出されている。また、最後に触れるが、ここで把握された弥生時代中期の有機質土層は、広く河内平野低湿地部の層準比定に有力な手がかりとなる可能性が強い。



池島・福万寺遺跡 弥生前期水田

志紀遺跡と田井中遺跡

八尾市の志紀遺跡と田井中遺跡は指呼の間にあり、弥生時代前期以降の水田や集落跡、周溝墓などが確認されている。志紀遺跡の調査は、1983年以来各機関で断続的に行われており、2000年度の調査では弥生中期の水田の一面から河内独特の石小刀をはじめとする打製石器が大量に見つかったほか、板状の人形木製品が出土している。この人形木製品は現状では最も古い出土例である。

田井中遺跡も各機関による数次の発掘調査が行われており、西よりの平野川改修工事地点で弥生前期の環濠集落の存在が報告されている。95・96年度に実施した当センターの調査では東よりの砂堆部分で、弥生前期の方形周溝墓、中よりの微高地部で弥生前期・中期の土器を大量に含む土坑や土器溜まり、古墳時代初頭の竪穴建物などが見つっている。



田井中遺跡 竪穴建物

大坂城三の丸跡

1999年度に実施した大阪府警新庁舎建設に伴う発掘調査は古代から現代まで各時代で大きな成果をあげた。調査地点は戦前に陸軍関係の施設があったところで、防毒マスクや鉄帽、壊れた銃剣、日本陸軍

の認識票や襟章、食器類などが廃棄された土坑などは米軍進駐前の慌ただしさを物語る。

豊臣大坂城の時代は三の丸の西端にあたり、徳川期に大きく改変を受けていたものの、削平を免れた部分では礎石をもつ屋敷跡がみつき、佐竹氏の家紋瓦や金箔瓦、各種陶磁器、漆器椀、硯、犬形土製品や人形、羽子板などの玩具、大量の銭貨、刀の柄に用いられた飾り付の目貫、鎧の小札、碁石と将棋の駒など武家屋敷の生活を彷彿とさせる品々が数多く出土している。三の丸築造以前にあった町屋の関連では、大工道具の一つである軽子、鋳物の工房、竿秤と分銅、物差しの尺、算盤玉などが出土し、大坂城下の賑わいを垣間見ることができる。

調査区北寄りに深い谷があり、ここで検出された水口と無数の足跡を伴う中世の水田跡は、この一帯では初めての確認例である。

この谷部では7世紀代の大量の木簡や絵馬、木製品と須恵器・土師器などの遺物が出土した。南側の高台にあったと想定される施設は豊臣期に削平されていると考えられるが、多数の木簡のうち「戊申年」と「秦人凡国評（こおり）」を記した木簡は、これに伴った土器などから戊申年を648年に限定でき、650年に孝徳天皇の勅命で造営が始まる前期難波宮の存在と、その関連施設の北西限を明らかにさせた。さらに、長く論争が続いていたこの時期の評（こおり）の存在も明らかにした。



大坂城址 屋敷跡

小阪合遺跡

開発による人為的な削平や河川の氾濫による生活面の削平や堆積が繰り返されてきた場所では、古い時期の遺構が良好に残っていないとしても、河川堆積物や遺構から遊離した包含層出土品がその地の歴史的な由来をより雄弁に語ることもある。

八尾市小阪合遺跡は、白鳳時代創建寺院と目されている東郷廃寺の南にあり、弥生時代の水田と古墳時代初頭の竪穴建物、掘立柱建物、5世紀前半の初期須恵器を伴う土坑が発掘されている。この一面に流れていた自然河川や「落ち込み」の出土品は、摩滅度や出土遺物のまとまり具合から元々すぐ近くにあったと考えられるものである。3世紀～4世紀初頭までの土師器、5世紀初め頃の最古の須恵器、和同開珎をはじめとする70枚もの皇朝十二銭や須恵器・土師器、官衙の一面や古代寺院などでしか用いられていない瓦、河内には類例の少ない緑袖陶器類など長期間にわたる遺物が大量に出土している。有力者の屋敷が近くにあったに違いない。顕著な遺構がなくても往時の暮らしぶりを推定できる。

瓜生堂遺跡

近鉄奈良線立体交差化に伴う発掘調査地点は瓜生堂遺跡の東北端にあたる。瓜生堂遺跡ではこれまで数十基にのぼる弥生中期から後期の方形周溝墓群が確認されており、今回の調査区においても中期の方形周溝墓群が多数検出されている。周溝墓は、幾度も水に浸かり水性堆積を繰り返す湿潤な場所の中の微高地に築かれており、周溝墓自体も弥生後期から庄内式期にかけて水没している。

さらに周溝墓の下層、T.P.-1.5 m以下で幅90 m程の南北に伸びる微高地が認められ、東西両側のやや低い部分に環濠状の溝を伴った弥生前期の集落が形成されている。瓜生堂遺跡内で確実な弥生前期中葉の集落は初めての確認例である。前期の遺構検出面は2～3面確認できたが、沖積層の形成が緩やかであったうえ、軟弱地盤のためか圧密を受けたり、削平を受けながら遺構面が形成されたようである。前期の集落自体も程なく水没し、方形周溝墓築造時

期までに1m近い水性堆積層が形成されている。現代の盛土を除く「現」地表直下、T.P.1.5～2.0m前後まで古墳時代前期以降大きな地層形成のない安定した場所であることも判明した。



瓜生堂遺跡 弥生周溝墓主体部

久宝寺遺跡

JR久宝寺駅南で行われた久宝寺遺跡の発掘調査では、広い範囲にわたって古墳時代初頭の方形周溝墓群や方墳群と後期の横穴式石室墳（七ツ門古墳）が確認されたほか、2001年度の調査で弥生前期の溝やピットなども多数検出されはじめている。方墳群は新駅舎南西部に集中するようで、その東端の1号墳からはやや小振りの割竹形木棺が完全な形で出土している。今後本格化する西側の水処理施設内の調査に期待がかかる。

七ツ門古墳は江戸時代に形成された島畑の下部にかろうじて石室基部が残っていた。石室復原全長約8m、玄室復原長約4.5m、同幅2.25mの右片袖式の横穴式石室である。畑の耕作によって床面まで乱



久宝寺遺跡 墳墓群

されていて、墳形が不明であるばかりか時期を特定できる遺物も確定できない。河内平野低地部における横穴式石室は極めて珍しく、低い段丘上に築かれた帆立貝形の墳形をもつ大阪市七ノ坪古墳例がわずかに知られている程度である。

七ノ坪古墳は畿内では古い横穴式石室である。七ツ門古墳は七ノ坪古墳に続く時期と考えられているものの、やはり古式の横穴式石室である。人頭大の岩塊もない河内平野低地部に、初期の横穴式石室が築かれたことの意義を今後検討する必要がある。



七ツ門古墳 横穴式石室

第二京阪関係遺跡

第二京阪道路関連の調査は本格化し始めたところである。寝屋川市打上地区では丘陵上の約3,000㎡の範囲に5世紀後半を中心とした10数基の方墳・円墳・帆立貝形古墳からなる太秦古墳群尾支群が、周溝部の一部を残すだけの姿で検出された。

南接する大尾遺跡も後世に著しい削平を受けていたものの、標高40mの丘陵上で弥生中期の計20基余の方形周溝墓群と7世紀代の掘立柱建物群、中世の火葬墓などが検出されている。河内の丘陵上で弥生中期の方形周溝墓群が確認されたことで、漠然と考えられていた沖積地に偏る弥生中期の河内の墓域イメージに新たな提言をするものである。

高宮遺跡は国指定史跡高宮廃寺の東側の丘陵斜面に広がっている。奈良時代に丘陵斜面を階段状に造成して、柱を建てるために掘った穴が1辺1.5mもある大きな建物（掘立柱建物）が5棟分、それに関連する掘立柱建物数棟が斜面全体から検出された。現代的に言えば県庁や市庁（官衙）に付随する公の建物または高宮廃寺に関わる正倉のような施設と考えられる。この地域は古代の地域区分でいえば讃良郡に属している。讃良郡衙の候補地は未だ特定できていない。高宮遺跡の大型建物はその問題に一石を投ずることになった。



高宮遺跡 大型建物群

これら現在進行形の発掘調査成果以上に讃良郡条里遺跡以南で行われた範囲確認調査の所見は重要である。その一つ、「讃良郡条里」は現在南北2.7km、東西1.3kmの範囲で想定されているが、当センターで行った範囲確認調査による限り国道170号線を跨ぐ一画は、近世以降に施行された地割りであり、中世以前に遡らない可能性が強くなった。

また、主に門真市に属する低湿地帯の確認調査では新たな知見が得られている。この地域は従来、河内湖の名残りの沼地ないし湖沼地で、弥生時代以降ほとんど陸地化したことがない場所と考えられてきた。そのため、確認調査での観察の主眼は、より低い地層に向けられてきた。ところが、讃良郡条里地区や門真市域で実施した確認調査、さらに河内平野沖積部の堆積環境、池島遺跡の堆積環境などを比較検討した一瀬和夫の所見によると、路線区間のほぼ全域で高低差はあるものの、現代の盛土を除く地表下数10cmに、弥生時代中期相当の有機質を含む堆積層が形成されているという。



門真確認調査 有機質堆積層

局地的に中世以降の河川氾濫堆積層が認められるが、基本的に弥生中期以降には著しい沖積層の形成がみられず、旧地形の高低差と湖（池）面水位の変化によって陸地化した部分が後世に生活面や耕作によってひたすら削られ、乱されてきたようである。古代から近世初期までの遺物が河川氾濫部を除いて現耕作土中ないしその直下のみ集中して出土することも、一瀬の想定を裏付けている。

宣教師ルイス・フロイスの『日本史』の記述にある浮島のような場所にあった教会や、織田信長に攻め落とされた三箇城ゆかりの場所の探索は幻ではなくなってきた。と同時に、私たちの未熟な観察力と洞察力ゆえに調査不要と判断されてしまった一部の地域に、該当する遺跡がないことを願っている。私たちに重い宿題が残された。

（藤田）

南部調査事務所の調査概要

南阪奈道路の調査

本書が対象とする95年以後、南部地域で最も調査が集中したのは河内南部の南阪奈道路であった。

この路線一帯は、日本書紀大化五年（649）条にいう「茅渟道」や最古の官道ともいわれる「丹比道」が走るとおり、大和飛鳥から河内飛鳥を経て難波に至る歴史的ルートであり、地形環境も変化に富む。各遺跡はこの地域性のみごとに反映して多彩な内容を示した。東から主要な調査結果をみていきたい。

二上山麓の楠木石切場跡（太子町太子）は史跡鹿谷寺跡の北西1 km。新発見の大規模な凝灰岩採掘跡である。遺構は古墳後期～平安初期、平安後期～室町前期頃の概ね2期に分かれ、多数の採石坑の集合がユニットをなし、谷底には長期にわたる採掘の痕跡を示す土坑、鍛冶炉、作業通路なども見出された。

田須谷古墳群（太子町春日）は、磯長谷古墳群の北方丘陵南斜面で発見された2基の終末期古墳で、

西側1号墳は横口式石槨を有し、南向斜面を成形・盛土した3段築成の墳丘に凝灰岩を石垣状に積む。南を除く三方は周溝が巡る。より小さな東側の2号墳は大きく破壊を受ける。2基は出土須恵器から7世紀後半に計画的に築造されている。古墳の主要部は大阪府土木部の協力を得て原位置での保存が図られた。すぐ西側では工事着工後、未知の凝灰岩石切場が発見され府土木部と府教委の協議をうけて緊急調査を実施、棕谷石切場として既に報告した。

駒ヶ谷遺跡（羽曳野市飛鳥・大黒）は飛鳥川左岸段丘上に位置し、飛鳥・奈良期、平安期の掘立柱建物を中心とする遺構群が広がる。井戸からは奈良三彩、大量の製塩土器、「古厨」など墨書土器も出土。丹比道（竹内街道）や河内飛鳥の中心飛鳥集落を東に見下し、対岸には飛鳥千塚古墳群。渡来系古代氏族「飛鳥戸氏」の本拠地である。遺跡内で古墳時代後期の前方後円墳を新たに発見、字名から蔵塚古墳と命名された。前方部を西北西に向け、周濠を含む総長69m、横穴式石室と考えられる主体部は失うが、



楠木石切場跡 採石坑



駒ヶ谷遺跡 建物群



田須谷古墳群 1号墳



蔵塚古墳 土嚢検出状況

設計に基づき土嚢を列状に積上げ、用土を版築状につき固めるなど当時最新の外来土木技術を駆使して古墳が築かれている状況を明らかにした。さらに西方、石川谷を見下ろす大黒丘陵の東に派生する支陵裾部でも掘立柱建物、上方には弥生後期～古墳初頭の竪穴住居群を検出、各時期の景観が姿を見せてきた。なお丘陵尾根に知られる弥生後期の集落遺跡保存のため、道路構造はトンネルとされている。

石川西岸氾濫原の現水田面下3mの深部に縄文後期の炉跡などが見つかった西浦東遺跡を経て、さらに西、石川の支谷大水川の流路から羽曳野丘陵東麓にかけて尺度遺跡（羽曳野市蔵之内、尺度）が広がる。いわゆる古市大溝の南方地域で、西浦銅鐸出土地に近接。国府型ナイフ形石器の小規模な製作址、弥生中期の集落遺構や水田址、庄内期の方形区画溝・柵を巡らす居館的建物、庄内～布留期の集落遺構や水利施設、畠畝等々多彩で濃密なまとまりを調査。

ここで道路は丘陵を西北に越え、慶長年間の狭山池改修以後は池の余水吐の機能をになう東除川を渡



尺度遺跡 方形区画と建物群



河原城遺跡 建物群

り、平坦・高燥な丹比野に至る。

河原城遺跡（羽曳野市河原城、南河内郡美原町多治井）では東除川西岸の段丘中位面を中心に古墳後期～飛鳥時代の竪穴住居・掘立柱建物を数多く発見、集落の建物構造の変遷をよく示す例となった。西側では奈良時代建物群と共に鍛冶炉・鉄滓などや南方丹比廃寺と同型瓦も出土、同寺の造営と深く関わることがわかる。

古くから河内国丹比郡衙の所在地ともいわれる郡戸遺跡（羽曳野市郡戸、美原町多治井）の現集落南西での今次調査では、小字狐塚付近から古墳時代中期の小方墳群が、さらに西北から飛鳥・平安時代の掘立柱建物群が一定の規格をもって発見されている。さらに続く路線の起点、近畿自動車道との接続個所での丹上遺跡（美原町丹上ほか）・真福寺遺跡（同町真福寺ほか）にまたがる調査では、郡戸遺跡とは異なる規格をもつ飛鳥・平安時代の掘立柱建物群が見出され、建物規模や墨書土器・施釉陶器などの存在から官衙的施設があったと想定されるほか、鎌倉～室町時代の鑄造に関わる遺物も多く、金銅製懸仏など河内鑄物師の生産の実態について、両遺跡のこれまでの成果に新たな資料を加えている。

このように、現代版竹内街道といえる延長13kmに及ぶ新路線の建設に先立つ発掘調査は、弥生・古墳・飛鳥～平安時代を中心に、この地の歴史文化の豊かさを物語る重厚な成果を生みだした。

その他の調査

難波宮の真南、いわゆる難波大道の発見で知られ



丹上・真福寺・郡戸遺跡 遠景

る大和川今池遺跡(堺市常盤町・松原市天美西ほか)では、大和川左岸高水敷及び高規格堤防整備に伴う調査が96年から続く。古墳前・中期の集落遺構、埋没古墳、奈良時代水田址と流路、中世居館の周濠など各期の多様な資料がみられ、依羅池・依網屯倉の記録とも切り離すことはできない。

大和川の堤防高規格化事業に伴い、著名な船橋遺跡(藤井寺市大井)でも96年から調査が行われている。縄文晩期(船橋式)から弥生中期、古墳前期、奈良～中世まで、河内国府にも近い要衝に幾多の洪水の跡とともに検出される遺構・遺物がある。北岸で始まった調査では飛鳥時代の遺構からガラス小玉・金属製品の鋳型が出土、今後が注目される。

伽羅橋遺跡(高石市高師浜)ははやく海浜の中世集落として知られたが、99年から府道建設に伴う調査を開始、鎌倉後期～室町前期頃の掘立柱建物の町並や、その海側では平安後期にはじまる寺院「浜寺」の外郭を調査。風光明媚を歌われた名勝高師浜の繁栄の一時期である。



大和川今池遺跡

泉州南部、男里川右岸に位置する男里遺跡(泉南市男里)では、92年から府道建設に先立つ調査を重ねている。弥生中期後半を中心とした竪穴住居30棟以上と方形周溝墓もみつき、海に近い水辺の集落の実態が次第に明らかになりつつある。

第二阪和国道の調査など

第二阪和国道は大阪・和歌山を泉州の平野部に結ぶ。60～70年代にその建設に先立って行われた池上(後、池上曾根)・四ツ池両遺跡の調査は、稲作文化の開花の舞台である拠点弥生集落の具体像に迫る成果を生み、両遺跡ともその後史跡に指定された。池上曾根遺跡(和泉市池上町、泉大津市曾根町)では、95年から当センター(本部事務所ほか)が公園整備に伴う発掘調査などを和泉・泉大津市から受託・実施し、弥生時代中期では全国屈指の大型掘立柱建物の復元や体験学習施設の建設などを含む第1期整備が完成、01年春に史跡公園として公開された。

90年代後半に泉南地域で始まったその延伸工事にかかる調査でも重要な成果があった。



男里遺跡 竪穴住居群



船橋遺跡 方形周溝墓群



池上曾根遺跡 大型掘立柱建物復元状況

向出遺跡（阪南市自然田）は男里川上流の菟砥川と山中川に挟まれた狭小な台地に位置し、縄文後～晩期の大規模な土坑墓群が発見された。遺跡は後期後半に最盛期を迎え、環状土坑墓群や石棒の樹立が祭儀の有様を示す。西日本では希な保存のよい縄文遺跡である。周辺と一体の史跡指定に向けて範囲の確認がおこなわれており、指定が待たれる。国土交通省の協力を得て土坑墓の一部は道路敷内で復元展示の予定である。また弥生後期から古墳前期にかけての竪穴住居も検出、すぐ南の向山遺跡（同市自然田）でも同時期の竪穴住居を調査した。

菟砥川の左岸緩斜面では亀川遺跡（阪南市自然田）で古墳時代中・後期の竪穴住居十数棟を調査、製塩土器を多数ふくむ焼土坑があり、滑石製玉類が大量に出土、製鉄の形跡もある。様々な祭祀を示す遺跡は日本書紀垂仁39年条の、皇子五十瓊敷入彦命（岬町淡輪古墳群の宇度墓古墳がその墓とされるが、明治以前には本遺跡南側の玉田山に比定された）が「茅渟の菟砥の川上宮」で剣一千口を作り大和石上



向出遺跡 石棒出土状況



亀川遺跡 竪穴住居群

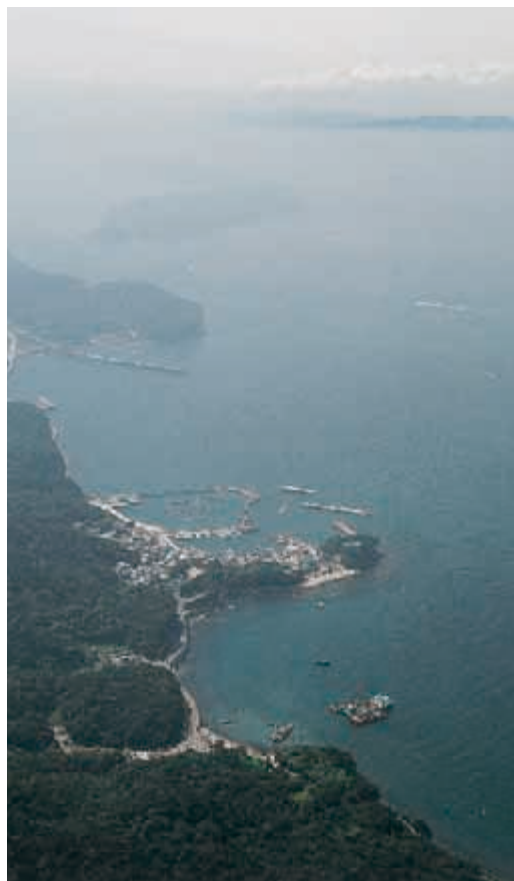
神宮に納めたとの記載を想起させる。

大阪の最南端、淡路島をのぞむ小島北磯遺跡（泉南郡岬町多奈川小島）は関西空港2期工事に関連して新たに発見された製塩遺跡である。岩礁に挟まれた小さな浜に弥生時代中葉から奈良時代に至る製塩の跡が現われた。奈良期の石敷製塩炉18基、弥生中期～古墳中期の石のない炉12基を確認、製塩土器は丸底のもの、脚台をもつものなど3千点を越え、大阪湾岸で最古期の製塩土器も含む。生活に不可欠の塩生産の変遷を示す極めて重要な遺跡である。

触れられなかった調査にも成果は多い。後章と各報告書をご覧ください。

今後これらの資料や調査報告書などが広く活用されることが待たれるのはもちろん、各地域での今後のまちづくりに際して、遺跡一帯が少しずつ緑地・公園などになり、憩いのなかに地域の歴史を体感できる場として蘇る日がくることを信じるものである。

（瀬川）



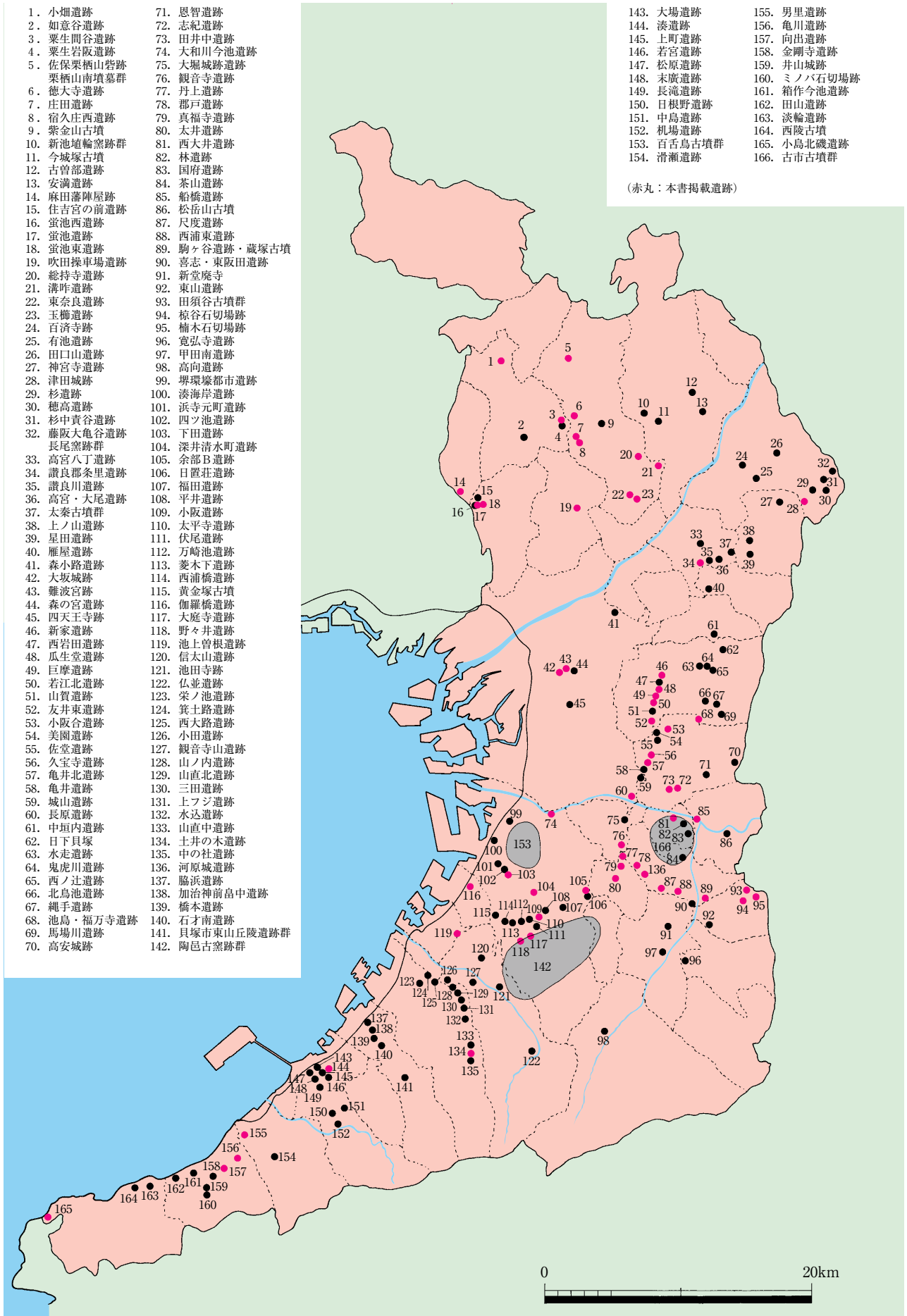
小島北磯遺跡 遠景

遺跡分布図

1. 小畑遺跡
2. 如意谷遺跡
3. 粟生間谷遺跡
4. 粟生岩取遺跡
5. 佐保栗栖山岩跡
栗栖山南墳墓群
6. 徳大寺遺跡
7. 庄田遺跡
8. 宿久庄西遺跡
9. 紫金山古墳
10. 新池埴輪窯跡群
11. 今城塚古墳
12. 古曾部遺跡
13. 安満遺跡
14. 麻田藩陣屋跡
15. 住吉宮の前遺跡
16. 蛭池西遺跡
17. 蛭池遺跡
18. 蛭池東遺跡
19. 吹田操車場遺跡
20. 総持寺遺跡
21. 溝咋遺跡
22. 東奈良遺跡
23. 玉櫛遺跡
24. 百濟寺跡
25. 有池遺跡
26. 田口山遺跡
27. 神宮寺遺跡
28. 津田城跡
29. 杉遺跡
30. 穂高遺跡
31. 杉中貴谷遺跡
32. 藤阪大亀谷遺跡
長尾窯跡群
33. 高宮八丁遺跡
34. 讃良郡奈里遺跡
35. 讃良川遺跡
36. 高宮・大尾遺跡
37. 太秦古墳群
38. 上ノ山遺跡
39. 星田遺跡
40. 雁屋遺跡
41. 森小路遺跡
42. 大坂城跡
43. 難波官跡
44. 森の宮遺跡
45. 四天王寺跡
46. 新家遺跡
47. 西岩田遺跡
48. 瓜生堂遺跡
49. 巨摩遺跡
50. 若江北遺跡
51. 山賀遺跡
52. 友井東遺跡
53. 小阪合遺跡
54. 美園遺跡
55. 佐堂遺跡
56. 久宝寺遺跡
57. 亀井北遺跡
58. 亀井遺跡
59. 城山遺跡
60. 長原遺跡
61. 中垣内遺跡
62. 日下貝塚
63. 水走遺跡
64. 鬼虎川遺跡
65. 西ノ辻遺跡
66. 北島池遺跡
67. 縄手遺跡
68. 池島・福万寺遺跡
69. 馬場川遺跡
70. 高安城跡
71. 恩智遺跡
72. 志紀遺跡
73. 田井中遺跡
74. 大和川今池遺跡
75. 大堀城跡遺跡
76. 観音寺遺跡
77. 丹上遺跡
78. 郡戸遺跡
79. 真福寺遺跡
80. 太井遺跡
81. 西大井遺跡
82. 林遺跡
83. 国府遺跡
84. 茶山遺跡
85. 船橋遺跡
86. 松岳山古墳
87. 尺度遺跡
88. 西浦東遺跡
89. 駒ヶ谷遺跡・蔵塚古墳
90. 喜志・東阪田遺跡
91. 新堂廃寺
92. 東山遺跡
93. 田須谷古墳群
94. 棕谷石切場跡
95. 楠木石切場跡
96. 寛弘寺遺跡
97. 甲田南遺跡
98. 高向遺跡
99. 堺環塚都市遺跡
100. 湊海岸遺跡
101. 浜寺元町遺跡
102. 四ツ池遺跡
103. 下田遺跡
104. 深井清水町遺跡
105. 余部B遺跡
106. 日置荘遺跡
107. 福田遺跡
108. 平井遺跡
109. 小阪遺跡
110. 太平寺遺跡
111. 伏尾遺跡
112. 万崎池遺跡
113. 菱木下遺跡
114. 西浦橋遺跡
115. 黄金塚古墳
116. 伽羅橋遺跡
117. 大庭寺遺跡
118. 野々井遺跡
119. 池上曾根遺跡
120. 信太山遺跡
121. 池田寺跡
122. 仏並遺跡
123. 栄ノ池遺跡
124. 箕土路遺跡
125. 西大路遺跡
126. 小田遺跡
127. 観音寺山遺跡
128. 山ノ内遺跡
129. 山直北遺跡
130. 三田遺跡
131. 上フジ遺跡
132. 水込遺跡
133. 山直中遺跡
134. 土井の木遺跡
135. 中の社遺跡
136. 河原城遺跡
137. 脇浜遺跡
138. 加治神前島中遺跡
139. 橋本遺跡
140. 石才南遺跡
141. 貝塚市東山丘陵遺跡群
142. 陶邑古窯跡群

143. 大場遺跡
144. 湊遺跡
145. 上町遺跡
146. 若宮遺跡
147. 松原遺跡
148. 末廣遺跡
149. 長滝遺跡
150. 日根野遺跡
151. 中島遺跡
152. 机場遺跡
153. 百舌鳥古墳群
154. 滑瀬遺跡
155. 男里遺跡
156. 亀川遺跡
157. 向出遺跡
158. 金剛寺遺跡
159. 井山城跡
160. ミノバ石切場跡
161. 箱作今池遺跡
162. 田山遺跡
163. 淡輪遺跡
164. 西陵古墳
165. 小島北磯遺跡
166. 古市古墳群

(赤丸：本書掲載遺跡)



Ⅱ部 発掘資料精選

Ⅱ部凡例

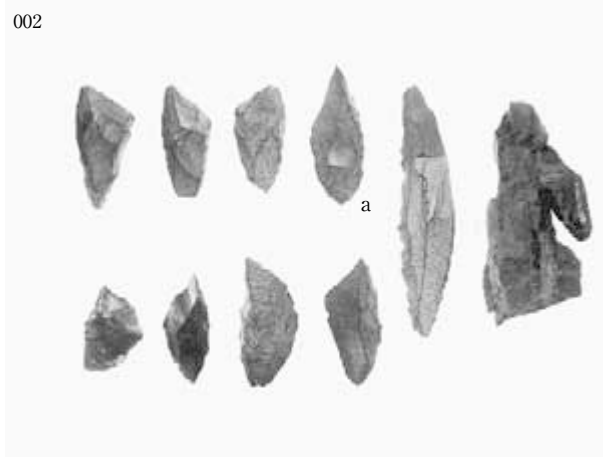
- ・本書に収録した遺物はすべて、旧(財)大阪文化財センターおよび旧(財)大阪府文化財調査研究センターの調査で出土した遺物である。
- ・遺物は、旧石器時代(001～009)、縄文時代(010～048)、弥生時代(049～150)、古墳時代(151～283)、古代(284～423)、中世(424～499)、近世(500～547)、近現代(548～555)の時代別、また同時代のうちでは、土器類、埴輪、瓦埴類、銭貨、金属製品(および関連資料)、土製品、石製品、木製品、文字資料類、その他の順に配列した。ただし、境界時期の遺物の一部や、遺物種の内容に鑑みて、必ずしも厳密には区別できていないものもある。
- ・各資料の時代表記については、執筆者により表現が異なる場合がある。
- ・遺物の大きさに関する略号は次のとおりである。

RD	: 口径	rd	: 推定・復原口径
D	: 径	d	: 推定・復原径
MD	: 最大径	md	: 推定・復原最大径
BD	: 底径	bd	: 推定・復原底径
H	: 器高	h	: 残存器高
W	: 幅	w	: 残存幅
L	: 長さ	ℓ	: 残存長
T	: 厚	t	: 残存厚
- ・遺物の大きさの単位はcm。ただし、概数値の場合は小数点以下を表記していない。
- ・石製品・木製品のうち、材種の判明するものは明記した。材種名の記載のないものは未鑑定である。
- ・報告・出典の文献名、遺跡別索引、遺跡所在地、遺跡名の読み、英文目録は、本書末を参照されたい。



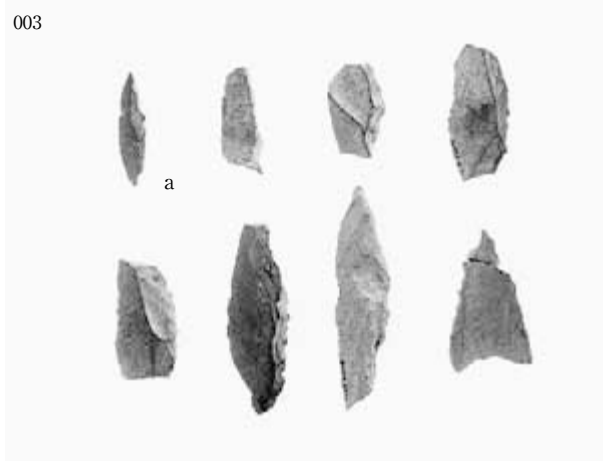
001 ナイフ形石器 旧石器
粟生間谷遺跡 (a:W1.8・ℓ7.9) 文献.578

中世の遺構や包含層から32点のナイフ形石器が出土した。石材はサヌカイトを用いており、bのみがチャート製である。大半が国府型ナイフ形石器であり、製作址出土の資料とは異なった状況を示す。北摂では郡家今城遺跡以来のまとまった国府型ナイフ形石器の検出例となる。瀬戸内技法関連資料は、ナイフ形石器以外に翼状剥片石核が出土した。(新海)



002 ナイフ形石器 旧石器
粟生間谷遺跡 (a:W1.4・L3.7) 文献.578

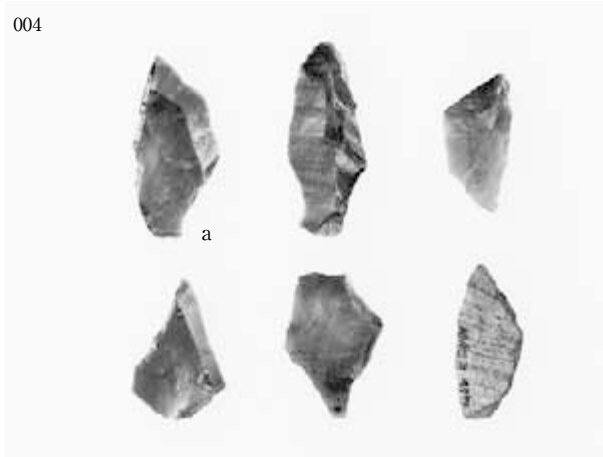
石器551点が確認された石器製作址から出土。ナイフ形石器は37点(サヌカイト製31点、チャート製6点)を数える。後世の包含層出土資料とは異なり、国府型ナイフ形石器は1点で、二側縁加工の切り出し形ナイフ形石器を主体とする。剥片との接合例(右端)も確認され、製作過程を復原する上でも貴重な資料といえる。(新海)



003 ナイフ形石器 旧石器
粟生間谷遺跡 (a:W0.8・L3.1) 文献.578

石器551点が確認された石器製作址から出土した。ナイフ形石器は20点を数え、石材は全てサヌカイトである。aは小型品であるが、主体は有底剥片を素材とする長さ5cm前後の中型のナイフ形石器となっている。背部整形剥片が存在するため、ナイフ形石器の製作を行っていたことを窺わせる。

(新海)



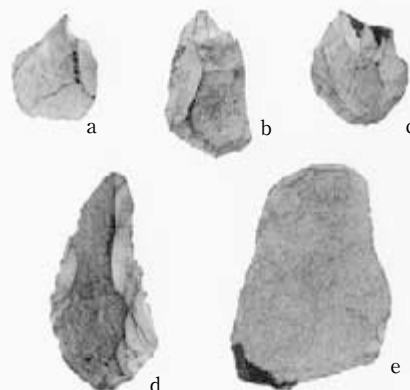
004 ナイフ形石器 旧石器
粟生間谷遺跡 (a:W1.2・L2.5) 文献.578

石器650点が確認された石器製作址から出土した。ナイフ形石器は14点(サヌカイト4点、チャート10点)を数える。これまでの資料とは異なり、小型品を主体とし、チャートを多用することに特徴がみられる。こうした石器群は大阪には類例がなく、近畿地方の旧石器研究に新たな展開をもたらす資料として注目される。(新海)

005 錐・搔器・削器 旧石器
粟生間谷遺跡 (a:W3.3・L6.6) 文献.578

No.003のナイフ形石器とともに石器製作址から出土した。いずれもサヌカイト製で錐(a)は1点、搔器(b・c)は2点、削器(d・e)は7点出土している。単独の石器製作址で、ナイフ形石器以外の器種がまとめて出土することは珍しく、該期の石器組成を考える上で貴重な資料といえる。

(新海)

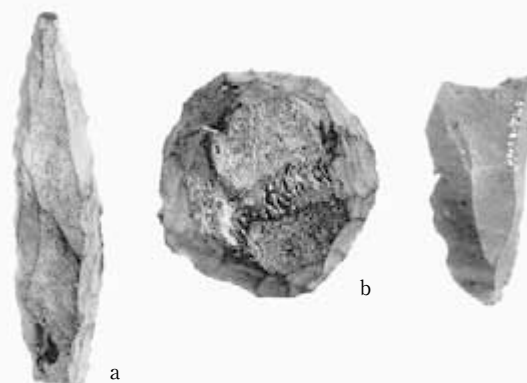


005

006 角錐状石器・円形搔器・他 旧石器
粟生間谷遺跡 (a:W1.6・ℓ6.5,b:D4.0) 文献.578

No.002のナイフ形石器とともに石器製作址から出土。各1点づつを確認した。角錐状石器と円形搔器は丁寧な作りの優品である。右端は珪質頁岩製の剥片である。郡家今城遺跡など淀川流域の遺跡で数点出土しているのみで、近畿地方ではほとんど用いられない。北陸方面からの搬入品と考えられる。該期の石器組成や交易を考える上で重要な資料である。

(新海)



006

007 ハンマー 旧石器
粟生間谷遺跡 (W60・L93) 文献.578

旧石器包含層より出土。礫面が平滑な楕円礫のハンマーである。チャート製。平面形は片側がやや広がるわらじ状を呈する。下端部には敲打痕が顕著にみられ、上端は一部欠損している。その用途は不明であるが、使用によるものと考えられる。ハンマーの多くが、砂岩・泥岩を用いるのに対し、チャート製であることはきわめで特異である。

(手島)



007

008 ナイフ形石器 旧石器
蛭池遺跡 (W1.7・L7.7) 文献.458

包含層から出土した完形の国府型ナイフ形石器。サヌカイト製で、外面は灰色に風化する。翼状剥片石核から最初に剥ぎ取られた翼状剥片の背部を主要剥離面側から調整加工して仕上げる。先端は鋭く、基部は折取られる。同時期の石器は周辺の遺跡からも数多く出土しており、特に石器製作址の存在が推定された蛭池西遺跡との関係が注目される。

(伊藤)



008

009



009 スクレイパー

旧石器

栗生間谷遺跡

(W4.4・L5.1) 文献.578

旧石器包含層より出土。一側縁に細かい調整が施されたスクレイパーである。やや幅広の大型剥片を素材とする。打面と片側縁には自然面がのこり、他側縁の背腹両面に細かい調整がみられる。特に腹面のそれが顕著である。背面構成は片側縁の礫面を打面とした2枚の剥離によりなる。府下においてはきわめて希少な石材である。凝灰岩製。(手島)

010



010 縄文土器 (深鉢)

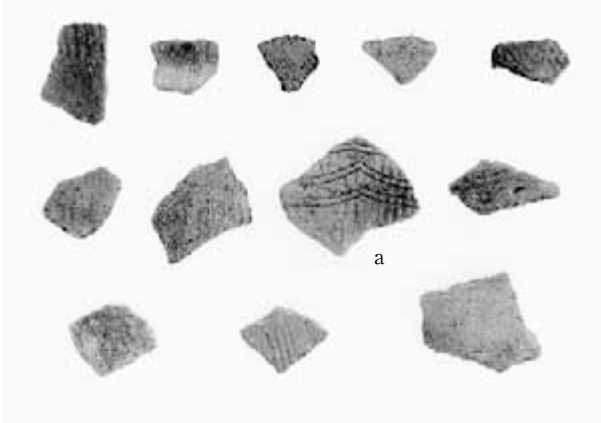
縄文中期

讚良郡条里遺跡

(a:w23.4・ℓ23.7) 文献.577

扇状地面を流下した土石流に混入したものであり、最下層の石礫中より出土した。中期末の星田式に比定される。2点とも口縁部に沈線文・円文・楕円文・3条の弧状沈線文を施し、bは胴部に3条の弧状沈線をもつ。縄文は口縁端部まで充填され、また文様帯ごとに施文方向や原体が区別されている。器面の摩滅も少なく、至近に当期の集落域が想定される。(清水)

011



011 縄文土器

縄文中期

讚良郡条里遺跡

(a:ℓ6.5・w7.4) 文献.577

氾濫原の様相を呈す洪水堆積物の最上層から出土。近接する調査区では当該の洪水が良丹沢火山灰層(約24,000年前降灰)を浸食しており、汀線の後退に伴う土砂流入の凄まじさを物語っている。

土器型式は船元Ⅱ式から里木Ⅱ式におさまり、中期中頃を下限として、当地周辺のこうした状況が収束しつつあったことを示す資料となっている。(清水)

012



012 縄文土器 (深鉢)

縄文後期

池島・福万寺遺跡

(RD29.2・H32.5) 文献.565

後期の氾濫堆積物上部より押し潰れた状態で出土。半球状の体部に大きく外反する口頸部を有する元住吉山Ⅰ式の有文深鉢で、口縁部内面には端部との間に刻目帯を巡らし、体部外面には巻貝により区画状文を描出している。器面調整は内外面とも巻貝条痕を施した後、外面の口頸部のみナデを加えている。なお、凹底の底部には焼成後の穿孔が認められる。(岡本茂)

013 縄文土器（深鉢） 縄文後期
池島・福万寺遺跡 (rd22.8・H32.5) 文献.565

No.012の土器と近接して出土した粗製深鉢。やや丸味を帯びた体部から直立気味に口頸部が立ち上がり、凹底の底部にはやはり焼成後の穿孔が施されている。

両資料が出土した氾濫堆積物の堆積によって、それまで葦原であった当遺跡周辺は著しく陸化が進行し、後に河内平野最古の水田が造成される乾燥化した土地が形成されることとなった。(岡本茂)



013

014 縄文土器（深鉢） 縄文後期
池島・福万寺遺跡 (RD24.0・H20.2) 文献.565

沼沢地環境を示す黒色粘質シルト層上面より出土。半球形の体部に大きく外反する口頸部を有する平縁の深鉢で、両者の境には1条の凹線が巡っている。

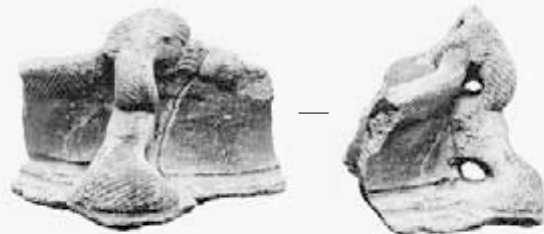
この面からは、過去の調査においても後期中葉の元住吉山I式に属する土器が完形に近い状態で複数個体出土しており、当時の人々の活動領域が低湿地まで拡大していたことを物語っている。(岡本茂)



014

015 縄文土器 縄文後期
西浦東遺跡 (bd7.0・T0.8) 文献.559

暗色土壌化層から出土。口頸部が大きく外傾し、肥厚させた口縁部の外面に縄文を施す。3条の沈線を口縁部から胴部にかけて施し、口縁部内面にも沈線を施すなどの特徴を有すことから、これら当該遺跡出土の土器の大半は北白川上層式2期にあたる。またサヌカイト石核・剥片が多数出土しており、当該遺跡において石器製作が行われていたと考えられる。(木嶋)



015

016 舟形土器 縄文後期
西浦東遺跡 (W10・ℓ17) 文献.559

屋外炉跡底部から出土した。器形は平面が楕円形、断面形状は半球状を呈する。器面は丁寧なヘラミガキ調整で仕上げられる。大阪府下では東大阪市縄手遺跡・和泉市仏並遺跡などで類似品が出土している。本例を含め、いずれも縄文時代後期の所産である。この屋外炉跡からは小型石棒が出土しており、祭祀性の強い土器であったと考えられる。(木嶋)



016

017



017 縄文土器（宮滝式） 縄文後期
向出遺跡 （上左：rd37.8・h22.3） 文献.531

当遺跡では、墓とみられる土坑が1,000基以上も確認されており、埋土から大量の土器が出土している。後期後葉の宮滝式土器はその最盛期のものである。近畿地方では縄文の施文は、後期中葉で終焉を迎えるため、宮滝式土器は「縄文」土器といいながらも、縄文は全く認められず、巻貝を横方向に引きずって施文する凹線文が多用される。（山元）

018



018 縄文土器（滋賀里Ⅰ式） 縄文後期
向出遺跡 （左：rd54.0・h29.5） 文献.531

土坑からは後期末の滋賀里Ⅰ式土器も多く出土している。土器の表面には宮滝式土器と同様に横方向の施文が施されるが、その工具は巻貝ではなく、棒状のものに変化したようである。また体部の屈曲は宮滝式に比べて弱くなり、全体に丸みを帯びるようになる。

（山元）

019



019 縄文土器（宮滝式） 縄文後期
向出遺跡 （rd35.7・H20.8） 文献.531

墓とみられる土坑の底面で上から押しつぶされたような状態で出土。口縁部には半円状の突起が認められ、本来は3ヶ所に配されていたと推定される。体部は三段構成で、4帯の凹線帯によって画されている。なお突起部直下の各凹線帯上には巻貝を扇状に押し付けた跡が認められる。

（山元）

020



020 縄文土器（宮滝式併行） 縄文後期
向出遺跡 （rd22.8・h15.1） 文献.531

墓とみられる土坑から出土した。他に石皿や玉類なども確認している。内彎する大ぶりの波頂部を有する波状口縁深鉢で、下部は欠損している。同時期の近畿地方には本例のように波頂が突起状に収斂する波状口縁は既に見られず、東日本の影響を受けた土器と考えられよう。

（山元）

021 縄文土器（滋賀里 I 式併行） 縄文晩期
向出遺跡 (MD22.2・h13.0) 文献.531

墓とみられる土坑から出土した注口土器である。体部上半部と注口部を欠損し、球形の体部には 2 段の山形反転沈線文が認められる。外面は指ナデ痕が顕著に残り凹凸が激しい他、文様自体も歪みが大きく、全体に稚拙な感を与える土器である。

(山元)



021

022 縄文土器（宮滝式併行） 縄文後期
向出遺跡 (rd16.0・h15.1) 文献.531

墓とみられる土坑から出土した砲弾形を呈する深鉢である。平行する 3 帯の横位凹線文帯と、それらを結ぶように走る右下がりの縦位凹線文帯が認められ、両者の交点を中心に貝殻圧痕、乳頭状の瘤が配されている。近畿地方の手法（凹線文・貝殻圧痕）と東日本の手法（平行、斜行の文様帯の組み合わせ、その結節点への瘤の配置）が認められる折衷土器である。(山元)



022

023 縄文土器（滋賀里 I 式） 縄文後期
向出遺跡 (rd21.0・h12.1) 文献.531

墓とみられる土坑から出土した小型の深鉢で、4 段にわたって短く外反、内彎を繰り返す珍しい器形を呈している。外面調整は口頸部ナデ、胴部ケズリを基本とするが内面は器形外反部分を中心に指押さえ痕が明瞭に残っている。底部を欠くが本来丸底であったと考えられる。

(山元)



023

024 縄文土器（船橋～長原式） 縄文晩期
粟生間谷遺跡 (中左:h10.9・w10.6) 文献.578

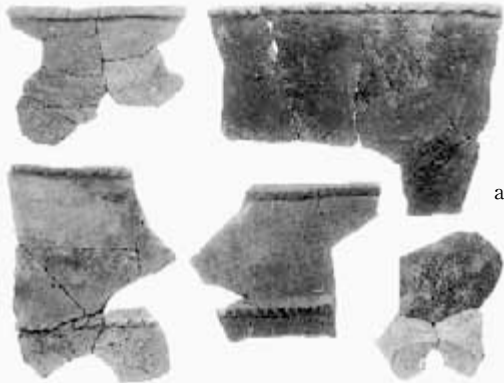
凹凸を呈する自然地形状の落込みから出土。縄文時代中期末から後期初頭の磨消縄文土器、晩期の船橋式や長原式が混在している。器種構成は、深鉢・浅鉢・鉢などである。周辺の包含層からも同様の構成を示す突帯土器群が出土している。

また、落込みから二上山産のサヌカイトの大形剥片が 1 点出土している。(手島)



024

025

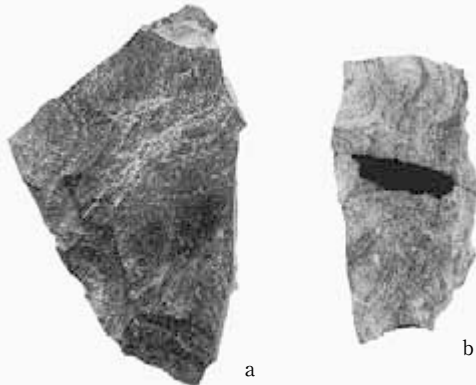


025 縄文土器（長原式） 縄文晩期末
池島・福万寺遺跡 (a:rd43.0・h34.4) 文献.567

弥生時代の水田面下に堆積する層中で半径3mに拡がり散在していた。口縁部や胴部に断面が三角形の凸帯を貼付し、そこに刻みを施している。器面には指や工具によりナデ、ケズリを施している。こうした資料の出土からも当期からすでに安定的な人の営みが当遺跡で築かれていた事が窺える。

(松尾洋)

026



026 板材 縄文
粟生間谷遺跡 (a:L23.5・b:L17.3) 文献.578

土坑より出土。石器をつくるための原材料となる大形剥片（板状石材）である。aは、表裏において数枚の剥片が剥離されていることから石核と分類される。縄文時代後・晩期から弥生時代にかけて特徴的に存在する。香川県金山地域産の石理の顕著な特徴を生かした剥片剥離技術であり、当該期の石材流通を考える上で重要である。

(手島)

027



027 トロトロ石器 縄文後期
粟生間谷遺跡 (w1.9・L2.5) 文献.578

縄文時代の遺物包含層から出土した。チャート製である。同時に出土した土器の残りが悪く、時期の決定が難しいが、後期に属すると考えられる。この石器は異形磨製石器のひとつであり、祭祀に関わる遺物と推定されているが、詳しいことは明らかになっていない。

(井上)

028



028 有舌尖頭器 縄文草創期～早期
粟生間谷遺跡 (W2.7・ℓ8.1) 文献.578

中世の流路から単体で出土した。サヌカイト製である。有舌尖頭器は縄文時代草創期の狩猟具のひとつであり、槍先として使用されたと推定されている。この種の尖頭器は縄文時代早期前半にもわずかに残存することが判明している。この遺跡の場合、共伴遺物がないため、時期の特定は困難である。

(井上)

029 有舌尖頭器 縄文草創期～早期
 (左から)丹上、庄田遺跡 (左:w2.9・ℓ7.1) 文献.371・488

ともに遺構に伴わず、単独で出土したものである。2点ともサヌカイト製である。縄文時代草創期～早期前葉の遺物と考えられる。これらの石器は槍先に使用されたと推定されており、狩猟に際して遺棄または見失ってしまったものが後の時代の遺物包含層に混入したものであると思われる。

(井上)



029

030 石器群接合資料 縄文早期
 河原城遺跡 (W7.5・L11.0) 文献.528

中位段丘崖直下の黒色粘土層内から、二つの集中区を持つ石器群が出土した。石核・剥片・チップ・楔形石器を主に、スクレイパー1点と石鏃2点を含む。写真の例のように接合資料も多いが、剥片より先の未製品が皆無である事や、含まれる層が沼状の堆積層であるなど疑問点も多い。層の¹⁴C年代は9,430±40年B.P.と出ている。

(三宮)

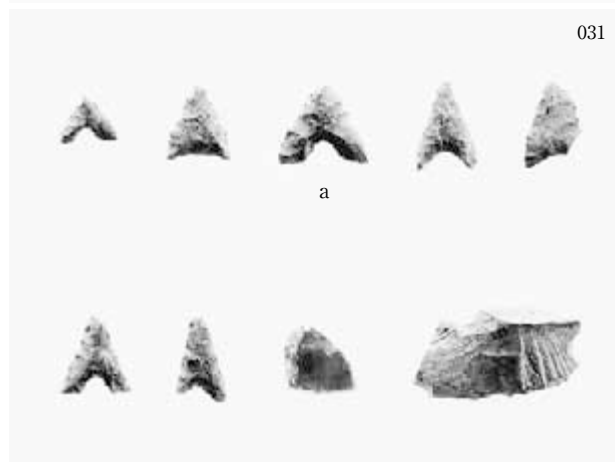


030

031 石鏃 縄文早期
 栗栖山南墳墓群 (a:W1.6・L2.3) 文献.533

表土に相当する層中からの出土。厳密に帰属時期を決定できる共伴遺物はないが、基部の挟りが深く、両端が長脚となる特徴などから該期にあたる資料といえる。この他、遺跡内で該期にあたる資料は出土していないが、当地あるいは周辺での人の活動痕跡を示す資料として重要である。

(松尾洋)

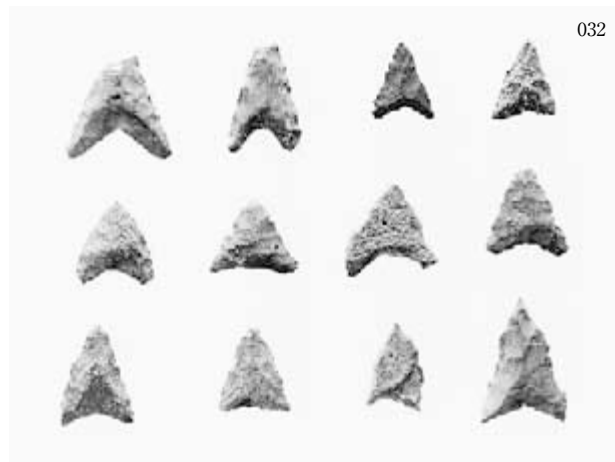


031

032 石鏃 縄文後期～晩期
 向出遺跡 (下右:L2.69・T0.45) 文献.531

墓と考えられる土坑から出土している。宮滝2式や滋賀里式の土器と共伴している。茎を持たず、基部が平ら或いは弱い挟りのある特徴などは、当該期に隆盛した形態である。当遺跡では墓坑を数多く検出しており、縄文時代の葬制の様子を考える上でも貴重な資料となる。

(松尾洋)



032

033



033 石錐 縄文後期～晩期
向出遺跡 (下右: $\ell 7.55 \cdot T1.02$) 文献.531

墓と思われる土坑をはじめとした遺構から出土。石製の穿孔具である。定形的なものは、長い軸部とつまみ状の頭部を持つが、ここでは少なく、軸部を簡単に作り出したものが目立つ。使用石材には二上山産のサヌカイトが大半を占めている。出土状況からはその性格を明確に示しているとは考えにくいが遺跡の性格を推測する一端となる資料である。(松尾洋)

034



034 石匙 縄文前期
蛭池遺跡 (W4.4・L5.5) 文献.458

落込みから出土。整った三角形を呈する完形の横型石匙である。サヌカイト製で外面は暗灰色に風化する。原礫面を残す部分がないことから、剥片を調整加工して作られたものであることがわかる。この種の石匙は前期の北白川下層式土器に伴うことが知られているが、遺跡周辺にはこの時期の遺跡はなく、遺物が出土することも稀である。(伊藤)

035

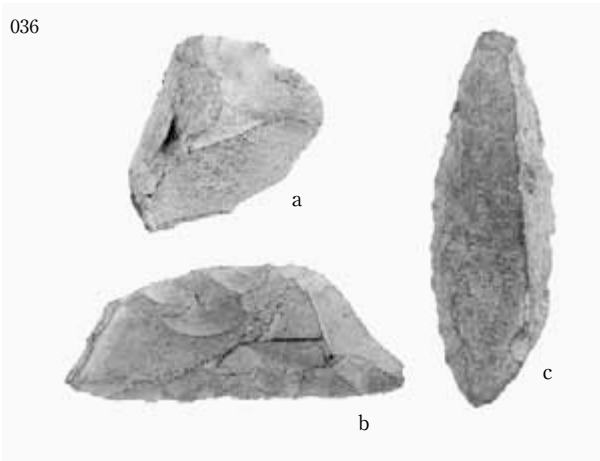


035 石匙 縄文前期
大和川今池遺跡 (W7.5・L5.4) 文献.553

地山直上層より出土。チャート製の横型石匙。細かい調整により、均整のとれた正三角形の平面形態を呈する精製品である。

石匙は縄文時代を代表する石器のひとつであり、近畿地方では横型石匙は縄文時代早期からみられる。中でも本例のような正三角形のものは縄文時代前期に、特徴的に認められる。(永野)

036



036 スクレイパー 縄文
粟生間谷遺跡 (a: W4.2, b: L7.8, c: L8.6) 文献.578

aは地山直上より出土。扇形の剥片の弧を描く縁辺に調整を加えて刃部を形成している。bは河川の埋土より出土。台形状の剥片の長辺に刃部をもつ。一部自然面を残す。cは包含層より出土。平面紡錘形を呈する剥片の一辺に刃部を作り出している。

いずれもスクレイパーである。

(永野)

037 定角石斧 縄文中期～後期
小阪遺跡 (W5.6・L13.3) 文献.289

縄文中期末～後期初頭と考えられる緑灰色シルト層内から当該期の土器群とともに出土。

扁平な両刃の磨製石斧であり、刃部が剥離するほかは基端面、両主面ともに摩滅や敲打痕は認められず滑らかな面をなす。

西日本では縄文後期に目立つ定角石斧のなかで比較的早い段階の資料とみられる。(合田)

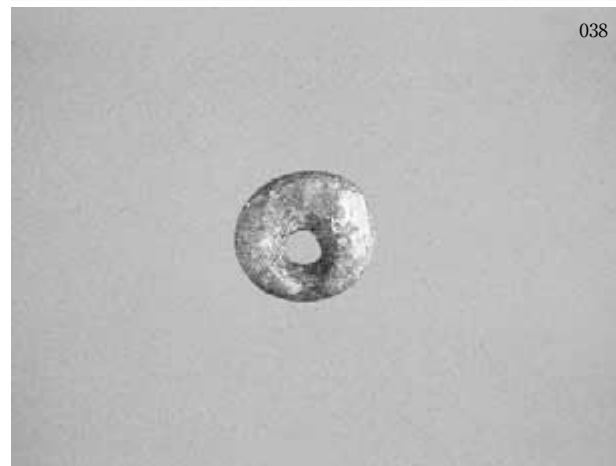


037

038 小玉 縄文後期末
向出遺跡 (L2.5・T0.8) 文献.531

墓坑からの出土。宮滝2式の土器片やサヌカイト製石器片を伴う。中央の孔は両面から穿たれている。石材は結晶片岩様緑色岩で、科学分析から九州南部産であることがわかっている。小玉の性格については首飾りの一部であるという説がある。

墓坑の埋土を分析したところ、動植物遺体と考えられる脂肪酸が検出されている。(松尾洋)



038

039 垂飾り 縄文
徳大寺遺跡 (W1.6・L4.3・T1.1) 文献.505

ピットから出土。淡緑色の滑らかで硬質な石材を素材とする。素材の形状を生かしつつ、全体的に磨いて形を整えた痕跡がある。穿孔はない。共伴遺物はないが、同じ遺構面で、縄文時代晩期に属すると考えられる住居跡3棟や縄文土器が比較的近接して検出されていること、弥生時代以降は同種の遺物が認められないことから、当該期の遺物と判断した。(若林幸)



039

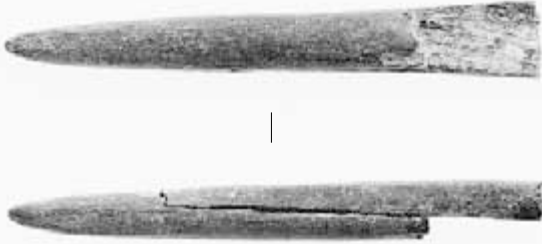
040 石製装飾品 縄文晩期
池島・福万寺遺跡 (W4.0・L5.2) 文献.566

縄文後～晩期と考えられる土壌層中から出土。扁平な楕円形の円礫を磨き、長軸両側から穿孔して貫通させ、表面に直線を組み合わせた線刻を入れたもの。何らかの装飾品と考えられるが詳細は不明である。東北地方の縄文遺物である土板、岩板に近似する文様が認められるものの、このように穿孔するものはなく、希少な資料である。(中尾)



040

041



041 小型石棒 縄文後期
西浦東遺跡 (ℓ30・T4.4) 文献559

同一個体の石棒が屋外炉と包含層の2ヶ所から出土した。節理の発達する黒色の粘板岩と考えられる。全体を丁寧に研磨し、先端部は丸く仕上げる。縦方向に不自然な形で割れており、意図的に割った可能性がある。また屋外炉の周囲ではサヌカイト石核や剥片が集中して出土しており、石器製作場において祭祀が行われていたと考えられる。(木嶋)

042



042 大型石棒 縄文後期
向出遺跡 (MD9.2・L38.9) 文献531

中央に三角錐状の礫を配した楕円形の土坑より出土。緑泥片岩製の無頭の大型石棒である。石棒は土坑の北西部より、ほぼ底面直上で南北に主軸をとるようにして検出された。一端は尖り気味に、他端は丸く整形し、表面をよく研磨している。

このような大型石棒の完形品が明確な出土状況を示して検出されたことの意義は大きい。(永野)

043



043 大型石棒 縄文後期
向出遺跡 (md10.1・ℓ27.7) 文献531

円形の小型土坑より、下端が土坑底面にわずかに接するような立位状態で出土。結晶片岩製。形状は断面ほぼ正円形の円柱状をなし上端は欠損しているが、下端は平坦に形成されている。表面はよく研磨されている。土坑は石棒以外の出土遺物は無く、その規模からも、この石棒を樹立させるためのものと思われる。石棒の性格を考えるうえで貴重な資料である。(永野)

044



044 石刀 縄文後期～晩期
向出遺跡 (w2.6・ℓ14.1) 文献531

遺物包含層から出土。両端部を欠損している。刃部と背部の間に鈍い平坦面を有しており、横断面形態はほぼ左右対称の五角形状を呈する。全体が研磨されており、とくに刃部や平坦面は丁寧である。

当資料は表面が被熱しており、当該期の祭祀活動がうかがえる興味深い資料である。

(永野)

045 石刀 縄文後期～晩期
向出遺跡 (w3.2・ℓ14.8) 文献.531

遺物包含層から出土。平面形態は基部から先端部へと若干広がる。研磨は全体的に粗いが、刃部と背部の間に形成された面に関しては非常に丁寧である。

当資料は先端部を欠損しているが、欠損部にも軽い研磨が施されている。このことから、欠損後の再利用が窺える。

(永野)



045

046 石刀 縄文後期～晩期
向出遺跡 (w2.8・ℓ14.4) 文献.531

弥生時代後期の竪穴住居から出土。基部片で、片岩質の石製品。背部と刃部の間に平坦面をもち、やや鋭角の刃部をもつことから、その横断面形態は細長い五角形状を呈する。全体的に磨滅している。

当資料と前述のNo.044・045の資料は、その材質や幅、厚さなどの類似性から同時期に製作されたものと思われる。

(永野)



046

047 石刀 縄文後期～晩期
向出遺跡 (w5.8・ℓ11.9) 文献.531

弥生時代後期の住居址から出土した石刀基部。

平面形態は刃部と背部がほぼ垂直に立ち上がっている。一部欠失しているが、刃部と背部の間にはややまるみをおびた鈍い面をもつことから、本来の横断面形態は五角形状を呈していたと考えられる。いずれの面も入念な研磨が施されている。

(永野)

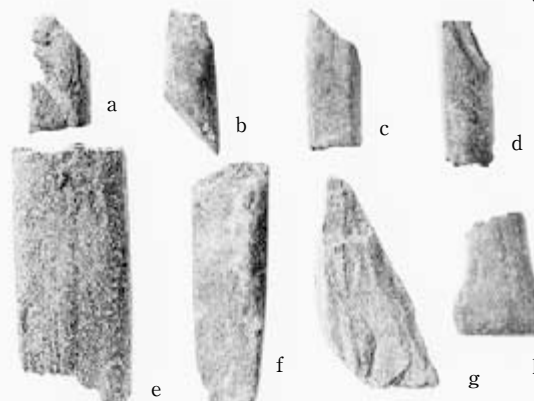


047

048 石棒・石刀 縄文後期～晩期
向出遺跡 (下右:w3.8・ℓ5.2) 文献.531

cとgは縄文時代後期の土坑より出土。それ以外は縄文時代後期から晩期にかけての遺物を多く含む包含層や後世の遺構から出土。いずれも片岩質の石製品であり、丁寧な研磨がなされている点で共通する。gのみ石棒の碎片であり、それ以外は石刀である。hは下半が膨らむ扁平な基部で、当遺跡では他に類似の資料は見られない。

(永野)



048

049



049 弥生土器一括 弥生前期
若江北遺跡 (中央壺:MD27.6・h25.0) 文献431

自然堤防の微高地上に竪穴住居・柵・土坑等が下層には掘立柱建物が検出された。南側河道の最終流路から弥生前期の最古段階に属する大量の土器が出土。北側後背湿地には水田畦畔も検出。稲作受容期の集落の実態・文化の伝播に迫る大きな手懸りである。器種は壺・甕・鉢他が揃うが生駒西麓産が多くを占めるのが注意され、突帯文土器の系譜を引く壺もある。(瀬川)

050



050 弥生土器(壺) 弥生前期
若江北遺跡 (上中:MD26.0・H27.4) 文献431

No.050～052はNo.049と一連の資料である。前列はNo.049と同一の溝、後列は土坑・住居址から出土。いずれも口縁部は短く外反し口径は15cm前後と揃う。内外面ともミガキが多用され、口縁部と頸部の境および頸部と体部の境には段を削り出すものが多い。重弧文・斜線文など細いヘラ描文様が施される。後列右端壺以外は生駒西麓産の遠賀川系土器である。(瀬川)

051



051 弥生土器(甕) 弥生前期
若江北遺跡 (右:RD20.7) 文献431

いずれも微高地上の土坑から大量の土器とともに出土。倒鐘形の器形で如意形の口縁端部には刻目をもつこと、口縁部・内面のナデ調整は共通する。左例の外表面には、成形時に工具による押圧後ナデしているため凹凸があることが注意されている。中央例は口縁部と体部の境に段を削り出す。沈線等の装飾はなく古相を示す。これらは生駒西麓産ではない例である。(瀬川)

052



052 弥生土器(鉢) 弥生前期
若江北遺跡 (上右:RD23.0) 文献431

微高地上土坑から出土。口縁部の形状は直口と外反するものがある。文様例として中央小型の鉢は2条の沈線間に下向重弧文と山形斜線文を使い分け、下部には爪形圧痕で縦列の文様とし一列を下方に延す。後例右では上半の沈線間に山形斜線文、部分的に縦位沈線・下向重弧文、下部にはまばらに上向重弧文を施す。壺と同様正面観の意識が見られる。(瀬川)

053 弥生土器（甕） 弥生前期
若江北遺跡 (rd20.5・h25.3) 文献.431

集落域南辺に位置する溝から出土。生駒西麓産の胎土を用いて製作されたもので、外面全体にナナメハケ、内面にナデが施されている。体部上位には明瞭な段を形作っていることが特徴的であり、その命脈は遠く北部九州の板付Ⅱ式土器にまでたどることができる。その姿相から近畿地方の弥生時代前期最古級段階に属する遠賀川系土器の一つであると考えられる。(三好)



053

054 弥生土器（壺） 弥生前期
若江北遺跡 (rd12.0・h27.3) 文献.431

集落域内の土坑の一つより出土。多くの土器片とともに出土した。生駒西麓の胎土で製作され、器形は厚く大きな底部から、中央部附近に最大径を持つ体部へつづき、短く外反する口縁部にいたる。口頸境と頸体境には細く浅い沈線がめぐらされ、その下位には上向の重弧文が添えられる。上記と同様、近畿地方最古級段階の遠賀川系土器の一つである。(三好)



054

055 弥生土器（壺） 弥生前期
若江北遺跡 (RD12.4・H28.7) 文献.431

集落域南辺に位置する河川から出土。生駒西麓産胎土で製作され、形態や文様は長原式段階の壺に酷似する部分もある。しかし、頸部が太いことや調整にハケ状工具が用いられるなど、細部では相違点も指摘できる。このことから縄文晩期長原式土器製作集団と遠賀川系土器製作集団とが接触し、双方の要素を折衷させた結果を具現化している土器と考えられる。(三好)



055

056 弥生土器（氷Ⅰ式深鉢） 弥生前期
若江北遺跡 (md11.2・h6.3) 文献.431

竪穴住居の埋土内から出土。体部の破片で、下半にはRの捺糸文を持ち、中央部付近の屈曲部には接続部の点刻が発達した浮線文が施されている。これらの特徴から、東日本に広く分布する氷Ⅰ式に分類されるもので、関東の千網式や南関東地域のものに類品がみられる。小片ながら大洞A'式併行段階の広域編年を考える上で非常に有意義な資料である。(三好)



056



057

057 弥生土器集合 弥生前期
田井中遺跡 (前列右:RD17・H29) 文献.459

最大幅約 8 m、深さ約70cmの溝状の落込みから出土。床面は起伏に富み、他の溝と合流するので、一時流水していた可能性もある。

出土遺物は、サヌカイト製石器類91点、磨製石器 19点、木製品 2点、土製円板 7点、紡錘車 1点、土錘 4点、人骨、獣骨、種子類、そして弥生土器17,398片と多種多様にわたる。時期の判明する弥生土器は、中期 6片に対し、前期は17,045片に及び、前期の中頃から後半(寺沢・森井編年 I-2~I-3 様式)が主体となる。器種組成は、壺が約半数、甕が約 1/4、他に鉢、壺や甕の蓋、ミニチュア土器もある。当遺跡は生駒山地西麓に近いが、角閃石を含み褐色をしたその特徴的な胎土は約 5%と少ない。

落込みへの廃棄遺物なので、厳密な一括性はないが、資料が比較的少なかった時期の土器群である。また、当地区の時期が明らかになったために、田井中遺跡周辺での前期集落の移動も確認できた。(本間)



058

058 弥生土器(壺) 弥生前期
田井中遺跡 (RD19・H33) 文献.459

落込みから出土。腹部が大きく張り出す扁平な体部をもつ。頸部に刻み目をもつ貼り付け突帯、肩部に削り出し突帯、体部にも刻み目をもつ特徴的な貼り付け突帯が、各 1 条めぐる。調整は基本的に横方向のヘラミガキで、外面の口頸部と体部の一部にハケが残る。

形態や文様から、尾張系の壺と考えられる。

(本間)



059

059 弥生土器(壺) 弥生前期
田井中遺跡 (MD7.5・h7.0) 文献.459

No.058と同じ落込みから出土。ミニチュアの壺形土器で、口縁部を欠く。

体部上半に施されたヘラ描き文には、鋸歯文、羽状文、上下方向の 2 本一組の直線文とが混在しており、文様に統一性がない。体部と底部との境にも、ヘラ描き沈線が 1 条めぐる。内面には指頭圧痕が残る。

他に甕形のミニチュア土器も出土している。(本間)

060 弥生土器（壺・甕） 弥生前期
瓜生堂遺跡 （下中:w7.0・ℓ8.4） 文献.583

溝や包含層から出土。頸・胴部の外面は、段、削り出し突帯、列点文、ヘラ描きの平行沈線文・木葉文・重弧文・菱形文など多彩な文様で装飾され、前期土器の中でも古相を示す。当遺跡では北西端で前期後半の集落跡が確認されていたが、これら資料の出土地点は北東端にあたり、東西約90mの前期前半の小規模集落が営まれていた事実があらたに判明した。（秋山）



060

061 弥生土器一括（第Ⅰ様式） 弥生前期
池島・福万寺遺跡 （上中:RD17.0・H15.1） 文献.566

府内最古と考えられる弥生前期の水田面から出土。大甕は口縁端部に刻み目を施し、頸部に削り出しの段を持つ。底部は欠失している。小型甕は倒鐘形のもの。壺は底部のみの残存。外面に密にミガキを施す。

いずれも水田域からではなく、微高地などの非可耕地からの出土で、生産地とそれ以外の場所を明確に使い分けている状況が推測される。（中尾）



061

062 弥生土器（壺） 弥生前期
池島・福万寺遺跡 （RD25.0・H49.4） 文献.567

水田面直上から出土した、完形の大型品である。第Ⅰ様式の中段階から新段階に属するものと考えられるが、無文のため特定はできない。内外面の全面に横方向の丁寧なミガキ調整を施している。底部は一方向にミガキ調整を施した後、水平を保つために周縁を搔き取っている。内部から多数の植物遺体がみつかる。（中村淳）



062

063 弥生土器（壺） 弥生前期
池島・福万寺遺跡 （RD14.9・H21.8） 文献.439

分厚い洪水砂中から出土。頸部と胴部に6条程のヘラ描き沈線文が施され、胴部のやや低い位置で横に張るプロポジションである。外面全体には、黒色物質を塗布している。第Ⅰ様式新段階に属する。

同じ洪水砂中から、No107の打製石剣が出土している。

（佐伯）



063



064 弥生土器集合（瀬戸内型甕） 弥生前期
池上曾根遺跡 （上左：ℓ6.0） 文献456・584

ピットや溝から出土した弥生前期の瀬戸内型甕。同甕は、口縁部の上端きわに突帯を1条めぐらせ平坦面を作り出した形態に特色をもつ。通常、突帯にはヘラで刻み目、突帯下には沈線文を加えて飾る。上右の1点は生駒西麓産の胎土をもつ。突帯を口縁下に貼り付けることから朝鮮半島系無文土器との関係も云々されている。（井藤暁）



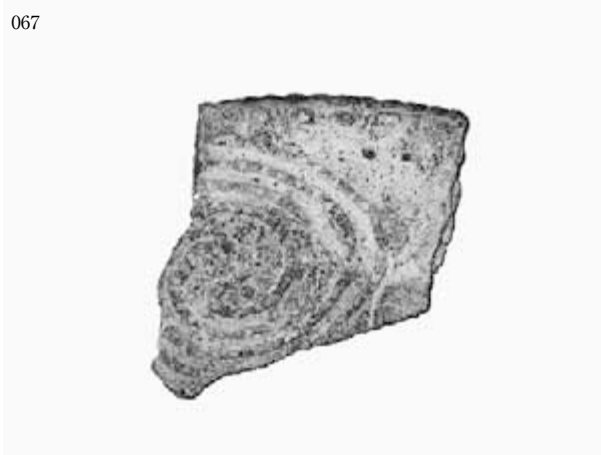
065 被熱変形土器 弥生前期
池上曾根遺跡 （左：ℓ8.1・T1.1） 文献400・584

弥生時代前期から中期後半にかけての湿地落込み状遺構下層から出土。高熱を受け、変形して歪んでしまった土器の破片である。左の個体は広口壺の口縁部片、右の個体は底部片である。両個体の形態的特徴や出土位置から弥生時代前期の新段階に推定される。土器が変形するには1,200℃の高温を必要とするが、日常では稀な状況であろう。（植村）



066 疑朝鮮系無文土器 弥生前期
池上曾根遺跡 （左：rd9.3,右：rd20.1） 文献456・584

落込み状遺構や土坑から出土。左は口縁部が小さく開く無文の壺、右は鉢状に広がる口縁部にやや角張った断面楕円形の粘土紐を巻き込むように貼り付けた無文の甕である。いずれも朝鮮半島系の形状をもつ。とくに、壺は、中期無文土器の松菊里式土器に類似した資料に当たる。近畿における同土器の時期比定に有効である。（井藤暁）



067 特殊文様をもつ土器 弥生前期
池上曾根遺跡 （w11.7・ℓ16.5） 文献584

弥生前期後半遺構面上より出土。口縁部片のみ遺存。口縁端部に綾杉状のヘラ描き文を施し、口縁内面に4条の粘土紐を貼り付けて渦巻状をなす。本例以外にこのような過度の装飾を持つ土器は、近畿では唐古・鍵遺跡出土例にも見られるが、播磨以西の地域で多く出土している。以上のことから、本例は瀬戸内地域の影響を受けたもの、又は搬入品と考えられる。（朝田）

068 摂津型水差 弥生中期後半
東奈良遺跡 (MD28.5・h55.0) 文献.381

大型の土坑から出土。紡錘形の体部外面には4帯の櫛描直線文の間に波状文や斜格子文が施されている。刳込みのある口縁形態をもつこの器種は、大阪府北部～兵庫県南東部を主要分布域とし、摂津型水差と呼ばれている。その初源期の形態は瓢箪の上部を切除した容器に類似する。淀川水系の弥生中期土器を特徴づける型式である。(若林邦)



068

069 台付無頸壺 弥生中期後半
東奈良遺跡 (RD8.1・H16.0) 文献.381

方形周溝墓の周溝から出土。短く外反する口縁形態で体部上半に櫛描波状文・直線文を施す小形品である。欠損により明確でないが、口縁部に紐孔の穿たれることの多い器種である。実際に同一遺構からは櫛描文を施した紐孔をもつ小形壺蓋が出土している。類似品は大阪府北部・京都府南部・滋賀県を中心に分布しており、地域性を示す器種である。(若林邦)



069

070 ミニチュア土器 弥生中期後半
東奈良遺跡 (上左:RD5・H4) 文献.381

遺跡北端域の方形周溝墓の周溝とその周辺の遺物包含層から出土。無頸壺などを模して作られた非実用的な土器で、既に削平されてしまった方形周溝墓盛土上に本来置かれていたのであろう。ただ、その出土量も出土する墓も限られているため、一般的な遺物とはいえない。被葬者の性格を反映するのだろうか。

(山元)



070

071 弥生土器集合 弥生中期
溝咋遺跡 (a:RD26・H40) 文献.510

当遺跡には木棺墓、土坑を伴った方形周溝状隆起の一群がある。そこからの出土土器には中期後半を中心とした壺・甕・高杯・器台形土器がある。中でも大形の加飾された壺形土器が目立つ。左から二番目奥の壺形土器には体部から頸部に櫛描直線文・波状文、口縁端面に凹線文が施される。右にある甕形土器は棺として利用された可能性もある。(一瀬)



071

072



072 弥生土器集合 弥生中期
瓜生堂遺跡 (後列右甕:RD18.7・H40.6) 文献.583
中期中頃～後半の方形周溝墓の供献土器で、周溝より出土。水差・高杯・壺・鉢は体部に穿孔がある。高杯・鉢は口縁部に凹線文を施し、鉢は把手が付き上げ底で、台部分に装飾的な透孔をもつ。広口壺は生駒西麓産の胎土で、体部に櫛描籐状文を、長頸壺も同直線文を施す。櫛の原体幅が広く体部が下方に張り出す例があることから、第Ⅳ様式前半を下限とする。(川瀬)

073



073 弥生土器一括 弥生中期
船橋遺跡 (上右:RD18.8・H33.7) 文献.465
不定形土坑から一括出土。いずれも広口壺である、中央の2点は無文、両側の土器は櫛描直線文・籐状文で飾られる。中期中葉。
当遺跡では従来から弥生時代中期を中心とする遺物が知られているがいずれも採集品であり、発掘で遺構に伴う遺物として出土した例としての意味は大きい。(寺川)

074



074 弥生土器集合 弥生中期
船橋遺跡 (上左:RD19.6・H35.5) 文献.465
包含層を掘削中に14点検出した。土器はいずれも完形又は完形に近く、直線的に並び横位で出土した。中央手前の壺は櫛描籐状文・円形浮文が施され、体部下半には、焼成後穿孔されている。
中期前葉から中期中葉後半と時期幅があることから、複数の遺構面があった可能性が高い。(寺川)

075



075 弥生土器集合 弥生前期～中期
船橋遺跡 (上中:RD14.8・H23.5) 文献.465
包含層から出土。手前左は瓢形土器といわれ、斜めになった口縁直下には円孔が穿たれている。右側の壺の体部上半には櫛描流水文が施される。中央手前は平面円形の蓋。中央の平面楕円形つまみを囲むように環状に突起が貼付けられている。突起の間には円孔が4ヶ所に穿たれる。遺構は未確認であるが当地での活動の一端を窺わせる資料である。(寺川)

076 弥生土器一括 弥生中期
池上曾根遺跡 (上右:RD28.5) 文献.400

土坑から一括出土。上左の大形壺体部下半の破片を受け皿に、底部を打ち欠いた上右の大形壺を直立させ、設置する。飯蛸壺完形品やその他の破片などは、直立した壺の底部にかたまっていた。この種遺構は湧水層まで掘削されることから、調査担当者は祭祀土坑というよりは、土器を側にした「土器井戸」と推測している。(井藤暁)



076

077 B.C.52年の土器 弥生中期
池上曾根遺跡 (ℓ18) 文献.400

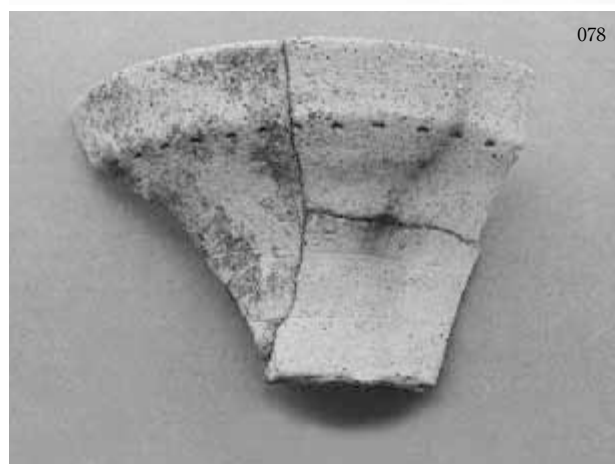
遺跡中心部の大形掘立柱建物(大形建物1)柱根のうち、柱穴12のものが光谷拓実氏による年輪年代法で測定され、伐採年は従来の考古学の年代観より約100年古い標記年を得ることになった。柱穴12掘方検出土器は櫛描文で飾られるものが多く、中期後半第IV様式前半にあてられる。土器による相対年代と実年代の再検討を促す資料になった。(井藤暁)



077

078 屈曲部に穿孔のある壺 弥生中期
池上曾根遺跡 (rd25.2) 文献.584

大形土坑から出土。ただし、同一個体の別破片が約43m離れた調査地点から検出された。口縁部は櫛描波状文、頸部は直線文で飾られた中期受口状口縁壺の口~頸部破片。口縁の屈曲部に約1.5cm間隔で0.25×0.5cm大の竹管を割ったらしい工具による穿孔列がある。穿孔は貫通し、類例のない非常に特異な装飾となっている。(井藤暁)



078

079 弥生土器一括 弥生中期
男里遺跡 (中央右:H31.2,右:H34.7) 文献.542

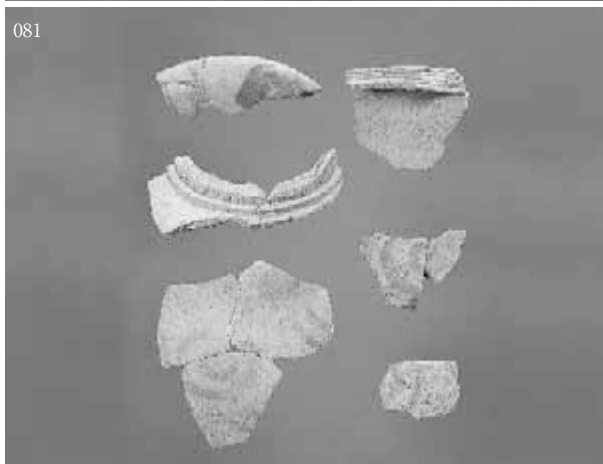
当遺跡では、弥生時代中期の集落がみつまっているが、その南部で方形周溝墓群が検出されている。いずれもこれらの周溝から出土したもので、盛土上から転落したものと考えられる。第IV様式のほぼ完形の脚台付水差(中央右)、把手付広口壺2個体(右、中央左)、甕(左)である。脚台付水差は、櫛描列点文や櫛描籐状文で飾られた優品である。(中村淳)



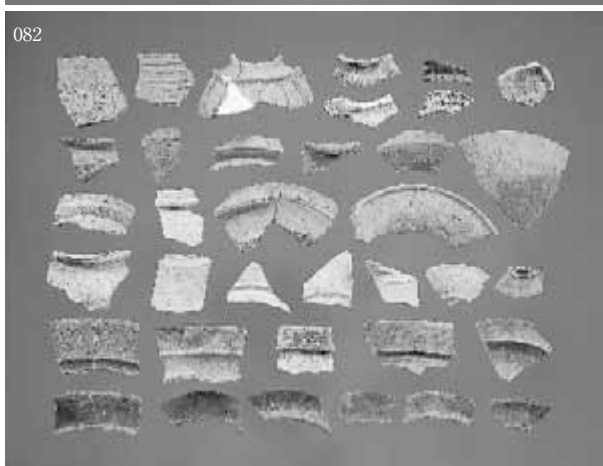
079



080 東部瀬戸内系の弥生土器 弥生後期
溝咋遺跡 (上:md34.0・h20.0,下:MD48.5・H61.0) 文献509
微高地上の土器棺に用いた後期初めの土器である。長径1.04mの楕円形掘方の土坑内に、鉢形土器を蓋、壺形土器を身に用い、互いに口縁部側を合わせ、横に納める。壺形土器には墓坑底と接する体部に径35cmの打ち欠きがある。底部に内側からの穿孔や口縁部外面に黒色物質もみられる。胎土に片岩を含むことから、阿波あたりのものとされる。(一瀬)



081 赤彩色の弥生土器 弥生後期
溝咋遺跡 (上右:rd30.9) 文献509
溝の砂層から出土であるが、もともとは下層にある遺構面に所属する搬入品とされる広口の壺形土器である。口縁部内面、体部外面肩部にベンガラ・鉄化合物による赤色顔料が施される。口縁部の文様は判然としないものの、肩部のものはおそらく10単位の渦巻き文がS字状に横方向へと連続して一周する文様帯になると考えられる。(一瀬)



082 外来系の弥生土器 弥生前期～古墳前期
溝咋遺跡 (a:md13.5・h4.5) 文献509
当遺跡からは搬入品とそれに類する土器が出土する。庄内期及び近辺の河内、北近畿のものが多い。遠方では淀川沿いのため、近江、河内、瀬戸内が目立つ。さらに、関東地方を中心に出土する壺形土器(a)の存在が目でき、肩部に横、体部に等間隔に縦方向の刻み目のある突帯がある。他にも東海系S字形口縁の甕形土器や山陰系の鼓形器台もある。(一瀬)



083 弥生土器一括 弥生後期
瓜生堂遺跡 (左:RD31.1・H17.2) 文献583
弥生後期前半に相当する地形の高まり状遺構から出土。同層では、特に遺構は検出されなかったが、数点の完形土器が出土した。弥生後期に新しく出現する長頸壺も出土し、土器成形では分割成形技法が顕著に見られる。調査区周辺では配石遺構などの祭祀関連遺構が検出されていることから本例も祭祀に伴う土器群である可能性がある。(河村)

084 弥生土器一括 弥生後期末
池島・福万寺遺跡 (中央壺:RD13.2・H25.6) 文献.567

弥生時代後期から古墳時代前期に続く溝の埋土から大量の遺物が出土した。これらの土器は完形品や破片の集中するものが多く、溝内に投棄されたものと思われる。土器は煮炊具等の生活道具が多いものの、一部に祭祀具もみられる。溝の周辺では多数のピットなどを検出しており、集落域との関連を考える上で重要な遺物群である。(亀井)



084

085 手焙形土器 弥生
池島・福万寺遺跡 (MD18.0・h16) 文献.541

弥生時代後期後半の遺構面を覆う洪水堆積層中から出土。外面には文様・調整が明瞭に残る。一部欠損するものの覆部が小ぶりであり初現的形態といえる。名称は、手焙用火鉢に形態的に類似することから付けられたが、本資料に煤の付着は見られず、実際の用途は不明である。祭祀との関連が指摘され、古墳時代の開始とともに姿を消す、特異な遺物である。(廣瀬)



085

086 弥生土器 (長頸壺) 弥生後期
田井中遺跡 (RD13・H30) 文献.459

井戸から出土。やや外反して直線的に伸びる口頸部、球形の体部、しっかりした底部からなる典型的な長頸壺。口頸長と体部高がほぼ等しく、その境は明瞭にくびれる。

体部上半には、記号文として、平行する2条のヘラ描き沈線が弓形に描かれている。

弥生時代後期前半に属する。(本間)



086

087 異種胎土使用長頸壺 弥生後期
船橋遺跡 (RD10.4・H22.4) 文献.31

包含層から出土。球形の体部をもち、頸部から口縁部へほぼ直線的に伸びる。内外面ともハケ調整を施す。

写真にもはっきりと写っているが、二種の異なった胎土が意識的に使われておりマーブル状になっている。二種の胎土のうち、ひとつは角閃石を含みチョコレート色をした生駒西麓産の土である。

他に、異種胎土を使った甕も出土している。(國乗)



087

088



088 絵画土器（鹿） 弥生中期後葉
東奈良遺跡 (w6.9・ℓ5.4) 文献468

方形周溝墓の周溝内より出土。大型の壺もしくは甕の外面に線刻された鹿がうかがわれる。頭部と尾部は欠損しているが、斜線で充填された三日月形の体部と脚が4本描かれている。当該期は絵画土器の最盛期だが、墓に関連して検出された例は珍しい。意図的に方形周溝墓に廃棄されたとすると、絵画土器をめぐる祭祀の性格を考える上で貴重である。（若林邦）

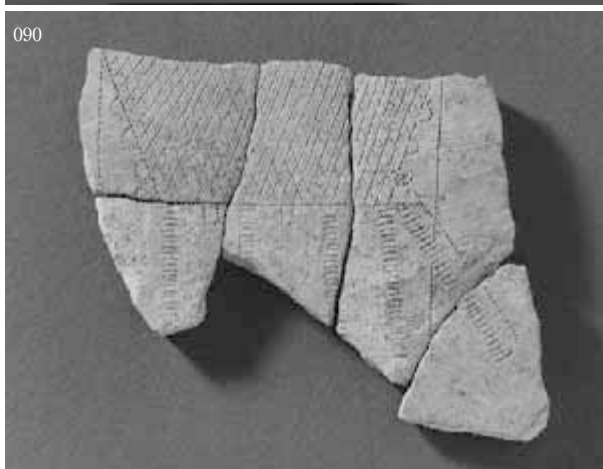
089



089 線刻土器 弥生中期～古墳前期
溝咋遺跡 (上左:ℓ5.5) 文献509

古墳時代初頭～前期の各包含層から線刻土器が出土。庄内期を中心とする。弧を描くものは複数本平行してセットになり、直線は鱗のように放射状気味に平行してその端が直交線で閉じられるものやVの字状のものがある。人面を表現したものも含まれるが、この写真例の表現意図は判然としない。いずれも壺形土器肩部に集中する傾向がある。（一瀬）

090



090 絵画土器（建物） 弥生中期
池上曾根遺跡 (w14.4・ℓ11.2) 文献456・584

土抗より出土した大型広口壺の破片に切妻屋根で両妻部に独立棟持柱を備え、右妻部に手摺付き梯子を架けた、桁行3間、屋根倉式の高床式掘立柱建物の側面を表現する絵画が発見された。この絵画は他の遺跡で出土した物と比較しても精緻な描法と写実的で具体的な諸表現を見せている。他の土器絵画と本絵画を参考にして現地で大型掘立柱建物が復原された。（井藤徹）

091



091 絵画土器（鹿） 弥生中期
池上曾根遺跡 (rd24.8) 文献400・456・584

包含層から出土。中期後半の受口状口縁壺の口縁部破片。屈曲部に複合鋸歯文と2頭の鹿を描く。左の鹿は大きく、首が長く、角がない。四肢も長い。対する右の鹿は小さく、首も短く、四肢も曲線的にか弱く描かれる。牝鹿と子鹿を描いたものとわかる。弥生土器の絵画の鹿は角が標識とされ、牡鹿が描かれるのが一般的である。（井藤暁）

092 被熱変形土器 弥生中期
池上曾根遺跡 (上左:w7.5) 文献.584

大形建物の柱穴を含む大形建物・井戸の周辺一帯から出土。土器は歪みや剥離等の変形を受け、器表は発泡状や海綿状である。分析から約1,200度で被熱したという結果を得ている。器種は甕、壺であり、口縁部、体部、底部片がみられる。弥生前期の被熱変形土器も僅少なが出土しており、この時期から通常ではない高温が得られていたことを示す資料である。(合田)



092

093 製塩土器転用高杯 弥生中期
小島北磯遺跡 (BD8.4・h9.7) 文献.530

包含層から出土。高杯の脚部であるが、二次的な被火により土器の表面が赤変する。下層の遺構面から地床炉が検出されていることや、他にも二次的な被熱を受けた壺底部などが出土していることなどから、製塩土器として転用されたと考えられる。大阪湾沿岸地域における土器製塩の始まりが弥生時代中期にまで遡ることを示唆する資料である。(後藤)



093

094 飯蛸壺 弥生中期
池上曾根遺跡 (上中:RD4.2・H7.2) 文献.584

掘立柱建物群域の井戸より出土。丸底で口縁直下一孔を持つ飯蛸壺は、弥生中期以降、大阪湾岸の弥生遺跡で多く見られる。漁撈活動との関連性も想定されるが、本遺跡では、大型土器の底部を打ち欠いて転用した「土器井戸」が多く見られ、そこからも数点の飯蛸壺が出土することから、それらを少量の水を汲み上げる釣瓶に転用した可能性も考えられる。(朝田)



094

095 土錘 弥生中期ほか
池上曾根遺跡 (上左:MD4.0・L6.3) 文献.584

弥生中期の遺構や包含層より出土。長さは約5.0～7.0cmで、紡錘形や俵形を呈する。貫通孔を持つ管状土錘は、弥生前期より大阪湾岸から瀬戸内海中・東部域を中心に通有的に分布している。下段左から2番目の有溝土錘は稀少で、本資料では長軸に沿って巡らせた溝内に、短軸方向の貫通孔を有する。形態的に木製浮子に類似するが、土製品では類例を見ない。(朝田)



095

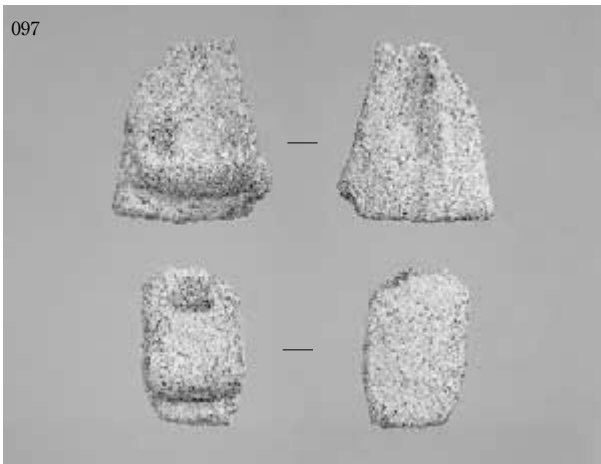
096



096 焼粘土塊 弥生中期
池上曾根遺跡 (W20・L16) 文献.584

掘立柱建物群域の包含層より出土。全体に明赤褐色を呈し、弥生土器と同程度の温度で焼成されたものと推測される。胎土にスサ（植物繊維）や粗い砂粒を含む。表面には工具の圧痕が残り、裏面には割竹状の材に押し付けて彎曲した面があるなど、人為的に形成された痕跡を確認できる。弥生土器焼成の際の「覆い焼き」に用いた粘土材の可能性も考えられる。（朝田）

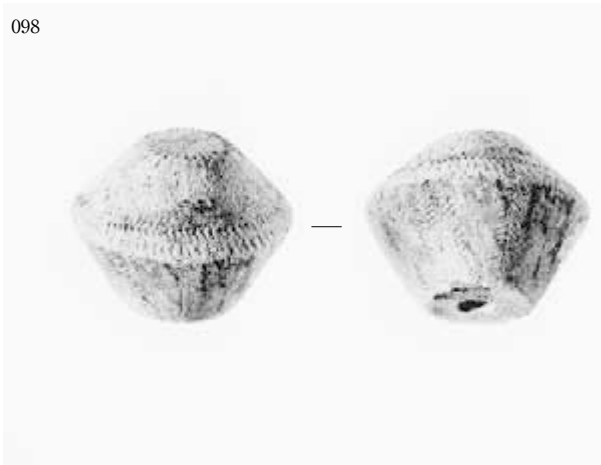
097



097 銅鐸形土製品 弥生中期
東奈良遺跡 (bd6.5・h5.2・t0.7) 文献.468

弥生中期の包含層より出土。鱗部と身中央付近の二つの破片が出土した。身は舞より下のみ残存で、紐など上部の構造は不明である。体部下は外側に横帯文を表すわずかな段差が認められる。体部内面の下部には、幅約1.5cmの突帯が貼り付けられている。ナデで仕上げられている。内面突帯を作り出した銅鐸形土製品としては稀有の例である。（川瀬）

098



098 把頭飾（土製品） 弥生中期
東奈良遺跡 (MD5.6・T4.2) 文献.468

方形周溝墓の周溝内から出土。表面の一部は摩滅しているが、ほぼ全体に綾杉文を基調とした文様が見られる。上半部では横方向に3列、下半部では縦方向と、上下により配置が異なっている。文様は、焼成後に先の尖った工具により精緻に施されている。

類例として、寝屋川市楠遺跡出土のものがある。

（佐伯）

099



099 仿製珠文鏡 弥生末～古墳
田井中遺跡 (D7.8) 文献.459

包含層から出土。仿製とは中国製を模倣した国産、珠文とは小さな突起のこと。

全体に歪み、鋳あがりも不良。縁は素文で平縁。文様は紐から外縁に向かって、圏線1条、不規則に配置された8つの珠文、圏線3条、櫛歯文帯という構成。

この鏡は、径10cm程度の小型品が多い仿製鏡の中でも小振り、時期的には比較的新しい。（本間）

100 円環型銅釦 弥生後期
溝咋遺跡 (W4.7・L8.4) 文献.509

本来、遺跡微高地上にのる土器棺群に伴ったと考えられる銅釦である。環身は幅4.5、厚さ3.5mmの中細のもので、内側の稜がややにぶい断面菱形を呈する。現状は片側から圧され長円形に歪むが、復原すると環外径は6.95cmとなり、大型の部類に属する。類するものは朝鮮半島南部から近畿地方にかけて出土し、東大阪市鬼虎川遺跡では鑄型がある。(一瀬)



101 銅鏃 弥生後期～
池島・福万寺遺跡 (左:w1.1・l3.8) 文献.439・541

右は中世耕作層中から出土。左は古墳時代と考えられる土壌層から出土。どちらも有茎式である。

鏃身は菱形の断面形をしており、鏃が見られる。茎の部分はほぼ円形である。両者とも、連鑄式で鑄造された銅鏃であろう。

(佐伯)



102 柳葉形銅鏃 弥生末期
久宝寺遺跡 (W1.9・L6.3) 文献.462

5世紀後半に埋没した旧河川を形成する細かいシルト層からの出土である。久宝寺遺跡では特に弥生時代末から古墳時代に人の活動が活発であったことが、その時期の遺構の多さからもわかっている。この資料はそうした様子を改めて知る上で貴重である。

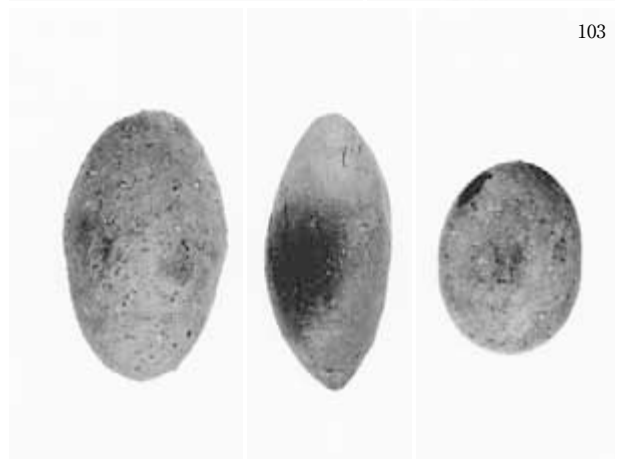
(松尾洋)



103 投弾 弥生前期ほか
志紀遺跡 (右:W2.7・L3.9) 文献.558

右は弥生中期～後期の水田小畦畔から、中は弥生前期の自然流路から、左は弥生前期包含層からの出土である。右は石製で円頭形。中と左は土製で、両端がやや尖る紡錘形をしている。

中央部を幅広にした紐にのせ、ぐるぐると回し、遠心力を利用して飛ばす武器と考えられている。世界的にも広く見られる武器である。(鹿野)



104



104 石剣 弥生前期
志紀遺跡 (W5.1・L20.1・T1.2) 文献558

弥生時代前期の包含層から出土。サヌカイト製の打製石剣である。両側縁から調整が施され、剣身は比較的短く、それよりやや短い柄部分が作り出されている。当該時期の河内地域の打製石剣は柄部分が明瞭につくり出されていないものが多い。本品は、柄が剣身より細身に作られ、明瞭に分割されている点に特徴がある。
(野口)

105



105 石剣 弥生前期～中期
池島・福万寺遺跡 (W3.6/2.8・L14.5・T0.7) 文献581

水田畦畔を検出中に出土。サヌカイト製の精巧なもので、先端を含む全体長1/3強の部分は刃縁が鋸歯状につくりだされる一方、基端部には自然面が残る。刃部先端を鋸歯状にしたものは山賀遺跡でも出土しており、前期に遡るとみられる。同種の遺物には下半部の刃縁を研磨しているものもあり、その部分を手で握って使用したと考えられる。
(若林幸)

106



106 石剣 弥生前期末
池島・福万寺遺跡 (W2.2・L13.5・T1.4) 文献560

包含層から出土。サヌカイト製だが風化により全体に灰色を呈している。下半部は刃縁を磨り落としていることから、前項の資料と同様、刃と柄が一体化した石器と考えられる。基端部には自然面が残っていたとみられるが、研磨されて滑らかな面を呈している。比較的厚みがあり、断面は凸レンズ状である。
(若林幸)

107



107 石剣 弥生前期末～中期初頭
池島・福万寺遺跡 (W2.8・L19.2・T2.2) 文献439

弥生時代の前期末～中期初頭の遺構面から出土。サヌカイト製の打製石剣である。レンズ状の断面を持ち、剣身のほぼ中央に稜が残る、細身に精緻な造りの石剣である。側縁には基部から刃部先端まで調整が施されている。基部端面には自然面が残っている。基部と刃部の明確な境はないが、刃部の先端付近は扁平な断面形で、側縁の調整はさらに細かい。
(野口)

108 石剣 弥生
吹田操車場遺跡 (W3.0・L13.0・T1.2) 文献.554

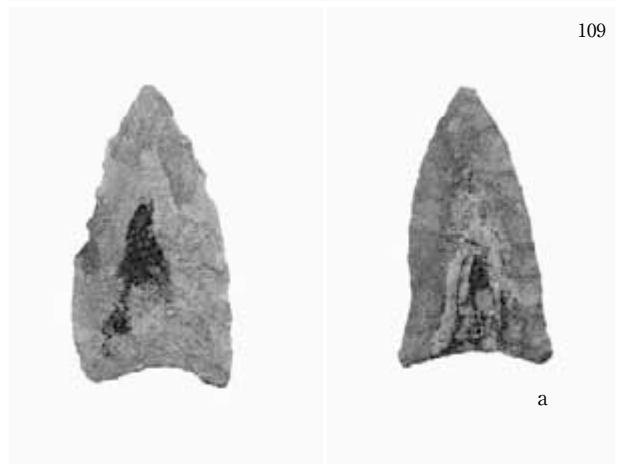
溝の最下層から出土。サヌカイト製で、精巧につくられている。全長のなかほどもしくはやや下よりに最大幅があり、そこから基部にむけて徐々に幅を減じる。最大幅より下の部分が柄もしくは着柄部と考えられる。刃縁の形状は直線的で、非常に鋭い切先を有する。断面の形状は凸レンズ状で、両面にきれいに鑄がとれる。(若林幸)



108

109 石鏃 弥生前期
志紀遺跡、池島・福万寺遺跡 (a:w1.4・ℓ2.8) 文献.558・581

a は池島・福万寺遺跡の弥生時代前期遺構面を精査中に出土。安山岩製の無茎式石鏃であり、矢柄との接合部に木質と樹脂が残存する。出土地周辺は水田域からわずかに離れる湿地であったと推測され、人や動物の足跡が検出されている。狩猟の途中に落としたものであろうか。矢柄の着装方法が分かる例は西日本では珍しく、貴重な資料といえる。(亀井)



109

110 大型尖頭器 弥生前期～中期
志紀遺跡 (左:W3.1・L16.7) 文献.558

弥生時代前期～中期の包含層から出土。サヌカイト製の大型尖頭器である。大きさに違いが見られるが、基部に近いほうに棘状の突起を左右対称に持つという共通の特徴を有する。現在までにあまり類例がなく、これだけまとめて出土した例はない。

近畿における大型尖頭器の一類型として興味深い資料である。(鹿野)



110

111 石小刀 弥生前期～中期
志紀遺跡 (下右:W2.3・L10.6) 文献.558

弥生時代前期～中期にかけての包含層から出土。サヌカイト製の石小刀である。全体が緩やかにカーブする刃部をもつものと直線の刃部をもつものとの2種類がある。さらに、刃部に突起を持つもの、鋸歯状の刃部を持つものがある。現在は加工具の一種として認識されており、対象物を切る、または削るという行為に使用されたものと思われる。(鹿野)



111

112



112 磨製石鉦 弥生
田井中遺跡 (W0.6・T1.2) 文献459

包含層から出土。粘板岩製で全体に丁寧な研磨されている。鏑が不明瞭で側縁も丸みを帯びることから基部に近い部分と考えられるが、幅が広いことから鉦と考えられる。

山賀遺跡の流路からこれと同様、石剣としては幅広い磨製石器が出土しているが、いずれも破損が著しく、全体の形状は把握しにくい。(若林幸)

113



113 石鎌 弥生
田井中遺跡 (W4.4・L14.8・T1.6) 文献459

包含層から出土。緑泥片岩製である。全体によく研磨されているが、基端部のみ研磨が及ばず敲打痕がみられる。刃縁は鋭いが基部付近は丸みを帯び、着柄痕らしい擦痕がみられる。農耕技術に伴って伝播した大陸系磨製石器の一種だが、出土点数はそれほど多くなく、北部九州とその周辺に分布が集中するのに加え、中期以降は数が減少する傾向がある。(若林幸)

114



114 石庖丁一括 弥生前期末～中期
池島・福万寺遺跡 (最上部:W5.8・ℓ12.0) 文献565

弥生前期末～中期初頭水田面の谷肩部のベース層より、5点の磨製石庖丁が斜めに重なった状態で出土。出土状態から単に廃棄されたものではなく、意図的に集積・埋納されたものと考えられる。

類例として知られる若江北遺跡や西ノ辻遺跡においても、本例と同様に河川内や谷肩部で検出されており、その性格を考えるうえで注目される。(岡本茂)

115



115 大型石庖丁 弥生
大庭寺遺跡 (H12.2・ℓ20.9・T0.9) 文献463

径1.8×0.6m、深さ0.15mの長円形の落込みから、柱状片刃石斧・石庖丁未製品・叩き石・素材となるサヌカイト等10点とともに出土。緑泥片岩製で、両面とも刃先から刃面上方まで光沢が見られる。大型石庖丁は身高があり薄身で刃部は鋭利な両刃で、両面に使用による光沢を持つ特徴がある。実験使用痕分析により、稲株の根刈りに使われたことが判明した。(石神)

116 石庖丁素材 弥生中期
池上曾根遺跡 (左: W8.5・ℓ12.5) 文献.584

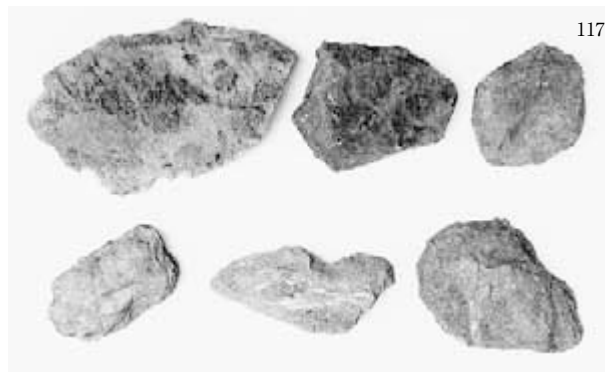
各種遺構や包含層から出土。本遺跡では石庖丁の完成品だけでなく、具体的工程が判明する、緑色片岩を原材にした製作途中品が数多く出土している。紀ノ川流域等から、適度な形状の素材を遺跡内に持ち込み、それらから加工を開始している状況が判明する。(秋山)



116

117 石庖丁製作途中品 弥生中期
池上曾根遺跡 (上左: W8.8・ℓ15.2) 文献.584

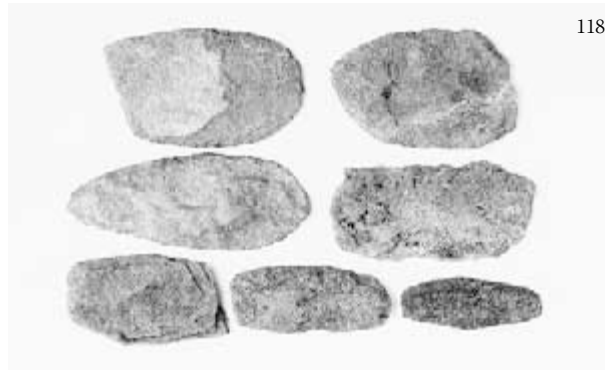
各種遺構や包含層から出土。No.116の素材から石庖丁を製作するにあたり、まず最初に大きく打ち欠き、石材の厚さを減じる工程の「粗割段階」を示す資料。体部の比較的広い面にわたる打撃、剥離を縁辺から行っている。この段階の出土資料は多くはない。(秋山)



117

118 石庖丁製作途中品 弥生中期
池上曾根遺跡 (上左: W7.7・ℓ13.0) 文献.584

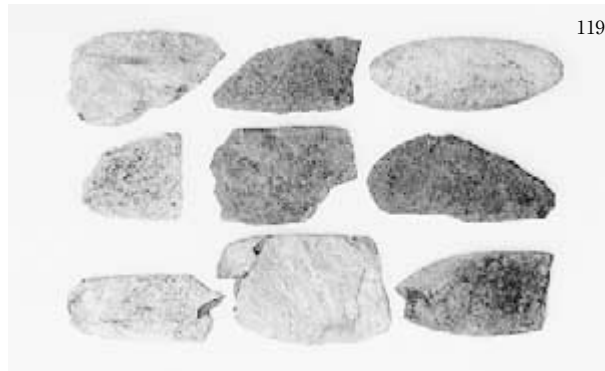
各種遺構や包含層から出土。No.117の過程を経て、ある程度薄くなった石材の縁辺に細かい剥離調整を加え、平面形を完成石庖丁に近似した形状に成形する「剥離成形段階」を示す資料。この段階の出土品を見ると、完成予定品の形状に大小あるのが分かる。(秋山)



118

119 石庖丁製作途中品 弥生中期
池上曾根遺跡 (上左: W5.6・ℓ10.1) 文献.584

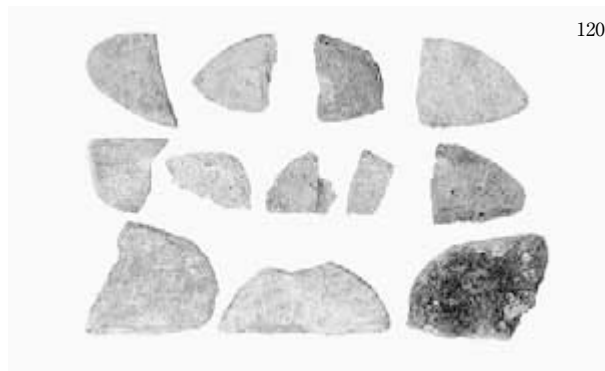
各種遺構や包含層から出土。概ね平面形を整えた石材を、研磨によって厚みを一層減らし、紐孔部以外を完成状態にする「研磨段階」を示す資料。粗・中・細研磨の順で施されるが、この穿孔前段階において、殆どの資料では刃部まできれいに細研磨される。(秋山)



119

120 石庖丁製作途中品 弥生中期
池上曾根遺跡 (上左: w5.8・ℓ6.9) 文献.584

各種遺構や包含層から出土。紐孔穿孔途中の「穿孔段階」を示す資料。穿孔には敲打法と回転法があり、同一個体で両者を併用するものや、同一紐孔部で敲打法の後に回転法を施す例がある。この工程を経て近畿地方における石庖丁製作は原則的に完了する。(秋山)



120

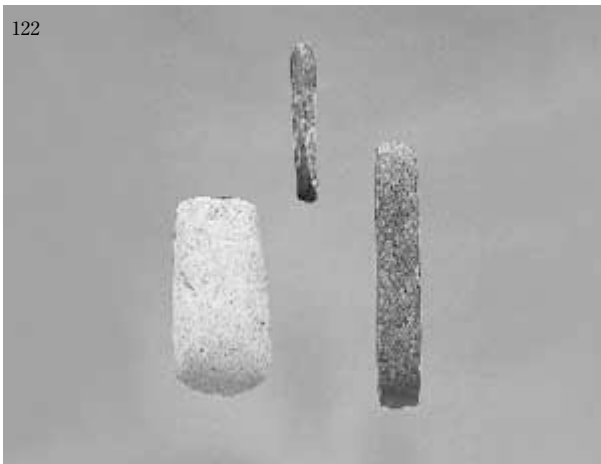
121



121 柱状片刃石斧 弥生中期
巨摩遺跡 (W2.2・L11.1) 文献.373

方形周溝墓の主体部の一つである小児用木棺内より、柄を外された状態で出土。緑色片岩類を素材とする完形品である。蓋板までが完存する木棺内からの出土であることから埋葬後の混入である可能性は否定され、石斧のみ単体で納められることも相まって、副葬されたとみなされる。近畿地方における該期の墳墓で確実に副葬品と断定できる稀有な例に属す。(三好)

122



122 柱状片刃・太型蛤刃石斧 弥生中期
男里遺跡 (左:W6.8・L14.5・T4.3) 文献.542

3点とも不定形な土坑から出土した。中央の資料を除いた2点は完形である。太型蛤刃石斧の方は刃先に刃こぼれ状の剥離がわずかにみられ、使用されたとみられる。柱状片刃石斧の方は挟りを持たない。刃部の稜線が刃縁に対して斜めになるが、使用後の砥ぎなおしに伴うものだろうか。

(若林幸)

123



123 柱状片刃石斧 弥生
大庭寺遺跡 (W3.0・L24.1・T3.9) 文献.463

開析谷斜面裾部に位置する長円形の落ち込みから、サヌカイト剥片刃器・叩石・大型石庖丁・石庖丁未製品とともに出土した。

刃幅に対して全長が長いので、全体に細身な印象を受ける。挟りは作り出されていないが、刃先に長軸方向にごく短く伸びる線状痕および剥離痕がみられ、使用されたことが窺える。

(若林幸)

124



124 石製紡錘車 弥生中期
野々井遺跡 (MD4.1・T1.5) 文献.436

集落域の西端で検出された竪穴住居跡床面から出土した。住居跡は直径約10mのやや大型のものである。

紡錘車は砂岩製で、断面形状は長方形を呈する。平面形は正円に近く側面はやや丸みを持ち、盤の比較的中心部に貫通孔が穿たれている。重さは36.3gを量る。

(田中龍)

125 砥石 弥生中期
池上曾根遺跡 (左:W9.8・L20.0,右:W14.4・L22.4) 文献.584

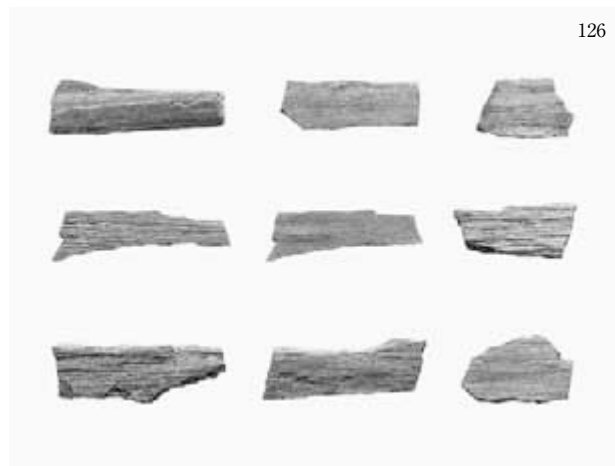
ともに掘立柱建物群域の遺構より出土。砂岩製の柱状石材で、3面ないし4面の砥面を有する。うち1面には砥石の長軸方向に沿って、幅約1cm前後の直線状の凹みが数条残り、筋砥石として利用されたと判断できる。集落内において稲作・漁撈のみならず、石製品製作・加工といった手工業生産の様相をうかがわせる資料として注目できる。(朝田)



125

126 赤色片岩 弥生
東奈良遺跡 (上左:w3・ℓ10) 文献.468

弥生時代の遺構面から破片が多数出土。部分的に摩耗している。出土当初は色調から紅簾石片岩と判断されていたが、岩石中に紅簾石の結晶が見られず、赤色片岩との鑑定結果である。用途としては、砥石等もともに出土している点や形状の類似から、玉加工用石鋸の未製品である可能性が指摘されている。(仁田)



126

127 銅鐸石製鋳型 弥生中期
池上曾根遺跡 (w5.2・ℓ6.2・T3.0) 文献.400

遺構面から出土。砂岩製である。凹面は研磨され端部に一条の刻線が見られ高熱を受け黒変している。凸面は叩打による粗い整形である。

形態の特徴や高熱を受けている点から、銅鐸鋳造時の石製鋳型破片と考えられる。



127

(山口)

128 石錘 弥生中期
池上曾根遺跡 (上左:W5.6・L11.5) 文献.584

掘立柱建物群域の大型井戸および土坑ほかより出土。有溝石錘は楕円球形で、長軸方向に溝を巡らせる。打欠石錘は、扁平な河原石を用い、長軸又は短軸の両端に打欠を施す。挟り部分に紐ずれの痕跡をとどめる。

当遺跡集落域では石錘のほか飯蛸壺等の漁撈具が均質的に出土することから、稲作以外に漁撈や海産物加工などを自給的に営んでいた可能性が高い。(朝田)



128

129



129 石棒 弥生前期
池上曾根遺跡 (W5.8・L7.6・T1.3) 文献400

低湿地の堆積を示す落込み状遺構から出土した。端部に瘤状の脹らみを作り出す。表面は滑らかに仕上げているが、裏面は断面のまま未調整であり、欠損した可能性もある。石材は緑泥片岩である。

出土遺構は弥生時代中期後半に属しているが、弥生時代前期の土器も出土しているため、本例はこれらとともに当該期の混入品と思われる。(田之上)

130



130 石棒 弥生前期
池上曾根遺跡 (w5.4・ℓ16.2・t4.6) 文献527

一方がやや細くなる棒状の石製品であるため石棒と判断した。半分以上欠損しているが横断面は楕円形を呈すると思われる。石材は緑色片岩以外の結晶片岩である。前期後半の土器と共伴した。本遺跡ではこのような弥生時代前期の所産と推定される石棒の出土例は比較的多く、遺跡が形成される時期の状況を考察するうえで示唆的である。(田之上)

131



131 石剣 弥生後期
野々井遺跡 (W4.2・ℓ18.7・T3.3) 文献436

洪水によって上部を削平されている溝の底部から、後期の土器や木製品とともに出土。全体にいいいな研磨が施される。先端はやや尖り気味で、断面の形状は楕円形を呈する。側面は丸みを残すが刃部を作り出すように研磨されている。基部を欠損するため本来の形状は不明であるが、石棒状の石剣と考えられる。結晶片岩製。祭祀関連遺物と思われる。(田中龍)

132

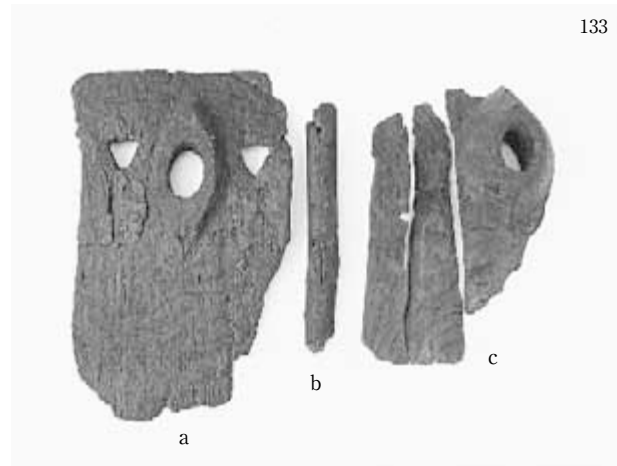


132 碧玉製管玉 弥生中期
池上曾根遺跡 (d2.0・ℓ3.4) 文献400

集落中枢部の弥生時代中期後半の包含層から出土。弥生時代の管玉としては最大級の大きさである。こうした大型管玉の単独出土の類例は近畿地方の中期に多い。明瞭な遺構に伴わない場合が多く、祭祀などの行為に伴って半裁された可能性もある。同様な大型管玉は各地で見られ、なかには破碎した大型管玉の例も知られている。(廣瀬)

133 広鋤 弥生前期
瓜生堂遺跡 (w18・L31) 文献.583

a・bは弥生時代前期の土坑から出土した。柄孔の両脇に逆三角形の孔が存在し、その孔の近くの側面には刻みが施されている。逆三角形の孔を有する広鋤は弥生時代前期のものがいくつか知られており、泥除け具を固定するためのものであったとも考えられている。また、当遺跡からは、建物柱穴の礎板として転用された広鋤(c)も出土している。(井上)



133

134 一木鋤未製品 弥生
池島・福万寺遺跡 (w33・ℓ69) 文献.567

弥生時代前期末頃の洪水堆積層から出土した一木鋤の未製品である。刃部中央からやや彎曲して広がり張り出した肩部を作り出している。断面形状は後面の両端部が立ち上り、柄が刃部まで伸びて突出している。弥生時代前半に多く見られるタイプである。稲作開始期の技術を知る上で貴重な農耕具の資料である。樹種はアカガシ。(廣瀬)



134

135 広鋤未製品 弥生中期
野々井遺跡 (左:W16.9・L25.4) 文献.436

大まかに輪郭だけをつけた未製品や、一次的な加工がなされた板材を一定期間保管していたと思われる土坑から出土。幅20cm前後の板材を、長さ25cm前後に切断し、頭部付近は両端を斜めに切り落として外形の輪郭が作られている。片面は平らに削られ、反対側の面の頭部付近を厚く山形に突出させることで柄孔の隆起を作り出しているが、孔は穿たれてない。(田中龍)



135

136 広鋤泥除具 弥生中期
東奈良遺跡 (W30.8・L31.8) 文献.468

弥生時代中期の土坑底面から出土した。この土坑からは土器のほか、モモ、ヒョウタンなどの種子も出土している。広鋤に装着する泥除具であり、柄に通す孔があげられていないことから、未製品であることがわかる。泥除具の形状には時期や地域によって違いがあることが判明しているが、本例は弥生時代の近畿地方で一般的に見られるタイプに属する。(井上)



136

137



137 盤
池島・福万寺遺跡 (W21.8・L37.8・T5.0) 文献.567

古墳時代前期の遺構面で検出された溝の最下層で出土。この溝の埋土は粗い洪水砂で、弥生後期の水田面を埋没させた同一のものと考えられる。やや厚い材の内側を浅く弧状に削り貫き、外面底部には長軸方向に対して平行に2本の脚が削りだされている。内外面には部分的に焼けた跡が見られるため、未製品の段階で廃棄されたと考えられる。樹種はシイノキ。(田中龍)

138



138 木槽
池島・福万寺遺跡 (L117.0) 文献.581

弥生時代後期の面で見られる微高地を形成している、中期末の大きな流路内の底から出土。木槽は縦に半分ほど欠損しているが、ほぼ舟形を呈している。外面の底部分に、脚と思われる高さ5mm程度の突起が下駄状に見られたため、木槽と考えた。しかし、木槽の周辺には数本の杭が打たれていることから、転用して取水口等に利用した可能性もある。樹種は不明。(田中龍)

139



139 四脚容器
池島・福万寺遺跡 (h5.2・w14.8/11.7) 文献.440

洪水砂中から出土。上半部は欠損しているが、作りが非常に丁寧であり、四脚があることなどから、蓋付きの容器(木製合子)と考えられる。四脚も含め一本の木から削り出されている。

このような容れ物は、特別なものの保管に使用したと考えられている。類例として、唐古・鍵遺跡出土の四脚付き木鉢などがある。(佐伯)

140



140 四脚容器
田井中遺跡 (D10・H4) 文献.459

土坑から出土。この写真は横からの撮影で、脚の状況がよく分かる。本来は四脚であろうが、ひとつを欠く。No.139同様、平面円形を呈する。ただし、この円形部分を底とすると、側面の立ち上がりはなく、容器から転用した際の加工痕も認められない。現状では、合子というよりは盤あるいは台と考えたい。樹種はヤマグワ。(本間)

141 木偶 弥生中期
志紀遺跡 (W7.1・L30.8) 文献.558

川の中央部から出土。頸・腰・脚間に抉りを入れ、それぞれの部位を作り出している。頭部をやや欠損するがほぼ本来の姿を保っていると考えられる。なお、股間直上のくぼみや股間の抉り部分に関しては本来の意匠かどうか判断しがたい。弥生時代の出土例は僅少ではあるが、時期については、出土状況から弥生時代と考えて大過ないと思われる。(鹿野)



141

142 持盾 弥生後期
池島・福万寺遺跡 (w3.7・ℓ11.9・t0.7) 文献.567

溝から出土。表裏面には無数の小孔がある。横方向の孔間に糸の痕跡あり、板を割れなくする為のもの。材はスギ。類例では東大阪市鬼虎川遺跡がある。盾は機能で置盾と持盾に分類でき、本例は持盾と思われる。持盾は手盾や歩盾とも言うが、大きさでは小盾である。持盾は奈良県石上遺跡2号鐸の鈕や群馬県の狩猟文鏡、佐賀県川寄吉原遺跡銅鐸形土製品に見える。(小野久)



142

143 扉材 弥生中期
池上曾根遺跡 (上:w8.5・ℓ79.0) 文献.456

弥生時代中期の大型建物1の前身(大型建物B)の柱礎板に転用された扉材である。「扉構え」と言われると建物の扉に関わる部材の一部である。軸部分の摩滅具合の観察から、上は扉装置上部の軸部分、下は扉装置下部の軸部分と推定される。木調も類似することから本来セットであった可能性もある。当時の建築技術を知る貴重な資料である。(廣瀬)



143

144 B.C.52年の柱材 弥生中期
池上曾根遺跡 (D56・h115) 文献.400

94年度の発掘調査で東西10間、南北1間、両妻側に独立棟持柱、屋内にも2基の棟持柱の大型掘立柱建物跡が発見された。多くの柱穴に柱が遺存しており、この内の柱1本から年輪が248本読み取れ、年輪年代法により紀元前52年と測定された。これにより共伴する弥生時代中期の土器の実年代が確定し、貴重な資料となった。(井藤徹)



144

145



145 井戸枠支柱材 弥生中期
池上曾根遺跡 (MD16.0・L77.6) 文献.456

掘立柱建物群域の大型井戸底面より出土。井戸枠は抜き取られていたが、支柱材が一本だけ立った状態で検出された。側面に縦方向の溝状切り込みが2ヶ所設けられており、本来は支柱材ではなく、建築部材の転用品とも考えられる。側面には金属器による面取りが顕著に残るものの、オリジナルの加工痕か、転用時のものかは判然としない。(朝田)

146

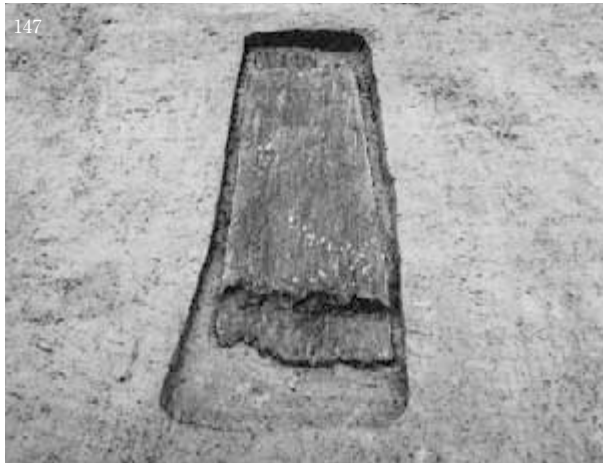


146 木樋 弥生前期
志紀遺跡 (MD25・L99) 文献.558

水田跡からの出土。水路から水田へと水を引くための導水管である。丸太材の内部を見事に削り抜き、外表面には明瞭な加工痕が残る。5～10cm幅で一定方向に外面を削る。樹種はサワラ。

管の周りを杭で固定した状況で出土しており、当時の水田における人々の活動状況を見ることの出来る資料である。(鹿野)

147



147 木棺底板 弥生中期
溝咋遺跡 (W53・L193) 文献.510

弥生時代中期の遺構面で検出した。木口側両端には上面に20～25cmの長さにわたって小口板をのせるための段を設ける。側板および小口板は残存しない。樹種はコウヤマキ。この墓坑は蛇行する溝に挟まれていることから、方形周溝墓の主体部であった可能性が高い。この発見により、当遺跡が弥生時代中期後半からの遺跡であることが初めて確認された。(伊藤)

148



148 木棺 弥生中期
巨摩遺跡 (底板:W30.0・L 78.0・T7.0) 文献.373

10号方形周溝墓から検出された第1主体部である。この主体部は古墳時代前期の河川によって攪乱され墓坑の南側が流出しているが、墳丘主軸と並行していた。墓坑の規模は現存で全長約1.25m、幅約0.6m、深さ約0.22mである。小児用木棺とされる小型のもので、天井板を流出していたが両側板と両小口板とも良好な状態で残存していた。(村上年)

149 木棺 弥生中期
巨摩遺跡 (底板:W31・L89) 文献.373

10号方形周溝墓では、5基の木棺が調査された。サイズからみて成人用1基、小児用4基と考えられる。

本例はその第4主体部。底板上に小口板と側板を2枚ずつ立て、蓋板をかぶせて組み立てる。底板・側板とも、小口板が当たる部分は一段薄く加工されている。棺材はコウヤマキ。土圧がかかったとはいえ、木棺の内寸は長さ62cm、幅14cm、高さ7cmしかなく、小児棺と推定される。

棺内から、柄を取り外した柱状片刃石斧 (No.121) 1点とモモの種子数点が出土した。近畿地方の弥生時代中期の方形周溝墓では、周溝内や墳丘上からは土器・石器・木器などがしばしば出土するが、埋葬主体内から副葬品が出土することは珍しい。

第4主体部は、棺内から遺物が出土し、さらに、墳丘中央の成人棺と切り合っているという点で、他の多くの小児用木棺とは様相が異なる。

(本間)

150 木棺 弥生中期
巨摩遺跡 (中央:W53・L186) 文献.373

巨摩10号墓の木棺で成人用。各部材がほぼ完全に残存し、材はすべてコウヤマキである。

墳形は南北に長く周溝底面で南北長13m、北西部は調査区外に出る。

中央南寄、東西向の約2.6×1.4mの墓坑に棺を収める。底面東側に頭骨痕跡と歯牙が遺存。

この主体部以北に幼児木棺をもつ主体部4基も検出。

周溝からは壺・水差・高杯・石庖丁・木製鋤等が出土した。

(瀬川)

149



150





151

151 土師器一括 古墳前期
池島・福万寺遺跡 (左端:RD13.4・H14.6) 文献.439
円形土坑の上層から一括出土。破片を含め5個体以上の二重口縁壺が出土している。二重口縁壺の体部には、焼成後の打ち欠きが見られる。また高杯や甕、この他に土坑内から出土した破片の1点を除き、一様に白っぽい胎土をしている。祭祀的な色合いの濃い土坑の資料である。

(佐伯)



152

152 土師器一括 古墳前期
池島・福万寺遺跡 (中央:RD16.5・H23.5) 文献.439
井戸から出土。比較的新しい時期の庄内甕を含む一群である。内面ヘラケズリで器壁を薄くし、外面にハケメ調整を施し、口縁端部のつまみ上げや底部の尖底化が顕著な典型的な河内地域の庄内甕と、古い特徴を残す弥生系甕の両者がともに出土した。直口壺の口縁部に打ち欠いた痕跡が見られることから、井戸の廃絶に伴う祭祀関連の土器群と考えられる。(河村)



153

153 土師器一括 古墳前期
池島・福万寺遺跡 (中央器台:RD17.5・H15.5) 文献.439
古墳時代前期の溝の上層から一括出土。No.152よりも比較的古い要素を持つ土器様相を示し、時期は遡ると考えられる。器種構成を見ると、甕の比率が低く、ミニチュア土器や小型器台が見られることから、土器群の意味合いを今後考える必要がある。また東海や山陰等の影響を受けている土器が存在することから、当時の交流範囲の広さが窺える。(河村)



154

154 土師器一括 弥生後期～古墳前期
池島・福万寺遺跡 (右端:RD22.5・H32.5) 文献.439
No.153と同じ溝の下層から一括出土。土器群の出土状況や出土土器の形態から、弥生後期まで遡る可能性も考えられる。内面にヘラケズリ調整を施し、外面にハケメ調整を施す甕や吉備系の甕に類似する追加口縁によって製作された二重口縁を持つ甕が見られることから吉備との交流が行われていた可能性も考えられる。(河村)

155

155 土師器（加飾性二重口縁壺） 古墳初頭
下田遺跡 (RD20.4・H32.1) 文献.434

大溝内に投棄された状態で出土。口縁部と体部に波状文をもち、竹管円形浮文を飾る丁寧な作りの二重口縁壺である。庄内式（併行）の古い段階には、このような加飾法によって装飾した壺が出現するが、おそらく祭事に製作されたものであろう。本例は体部にも円形浮文を貼付した形跡があり、また内面を研磨するなど、やや特異な特徴を備えている。 (西村)



156

156 土師器（細頸直口壺） 古墳初頭
下田遺跡 (RD7.6・H15.4) 文献.434

大溝内に投棄された状態で出土。同様のものが数個体存在する。本器種は庄内式の古相で出現するが、その前半をもって姿を消す比較的寿命の短い器種である。形態の類似性から弥生時代末葉における細頸壺との関連も考えられるものの、出現の系譜はなお不明な点が多い。中河内における北鳥池下層式の土器組成にも含まれる器種である。 (西村)



157

157 土師器（有稜高杯） 古墳初頭
下田遺跡 (RD24.6・H15.4) 文献.434

大溝内に投棄された状態で出土。伝統的な弥生形高杯の系譜上にある器種である。特に有稜高杯は時間の経過に伴った形態変化が大きく、土器編年細分の指標となりうる器種である。その特徴は口縁部形態において顕著に発現する。本例は外反して大きく広がる口縁部を備えており、庄内式（併行）古段階における本器種の特徴をよく示している。 (西村)



158

158 土師器（弥生形甕） 古墳初頭
下田遺跡 (RD19.8・H32.6) 文献.434

大溝内に投棄された状態で出土。和泉地域における庄内式甕の出現は中河内地域より遅れるが、それでも在地系弥生形甕においては弥生時代と異なって体部が膨らみ、球形に近づくものが現れてくる。こうした器形や組成変化によって、庄内式土器を含まない資料群であっても、庄内式併行期に属する土器様相であることが推定できる。 (西村)



159



159 土師器（小型器台） 古墳初頭
下田遺跡 (RD9.2・H8.0) 文献434

大溝内に投棄された状態で出土。小型器台の出現は庄内式の開始とほぼ相前後するとみられるが、本例は和泉地域から出土した小型器台の資料中でも、最古の一例として数えられる貴重なものである。受部から体部まで中心を貫く貫通孔を有し、弥生時代の大型器台における中空形態の名残をとどめるなど、古い特徴がみられる。 (西村)

160



160 土師器（大型器台） 古墳初頭
下田遺跡 (RD16.7・H15.6) 文献434

大溝内に投棄された状態で出土。庄内式期に入ると、中河内地域では弥生系の大型器台が姿を消し、小型器台として転換するのに対し、和泉地域ではこの段階に至っても弥生系器台の残存することが、本例によって確かめられた。同遺構からは他に同形のものが数個体出土した他、口縁部を二重口縁のように作るやや特異な大型器台も出土している。 (西村)

161



161 土師器（注口土器） 古墳初頭
下田遺跡 (RD4.2・H9.2) 文献434

大溝内に投棄された状態で出土。口径の小さい口縁部をもち、体部の一方に細い注口を備える。何らかの液体を容れ、かつ、注ぐ機能のあったことがわかるが、詳細な使用目的等は全く不明である。形態は均整がとれたとは言い難いやや歪なもので、全体をミガキで仕上げる。纏向遺跡ほか庄内式初頭前後の遺跡に類例が散見されるが、概して出土例は多くない。 (西村)

162



162 製塩土器 古墳初頭
下田遺跡 (RD17.3・H17.2) 文献434

大溝内に投棄された状態で出土。低い脚台をもち、体部と一体化した口縁部は比較的急角度で立ち上がる。この種の製塩土器には、外面にタタキ成形痕が残されたものが多いが、本例はナデ仕上げである。和泉の沿岸地帯は弥生時代から製塩活動が盛んな土地柄であり、その土器製塩技術は中部瀬戸内地域との強い関連性を窺わせる。脚台Ⅱ式に相当する。 (西村)

163

163 土師器（広口壺） 古墳初頭
久宝寺遺跡 (RD8.5・H13.8) 文献.585

No.163～174まで井戸出土の一括資料で、庄内式古段階に属する。本例は球形に近い体部に、大きく外反する口縁部と平底をもつ壺で、外面はミガキ調整、内面はハケ調整による。弥生後期における壺の組成中、広口壺とともに主流であった長頸壺は、この時期になると完全に姿を消す。庄内式期を通じて広口壺は残存するが、直口壺の増加に伴い衰退の途を辿る。(新垣)



164

164 土師器（短頸直口壺） 古墳初頭
久宝寺遺跡 (RD11.9・h23.0) 文献.585

井戸から出土。球形の体部をもち、やや外傾しながら短く直線的に立ち上がる口縁部を備える。調整は外面が丁寧なハケとミガキ、内面はナデを施す。本器種は弥生末葉以降に出現し、庄内式期を通じてみられるが、組成中における出現比率は高くない。庄内式期には直口壺が増加することが知られているが、本器種との関連は不明である。(新垣)



165

165 土師器（編籠痕のある壺） 古墳初頭
久宝寺遺跡 (MD28.3・h26.3) 文献.585

井戸から出土。体部は球形で平底をもち、口頸部は欠損する。外面は弱く煤化するが、全面に斜格子状の煤付着を認めない部分があり、竹材などの繊維を、いわゆる植木結びで連続的に巻いた痕跡とみられる。これについては土器の乾燥・焼成の工程で焼き込まれたという説があるが、本例は焼成後の痕跡であり、貯蔵容器として住居内での懸垂使用が想定される。(新垣)



166

166 土師器（小型器台） 古墳初頭
久宝寺遺跡 (RD8.1・H8.9) 文献.585

井戸から出土。庄内式古段階における小型器台の一例として貴重。器面調整として内外面の全面に縦方向の丁寧なミガキが施されている。脚部には透孔を三方に穿つが、かなり高い位置にある。胎土は精良、かつ焼成は極めて良好であり、赤褐色を呈する色調は河内地方で作られた通有のものとは異なる。これらの諸特徴から、他地域からの搬入土器とみられる。(新垣)



167



167 土師器（弥生形甕） 古墳初頭
久宝寺遺跡 (RD18.2・H27.2) 文献.585

井戸から出土。本例は弥生後期における典型的な甕とは異なり、体部が球形に近い状態まで膨らむなど、新たな方向性が窺える。しかし外面のタタキ調整や平底を呈する底部には、前代の技法に対する根強い執着がある。庄内式期に入っても本器種は庄内式甕と共伴する。集落内における土器組成の実態としては、庄内式甕だけで構成されることはほとんどない。（新垣）

168



168 土師器（異形甕） 古墳初頭
久宝寺遺跡 (RD15.1・h14.3) 文献.585

井戸から出土。庄内式古段階における異形の甕の一例。口縁部の形態や、内面ケズリなどに庄内式甕と共通する特徴を持ち合わせるが、体部外面にタタキは認められず、全面ハケ調整という点に特徴がある。また胎土には生駒西麓産の土を用いず、焼成は極めて良好かつ堅緻である。弥生土器から土師器への移行過程における、過渡的で不安定な形質を備える。（新垣）

169



169 土師器（異形甕） 古墳初頭
久宝寺遺跡 (RD16・h19) 文献.585

井戸から出土。庄内式古段階における異形の甕の一例。本資料群には弥生形甕・庄内式甕の他、いずれにも属さず系譜関係の明らかでない甕が散見される。本例も口縁部や内面ケズリなどに庄内式甕と通じる特徴を備えつつ、外面の全面にわたり縦方向ケズリを加えた特異な甕である。伝統的な土器作りの規範が崩壊した状況下に生み出された土器であろう。（西村）

170



170 土師器（庄内式甕） 古墳初頭
久宝寺遺跡 (RD14.6・H20.6) 文献.585

井戸から出土。庄内式古相の庄内式甕で、本器種の個体差が大きい段階の一例。本例は生駒西麓産の胎土をもつが、後半のものよりはるかに硬質に焼成されている。口縁端部は丸くおさめ、やや太めのタタキ成形、ハケによる微弱な調整など、定型化した庄内式甕としての特徴が発現していない。ただし定型化を指向した個体も一括資料中に出現している。（西村）

171 土師器（片口鉢） 古墳初頭
久宝寺遺跡 (RD27.4・H18.9) 文献.585

井戸から出土。半球形の体部にやや突出する平底をもち、外傾する口縁部を備える。口縁部の一端には片口を設け、流動性的内容物を注ぐ機能を付加する。同じ煮沸の用途をもつ甕に比べ、組成の中に占める個体数は多くない。伝統的な弥生系の大型鉢で、庄内式期以降は平底を持つものは減少し、丸底へと変遷する傾向にある。

(田之上)



171

172 土師器（有稜高杯） 古墳初頭
久宝寺遺跡 (RD19.8・h11.6) 文献.585

井戸から出土。やや内彎する体部に外反した口縁部を備えた高杯で、脚裾部に四方透かし孔を穿つ。器面調整として、縦あるいは斜め方向の密なミガキを施す。弥生後期からの系譜を引く伝統的な高杯で、本例は形態・技法ともに、この時期における本器種の典型的な特徴をよく示している。庄内式期を通じて衰退する傾向にある。

(田之上)



172

173 土師器（庄内系高杯） 古墳初頭
久宝寺遺跡 (RD17.5・H12.2) 文献.585

井戸から出土。やや内彎する体部に外反する口縁部を備えた高杯で、脚裾部に四方透かし孔を穿つ。器面調整として、横方向の細いミガキを密に施す。杯部の稜線はやや不明瞭である。形態・技法ともに吉備系高杯との強い関連性が窺われる器種で、庄内式期を通じて高杯の主流をなしていく。吉備地方との交流を考える上で重要である。

(田之上)



173

174 土師器（吉備系高杯） 古墳初頭
久宝寺遺跡 (rd18.2・H13.2) 文献.585

井戸から出土。内彎する体部に外反する口縁部を備えた高杯で、脚裾部に四方透かし孔を穿つ。口縁部はやや急角度で立ち上がり、また脚柱部は短く、中心に軸芯をもっている。脚部のデザインは直線的に構成され、器面調整は横方向のミガキによる。これらの諸特徴は、吉備地方における高杯の形態・技法を踏襲しており、搬入品の可能性が高い。

(田之上)



174

175



175 土師器（小型直口壺） 古墳前期
船橋遺跡 （右：RD13.8・H19.2） 文献.465

溝状遺構より出土。ともに精良な胎土で製作された完形の小型直口壺で、体部は横方向、頸部内外面は横後、斜め方向のヘラミガキ調整で仕上げられている。

当遺構は方形周溝墓の周溝の可能性が高い平面逆L字形の溝で、埋土からは多量の古式土師器が出土した。これらは庄内式末～布留式に属しており、一定の時間幅の中で廃棄された資料と考えられる。（岡本茂）

176



176 土師器（広口壺） 古墳前期
船橋遺跡 （RD17.6・H29.5） 文献.465

No.175と同じ遺構の上～下層から出土。完形の広口壺である。体部外面はタタキ整形の後にハケ調整、内面はハケ調整で仕上げられており、体部中位には焼成後の穿孔が認められる。

方形周溝墓に供献された土器には、底部あるいは体部に穿孔を施した例が多く、当資料も葬送儀礼に用いられていた可能性が高い。（岡本茂）

177



177 土師器（二重口縁壺） 古墳前期
船橋遺跡 （RD22.4・H38.2） 文献.465

井戸と考えられる平面不整円形の土坑より出土。口縁部が直線的に広がる二重口縁壺で、底部はわずかに平底状を呈している。器面調整は内外面とも全体にハケ調整で仕上げられている。布留式。

当遺構では、底面から中位までを意図的に埋め戻した後に多量の土器が投棄されており、井戸廃絶に関わる儀礼に用いられた可能性が考えられる。（岡本茂）

178



178 土師器（甕） 古墳前期
船橋遺跡 （RD28.4・H40.9） 文献.465

溝状遺構より出土。口縁が段を有して立ち上がる形状の大型品で、体部内面はヘラケズリ調整で仕上げ、外面はハケ調整を施した後に疎らにヘラミガキ調整を加えている。布留式前葉。

共伴した土器には、焼成後の穿孔が施された資料が含まれており、当遺構は方形周溝墓の周溝である可能性が高い。（岡本茂）

179 土師器（甕） 古墳前期
船橋遺跡 (RD16.4・H23.8) 文献.465

溝から、小型丸底壺・鉢・小型器台・高杯・鳥形土製品等とともに出土。胴部外面全体をハケ調整、内面をヘラケズリ調整で仕上げる甕である。口縁端部を積み上げる形態をとり、形態・調整手法の特徴から、庄内式甕と類似するが、いわゆる「布留系甕」「布留式傾向甕」と呼ばれる型式の古式土師器甕の優品である。

(田中一)



179

180 土師器（甕） 古墳前期
船橋遺跡 (RD15.3・H22.6) 文献.465

No.179と同じ溝から出土。口縁端部を積み上げた形態の甕で、底部は丸底。胴部外面をタタキ整形後ハケ調整、内面をヘラケズリ調整で仕上げる。角閃石・長石・石英の角礫を多量に含む“生駒西麓産”胎土で造られる。形態・調整手法・胎土の特徴から、「庄内河内型甕」と言われる典型的型式の優品。

(田中一)



180

181 土師器（甕） 古墳前期
船橋遺跡 (RD14.6・H21.0) 文献.465

土坑から吉備系甕・小型丸底土器・高杯・ミニチュア土器等とともに出土。胴部形態が球形、口縁は内彎気味に立ち上がり端部に面をもつ形態で、胴部外面全面にハケ調整後、外面肩部に横方向のハケ調整、内面はヘラケズリ調整で仕上げられる、いわゆる「布留式甕」。布留式期前～中葉の所産と考えられる優品である。

(田中一)



181

182 土師器（甕） 古墳前期
船橋遺跡 (RD15.3・H21.8) 文献.465

溝から小型丸底壺・二重口縁壺・小型器台等とともに出土。内彎気味の口縁端部に面をもつ形態の甕。胴部外面全体にハケ調整・肩部に横方向のハケ調整が施され、内面はヘラケズリ調整で仕上げられる。「布留式甕」の定型的型式の優品である。体部底に焼成後の穿孔を認める。

(田中一)



182

183



183 土師器（甕） 古墳初頭
尺度遺跡 (MD12.7・H19.9) 文献.504

庄内期集落内の方形区画溝から出土。外面はタタキ後ナデでそれを消す。内面は底部・頸部に指押さえ痕が残るが、ケズリ後上半ナデ。煤が付着し、底面はやや磨滅。調整は庄内式甕にナデが加わったと言ってもよいが、外反する口縁は端部も丸く、胴部は卵形を成し特異なものである。しかし、胎土は典型的な生駒西麓産であり、中河内からの搬入品である。 (三宮)

184



184 土師器一括 古墳初頭
尺度遺跡 (左：H24.1) 文献.504

住居床面の大型土坑から一括出土。第五様式系甕、細頸壺、手焙り形土器の土器群である。

手焙り形土器は胴部の突帯に刻み目を施すのみで、甕と壺も底部が矮小化している。

土坑の大きさなどから住居廃棄時の祭祀に伴うものと考えられ、南河内地域の庄内式併行期前半の一例とする事ができる。 (三宮)

185



185 土師器一括 古墳初頭
尺度遺跡 (中央手前壺：H25.8) 文献.504

井戸底部より一括出土。甕・壺・小型平底鉢・ミニチュア壺からなる土器群である。

井戸は集落内の方形区画の中にあり、切り合い関係から、後述のNo.186が出土した井戸と同時期、庄内式後半期併行に位置付けられる。

土器群自体は、第五様式系であり、南河内地域庄内式併行の在土器群の例として貴重である。 (三宮)

186



186 土師器一括 古墳初頭
尺度遺跡 (前端器台：H8.0) 文献.504

井戸から一括出土。壺・甕・高杯・小型平底鉢・小型器台からなる土器群である。

大～中型の甕が、生駒西麓産の典型的庄内式甕と口縁外反胴部タテハケの甕から構成され、それを補完する小型の在土ハケ甕が存在する。

庄内式期の南河内地域での、中河内の土器の受容類型の一例を成すものである。 (三宮)

187 土師器集合 古墳前期
溝咋遺跡 (最上段右2つめ:RD15.6・H19.8) 文献.509

古墳時代の遺構面および、その下層の溝から出土した土器群。写真は一括掲載のため須恵器を含み時期幅がみられるが、溝から出土した資料はおおむね古墳時代初頭、庄内式期の範疇でまとまっている。壺・甕・高杯・小形丸底の鉢など各種がそろっており、北摂津地域における庄内式後半の良好な資料である。

(阿河)



187

188 土師器集合 古墳前期
溝咋遺跡 (上左:RD18.0・H27.6) 文献.509

一部重複を含むが、No.187土器群の上層の遺構面および、溝から出土した土器群である。これらの土器群の大半が古墳時代前期の土師器で、溝からはNo.100の銅釧やNo.235の人面線刻土器の他、瀬戸内系の甕や壺、近江・東海系の甕や壺など、外来系の土器が出土している。他地域との交流を示す貴重な資料である。

(阿河)



188

189 土師器(複合口縁壺) 古墳前期
小阪合遺跡 (RD22.4・H39.3) 文献.511

庄内期の竪穴住居上層から出土。肩部に最大径を持ち、底部は丸底化する。内面は上半に指頭圧痕を残し下半にヘラケズリ調整を施す。外面はハケメの後、波状のヘラミガキ調整を施し、タタキ目が残る。胎土に結晶片岩を含み複合口縁をもつ阿波系の土器である。竪穴住居が廃棄されてまもなく本例と共伴遺物の壺片を土器棺及び蓋に転用して埋設したとされる。(河村)



189

190 吉備系甕 古墳前期
小阪合遺跡 (RD14.4・H21.6) 文献.511

外来系土器が多量に出土した包含層から出土。内面は上半にヘラケズリ調整、下半に指頭圧痕が残る。外面はハケメの後ヘラミガキ調整を施す。二重口縁部に櫛描直線文が施され、底部が丸底化した吉備系の土器である。他にも東海・近江・山陰・四国系の土器が見られることから、これら広範囲に及ぶ地域との交流が盛んであったと分かる資料の1つである。(河村)

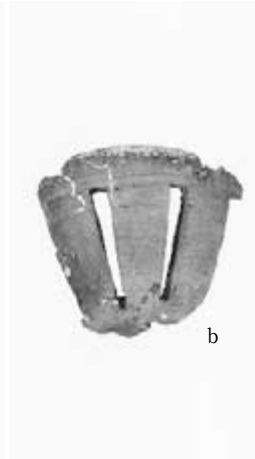


190

191



a



b

191 須恵器（二重甕） 古墳中期
小阪遺跡 (a:md10.4) 文献.289

複数の須恵器窯により形成された可能性の高い灰原から出土。aは体部に凹線文の間に列点文を施した後、長方形の透かし孔を穿つ。体部の外側と内側に円形透かし孔がある。bは上下二段交互に長方形の透かし孔を穿つ。底部に三方向の同形の透かし孔がある。これらは特殊な器形であり、生産地となる灰原からの出土は生産、流通を知る上で重要である。 (松尾実)

192



192 須恵器（鳥形甕） 古墳中期
小阪遺跡 (h5.6・w11.0) 文献.289

複数の須恵器窯により形成された可能性の高い灰原から出土。体部のみが残存する。鳥を象形化した特殊な器形であるが、頭、羽、尾の各部位は欠損している。頭部下に円形透かし孔を穿つ。葬祭用の須恵器と考えられる。5世紀代の福岡県番塚古墳や三重県神前山1号墳などから出土しており、分布範囲は広い。生産地と消費地を考える上で重要な資料となる。 (松尾実)

193



193 陶質土器（鳥足文） 古墳中期
池島・福万寺遺跡 (w10.0・ℓ8.2) 文献.567

中世耕作土から出土。短頸壺とみられる体部の破片である。縦方向の平行タタキを地文とする右開きの鳥足文タタキを施した後、らせん状沈線を巡らす。大阪府内では長原遺跡や城山遺跡などで鳥足文タタキを施した軟質の韓式系土器が出土しているが、本資料は陶質土器である。朝鮮半島では百済を中心とした地域に分布しており、交流の一端を窺わせる。 (大庭)

194



194 須恵器（器台） 古墳中期
池島・福万寺遺跡 (rd45・h35) 文献.567

古墳時代～古代の包含層から広範囲に散乱した状態で出土。口縁部および脚裾部が緩やかに広がる高杯形器台で、脚部には長方形透かしを二段で交互に配する。波状文・鋸歯文・斜格子文・竹管文で外面全体を飾る。このような器台は朝鮮半島南東部の釜山・金海地域に起源をもつと考えられ、本資料は日本列島内で製作された初期須恵器である。 (大庭)

195 須恵器（甗・壺） 古墳中期
小阪合遺跡 (右:H8.6,左:H8.6) 文献.511

古墳時代から平安時代までの遺構が重複して検出された遺構面の落込み上層より出土した。この落ち込みの下層では須恵器を伴わない布留式古段階の土師器が、上層からは布留式新段階の土師器多数と軟質土器、古式の須恵器62点などが出土している。甗は、TK73相当と考えられ、口縁部に細い突帯を1条巡らせる。

(阿河)



195

196 須恵器（鉢） 古墳中期
小阪合遺跡 (rd16.4・h8.2) 文献.511

落込みの上層から多数の須恵器・土師器とともに出土。全体の器形としては深く平底で、立ち上がり、受部ともに短い。体部外面にはカキメを施す。口縁部と体部内面にはナデを行い、底部内面には同心円当て具の痕が残存する。当遺跡からはこのような初期須恵器や韓式系軟質土器の出土も見られ、集落の性格の一端を窺わせる。

(大庭)



196

197 須恵器（有蓋高杯） 古墳中期
小阪合遺跡 (RD10.4・h9.0) 文献.511

深さ約0.8mの落込みの上層から出土。短く内傾して立ち上がる口縁部、水平に張り出す受部、丸く仕上げた脚端部付近に巡る鋭い凸帯、器壁が厚く重厚な作り、最終仕上げを丁寧に行うなど最古段階の須恵器の特徴を備えた製品である。

半島南東部地域の陶質土器からの系譜がたどれ、その関係が注目される。

(岡戸)



197

198 須恵器（無蓋高杯） 古墳中期
小阪合遺跡 (RD15.6・H12.1) 文献.511

落込みの上層から出土。鉢形を呈する杯部は、凸線により区画した文様帯に波状文を施し、下部に対となる耳状の把手を付ける。脚部の透かし孔は長方形で、四方向に穿つ。No.197よりも後出のTK216型式に比定される。

なお、この落込みからは他にも最古型式からTK208型式までのものが出土している。

(岡戸)



198

199



199 土師器（高杯） 古墳中期
小阪合遺跡 (MD7.2・H9.2) 文献511

落込み上層より出土。同層には布留式後半の土師器と初期須恵器を含む。器面はやや磨滅して調整は定かではない。非常に類例の少ない器形で、身部の形態は、弥生後期の台付き無頸壺の伝統を引くものか、脚部の形や小型である事を見ると東海系の欠山式まで残るワイングラス形高杯の影響も考えられるが、多少器形が異なり、時期も大きく違う。(三宮)

200



200 土師器（高杯） 古墳中期
小阪合遺跡 (RD23.5・H17.6) 文献511

落込み上層より、布留式後半の土師器と初期須恵器とともに出土。全体にナデ後タテミガキを基調とし、身部内面は底部まで放射状にミガキが入る。脚部内面はケズリとハケが入る。透かし孔は三方。須恵器定型化の時期まで残る布留式の高杯であるが、ここまで密にタテミガキが入るものは珍しい。布留式の大型高杯の優品である。(三宮)

201



201 韓式系・特殊土器集合 古墳中期
小阪合遺跡 (a:rd19.2・h34.4) 文献511

aは包含層から出土。b・cは5世紀前葉の土師器有段高杯などとともに土坑から出土。aは体部全体に格子文タタキを施した軟質の韓式系長胴甕である。その他の3点は表面に炭素を吸着させ黒色を呈する特殊な資料である。これらは朝鮮半島南部の瓦質土器製作技術の影響下で作られたものと考えられる。

(大庭)

202



202 須恵器一括 古墳中期
小阪合遺跡 (a:RD18.3・h32.7) 文献511

初期須恵器の甕・甌・杯・無蓋高杯・有蓋高杯蓋で、落込みから一括出土。甕は球形の体部外面に縄蓆文タタキを施し、上半をナデ消す。甌は平行タタキを格子状に施す。有蓋高杯蓋は天井部にカキメおよび刺突文を巡らせる。小阪合遺跡ではこのような初期須恵器や韓式系土器が多数出土しており、渡来系集団が居住していたと考えられる。(大庭)

203 韓式系土器（平底鉢） 古墳中期
久宝寺遺跡 (RD11.8・H10.0) 文献.410

合掌型堰が構築された中期河川の洪水砂から出土。軟質で、体部外面は平行タタキ調整、内面は弱いヘラケズリ調整を施す。口縁部はつまみ出し、端部を四角く仕上げる。底部はやや上げ底状を呈し、外面中央にはいわゆる「ゲタ」の痕跡が残る。体部外面には煤が付着する。この河川からは他にも初期須恵器や数点韓式系土器片の出土がみられる。 (後藤)



203

204 須恵器（杯身） 古墳中期
久宝寺遺跡 (RD10.2・H4.6) 文献.410

南北方向にはしり、合掌型堰が構築された中期河川の洪水砂から出土。

内傾する口縁をもち、端部を丸く収める。口縁部および内面は回転ナデ調整を施すが、体部外面は静止ヘラケズリによる調整が認められる。

他にも韓式系土器片や、5方向に三角形の透かしをもつ須恵器の高杯などが出土した。 (後藤)



204

205 須恵器（無蓋高杯） 古墳中期
久宝寺遺跡 (RD12.2・H9.2) 文献.410

南北方向にはしり、合掌型堰が構築された中期河川の洪水砂から出土。杯部底面は平坦で、杯部との境に稜をもつ。全体に回転ナデによる成形を行うが、口縁端部には静止ヘラケズリ調整を施す。また、脚部にはカキメ調整が認められる。この遺物はNo.203・204と同じ遺構から出土していることから、合掌型堰を構築した集団との関連が考えられる。 (後藤)



205

206 須恵器（樽形甗） 古墳中期
久宝寺遺跡 (MD15.2・H17.6) 文献.462

古墳時代から中世まで継続する遺構面上から土器溜まり状になって出土。多くは土圧等で破損していたが杯などの薄い土器は完形で残っていた。胴部が丸みを帯び、やや新しい様相を見せる。当遺跡ではこれまでも最古段階の須恵器やそれに伴うであろう土師器が散見されており、今後の調査が期待される。

(阿河)



206

207



207 土師器一括 古墳中期
 蛭池東遺跡 (左端:rd15,右端:rd14) 文献.339
 5間×5間の総柱で近接棟持柱形式の掘立柱建物の掘方から出土。いずれも建物廃絶後に廃棄された状態で出土した。左端の甕は、口縁端部に布留式土器の特徴を残す。中央2点の甕は、体部外面に縦方向の粗いハケメ調整を施し、右端の甕は、体部内面に縦方向のユビナデ調整を施す。面積100㎡を超える大型倉庫群の下限の時期を示す資料。(金光)

208



208 土師器(樽形甕) 古墳中期
 溝咋遺跡 (MD13.5・H18.0) 文献.509
 13世紀を中心とする中世の遺構面で多量の古墳時代遺物とともに出土。焼き上がりが土師質を思わせ、口縁部や樽両端の底あるいは頸部の取り付けなど初期須恵器に比べ作りがあまりいことなどから須恵器写しの土師器と考えられる。しかし、一般的には須恵器写しの土師器は高杯や甕などに日常にあった品々に限られ、本例は須恵器の生焼けの可能性もある。(阿河)

209



209 軟質韓式土器(鉢) 古墳後期
 溝咋遺跡 (左:RD39・h36) 文献.510
 左は河川の下層から、右はピットから出土。両者とも外面に格子目タタキを施し、右は更に3条の沈線がめぐり。底部が円形に剥落していることから脚台が付くと考えられる。ピットには他に遺物が含まれておらず、土器棺であった可能性が高い。類例は大阪府伏尾遺跡、大庭寺遺跡、奈良県南郷遺跡出土品が知られるのみで、稀少な遺物である。(伊藤)

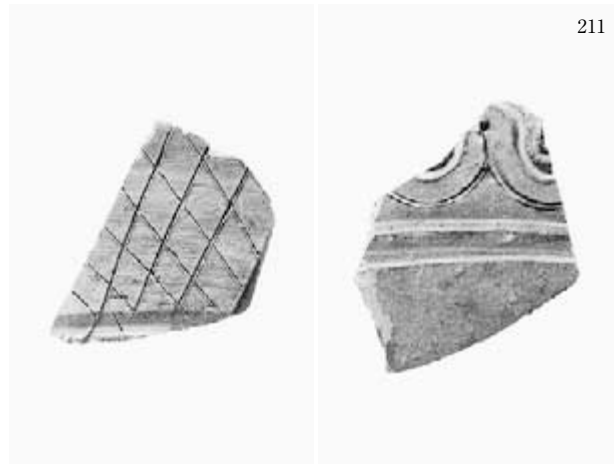
210



210 移動式竈 古墳後期
 溝咋遺跡 (RD24.0・BD48.0・H37.6) 文献.510
 旧安威川とみられる自然河川が埋没した上面で須恵器杯蓋などとともに一個体分が出土。
 前面焚口の周囲には庇がめぐり、側面には下方を向く角状の把手が付く。背面中央には煙出しのためか、円形の孔が穿たれる。
 内面の煤の付着は薄く、日常的な炊飯に用いたものとは考えがたい。(合田)

211 器台片 古墳中期
大和川今池遺跡 (右: $\phi 5.0 \cdot T0.6$) 文献.529

包含層から出土。この2片は高杯形器台の杯部の破片である。コンパス文は中心から2条の沈線が弧状に連続して施文されている。福岡県の有田遺跡や島根県の長尾古墳群表採資料等を除けば、大阪では一須賀2号窯や田井中遺跡での出土が認められているに過ぎない。朝鮮半島でも出土しており、同地からの系譜を含めて重要な資料である。(後川)



211

212 須恵器(樽形甕) 古墳中期
大和川今池遺跡 (h19.2・L23.1) 文献.529

古墳時代の井戸の埋土上層上部から出土。割れてはいたが、ほぼ原形を保って出土した。樽状の体部中央に口がとりついており、肩に1ヶ所、注ぎ口が開けられている。体部・口縁部とも無文で装飾性に乏しい土器である。樽形甕は初期須恵器に特徴的な器形といえるが、この井戸からは合計で3個体分が出土している。(森本)



212

213 須恵器(壺) 古墳中期
大和川今池遺跡 (RD16.5・H24.2) 文献.529

古墳時代井戸からNo.212・214・215などとともに出土。球形の体部にルーズな複合口縁を持つ土器で、No.212同様、装飾性に乏しい。他の土器とともに使用されたのち、井戸に投棄されたものと推測することができるが、このとき同時に井戸も埋められている。何らかの祭祀に用いられたと仮定すると、その最終の手順を示しているのかもしれない。(森本)



213

214 須恵器(脚付有蓋鉢) 古墳中期
大和川今池遺跡 (RD15.6・H18.6) 文献.529

古墳時代井戸からNo.212・213・215などとともに出土。非常に装飾性に富んだ土器で、体部上半の波状文には竹管文を重ねて施し、脚部の透かしにも円形と方形を組み合わせており、多様である。さらに体部下半には波状文と同じ原体で紡錘形を連続させる文様帯を配している。種類は豊富ながら、個々の装飾は稚拙である点がこの土器の特徴かもしれない。(森本)



214

215



215 須恵器（筒形器台） 古墳中期
大和川今池遺跡 (RD20.1・H54.6) 文献.529

No.212と同じ井戸の埋土上層から出土。他に土師器や初期須恵器がまとまって投棄されていた。6方向6段の方形透かしを有し、その間に波状文帯が配される。土器そのものに特徴的な点はないが、本来、集落で普遍的に使用される器種ではなく、出土状況を考え合わせても、周辺での祭祀に用いられたと考えることが妥当であろう。(森本)

216



216 土師器（壺） 古墳中期
大和川今池遺跡 (上左:RD17.2・H38.7) 文献.529

18世紀初めに付け替えられた現大和川河川敷内の井戸の埋土から、最古段階の須恵器筒形器台・台付鉢形土器・樽形甕など（前記4点）とともに出土。甕は口縁部内側の膨らみが退化しており、布留式新段階に属する。ほかに高杯や小型の壺などが出土しており、最古段階の須恵器と土師器の相伴関係を知ることのできる好資料である。(阿河)

217



217 土師器・須恵器一括 古墳中期
大和川今池遺跡 (後列中央:RD17.7・H33.9) 文献.529

傾斜変換線上に並ぶ井戸から一括出土。遺物は埋土全体にみられるが、とくに下層からまとまって出土しており、土師器・須恵器のほか琴、砥石が含まれる。土師器は、甕・短頸壺・高杯・鉢が、須恵器は甕・高杯・杯がある。須恵器は初期須恵器であり、これと相伴する豊富な土師器とともに一括資料として価値ある資料である。(合田)

218 移動式竈 古墳後期
 亀川遺跡 (d23.0・bd39.6・h33.8) 文献.563

焼土塊、炭化板材を含む落込みから出土。天井部は水平で、掛口の直径は19.6cmを測る。把手の位置に埴輪のタガ状の突帯をめぐらせ、裾部は幅広の突帯を貼りつける。体部は内外面ともハケメ。体部後方中央に孔がみられる。底の上部は欠損している。接合した隣り合う破片が全く違う色調をしており、割れた後に二次焼成を受けたことが分かる。(島崎)



218

219 須恵器(高杯形器台) 古墳中期
 亀川遺跡 (rd26.1・H19.6) 文献.563

祭祀的性格の強い土坑から出土。小型の製品である。杯部の文様帯は凸線によって区画され、波状文で飾られる。下部にはタタキ目、内面には当て具痕が残存する。脚部は凸線により二段に区画し、各段に長方形透かしを5方向に千鳥状に配する。

陶邑でも小型器台の類例は少なく、須恵器の器種構成の変遷を考えるうえで貴重な資料である。(岡戸)



219

220 須恵器(筒形器台) 古墳中期
 亀川遺跡 (rd12.7・h25.8) 文献.563

No.219と同じ祭祀的性格の強い土坑から出土。

バランスのとれた優品である。円筒部・台部は凸線により区画し、波状文や刺突文で飾る。透かし孔は円筒部に長方形のものを直列させ、台部には三角形のものを千鳥状に配する。

器台の他、高杯・製塩土器・白玉なども共伴しており、集落内の祭祀における須恵器の使用状況を知るうえで良好な資料である。(岡戸)



220

221



221 鞞形埴輪 古墳中期
大和川今池遺跡 (ℓ9.7・t1.2) 文献.588

古墳時代から平安時代の包含層から出土。周辺より円筒埴輪、盾形埴輪などの破片も出土しており、近接した古墳の存在が推定されている。矢筒部上部が残存しており、鏃および「忍ヶ丘系」直弧文が線描されている。「中央割付線」が認められ、線描に一定の役割を果たしたと考えられる他、類例との比較検討が可能な資料である。(森本)

222



222 円筒埴輪 古墳後期
大坂城跡 (d21.0・BD13.1・h31.0) 文献.401・425

弧を描くように掘削された溝の中から、横倒しの状態で出土。この溝の周辺からは家形埴輪の屋根部分の破片も出土している。2条以上のタガが巡り、2孔一对の透かし孔が2箇所みられる。

『日本書紀』に古墳を壊して難波宮を造営したとの記述があるが、そのような出来事を推定させる貴重な資料である。(新海)

223



223 円筒埴輪 古墳中期
小阪遺跡 (RD29.1/16.6・H46.5) 文献.538

集落を画する河道縁辺に巡る溝から、韓式系土器・初期須恵器等とともに出土。川西編年V期の普通円筒埴輪で、円形の透かし孔が2・3段目に互い違いに開く。不整形突帯が3条巡るが下段はナデを省略。外面は、タテハケの一次調整のみ。胎土等の分析から、和泉丘陵未発見埴輪窯の特徴が解かる埴輪である。

(田中一)

224

224 円筒埴輪・鶏形埴輪 古墳中期
瓜生堂遺跡 (左:RD22.9) 文献.583

浅い溝状の土坑から出土。円筒埴輪は、いずれも基部あるいは上半部のみ残存。外面はタテハケのちB種ヨコハケ調整。内面は指ナデ。焼成は良好で須恵質。鶏形埴輪は頭部のみ出土。鼻孔・目・耳は串状工具の刺突で表現。I型式4段階の須恵器伴出。河内平野沖積低地での、埋没古墳の存在を推測させる一括資料。

(阪田)



225

225 円筒埴輪 古墳後期
太井遺跡 (RD57・BD54・h119・T2) 文献.415

飛鳥・奈良時代の井戸枠に転用。井戸は直径1.35mの円形で円筒埴輪を4段に積み上げている。本来、このような特大型円筒埴輪は11段~13段造りであるが、転用時に8段目で打ち欠かれたものと考えられる。当遺跡西側の日置荘遺跡で6世紀の埴輪窯が見つかっており、この円筒埴輪はその中の日置荘西町窯系埴輪とみられる。

(石神)



226

226 円筒埴輪 古墳中期
丹上遺跡 (rd40・h90) 文献.464

7世紀に埋没した溝を切って掘られた墓坑に棺として転用。底部欠失。断面台形のタガが7条残り、2・3・6段目に円形の透かし孔をもつ。口縁部はわずかに外反し、端部には突帯らしき剥離痕跡を残す。体部外面は細かい縦方向のハケ、内面はヨコナデ調整。外面調整はI期的であるが、タガ形状はII期以降のもの。周辺古墳に設置されていたものか。

(阪田)



227

227 須恵質船形土製品 古墳中期
深井清水町遺跡 (h1.8・w1.95・ℓ4.1) 文献.414

中世包含層から出土したが、古墳中期の共伴遺物から時期を推定。単材刳舟の船首部のみの破片であるが、刳込部がわずかに残る。径4mmの垂下用と考えられる孔が水平に穿たれている。船体は、鋭利なヘラ状工具で船上と船底各1面、右舷3面、左舷2面の変形7角形に面取り成形されている。刳込部も、同じ工具で隅丸方形状に深さ10mmまで抉られている。

(赤木)



228



228 土師質船形土製品 古墳前期
田井中遺跡 (H1.7・W2.2・ℓ6.2) 文献459
庄内期の井戸から出土。手捏ねで準構造船を模したもので、船尾側の先端と豎板上半が欠損する。刳船部は船首尾同形であり、先端が上に彎曲しながら尖る。垂下用のためか、船首基部に径2mmの孔が水平に貫通する。船首尾近くに豎板を配し、その間に低い舷側板を装着している。準構造船の形態としては、船首尾閉塞型の最もシンプルな構成のものである。(赤木)

229



229 土師質鳥形土製品 弥生後期～古墳前期
溝咋遺跡 (MD3.4・L11.2) 文献509
自然堤防上に立地する集落を貫流する溝から出土。頭部・胴部・尾部を作り出し、ナデで仕上げる。頭部頂部には剥離痕があり、鶏冠があった可能性がある。側面の片側には浅い敲打痕が一部みられる。胴部下面中央には円筒状の孔が穿たれる。
鳥形土製品の類例はこの時期の交易拠点集落を中心に見られ、注目すべき遺物である。(合田)

230



230 土師質鳥形土製品 古墳前期
船橋遺跡 (h10.4) 文献465
幅1m前後の溝から、庄内～布留式移行期の大量の土器とともに出土した。頭部側は大きく開口し、ほぼ原形を残すが、尾部を欠損する。尾部側に径5mm弱の注口部がつく。当該時期の鳥形土器と称するものは、全国で相当数が出土しているが、本例は本来の形状をよく推定しうるものであり、韓国の鴨形土器を源流とするものであろう。(福岡)

231



231 須恵質鳥形土製品 古墳中期
小阪合遺跡 (頭部:h5.8) 文献511
頭部は包含層から、胴部は河川内堆積土から出土。大きさや胎土、焼成の様子からみて同一個体であろう。復原形は背の中央が開口し、尾部を注ぎ口とする、韓国陶質土器の鴨形土器を彷彿とさせる。本資料の年代は共伴遺物からは特定できないが、5世紀代のものとして間違いないであろう。類例が和泉市の濁り池須恵器窯址からの出土品にある。(福岡)

232

232 須恵質算盤玉形紡錘車 古墳中期
向出遺跡 (MD5.5・T2.0) 文献.531

ピットから出土。須恵質で重さ56gを量る。須恵質の算盤玉形紡錘車は、大阪府内では大庭寺遺跡や深田遺跡などにも類例があり、長原遺跡では土師質のものが多数出土している。このような形態の紡錘車は朝鮮半島南部地域に出自が求められる。当遺跡でも平底鉢など5世紀後半に比定される韓式系土器が出土しており、渡来系集団の存在も窺える。(大庭)



233

233 土製支脚 古墳前期
池島・福万寺遺跡 (L15) 文献.441

古墳時代のくぼみから出土。主に山陰地方で見られる支脚である。畿内においても、いくつかの出土例がある。内外面とも非常に粗い作りで、外面全面には粗いタタキが見られるが、二又の部分は未調整である。背面には、焼き割れを防ぐためのものと考えられる、孔が開けられている。



(佐伯)

234

234 籠目土器 古墳前期
溝咋遺跡 (W6) 文献.509

自然堤防上に立地する集落を貫流する溝から出土。外面に籠目の文様をもち、黒斑が一部みられる。平底、鉢形の籠目土器の体部片と考えられる。

籠目土器は、古墳時代前期の古墳および集落で少数例が確認されており、供物の容器と考えられている。交易拠点集落での出土例が多く、本資料もその一例である。(合田)



235

235 線刻土器(人面) 弥生後期~古墳前期
溝咋遺跡 (w5・l7・t1) 文献.509

自然堤防上に立地する集落を貫流する溝から出土。壺の肩部とみられる土器片に、線刻により2つの楕円形、先端がつながる2条の平行線と円、内側に1本線を充填する半円形が描かれ、人面を線刻した土器片と考えられる。この時期の線刻された人面は、入れ墨をもつものが大半であり、入れ墨をもたない本例は稀少である。(合田)



236



236 製塩土器 弥生後期～古墳前期
男里遺跡 (RD12.1・H26.1) 文献.586

弥生時代中期の集落南部で検出された土坑から出土。共伴遺物がないため、時期は確定できないが、外面にはほぼ全面にタタキ調整が施されており、形状から弥生後期～古墳前期に属するものと考えられる。製塩土器がほぼ完形で出土することは珍しく、未使用品の可能性がある。

(中村淳)

237



237 製塩土器 弥生後期～古墳前期
湊遺跡 (左:H26.0,右:H24.5) 文献.587

自然河川の肩部の土器溜まりから、多量の土師器とともに出土。このほかに多量の製塩土器の破片もみつかっている。すべて脚台をもつタイプで、外面にはほぼ全面にタタキ調整が施されている。湊遺跡では、製塩土器を主体とした土器溜まりが多く検出されているが、現在のところ製塩炉などの遺構は確認されていない。

(中村淳)

238



238 製塩土器 古墳中期～後期
亀川遺跡 (RD6.4・H4.5) 文献.563

古墳時代後期の集落内で検出された土坑から出土。須恵器杯のほか、製塩土器と考えられる小型の土師器甕が共伴している。丸底の薄手のもので、内面には条痕が認められる。集落内では製塩炉などの遺構は確認されていないが、製塩土器の破片が多く出土していることから、製塩作業が行われていたことがわかる。

(中村淳)

239



239 製塩土器 古墳中期～後期
溝昨遺跡 (手前鉢形:w5・ℓ7・t1) 文献.510

旧安威川とみられる自然河川により形成された自然堤防上の集落内土坑からまとめて出土。外面に叩きをもつ蛸壺形のものや丸底の鉢形のものがある。蛸壺形ものは二次的な焼成痕がみとめられるが、鉢形ものは二次的な焼成痕がみとめられない。

河内湖岸の交易拠点集落ではこの時期、製塩土器が出土する例が多く、本遺跡もその一例となる。(合田)

240 銅鏃 古墳前期
池島・福万寺遺跡 (w1.6・L4.5) 文献.439

庄内式甕の破片とともにピット内から出土。
有茎式の銅鏃である。鏃身の断面形は菱形をしており、
鏃が見られる。茎の先端は欠損している。断面形は円
形である。1個ずつ鑄造する単鑄式により作られた可
能性がある。

(佐伯)



240

241 耳環 古墳前期
溝咋遺跡 (MD3.8・T0.5) 文献.510

庄内式期から布留式期に相当する水田耕土中から出
土。棒状の銅をやや楕円形に曲げ、耳への装着部とし
て3mmの隙間をあけている。遺存状態は良好であり、
出土時には赤銅色の光沢があった。

出土地点は水田域の中でも北寄りに位置するが、水
田域は北端を集落域と接しており、両域の関連性につ
いても注目される。

(清水)

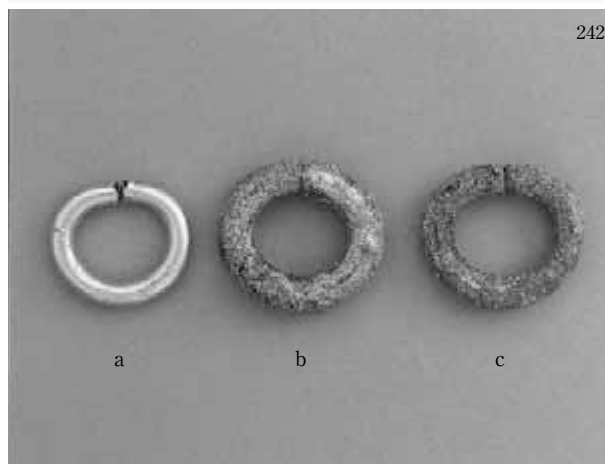


241

242 耳環 古墳後期
久宝寺七ツ門古墳 (a:D2.8・T0.5) 文献.536

いずれも沖積地に構築された横穴式石室から出土。
aは金環で、石室の上層から出土。銅芯金張りで、良
好な遺存状態である。b・cは銀環で、石室内から接
近して出土したが、原位置を保たない。表面は錆によ
る荒れが著しいが、銅芯銀張りである。銀環2点は大
きさや構造が似ることや出土位置などから考えて、対
であった可能性が高い。

(後藤)



242

243 小型仿製鏡 古墳前期
溝咋遺跡 (D2.9・T0.1) 文献.509

自然堤防上に立地する集落内の柱穴から出土。柱穴
は平面隅丸方形の深い掘方を持つものであるが建物に
はならない。文様は圈線が部分的に認められるのみで
ある。断面半円形の紐には円孔が穿たれる。

小型仿製鏡は弥生後期から古墳前期にかけて集落
で出土する例が多い。本資料は中でも素文化が進んだ
系統に属し、新しい段階に位置付けられる。

(合田)



243

244



244 鉄斧・鉄鏃

古墳後期末

粟栖山南墳墓群

(斧： ℓ 8,鏃： ℓ 12) 文献.533

斧は群集墳内の堆積層から出土したもので、鍛造袋状鉄斧である。鏃は3号墳の石室から出土した平根系方頭式鉄鏃である。いずれも古墳の副葬品である可能性が考えられるが、7世紀代の群集墳において副葬品を有する例は少なく、特にこの鉄鏃の形態は近畿地方での出土が稀であるとされる。他に鉄滓も数点出土しており、被葬者の性格を考える上で興味深い。(森本)

245



a



b

245 釣針・鉄鏃

古墳後期

亀川遺跡

(a:W2.0・L5.0,b:w0.9・ ℓ 6.5) 文献.563

集落縁辺部の祭祀遺構から出土。aは鉄製釣針。軸は断面台形を呈する。上部はやや細く断面円形に近い。針先の内側にはアゲがみられる。bは有茎鉄鏃。刃は片刃で逆刺がみられる。茎は断面四角形を呈する。U字鋤(鋤)先、穂摘具、鎌、刀子等の鉄器の他、勾玉、白玉、勾玉、手づくね土器、製塩土器等の遺物が共伴している。(島崎)

246



b



a

246 鉄素材

古墳後期

亀川遺跡

(a:w2.2・ ℓ 7.6,b:w0.9・ ℓ 6.9) 文献.563

白玉・有孔円盤・手づくね土器・須恵器・土師器などとともに、祭祀土坑から出土。aは両端がバチ型に開く板状をし、先端は非常に薄い。bは断面長方形の棒状鉄器である。aは細型鉄挺に似ており鉄素材と考えられ、同様にbも鉄素材の可能性が考えられる。一般に鉄挺は古墳の副葬品に多く見られるが、集落内で活用された鉄素材として注目できる。(島崎)

247



247 袋状鉄斧

古墳後期

大坂城跡

(W5.6・L14.0) 文献.334

鍛冶関連遺構が集中する一角にある土坑内から、須恵器や土師器とともに出土した。袋部は折り返して作られ、身部は厚みを持ち、全体的に重厚で丁寧な作りとなっている。錆化がさほど進んでおらず、内部には金属鉄がしっかりと残存する。鍛冶工房から出土したことに意味を持ち、製作された製品を推定する大きな手掛かりとなる資料である。(新海)

248 玉類一括 古墳前期
池島・福万寺遺跡 (勾玉: $\ell 1.0 \sim 1.9$) 文献.581

遺構面から一括出土。丸玉・勾玉・管玉・小玉である。材質は丸玉がメノウ、他はガラス・緑色凝灰岩・滑石などさまざまである。遺構に伴った出土ではないが、周囲には朱の痕跡が残っており、埋葬された人物が身に付けていた一綴りのアクセサリーであろう。

なお、出土状況を再現したレプリカを作成している。

(植村)



248

249 子持勾玉 古墳後期
大坂城跡 (W5.3・ $\ell 8.3 \cdot t1.8$) 文献.402

上町台地を東西に貫流する谷から、多量の須恵器や土師器とともに出土した。過去に同谷から2点の出土があった。滑石製で、頭部を欠損し、片面の子は全て削り取られている。調査区の周辺では祭祀を窺わせる様々な遺物が見つまっている。本例もこうした資料と共に、該期の祭祀形態を復原する上で重要な情報を提供するものである。

(新海)



249

250 子持勾玉 古墳後期
船橋遺跡 ($\ell 12.4$) 文献.465

流路から出土した滑石製子持勾玉。この流路からは須恵器杯身や土師皿など7世紀前半から11世紀にわたる遺物が出土している。

背部・側面に付属する子勾玉は著しく退化した単なる突起状の形状となる。形態からは子持勾玉の最末期のものと考えられ、7世紀にまで年代が下る可能性がある。

(植村)



250

251 子持勾玉 古墳後期
河原城遺跡 (w5.9・ $\ell 11.8$) 文献.528

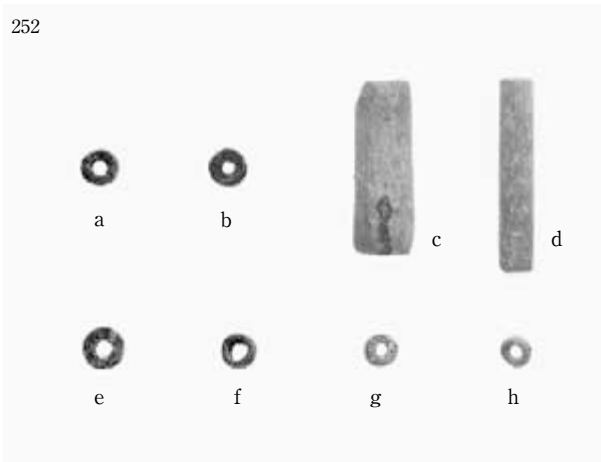
古墳時代後期～古代の溝から出土。滑石製で、方形突起状の子勾玉が背・腹部・両側面に付帯する。表面には、研磨痕や突起部形成のための擦切り痕が顕著である。子勾玉の退化傾向が顕著なことから、編年上では最末期の形態といえる。6世紀後葉～7世紀建物群の周縁部で出土していることから、集落内祭祀の後廃棄されたと推測できる。

(若林邦)



251

252

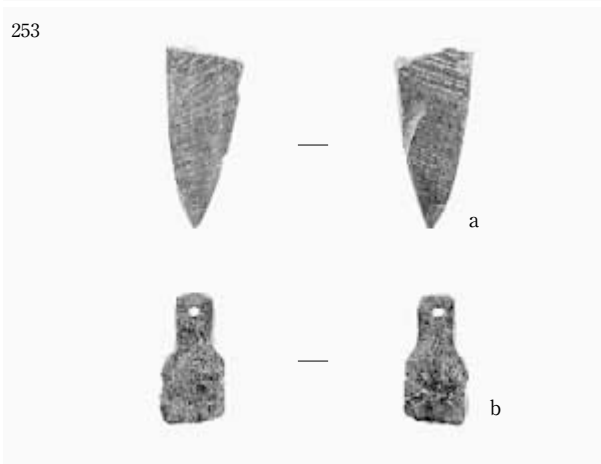


252 滑石製管玉・白玉 古墳中期
溝咋遺跡 (d:L2.5・D0.4) 文献.510

aは河川下層、cは古墳時代の包含層、eは遺構面、他は河川中層から出土した。白玉の表面には研磨の痕跡が残るが、管玉の表面は滑らかに仕上げられている。特にdは光沢があり、完成度が高い。また、管玉の孔内中央部に稜線があり、両側からの穿孔であることがわかる。

(植村)

253

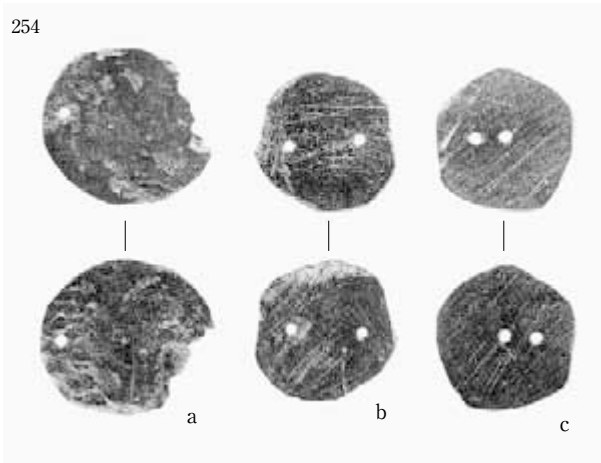


253 滑石製模造品(剣) 古墳中期
溝咋遺跡 (a:ℓ3.6・T0.4) 文献.510

aは古墳時代の包含層、bは溝から出土した。aは刃部上半の破片で、断面形は長方形を呈する。表面全体には粗い研磨痕を残す。bは刃部下端から基部にかけての破片で、aに比べ表面を滑らかに仕上げる。基部には直径2mmの孔を穿つ。刃部の断面形はレンズ状を呈しており、鍔を表現していたことがわかる。

(植村)

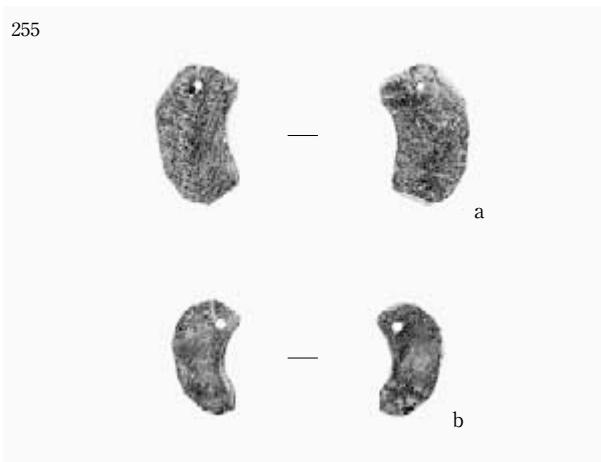
254



254 滑石製模造品(有孔円盤) 古墳中期
溝咋遺跡 (a:md3.3・T0.45) 文献.510

aは古墳時代の遺構面、bは同包含層、cは土坑から出土した。鏡を模造したとされる石製品である。表面には研磨の痕跡が明瞭に残る。cは均一の厚さに仕上げるが、他は中央がやや肉厚である。孔はcが直径2mmで、他は若干小さい。孔内中央部には若干の稜線が認められるが、両側からの穿孔かは判断できない。遺跡全体からの出土総数は7点である。(植村)

255



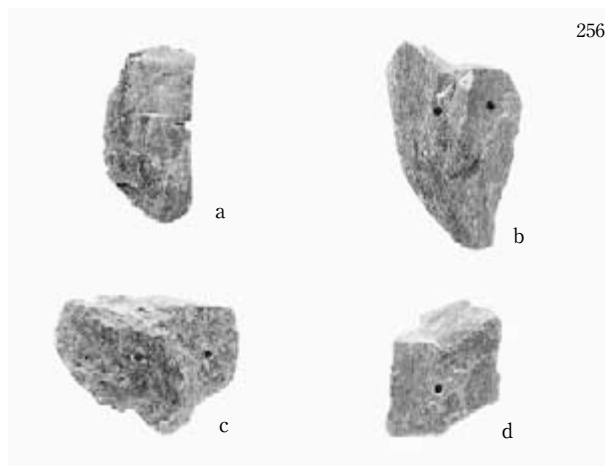
255 滑石製模造品(勾玉) 古墳中期
溝咋遺跡 (a:L3.6・T0.6) 文献.510

古墳時代中期から後期と考えられる別々のピットから出土した。両資料共に研磨の痕跡が明瞭に残る。aは目が粗い研磨で自然面を残し、厚みも一定でない。直径2mmの孔を有するが、片面には貫通していない孔もある。両側から穿孔した孔が食い違ったためであろうか。bは研磨の痕跡も細かく、厚みも一定である。

(植村)

256 滑石製未製品 古墳中期
溝咋遺跡 (b:L5.5・T1.2) 文献.510

aは河川中層、他は古墳時代の包含層からの出土。
a・dは1個、b・cは2個、各直径2mm程度の孔を有するが、a以外は孔が貫通しておらず、製作途中で放棄されたことが窺える。おそらく有孔円盤の未製品と思われる。この遺跡が滑石製品の生産遺跡であったことを裏付ける資料であり、穿孔が工程の比較的早い段階に行なわれていることも注目される。(植村)



257 滑石製模造品集合 古墳前期
亀川遺跡 (a:L4.2,b:L2.1,c:T平均0.5) 文献.563

河岸段丘上に位置する集落の竪穴住居跡や土坑、落ち込み内より出土。調査では約9,000点の白玉や勾玉、管玉のほか、不定型な板に穿孔を施しただけの有孔円盤が多数出土した。滑石製玉類は、主に集落の北東側で検出された土坑や落ち込み内で出土し、鉄製品や手づくね土器、須恵器、土師器とともに出土することから、祭祀に関連する遺構と考えられる。(田中龍)



258 滑石製紡錘車 古墳後期
溝咋遺跡 (d5.0・T1.0) 文献.509

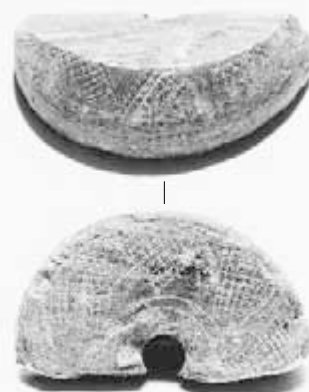
水田域を挟む微高地上に展開した集落内のピットから出土。断面は逆台形で圏線内側のやや内彎する面に鋸歯文を施し、その間を斜線文で充填する。線刻の底面に赤色顔料が認められた。当遺跡内において滑石製品の製作が行われたと指摘されている。これもその一つか。

(清水)



259 滑石製紡錘車 古墳後期
蔵塚古墳 (MD4.2・t1.2) 文献.460

包含層から出土。下面と側面に斜格子の鋸歯文を施す。下面の鋸歯文は軸孔側に2条、外側に1条の圏線を入れた後、その中に施される。軸孔は上面からやや斜め方向に穿孔される。このタイプは、大阪府と琵琶湖周辺から多く出土する。近接する地点からは、蔵塚古墳と同時期の竪穴住居跡1棟が検出されており、これら集団との関連性が窺われる。(金光)



260



260 滑石製紡錘車 古墳
大和川今池遺跡 (D4.3・T1.0) 文献.529

中世の坪境に設けられた大型土坑の堆積層から出土したもので、下層に存在した古墳時代の遺物が土坑の掘削により混入したものと考えられる。断面は台形を呈するもので、研磨痕は認められるが、線刻はみられない。下層の調査では古墳時代中期の土坑から初期須恵器とともに滑石製白玉などが出土しており、これに関連させて性格を考えることも可能ではある。(森本)

261



261 滑石製紡錘車 古墳後期
久宝寺七ツ門古墳 (MD4.1・T1.5) 文献.536

沖積地に構築された横穴式石室の外側から出土したが、石室は地震によって崩壊しており、古墳の副葬品であったと考えられる。断面形態はやや厚みのある台形を呈し、上面から底面に向かって穿孔された軸孔をもつ。全体に研磨痕が残るが、無文である。同古墳からは、須恵器杯蓋・杯身・短頸壺・甕・土師器甕の他、鉄製鎗や耳環などが出土した。(後藤)

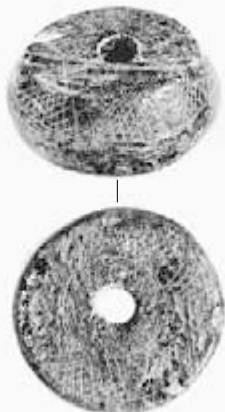
262



262 滑石製紡錘車 古墳後期
大庭寺遺跡 (MD4.0・T1.5) 文献.463

埋没谷埋土の包含層から出土。包含層は古墳～奈良時代のもが多く見られる。紡錘車は糸紡ぎの道具である。断面形状は台形を呈し、残りによく盤の中心に貫通孔が施されている。外面には圏線状の線刻が2本見られ、底部には鋸歯文と思われる線刻がしてある。鋸歯文の間には、斜櫛歯文と思われる線刻が一部であるが見られる。重さ28.7 gを量る。(田中龍)

263



263 滑石製紡錘車 古墳後期
大坂城跡 (MD4.2・H1.8) 文献.334

包含層から出土。完形品であり、断面形状はほぼ台形状を呈している。表面に線刻が施されており、側面と底面に鋸歯文がみられる。圏線と鋸歯文で構成される基本的な文様で、古墳時代後期に多くみられる特徴である。出土地点付近では、古墳時代後期の集落はみつかっておらず、性格や使用状況を判断することは難しい。(中村淳)

264 石釧 古墳前期
瓜生堂遺跡 (h1.5・ℓ3.0) 文献.474

包含層から出土。石材は緑泥片岩であり、製品の大部分を欠損する。施文の全体的な構成は不明であるものの、残存する部分では斜面と側面に縦方向の刻みを施した後、屈曲部に横方向の刻みを1条巡らせる。刻みはいずれも約1mmのU字形を呈し、丁寧な作りである。断面の形状や大きさ、施文からは古い型式のものと考えられる。(亀井)



264

265 車輪石 古墳前期
久宝寺遺跡 (h1.0・ℓ7.9) 文献.7

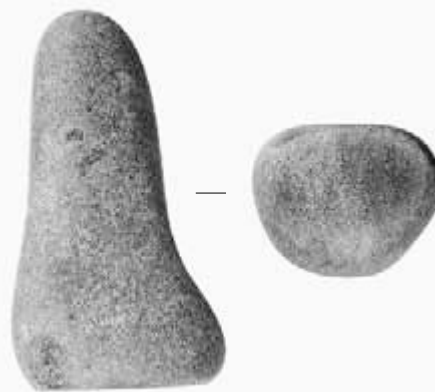
近畿自動車道建設に伴う試掘調査において、大量の土器とともに出土。石材は葉理の顕著な緑色凝灰岩であり、全体の約2/3を欠損する。断面は長方形を呈し、斜面には施文がみられない。文献では石釧と報告しているが、断面の形状やわずかながら変化する環体幅から、車輪石と改めた。No.264の石釧と合わせ、集落域からの出土例としては稀有のものである。(亀井)



265

266 石杵 古墳前期
池島・福万寺遺跡 (h6.0・ℓ10.8) 文献.567

遺構面を精査中に出土。直下から土器埋納土坑が検出されており、関連性が指摘されるものの、明確な根拠はない。土坑や周辺の遺構の出土遺物から、古墳時代前期の資料と考えられる。先端は使用による摩滅のため鏡面状を呈しており、部分的に水銀朱が付着する。また、一部に敲打痕もみられる。全国的にも類例が少なく、貴重な資料である。(亀井)



266

267 石杵・石臼 古墳前期
溝咋遺跡 (杵:L13.2,臼:d37.0・T7.6) 文献.509

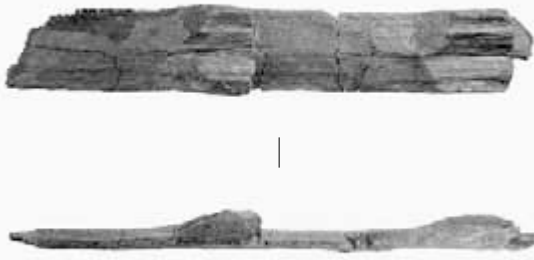
自然堤防上に立地する集落内の異なる土坑から出土。杵はやや彎曲し下部が広がる円柱形で、磨面は前面のみが残存し平滑でやや黒色を呈する。臼はわずかに高い周縁をもち、その内側が水平な磨面である。

両者とも顕著な赤色顔料の残存は認められないが、形態から、辰砂をすり潰すために用いられた可能性がある。(合田)



267

268



268 梯子 弥生後期～古墳初頭
新家遺跡 (w15・ℓ95) 文献.313

弥生後期～古墳初頭の木製品包含層から出土。この層は流れ込みによる堆積層と考えられている。

木製の一木の梯子で両端を欠損している。足掛けは二段認められる、段の上部は欠けており推定で8～10 cm程度の高さと思われる。下部の左側が被熱し炭化していた。樹種は不明であるが、木取りは心去り材を用いていた。(村上年)

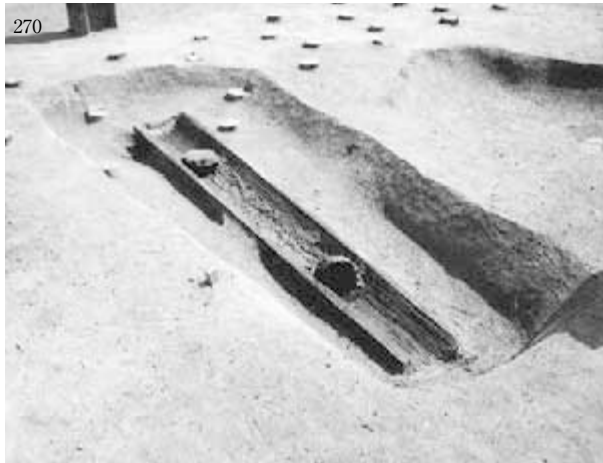
269



269 扉板 古墳中期
新家遺跡 (左:d4.4・w59.2,右:d4.3・w48.5) 文献.313

古墳中期の集落面より検出した井戸内の井戸枠に転用されていたものである。どちらの扉板も両側辺を段で薄く加工していた。左の軸部は5 cm突出した断面半円形のもので本来の形状を残しているが、右は軸部の先端が尖りぎみに加工されていた。他には、幅44.4 cmのやや小さなものがあり、窓板と推定できるかもしれない。樹種は全てスギ。(村上年)

270



270 割竹形木棺 古墳前期
久宝寺遺跡 (D50・L330) 文献.585

1号墳の中央、ほぼ南北に主軸を持つ第1主体部より検出。円柱状の材を縦に半裁し、中を削り貫いて蓋と身とする。北と南に約1.8 mの間隔をあけて仕切板を設置し、埋葬区画を作る。南北の仕切板付近から各々歯列を検出したため、二体の対向埋葬と考えられる。これまで割竹形木棺の一部や痕跡を検出した例はあるが、完存は本例が初。樹種はコウヤマキ。(南條)

271

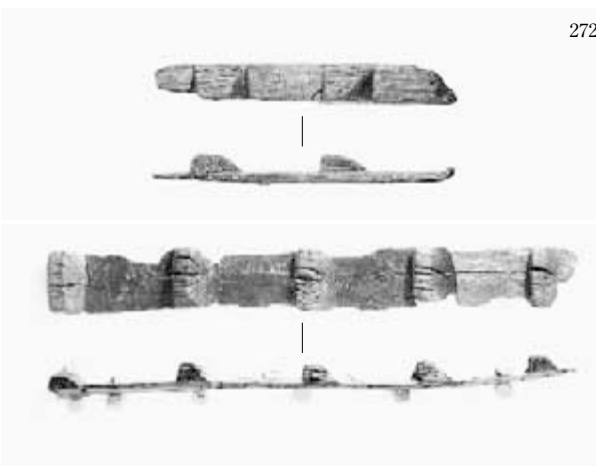


271 準構造船 古墳前期～中期
久宝寺遺跡 (h38・w8・ℓ318) 文献.585

河川内より出土。準構造船削船部の舷側胴部破片で、先端への絞込み部を含む。船材はスギ。胴部断面は、緩やかに弧を描く。厚みは、舷側上面で4 cm、船底側で6 cmである。舷側上面から5 cm下に、縦横2×5 cmの孔が40 cm間隔で7個並ぶ。孔中に桜皮と板材が詰まっており、舷側板固定材が遺存したものである。同じ例は、久宝寺遺跡出土船にある。(赤木)

272 梯子 古墳前期
下田遺跡 (下:W16.4・ℓ137.3・T7.5) 文献.434

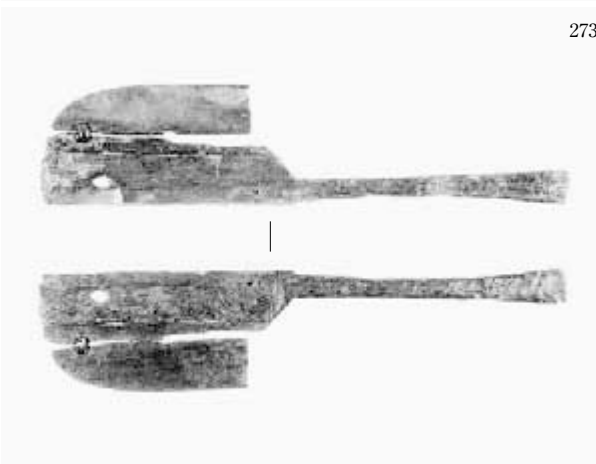
大溝内に投棄された状態で出土。丸太を半裁し、足掛部以外を削り込んだ一木作り。足掛部は上面を平坦に削り、下面はやや角度をつけて削り込み、断面形は全体として台形状を呈する。足掛部自体には手が加えられず、素材の半円形状を残している。足掛部は約30cmの間隔で5段分が残存する。高床建物か、貯蔵穴の昇降などに利用されたものであろう。(南條)



272

273 アカカキ状工具 古墳前期
下田遺跡 (w21.4・L92.1・T2.1) 文献.434

大溝内に投棄された状態で出土。船底に溜まった水を汲み出すアカカキの形状に似ているが、実際に船舶用具として利用されたかは不明。本体と側縁が樺紐で結合されている。一般的なアカカキより大形で、復原すると少なくとも3つの部材からなる組立式と考えられる。側縁は本体に対して直角に立ち上げることができ、可動させて使用した可能性がある。(南條)



273

274 櫂 古墳前期
下田遺跡 (W8.8・L111.6・T3.2) 文献.434

大溝内に投棄された状態で出土。板目材の一方を細長く削り込んで柄を作り、他方を膨らみの弱い紡錘形に削り水掻きとする。水掻きは片面中央に明確な稜線を持ち、左右になだらかに傾斜する。表面のほぼ全面に、手斧と思われる工具痕が見られ、遺存状態は極めて良い。船具の出土は、石津川河口を中心とした水運に関わる、当遺跡の性格の一端を示している。(南條)



274

275 斧柄 古墳前期
下田遺跡 (W4.4・ℓ50.7・T4.2) 文献.434

大溝内に投棄された状態で出土。樹木の幹と枝を利用して作った一木作り。幹が斧台、枝が握部を構成する。斧台の側面を僅かに削り込んで装着部とするが、上下面には特に装着用の仕様はみられない。断面形状は、斧台が楕円形で、装着部は扁平を呈する。本例は斧身の刃先が、柄の主軸にほぼ直交する横斧である。袋状鉄斧を装着した可能性がある。(南條)



275

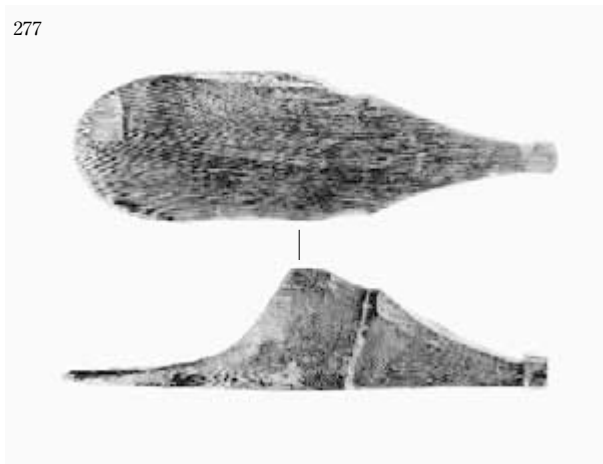
276



276 豎杵 古墳前期
下田遺跡 (下:MD8.5・L103.4) 文献.434

大溝内に投棄された状態で出土。丸材の中央部を削り込んで握部とした一木作り。搗部の径は、両端付近が最大で、握部に向かって径を減じる。両搗部端はかなり摩耗しているが、それぞれ摩耗の度合いが異なる。一般に、搗部端が平坦なものは表面粉碎能力、丸いものは衝撃粉碎能力が優れるといわれる。よって搗部の両端では使用目的が違ったのであろう。 (南條)

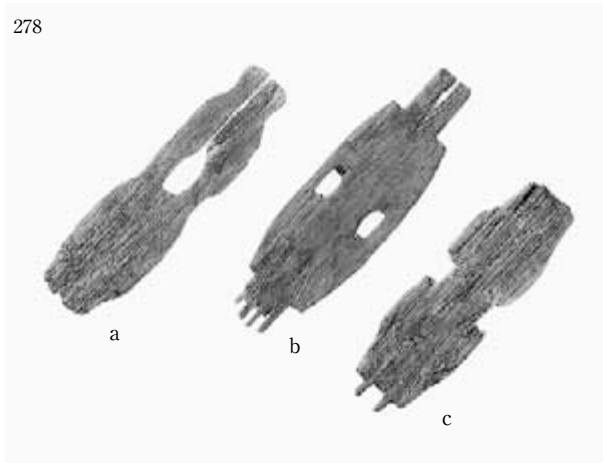
277



277 アカカキ・朮すくい 古墳前期
西大井遺跡 (w14.7・ℓ46.0・T11.2) 文献.406

包含層中から底面を表に向けて出土。曲柄平鋏の刃を模した様な軸頭と傘状の張出し、長円形の刃が一木を削って作られている。軸形態はアカカキに似るが、底面が茄子形という特異な形で、他に類例をみない。使用痕が不明瞭で、農具としての使用は考えにくい。農具として作るが実用に適さなかったか、農具を模したものであろう。樹種はコウヤマキ。 (南條)

278

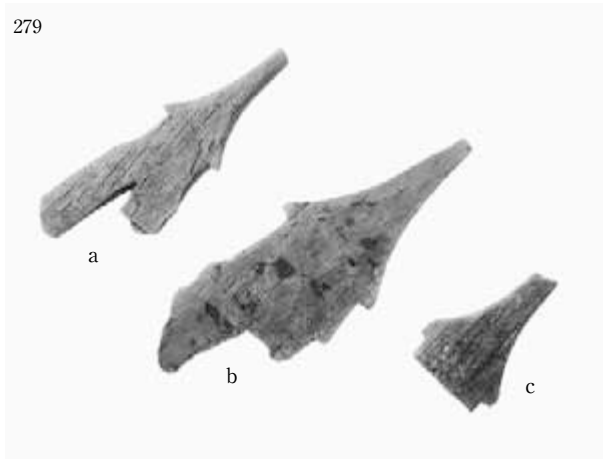


278 大足足板3種 古墳後期
溝昨遺跡 (a:W10・L36) 文献.509

水田面より出土。aとcは、大畦の補強材として再利用されていた。大足には種々の形状があるが、a～cの3点はすべて杵と棧を梯子状に組む「杵型」大足の足板である。bはほぼ完存するが、a・cは前方差込部を欠損する。差込部は、a・cともにbと同じく又状を呈していたと考えられる。

(黒須)

279

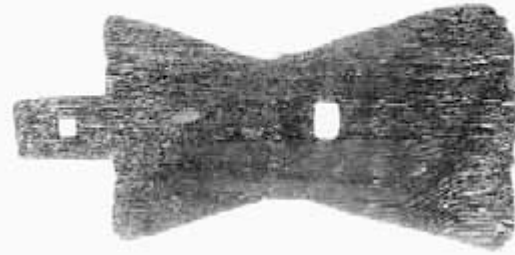


279 曲柄鋏(ナスビ形木製品) 古墳後期
溝昨遺跡 (a:W10・ℓ30) 文献.509

a・bは包含層から、cは集落の土坑内より出土。曲柄に装着する鋏身で、その形状から「ナスビ形木製品」と呼称されるものである。すべて肩下のくびれから外彎して増幅し、刃部途中で最大幅を測るタイプである。aとbは、又鋏であるが、cは欠損のため平鋏の可能性が残る。a・bともに刃部が著しく磨耗しており、相当の使用に耐えたものである。 (黒須)

280 腰掛の脚板 古墳前期
溝咋遺跡 (W21.2・L43.2) 文献.509

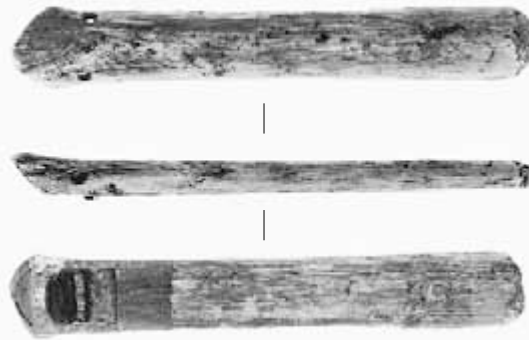
古墳時代後期水田の大畦下より出土。指物腰掛の脚板である。通常は脚板2枚と座板(上板)、棧などの部材を組んで使用するものであるが、脚板以外の部品は出土しなかった。腰掛は座像埴輪の研究より、古くから存在したであろうことが予測されてきた木製品のひとつである。この形状の脚板をもつ腰掛の出土例は、弥生時代末～4世紀に限定される。(黒須)



280

281 筑状弦楽器 古墳後期
溝咋遺跡 (W5.0・L32.8) 文献.509

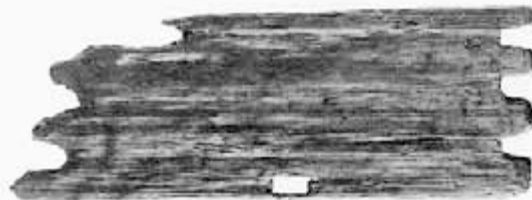
集落内の土坑より出土。断面半円形を呈する棒状木製品で、元来「板作りの琴」として分類されてきたものである。銀杏形に広がる頭部には、半月形の集弦孔と側面へ抜ける2点の小孔を持つ。集弦孔下には別個体の集弦板が木釘で装着されており、一部漆装飾を施す。近年、「筑」という弦楽器とする説が楽器研究者より提示され支持されている。樹種はヒノキ。(黒須)



281

282 琴形木製品 古墳中期
大和川今池遺跡 (w14.5・l40.3・t2.4) 文献.529

土坑から出土。この琴形木製品は槽作り(共鳴槽)の琴と考える。琴板の側面は割れており、4本の突起部が遺存する。突起部の対面側は腐朽が顕著であった。琴は旧河道や溝、古墳の周溝から全国的に出土し、水辺の祭祀との関係が深い遺物として注目されている。当資料が出土した土坑も谷状の地形に接して確認された。樹種はヒノキ。(後川)



282

283 大足横木 古墳中期
吹田操車場遺跡 (W2.3~3.1・L32.2~32.5) 文献.492

6世紀末頃と考えられる須恵器甕内より10本一括で出土。「杵型」大足の横木(棧)である。薄い板状で、両端に差込部を削り出す。この甕は高さ101.0cmを測る大型品で、長径1.1m×短径0.95mの土坑内に正位置で据えられていた。甕の底部には穿孔があるため祭祀に関係するとの見方があるが、大足の横木が祭祀と関連するか否かは不明である。(黒須)



283

284



284 古代土器集合

飛鳥

難波宮跡

(上右:RD48.0・H4.2) 文献512

谷部から出土。概算破片数で土師器約4,000点、須恵器約1,000点が出土している。出土した土師器は煮炊や貯蔵形態のものよりも供膳形態のものが数量的に多い。出土土器の大半は7世紀代のものであるが、奈良時代の皿や重圏文軒丸瓦もわずかではあるが出土しており、その堆積時期は奈良時代に下るものと考えられる。

(木嶋)

285



285 須恵器(蓋杯)

飛鳥

難波宮跡

(下杯身:RD16.0・H5.2) 文献512

谷部から出土。蓋の天井部は比較的高く丸みをもつ。かえりの端部は天井端部を結んだラインよりも内側になる。つまみは中央が高く菱形をなす。杯の底部はやや深く丸みをもつ。口縁部は内彎気味にのび、端部は丸く仕上げる。これらの土器は難波宮の造営に伴って多数の木簡や木製品とともに投棄されたものと思われる。

(木嶋)

286



286 須恵器(平瓶)

飛鳥

難波宮跡

(BD7.2・ℓ13.6) 文献512

谷部における土器の集中部からの出土。体部は肩部が張る扁球体をなし、底部は丸みをもつ。外面は体部の上位から中位にかけて回転カキ目調整を行う。体部の上位の一方に偏った位置に口頸部を貼付する。口頸基部は細く外反してのび、端部は欠損しているがおそらく丸く仕上げたものと思われる。

(木嶋)

287



287 須恵器(提瓶)

飛鳥

難波宮跡

(RD5.2・H18.0) 文献512

木簡をはじめ多量の木製品とともに谷部から出土。口頸基部は細く外反しつつ上方へとのびる。体部は一方が丸く、一方が平坦な扁球体をなし、体部全体に回転カキ目調整を行う。側面肩部の一方に把手が退化した小さい突起を貼付する。難波宮の造営に際し、谷へ祭祀関連遺物とともに投棄されたものと考えられる。

(木嶋)

288 須恵器・土師器 飛鳥・奈良
田須谷古墳群 (後列中:RD7.6・H16.5) 文献.493

1号墳の周溝内埋土から出土。遺物群の時期は、ほぼ7世紀後半から8世紀前半代に比定され、時期差がみられる。このうち、新相の土器群については当古墳の北西約15mの付近で検出された火葬墓の出土品と接合するものがあるため混入遺物として捉え、古相の土器群の時期が当古墳の築造時期と考えることができる。

(岡戸)



288

289 古代土器一括 飛鳥
太井遺跡 (壺:RD11.4・H16.4) 文献.415

円筒埴輪を転用して井戸枠とする井戸から出土。須恵器の壺・甕、土師器の皿・杯などの器種がある。釣瓶と考えられる甕や柄杓と考えられる穿孔のある瓢箪や蛸壺も出土している。生活様式を示す一括性の高い内容を示すとともに、井戸を使用する際の具体的な用具が出土したことは貴重なデータであるといえよう。

(松尾実)



289

290 古代土器一括 飛鳥
真福寺遺跡 (円面硯:RD16.8・h5.6) 文献.445

谷から出土。須恵器、土師器が多く出土しており、豊富な器種を有する。前者は杯身・杯蓋・壺・甕・鉢・提瓶・蛸壺など、後者は杯・皿・盤・甕・杯・鉢などが出土している。これらは当時の生活様式を示す遺物であり、貴重な資料となるといえよう。

(松尾実)



290

291 古代土器一括 奈良
駒ヶ谷遺跡 (左前平瓶:RD9.6・H14.4) 文献.491

井戸埋土下層からの出土土器群。土師器・須恵器・奈良三彩の小壺などがある。

土師器では壺・甕・羽釜などの貯蔵・煮沸具類、須恵器では壺・瓶類の出土比率が高い。また、土師器の甕、須恵器の壺や瓶の中には、頸部に縄を巻いた痕跡のあるものが多く見られ、釣瓶として使用されたものと推定されている。

(岡戸)



291

292



292 古代土器一括 奈良中期
溝咋遺跡 (奥左:MD44.0・H49.8) 文献509

溝咋神社上宮跡下層からまとめて出土。平城Ⅲの時期に位置付けられる一群である。須恵器壺、横瓶、平瓶、土師器甕などのほか、底部に穿孔をもつ瓦質壺も含まれており、祭祀的な性格がうかがえる。なお西側に接する調査区で出土した「奈肱□」の墨書土器(前冊No.446記載)もこれらと同時期のものであり、一群の土器に伴う可能性が高い。(伊藤)

293



293 古代土器一括 奈良
亀井北遺跡 (後列中央:RD14.4・H22.2) 文献514

幅約195mになる河川から8世紀代の遺物が大量に出土。土師器小皿・皿・杯身・杯蓋・碗・高杯・ミニチュア高杯・小形壺・鉢・鍋・甕・羽釜・甌・竈、須恵器杯身・杯蓋・甕等である。ミニチュアも含め、竈が5点出土しているのは特記すべきものである。墨書土器も7点出土し、「井」「十四」「部□」と読める。(畑)

294



294 古代土器集合 飛鳥～平安前期
総持寺遺跡 (下中:bd4.0・h12.2) 文献466

総持寺遺跡(現「総持寺北遺跡」)では飛鳥時代末から平安時代初頭にかけての集落が検出されている。この集落で使用された素掘りの井戸が6基検出されたが、これらの井戸に廃棄されていた遺物である。

土師器甕・蛸壺・須恵器壺などが出土した。7世紀後半～10世紀初頭の北摂地域の土器様相を考える上で貴重な資料となろう。(岡本圭)

295



295 黒色土器A類等一括 平安中期
粟生間谷遺跡 (下右:RD14.3・BD5.6・H5.2) 文献578

土坑からの一括出土。黒色土器A類碗、土師器皿・甕、須恵器鉢がある。碗は正置の状態と並べられていた。同じ場所には同時期と思われる大型建物がある。碗には、底部外面に墨書をもつもの、体部外面下部に線刻をもつものが含まれる。この地域の土器様相を考えるうえで貴重であるのみならず、周辺の遺構群を評価するうえでも重要な資料である。(信田)

296 古代土器一括 平安中期
長原遺跡 (a:rd15.6・h6.7) 文献.514

掘立柱建物の廂部分から一括して出土。土師器小皿・杯・椀・甕・羽釜、黒色土器A類小皿・椀、黒色土器B類小皿・椀、篠窯系ねり鉢、緑釉陶器(近江産)等が出土した。土師器小皿が半分以上を占め、次いで黒色土器A類椀が多い。10世紀末～11世紀前半の食器の様相を示していると思われる。

(畑)



296

297 黒色土器B類等一括 平安後期
粟生間谷遺跡 (中央奥椀:RD15.7・BD5.2・H5.7) 文献.578

土坑から出土。出土状況から一括して廃棄したものと思われる。周辺には同時期の掘立柱建物が数棟ある。黒色土器B類椀、土師器大・小皿以外に、器壁の厚い黒色土器A類椀、灰釉陶器片も少量含まれる。同遺跡からは黒色土器A類椀、楠葉型瓦器椀をそれぞれ主体とした一括資料も出土しており、供膳形態の土器の変遷を考えるうえで貴重な資料である。

(信田)



297

298 楠葉型瓦器椀等一括 平安後期
粟生間谷遺跡 (中右:RD15.7・BD5.2・H5.7) 文献.578

土坑からの一括出土。出土状況から破棄されたものと思われ、隣接してほぼ同時期と考えられる建物がある。楠葉型瓦器椀、土師器大・小皿を中心として、白磁碗、回転台土師器皿なども含まれる。同遺跡では黒色土器A類椀、黒色土器B類椀それぞれを中心とした一括出土資料も存在し、供膳形態の土器の変遷を考えるうえで貴重な資料である。

(信田)

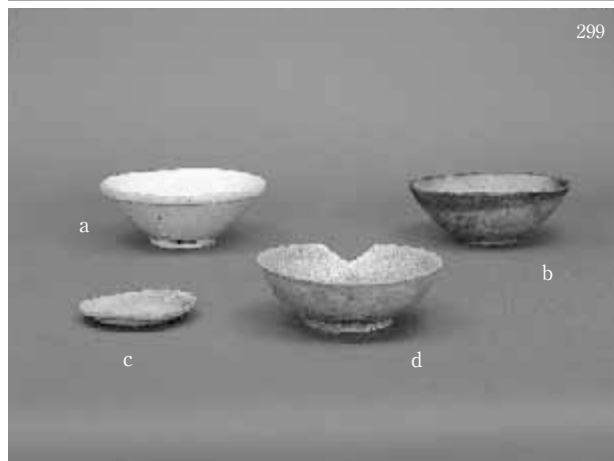


298

299 古代土器一括 平安中期～後期
玉櫛遺跡 (a:W16.8・T6.4) 文献.467

井戸から出土。aは白磁碗ⅢもしくはⅣ類、玉縁状口縁、高台は断面台形。bは樟葉型Ⅰ-3形式の瓦器椀。dは東海系灰釉陶器山茶碗。高台は三角形で口縁部は外反。これらはcが井戸の底部、dが埋土最上層から出土し、若干の時間差があるものの11世紀後半から12世紀初めの一括資料である。

(入江)



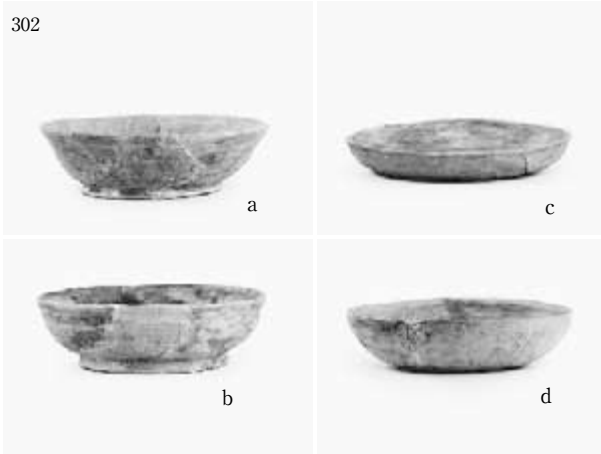
299



300 墓出土遺物一括 平安末～鎌倉
粟生間谷遺跡 (左端小皿:RD9.1・H1.7) 文献.578
墓の副葬品。土師器大皿1枚・小皿5枚以上と白磁碗・短刀が出土している。短刀は底面に置かれていた可能性があるが、その他は原位置を保っていないかった。大皿は出土状況から、埋め戻した墓坑の上、もしくは木棺があったとすればその上に置かれていた可能性もある。これで全てであるとはいえないにしろ、副葬品の1セットを捉えるうえで重要な資料である。(信田)



301 墓出土遺物一括 平安末～鎌倉
粟生間谷遺跡 (前中央小皿:RD9.4・H1.6) 文献.578
釘は木棺に使われていたもの、それ以外は墓の副葬品である。釘は原位置を保っており、木棺の規模を推定することができる。副葬品には、短刀と土師器皿があり、短刀の上に土師器皿を正置の状態と並べていた。土師器皿は大皿が2枚、小皿が9枚またはそれ以上である。副葬品のセット関係およびその埋葬時の状態がわかる貴重な資料である。(信田)



302 土師器(杯・皿) 奈良
小阪合遺跡 (a:rd22.0) 文献.511
河川内に川の左岸から投げ込まれた状況で出土。a・bは底部に高台を付すタイプで、口縁部内面に2段の放射状暗文、底部内面にラセン状暗文を施す。暗文の間隔は細かく、aは放射状暗文の上から連弧状暗文を描く。c・dは口縁部内面に1段の放射状暗文を施すが、間隔は粗く雑である。cは底部内面にラセン状暗文、外面に焼成前の線刻が認められる。(橋本)



303 土師器(羽釜) 奈良
小阪合遺跡 (bd24.0・ℓ24.8) 文献.511
河川から出土。鏝を比較的高い位置に貼り付け、端部は面をもつ。体部内・外面の調整はナデ、外面には指頭痕が顕著に残る。鏝以下に炭化物が付着している。出土した大半の羽釜は生駒西麓産の胎土であったが、これには角閃石が認められず、色調や鏝の形態も異なっていることから他地域産と思われる。柏原市高井田遺跡井戸-1出土のものに類似している。(橋本)

304 土師器（甕：釣瓶） 飛鳥
太井遺跡 (RD15.0・H13.6) 文献.415

井戸内の最下層から出土。体部外面はハケ調整を施す。内面は削り調整を行い、底部に指おさえ痕が残る。口縁部は横ナデである。部分的な残存ではあるが、三重に燃った縄が頸部に巻かれている状態で出土した。井戸の水を汲む釣瓶としての用途が考えられる。当時の生活を具体的に知る上で貴重な資料といえよう。

(松尾実)



304

305 土師器（甕：釣瓶） 奈良
駒ヶ谷遺跡 (RD16.6・H11.6) 文献.491

井戸の下層から出土。いわゆる南河内型の甕であり、この地域一帯に通有のものである。内外面全体に煤が付着するため何度か使用されていたようである。頸部には縄を巻きつけ、持ち上げていたような痕跡が見られる事から、井戸で水を汲むための釣瓶として使われていたと考えられる。同じ遺構からは須恵器の長頸壺等を転用した釣瓶も出土している。

(鹿野)



305

306 土師器（真蛸壺：釣瓶） 平安前期
総持寺遺跡 (RD13.8・H24.2) 文献.466

井戸の底付近から出土。甕の胴は長く外面には縦方向の粗いハケ調整が施されている。胎土も砂粒が多く入りやや粗い。

これに類似した甕は瀬戸地域（岡山県・香川県）で出土し、蛸壺と考えられている。

当資料は本来の機能が転化して、井戸の釣瓶として使用された可能性が考えられる。

(岡本圭)



306

307 土師器（真蛸壺） 平安末～鎌倉
船橋遺跡 (RD13.8・H23.0) 文献.465

自然流路の底から出土。土師質、底部は尖りぎみで口縁下に穿孔が認められる、体部外面には縦方向に3条線刻後それに直交して3条線刻されている。田山遺跡（阪南市）では多種類の線刻が見られることから屋号ではないかと推定されている。内陸部で出土するのは、他の用途があったのであろうか。

(寺川)



307

308



308 黒色土器A類（鉢） 平安中期
粟生間谷遺跡（RD22.9・bd12.0・H16.6）文献578

土坑から黒色土器A類碗、土師器皿・羽釜片などとともに出土。口付きの鉢で高台を有する。周辺には同時期と思われる大型建物などの遺構群があり、土坑は建物に付属するものと思われる。

平安時代黒色土器A類の器種のバリエーションを知ることができる資料である。

（信田）

309



309 須恵器（杯・杯蓋） 奈良
小阪合遺跡（rd a:14.8,b:11.8,c:19.0）文献511

河川内より左岸から投げ込まれた状況で出土。

aは内面にかえりの残る杯蓋である。頂部は高く、宝珠状のつまみが付く。頂部外面に焼成前に施された線刻がある。bは平底の底部をもつもので、底部の外面はヘラ切り後、不調整である。cはbのタイプの杯に高台を付したものである。体部下方に1条の凹線が巡る。銅碗を模したものである。

（橋本）

310



310 須恵器（壺） 奈良
小阪合遺跡（rda:18.4,b:9.8,c6.6,d:10.0）文献511

出土状況はNo.309と同様。aは広口の口縁部をもち、肩部が屈曲するものである。底部には高台を付す。bはaに比べて口縁部はさほど広がらず、頸部は細い。不安定な底部である。cは直立する短い口縁部をもち、体部に1条の沈線が巡る。dはcに比べるとやや外に開く短い口縁部をもち、肩部に稜がみられる。底部は丸底である。

（橋本）

311



311 須恵器（壺：釣瓶） 奈良
駒ヶ谷遺跡（RD5.2・H19.0）文献491

釣瓶として転用された細頸壺で、井戸の埋土下層から出土。

頸部と胴体部の境には縄を巻いた痕跡が良好な状況で残存し、縄は一方向から持ち上げていることがわかる。また、釣瓶使用時に頸部から上方向にのびる縄を固定させるためか、意図的に口縁部を波状に打ち欠いている。

（岡戸）

312 漆附着須恵器（壺） 奈良前半
河原城遺跡 (RD6.0・h4.7) 文献.528

奈良時代の鍛冶工房が検出された地区の包含層から出土。細頸壺の頸部内面に厚さ0.8cm程度の漆が付着している。付近からは鍛冶炉や鉄滓・鞆羽口などが出土し、金属製品の加工・仕上げに使う漆が壺に入られていたと類推できる。土器片破断面にも漆が付着していることから、最終段階ではパレットとして利用されていた可能性がある。(若林邦)



312

313 須恵器（甕） 奈良
丹上遺跡 (rd26・md39・h45) 文献.464

官衙的性格を有する大型掘立柱建物群の南端を画する溝から出土。肩の張りはなだらかで、最大径は体部上位1/3にあり、底部に至るカーブはゆるやかで長円形を呈す。口頸部に飾りはなくシンプルな美しさが見られる。甕は製作年代によって形の変遷が余りなく口頸部のつくりや文様に多少の変化が見られる程度であり、奈良時代の特徴的な甕といえる。(石神)

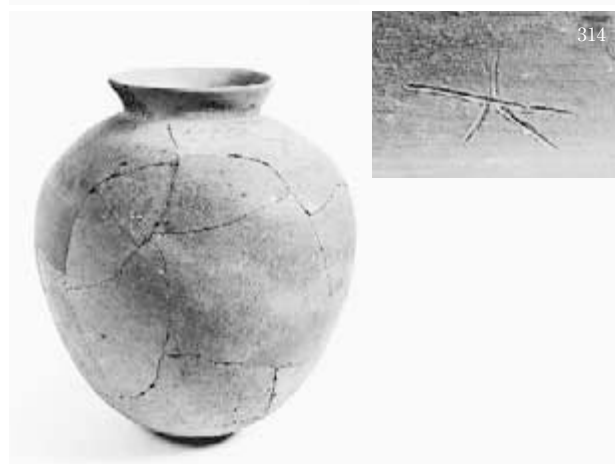


313

314 須恵器（甕） 奈良
駒ヶ谷遺跡 (rd19.5・H39.7) 文献.491

開析谷の埋土下層からの出土。口頸部の一部を欠くが、ほぼ完形品である。

口頸部は胴部から「く」の字状に短く外反させ、口縁端部はそのまま面をもっておさめている。頸部外面にはヘラ描きにより「大」と焼成前に線刻される。なお、線刻は文字の可能性が指摘されているが、筆順などから疑問視する意見もある。(岡戸)



314

315 須恵器（壺：蔵骨器） 奈良
田須谷古墳群 (rd11.2・H14.1) 文献.493

火葬墓に納められた蔵骨器である。火葬墓は盗掘により大きく攪乱されており、蔵骨器も高台の一部が火葬墓から出土した以外は、その大半が近接する田須谷1号墳の周溝内から出土した。

残存状況が悪く明確ではないが、高台の内側部分は打ち欠いたように円形に欠損しており、意図的に底部を穿孔させた可能性が高い。(岡戸)



315

316



316 須恵器（壺：蔵骨器） 奈良後期
粟栖山南墳墓群 （RD13.2・H15.8） 文献533

7世紀代を中心とする群集墳の周辺から破片の状態
で出土したものであるが、接合作業によりほぼ完形に
復原された。須恵器の薬壺で、律令期の蔵骨器として
は一般的なものである。この蔵骨器の出土により古墳
の築造が終了した後、同じ墓域において火葬墓が営ま
れたことが明らかとなった。群集墳を営んだ集団によ
る墓制変化を知る上で貴重な資料である。（手島）

317



317 奈良三彩小壺 奈良
駒ヶ谷遺跡 （RD3.9・H4.7） 文献491

井戸の下層より出土。肩の張った扁球形の体部に短
く垂直に立ち上がる口縁部、底部には外反気味の小さ
い輪高台を貼り付け、焼成時の胎土目が2ヶ所、痕跡
が1ヶ所認められる。胎土は淡黄色で、全体に細かい
貫入がある。釉は体部内面に透明釉、外面の緑釉は深
みのある濃緑色に発色。腹部に透明釉・褐釉を並列し
て配するが、褐釉の大部分は銀化している。（阪田）

318



318 奈良三彩小壺 奈良
吹田操車場遺跡 （rd3.5・h4.0） 文献492

古墳時代から中世の包含層から出土。体部の1/3
残存、口縁端部欠失。肩の張った扁球形の体部に外反
気味の輪高台が付く。胎土は極く細かい石英粒を含み
淡褐色を呈す。肩部に白色釉と緑釉、体部下端から高
台上部に緑釉と褐釉がわずかに残存する。

（阪田）

319

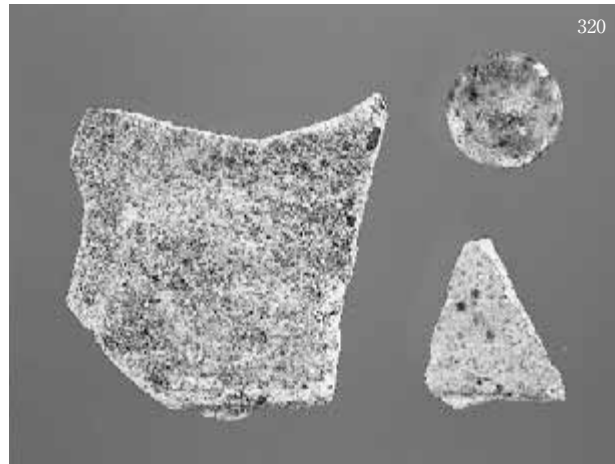


319 統一新羅系土器 奈良
大庭寺遺跡 （rd22.8・h11.6） 文献463

落込みより出土。報告書では蓋としたが、薄手の鉢
か。須恵器と同じ質感である。外面に2条の沈線文、
スタンプ文が施されている。スタンプ文は口縁部でC
字状に1段、体部で逆C字状に6段、底部寄り斜め
C字状に4段以上である。内面は回転ナデ。類例が見
あたらず、統一新羅系土器の模倣品の可能性がある。
他に同一個体らしい1片もある。（村上富）

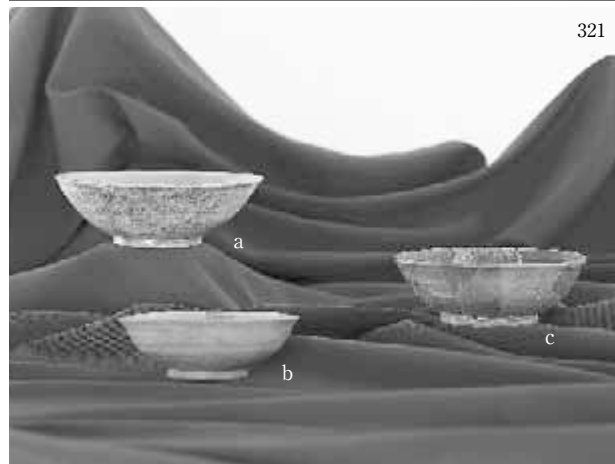
320 緑釉陶器 平安
小阪合遺跡 (上右:w3.1・t2.0) 文献.511

左は包含層から出土した火舎の体部、上右は包含層から出土した蓋のつまみ、右下はピットから出土した甑の体部である。いずれも洛北栗栖野産である。緑釉陶器は、奈良時代末から平安時代初頭の平城京・平安京・山城国府跡・北野廃寺・奈良市興福寺一乗院・藤井寺市葛井寺遺跡など出土遺跡や時期が限られる遺物である。 (金光)



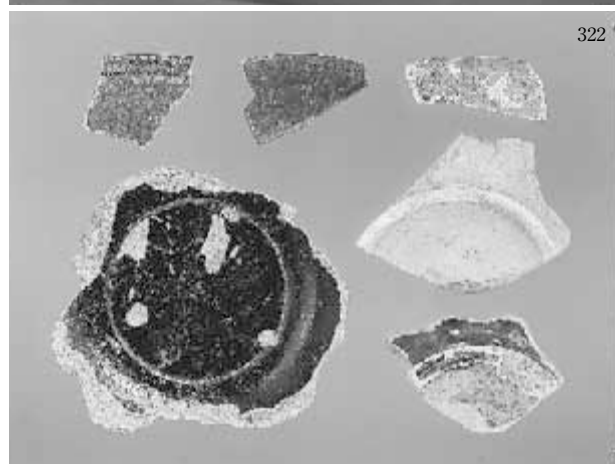
321 緑釉陶器 平安中期
小阪合遺跡 (a:RD18.4・H5.8) 文献.511

aは河川から、bは土坑から、cは包含層から出土。aは削出し輪状高台の洛西産。b・cは削出し輪高台の篠産。cの内部には重ね焼きの痕跡が残り、高台外面中央にも釉が施されている。この他にも、東海産や洛西産を含む185点もの施釉陶器が出土しており、平安京や有力寺院跡からの出土傾向に近く、当遺跡の性格を示唆している。 (金光)



322 緑釉陶器 平安
長原遺跡 (下左:bd7.3) 文献.514

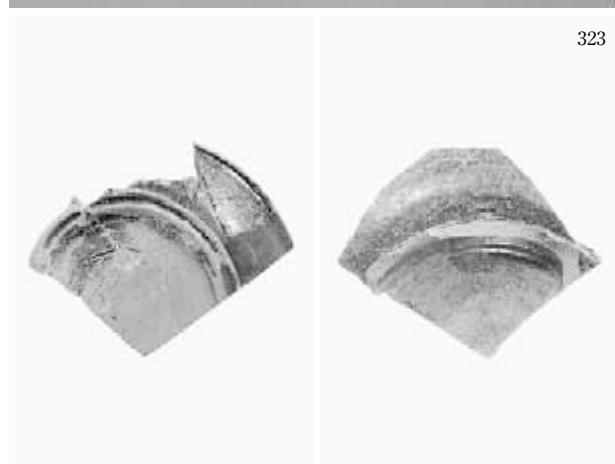
包含層等から出土。9世紀中頃～10世紀後半の猿投窯産、山城(北)産、篠窯産、近江産のものである。他にも10世紀の美濃窯産かと思われるものも出土している。平安期の緑釉陶器生産地は、畿内・東海・近江・防長の4地域が確認できている。9世紀後半に畿内と東海が飛躍的に生産量を伸ばし、10世紀中頃に近江産が急速に生産量を増やす。 (畑)



323 緑釉陶器 平安前期
総持寺遺跡 (左:rd11.2・H2.1) 文献.466

包含層の下位から出土。体部外面は回転ヘラ削り調整が施され、底部は糸切り痕を撫で消し、高台を貼り付けている。釉は高台内以外全面に掛けられており、濃緑色を呈する。胎土はやや硬質である。高台には段があり近江(滋賀県)産の特徴を有している。

近江での緑釉陶器の生産は比較的后発であることから、10世紀後半代の資料と思われる。 (岡本圭)



324



324 越州窯系青磁（碗） 平安前期
真福寺遺跡 (bd5.4) 文献.445・560

包含層から出土。底部から体部にかけて残存。体部は底部よりほぼ直線的に斜め外方に開く。全面に浅黄色の釉がかかる。胎土は灰白色。畳付には釉を掻き取った後の目痕が推定6ヶ所ある。出土例少なく貴重な資料。

(村上富)

325

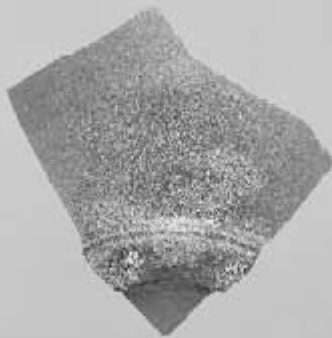


325 越州窯系青磁（碗） 平安後期
真福寺遺跡 (w6.5・ℓ3.9) 文献.560

包含層から出土。器面は内外面ともにナデ調整を行うが、下半部にヘラケズリ調整を施す。色調は灰黄色を呈す。胎土は非常に精緻である。当遺跡における平安時代の遺構として、正方位に軸をもつ溝や整然と並んだ5棟の掘立柱建物などがあげられる。ちなみに府内で出土した越州窯系青磁は、6遺跡9例を数える。

(後藤)

326

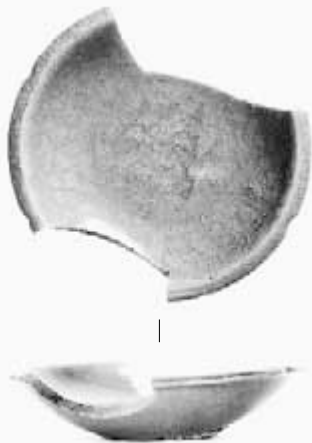


326 越州窯系青磁（碗） 平安前期
長原遺跡 (bd5.8) 文献.514

包含層から出土。青磁碗である。全面施釉で貫入なく、輪高台の畳付に砂目痕が推定5ヶ所存在する。

越州窯は浙江省紹興を中心とした地域に起こった窯で、起源は後漢の末か三国時代までさかのぼる。唐末頃から越州秘色の賞賛を得る。北宋時代に入って北方諸窯の隆盛や浙江省に興った龍泉窯の本格的な青磁の出現もあって諸窯の中に没してしまう。(畑)

327



327 高麗青磁（皿） 平安後期～鎌倉
粟生間谷遺跡 (RD9.0・BD2.7・H2.3) 文献.578

墓の副葬品。墓坑の底面に正置の状態で置き、その上に刀子、さらにその上に砥石とやや長めの刀子を並べていた。青磁皿は、内面に印花花文を施す輪花小皿で、良質な初期高麗である。意図的に打ち欠かれたのか、2ヶ所が欠けている。出土数が少ない高麗青磁のなかでも、具体的な使用状況が知れる貴重な資料である。(信田)

328 製塩土器 奈良中期
駒ヶ谷遺跡 (中央右:RD9.0・h14.3) 文献.491

井戸から出土。主に中層から破片数で約2,100点が出土した。内面に布目をもつものと、もたないものに大別でき、前者には絹織物を思わせる非常に精緻なものから粗いものまで多種類の布目が認められる。製塩土器がこれほど大量に出土する例は、都城や官衙遺跡に限られており、遺跡の性格を理解する上で非常に重要な資料である。(伊藤)



328

329 製塩土器 奈良
小島北磯遺跡 (左:RD6.4・H21.1) 文献.530

奈良時代の遺構面から出土。写真は丸底Ⅲ式であるが、この遺構面からは丸底Ⅱ式と同Ⅲ式の2種の製塩土器が出土している。検出された石敷製塩炉は18基を数えるが、それらにも一辺20~40cm大の大きな礫を使用した炉と、拳大の円礫を使用した炉の2種が認められることから、作業工程上の使い分けがなされた可能性が考えられる。(伊藤)



329

330 製塩土器 奈良
小阪合遺跡 (RD12.6・h8.4) 文献.511

破片総数1,694点のうち80%は河川から出土した。型作りを示す内面布目のものと、ナデ調整による仕上げのものに大別でき、さらに口縁形状や内外面の調整手法によって細分可能である。型作りに使われた布には粗い布と細かい布の両者を綴じ合わせた特異な例もある。駒ヶ谷遺跡と同様に遺跡の性格を理解する上で非常に重要な資料である。(伊藤)



330

331 単弁八弁蓮華文軒丸瓦 白鳳
久宝寺遺跡 (d9.6) 文献.514

当遺跡範囲の東端にあたる場所から出土。7世紀後半の軒丸瓦で原山廃寺式と呼ばれるものである。文様はやや大きめの中房と8枚の重弁から成る。原山廃寺式は中河内のいくつかの寺院跡で出土例がみられるが、すべて中小規模寺院に限られる。出土地点から当資料は遺跡東端に位置する洪川廃寺のものではなく、在地氏族が建立した他の寺院のものと考えられる。(奥村)



331

332



332 重圏文軒丸瓦 奈良
船橋遺跡 (d15.0) 文献465

自然流路から出土。聖武朝の難波宮（726～734年に造営）で多用された重圏文軒丸瓦が、当資料の祖形と考えられる。流路からの出土のため、船橋廃寺所用瓦とは特定できないが、近隣の寺院で難波宮と同時代に瓦の差し替えが行われたことを示すものである。同じ流路からこれと組み合わせる重郭文軒平瓦も出土している。（奥村）

333



333 複弁六弁蓮華文軒丸瓦 奈良
船橋遺跡 (D17.3) 文献465

No.332と同じ流路から出土。文様構成から奈良時代後半のものと考えられる。ただ、花卉と鋸歯文の割付が不均等であること、花卉と鋸歯文帯の間に圏線が無いことから、都城で用いられた軒丸瓦をモチーフに、当地の瓦工人が独自に製作したものといえる。そのためこれも周辺からの流れ込みの可能性があり、船橋廃寺の差し替え瓦と特定することはできない。（奥村）

334



334 複弁七弁蓮華文軒丸瓦 奈良
船橋遺跡 (d15.6) 文献465

出土遺構はNo.332・333と同じ流路である。奈良時代前半の軒丸瓦。複弁の花弁の外に珠文帯をめぐらせ、その外に鋸歯文を施すこの文様構成は、都城で多用されたものと同じである。文様表現は全体的に線の平坦。同様の文様構成を持つ軒丸瓦が、平城京では天平年間（730年代）の主要瓦に位置付けられているため、当資料の年代もその頃と考えられる。（奥村）

335



335 複弁十弁蓮華文軒丸瓦 奈良前半
河原城遺跡 (D16.8・ℓ14.0) 文献528

古墳後期～奈良時代に埋積した開析谷から出土。複弁形式軒丸瓦で平城宮6282A系に属する。近接して並存する丹比廃寺からも同型式軒丸瓦が出土しており、寺から隣接する谷部に土器類とともに廃棄されたものと考えられる。当遺跡の奈良時代建物群が丹比廃寺関連施設であることを示す資料である。当遺跡からは、丹比廃寺式軒平瓦も出土している。（若林邦）

336

336 単弁八弁蓮華文軒丸瓦 奈良前期
信太寺跡（観音寺跡） (d18.2・T2.7) 文献.17

包含層から出土。橿原市軽寺、和泉市坂本寺の軒丸瓦と同系。蓮弁は肉厚で丸みをおび、先端には棒状の小さな突起がみられる。

その後の発掘調査では基壇が検出され、同範と思われる瓦も出土した。瓦は百濟系式のもので、No.350に記した信太首の出自と一致する。信太寺跡ではその他に、多種類の軒丸瓦や軒平瓦も存在する。 (國乘)



337

337 単弁八弁蓮華文軒丸瓦 白鳳
太井遺跡 (d18.8・T2.0) 文献.415

中世の灌漑用の溝から出土。花卉は幾重もの重なりを表現した重弁で、外縁には凹んだ圏線（重圏文）をめぐる。この文様構成は飛鳥の山田寺の創建瓦を祖形とする。ただ重弁の文様表現が三枚の花びらによってなされていること、重圏文の表現が形骸化していることから、当資料の年代観は山田寺創建よりは下の7世紀第3四半期と考えられる。 (奥村)



338

338 複弁八弁蓮華文軒丸瓦 奈良
太井遺跡 (d15.6・T3.8) 文献.415

No.337と同じ溝から出土。中房の径が大きく、花卉はやや盛り上がった複弁で、外側に太い二重の圏線がめぐる。この文様構成の瓦は平城宮で天平勝宝から天平宝字年間（750年代）に多用された。遺跡の東に所在する黒山廃寺（7世紀後半創建）からは、この瓦と同範と思われるものが出土している。黒山廃寺の奈良時代の差し替え用瓦と考えられる。 (奥村)



339

339 単弁八弁蓮華文軒丸瓦 白鳳
小阪合遺跡 (d9.4・T4.8) 文献.511

土坑から出土。花卉は単弁で子葉は二条。讃岐国分寺建立時の僧坊所要瓦、同じく讃岐宝幢寺所要瓦と同範。瓦当範の痛み具合から讃岐の諸寺よりも後に製作されたことがわかっている。製作年代は天平宝字年間前後（760年前後）。中河内と讃岐で瓦の同範関係があることは、中河内が都（大和）と讃岐をつなぐ水運の要地だったことを想定させる。 (奥村)



340



340 細弁一六弁蓮華文軒丸瓦 平安後期～鎌倉初頭
観音寺遺跡 (d16.0・T3.5) 文献470

土坑から出土。蓮弁の先端は尖る。中房は大きく、蓮子を1+7+9と配する。外縁は断面四角形で、外側に瓦範の圧痕がみられる。二次焼成を受ける。遺跡内では、溝で区画する建物群周辺で瓦が多く出土しているが、基壇を有する建物跡などは検出されていない。

(島崎)

341



341 複弁八弁蓮華文軒丸瓦 平安後期～鎌倉初頭
観音寺遺跡 (D14.5・T3.4) 文献470

包含層から出土。中房に梵字の「キリーク」を描き、周囲には雄蕊（おしべ）帯がめぐる。梵字は断面三角形で、シャープではあるが字体は崩れ、形骸化している。蓮弁の外側には圈線がめぐる。

中房に「ア」或いは「アク」の梵字を配する複弁八弁蓮華文軒丸瓦も出土している。

(島崎)

342



342 複弁八弁蓮華文軒丸瓦 平安後期～鎌倉初頭
観音寺遺跡 (D13.6・T2.7) 文献470

井戸から出土した。文様構成はNo.341と同様であるが、中房の梵字の「キリーク」の字体が異なる。中房の周囲にめぐる雄蕊帯の幅はNo.341に比べて狭い。

遺跡内では、No.341・342・345など梵字を配する軒丸・軒平瓦が出土しているが、梵字瓦は、南河内地域で多く出土することが指摘されている。

(島崎)

343



343 単弁八弁蓮華文軒丸瓦 平安後期
亀井北遺跡 (d14.4・T2.4) 文献514

12世紀後半～13世紀のものと考えられる溝から出土した。

同範と思われるものがもう1点出土している。中房の外側に雄蕊帯が巡っている。

雄蕊帯は、平安時代後期に出現する。大阪市喜連東遺跡でも同じようなものが出土している。

(畑)

344

344 複弁八弁蓮華文軒丸瓦 平安後期
 亀井北遺跡 (d14.6・T3.0) 文献.514

No.343と同じく12世紀後半～13世紀のものと考えられる溝から出土した。中房の外側には、雄蕊帯が巡っている。

堺市日置荘遺跡、大阪市長原遺跡でも同様な瓦が出土している。

(畑)



345

345 均整唐草文軒平瓦 平安後期～鎌倉初頭
 観音寺遺跡 (W27.0・T4.3) 文献.470

瓦を多く含む土坑から出土した。中心飾りは円形の凸部上に梵字の「キリーク」を描く。外縁は断面台形を呈し、外縁に沿って、界線がみられる。外縁の平瓦部凹面側は幅広の面取りを施す。顎は曲線顎である。

他にも円形に凸線をめぐらせた中に、梵字を配する中心飾りをもつ軒平瓦が出土している。

(島崎)



346

346 均整唐草文軒平瓦 平安後期～鎌倉初頭
 観音寺遺跡 (w26.0・t5.3) 文献.470

瓦を多く含む土坑から出土した。中心飾りは蓮子文である。文様は断面三角形を呈しシャープである。外縁は断面台形。界線は下側のみにみられる。

顎は直線顎である。平瓦部が残存しており、凹面には粗い布目と糸切り痕が残る。狭端部側には釘穴がみられる。

(島崎)



347

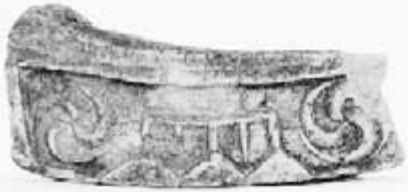
347 均整唐草文軒平瓦 平安後期～鎌倉初頭
 観音寺遺跡 (w25.0・t3.5) 文献.470

No.346と同じ土坑から出土した。中心飾りは円形に凸線をめぐらした中に蓮子文を描く。唐草文は連続して4回転する。外縁は断面台形を呈する。外縁に沿って、界線がみられる。顎は直線顎である。上外縁は欠損しているが、No.345・346に比べて瓦当厚が狭い。

(島崎)



348



348 軒平瓦 平安末期
溝咋遺跡 (w13.5・T5.0) 文献509

溝咋神社上宮跡から出土。中心と両端に巴文を配し、その間に3個の珠文と2個の剣頭文を配す。当時一般的に用いられた瓦当文様3種をミックスしたような特異な瓦である。平瓦部凸面には縄目タタキ痕、凹面には布目痕がみられる。これとセットになるとと思われる巴文軒丸瓦も出土している。上宮に葺かれていたものか。(伊藤)

349



349 文字線刻瓦 奈良
久宝寺遺跡 (ℓ5.0) 文献462

包含層から出土。凸面は縄目タタキを施し、凹面は布目の痕跡を残す平瓦である。凹面には布目の上から焼成前にヘラ状工具で線刻された文字が見られる。文字は縦に2文字認められるが、上の1文字は欠損部分が多く、判読する事が困難である。下の1文字は、数字の「四」と読むことができる。下の文字が「四」であれば年号を付した瓦の可能性が高くなる。(橋本)

350



350 信太寺刻印平瓦 奈良後期
信太寺跡(観音寺跡) (左:ℓ9.0・T2.1) 文献17

包含層から2個体出土。いずれも平瓦で、細かい布目がみられる凹面には、スタンプ状のもので信太寺と陽刻されている。字体は右肩下がりの楷書である。

現地には観音寺が存在するが、和名類聚抄の和泉郡の条に信太、また新撰姓氏録抄の和泉国諸蕃、百済の部に信太首の記述も見られる所から当地は信太首による古代寺院の創建と考えられている。(國乗)

351



351 鴟尾片 奈良
太井遺跡 (ℓ20) 文献415

出土遺構はNo.337・338と同じ溝。縦方向の粘土帯は胴部と鱗部を隔てる縦帯であろう。縦帯から斜めにはしる粘土帯は鱗部の段を表現したものか。裏側の突起は丸瓦の割り形を覆う庇と考えられる。ただ鱗部の段表現にはやや疑問が付きまとう。当資料を鴟尾と断定できれば、当地に古代の大型瓦葺建物があったという興味深い事実を想定できよう。(奥村)

352 埴 飛鳥
太井遺跡 (ℓ22.4・T5.0) 文献.415

溝から出土。表裏面に同心円文の圧痕が認められる。破片であるため、大きさは不明である。埴は、古代において宮殿や寺院などに敷設、壁または基壇積みなどに用いたことから、調査地周辺に古代寺院等の施設の存在を示唆すると考えられる。

(河端)



352

353 埴 奈良
駒ヶ谷遺跡 (ℓ17.0・T11.0) 文献.491

流路の最下層から出土。ほぼ完形に近い。平滑な面をもつ3面に火を受けた痕跡が見られた。他の遺跡の出土例と比較して厚さがあり、大型である。この埴と近似した値を示し、ほぼ同形と思われる埴が、聖武天皇が行幸した際に使用した竹原井の頓宮と推定される柏原市青谷遺跡の建物に付属する溝から出土している。

(河端)



353

354 和同開珎 奈良
田須谷古墳群 (W2.6・L2.9) 文献.493

1号墳の周溝肩部からの出土である。7枚が重なった状態の和同開珎の銅銭である。輪・郭が整然とし銭文も明瞭であるため、いわゆる「新和同」と考えられる。

出土位置や時期から、本墳に伴うものではなく混入品であると推測される。

(鹿野)



354

355 和同開珎 奈良
真福寺遺跡 (D2.4) 文献.560

自然流路から4枚重なった状態で出土。3枚は鑄着しているが、全て新和同である。紐等の痕跡は認められない。祭祀行為に用いられたものと考えられる。

近年、銭貨の生産を考古学的に実証する資料の出土が相次ぎ、財貨の交換・経済活動など流通面の研究が進みつつある。そうした中で祭祀遺物としての側面を知る資料として重要である。

(田中-)



355

356



356 和同開珎 奈良
巨摩遺跡 (D2.4) 文献.373

条里南北方向に流れる溝から出土。銭貨は50年以上も発行し続けた銅銭の新和同（始铸造708年）であるが、付近の溝からは延喜通寶（始铸造907年）8枚や元豊通寶（始铸造1078年）の出土もある。また、同溝からは土馬、付近からミニチュア土器も出土しており、祭祀に関連する行為があったことが考えられる。

(田中一)

357

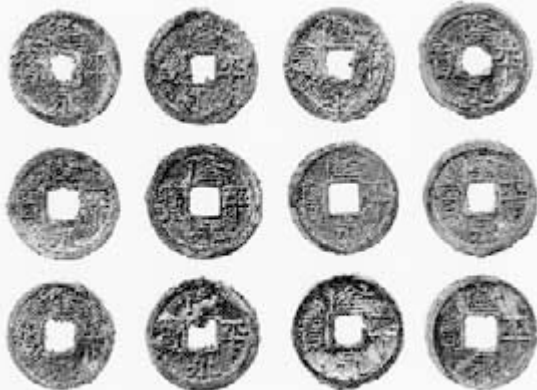


357 皇朝銭6種 奈良～平安
小阪合遺跡 (a:D2.1,b:D2.0,c:D1.9) 文献.511

奈良～平安時代前期の河川・落込みから出土。富本銭に始まる律令政府铸造の和同開珎61・隆平永寶2・富壽神寶2・承和昌寶1・長年大寶1・饒益神寶2・萬年通寶1の合計70枚で、一遺跡出土数では摂河泉地域で五指に入る。大半が未使用かそれに近く和同開珎は縉状態で28枚出土。銭貨は政治的威信財としての性格をも持ったものであろう。

(田中一)

358



358 隆平永寶 平安初期
大坂城跡 (平均:D2.5・T1.6) 文献.402

墓から出土。銭貨は計29枚あり、判読された22枚はすべて隆平永寶である。木製の円形容器に納まった状態で出土した。10枚ずつ重ねて2本の柱状にした状態で埋納されたと推測されている。この隆平永寶は皇朝十二銭の一つで初铸年は延暦十五年（796）である。ほかに蔓草鳳麟鏡1枚、水晶製数珠玉1個が出土している。

(後川)

359



359 延喜通寶 平安
太井遺跡 (左:D1.85) 文献.415

鉾淳の集積とともに溝から3点出土。堆積状況から水が流れていたことが確認されており、上流域に金属生産に関連する生産遺構の存在が示唆されている。延喜通寶が铸造されていたか、溶かされ別の物にされていたかは不明である。延喜通寶は皇朝十二銭の一つで延喜七年（907）11月に初铸、天徳二年（958）に乾元大宝が初铸されるまで流通。

(中村ま)

360 鉄釘 飛鳥
田須谷古墳群 (右:w1.0・ℓ3.7) 文献.493

いずれも1号墳の周溝南西コーナーからの出土。小振りの釘で先端まで残るものはない。左と中央のものは、先端を叩いて平らに伸ばし、それを折り曲げ頭を作り出している(折頭の角釘)。右のものは楕円形の頭を持ち、作り方が他の2点と異なる(頭巻の角釘)。いずれの釘にも木質の痕跡は見られないため、棺材に使用されたものではなさそうである。(鹿野)



360

361 棒状留金具 平安前期
船橋遺跡 (W1.3・L2.7) 文献.465

中世までの遺物を含む洪水砂の最下層より出土。青銅の一体成型であることから、鋳造品と考えられる。平面形は隅丸の長方形を呈し、断面形は表面側に稜を有する三角形となる。その形状や大きさから刀剣類の鞘あるいは帯取や革先に付随する金具と考えられる。類品には正倉院の刀剣類に付属する青銅製品や、京都市山科区西野山古墓出土の金製品がある。(寺川)



361

362 銅鈴 平安
池島・福万寺遺跡 (MD2.3・H2.8) 文献.473

水田跡から出土。出土層位には地震による変形構造が顕著に認められ、埋没後に移動した可能性もある。銅鈴を水田畦畔に埋納した事例は、当遺跡の平安時代水田跡で2例確認されており、この事例も意図的に埋納された可能性が考えられる。水田でおこなわれた祭祀の実態や、水田開発に関わった集団の性格を考える上でも興味深い資料である。(井上)



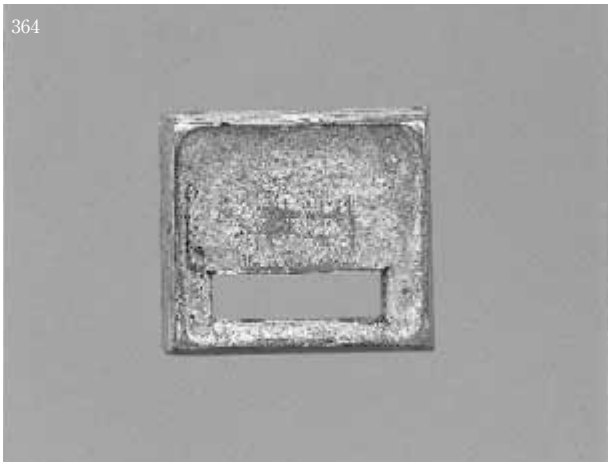
362

363 錘 奈良~平安
友井東遺跡 (MD3.7・h2.7) 文献.474

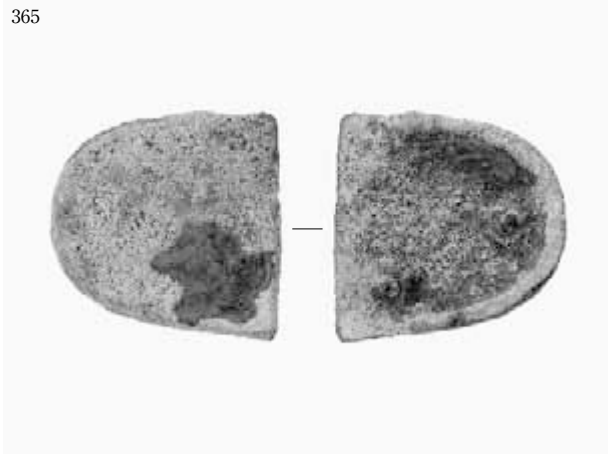
中世から近世にかけての包含層から出土。青銅製で重さ111.0gを量る。先端には吊下用の突出部が残存する。下方は円筒形、上方は半球形で肋状の加工を施し、八稜形に整えられており、形態的には古代にまで遡る特徴を備える。類品出土遺跡は官衛的性格を持つ場合が多いと指摘され、「令制」で様を配付したとの記述に関連する具体的候補との見方もある。(三好)



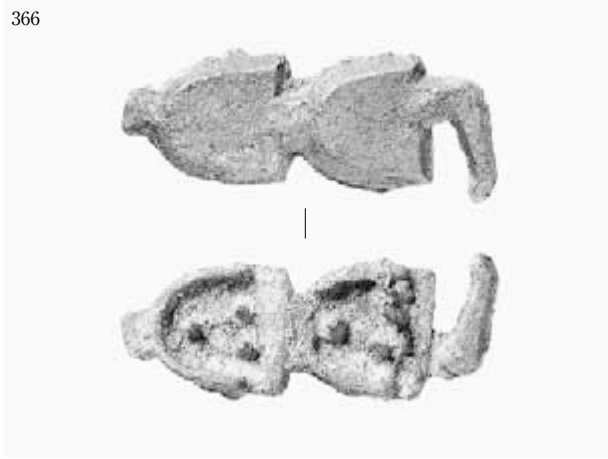
363



364 巡方 平安前期
 小阪合遺跡 (w2.5・T0.8) 文献511
 河川から出土した銅製帯金具。残りがよく赤銅色を呈する。鑄造された表金具と四隅の鉤足・鉤留された裏金具とからなる。表金具の表面四周には稜が巡り、中央が緩やかな凹面をなす。透かし孔付近に黒漆が残る。他に非常に残りの良い多量の土器や皇朝銭などが伴出しており、近くに官人層に関する何らかの施設が予想される。(金光)



365 鉈尾 奈良～平安
 巨摩遺跡 (w2・L2) 文献431
 古墳後期以降から中～近世にかけて形成された包含層より出土した帯金具の銅製の鉈尾である。本体の厚さは1mmで裏面には3ヶ所の鉤足を有し、曲縁にそって約1.5mmの縁取りの段を作り出している。段の高さから帯の厚さ2mmと推定でき、帯の幅は20mmであろう。調査担当者はこの帯を締めていた官人の位階は少初位と比定している。(村上年)



366 鉈尾未製品 奈良～平安
 船橋遺跡 (W2.1・L5.9) 文献465
 自然流路から出土。銅製、連鑄式で鑄放し状態である、連結部で切断した痕跡があり、もとは3連以上あったことが窺える、平面形は半楕円形で弧線側が先端となる、裏面は凹面をなし革帯に装着するための3つの突起が鑄出されている。
 近隣に工房があるのは間違いないであろう。(寺川)



367 海獣葡萄鏡 奈良
 大坂城跡 (D13.3・T0.2) 文献402
 8世紀中頃の火葬墓に副葬されたものであり、蔵骨器の北外側に鏡面を上にした状態で出土した。鏡の下に板材が遺存しており、鏡箱に納められていた可能性が高い。鏡背文は、鈕に伏臥した龍形、内区は4体の禽獣と2羽の孔雀、外区には8羽の小鳥と8匹の昆虫を配する。上町台地北端の高台に葬られた人物像は難波宮に関わった上級官人と推定されよう。(清水)

368

368 獣脚円面硯 奈良後期
大坂城跡 (rd16.8・h4.1) 文献.402

南北方向の溝から出土。硯面部は摩滅しており、わずかに墨痕が残る。獣脚硯は当時製作された硯の一つである。硯は筆や木簡、紙などともに公務、信仰生活になくなくてはならないものだった。当遺跡では、この獣脚硯以外にも須恵器の杯蓋を転用した硯も出土した。

(後川)



369

369 中空円面硯 奈良前半
河原城遺跡 (RD10.8・ℓ4.9) 文献.528

奈良時代建物群内の溝から出土。内部が中空の小形の須恵器円面硯で、把手・底部が欠落している。把手は、上方に屈曲する棒状形態であったと類推できる。携帯用であろうか。このような硯の出土からは、官衙や寺院といった遺跡の性格が考えられる。当遺跡建物群は丹比廃寺に近接しており、寺域内施設としての機能が想定される。

(若林邦)



370

370 蹄脚円面硯 奈良前半
河原城遺跡 (md28.4・ℓ4.2) 文献.528

古墳後期～奈良時代に埋積した開析谷から出土。脚台部分が獣蹄様に裝飾された大型品である。他遺跡の例では宮殿・官衙からの出土が多く、他の円面硯とは異なる性格が想定されている。当遺跡は奈良時代丹比廃寺の寺域内と考えられるが、立地が丹比道沿いで古代寺院の密集する要衝地だったことも蹄脚円面硯が出土する所以であろう。

(若林邦)



371

371 円面硯 奈良前期
駒ヶ谷遺跡 (rd8.2・h1.2) 文献.491

弥生時代から古代にかけて継続して存在した流路中より、No.372・373とともに出土した。

硯は平面形態の差異によって風字硯・円面硯・円形硯・二面硯などに分類されており、本資料はこの内の円面硯にあたる。脚部形態は欠損しており不明である。硯面は滑らかなためかなり使用されていたと考えられる。

(中村ま)



372



372 円面硯 奈良前期
駒ヶ谷遺跡 (rd5.8・H4.8) 文献491

円面硯は硯面を支える台脚の形態や特殊な全形によって透脚・低脚・無脚・蹄脚・獣脚などに分けることができる。

本資料は透脚の円面硯で長方形の透かしが入る。台脚の透かしは縦長の長方形透かしが多いが、他に矩形・半円・十字・鍵形などがあり、時代が下がるにつれて透かしの数が少なくなる。(中村ま)

373



373 円面硯 奈良前期
駒ヶ谷遺跡 (rd18.2・h6.2) 文献491

透脚の円面硯で、十字と長方形の透かしが入る。

駒ヶ谷遺跡は大阪と奈良とを結ぶ古代の官道である丹比道を望む丘陵上に立地し、倉庫群と考えられる総柱の掘立柱建物が検出されており、一般の集落ではなく公的な施設の可能性が考えられている。また、No. 371～373の硯の出土により識字層の存在が示唆されている。(中村ま)

374



374 圈脚円面硯 奈良
小阪合遺跡 (rd12.2・H7.4) 文献511

奈良～平安期の遺物を含む包含層から出土。脚部には推定10ヶ所の透かし穴があり、縦長の台形を呈している。透かし孔の間にはヘラによる線刻が2種施されており、縦方向の直線を3条引いたものと、縦方向に引かれた2条の直線の間「ハ」の字を重ねたような綾杉状の文様を施したものが交互に用いられる。陸部は著しく研磨されている。(橋本)

375



375 風字硯 平安
小阪合遺跡 (H5.2) 文献511

井戸から出土した黒色土器B類の硯。口縁端部内面に1条の沈線を巡らす。内面にはヘラミガキ調整、脚部は断面八角形の面取りを施す。胎土は緻密で丁寧な作りである。山科区西野山古墓や大阪市中央区釣鐘町1丁目の調査では、黒色土器の水滴とセットで出土している。他に類例が少なく、斎宮・長岡京・平安京などから数点出土している。(金光)

376 土馬 飛鳥
難波宮跡 (w5.2・ℓ12.6・t6.8) 文献.512

難波宮北側の谷地形の底から出土。他にも祭祀的関連遺物や木簡が出土した。首から体部までの残存である。胎土は砂粒をやや含む精良なもので明灰色を呈する。全体的に丁寧に調整し、鬣・前足の部分は粘土を継ぎ足しなでつける。なお、脚の断面に串状のものを刺したような孔があく。大型品で、宮都などでよく出土する土馬とは異なるタイプである。(小野^重)



376

377 土馬 飛鳥～奈良
船橋遺跡 (ℓ15.0) 文献.465

弥生～中世までの流路から出土。奈良時代の土馬が10～20cmなのに対し、本資料は頭～頸部片だけで約15cmにも及ぶ大型品である。長く伸びた頸部、前方を向いた両目、馬具などが写實的に表現されている。奈良時代に見られる土馬とは違って定型化以前の土馬と推定され、7世紀代に使用された可能性が想定されている。(中村^ま)



377

378 土馬 古代か
吹田操車場遺跡 (右頭部: ℓ7.1) 文献.492

古代から中世の遺物包含層出土。左は頭部のみ、右は頭部と頸部上半のみ残存。ともに淡褐色で土師質焼成。右は目を管条工具、鼻孔は棒状工具で刺突して表現、左は目と鼻孔を棒条工具で刺突し、鬣は頸部の上半をつまみあげて表現している。いずれも馬具の表現はない。(阪田)



378

379 土馬 奈良～平安
宿久庄西遺跡 (ℓ8.2・t2.8) 文献.580

包含層から出土。土師質で、胎土は精良で砂粒・くさり礫を多く含む。頭部のみ出土で全体に磨耗しているものの、馬具をつけた痕跡は見られない。耳部は欠損し、鼻部は先を左右に肥厚させ串状工具で刺突する。まぶたのつくりや、頬・鼻梁の張りの立体感など非常に写實的に表現されており、他に類例が見られない。(小野^重)



379

380



380 須恵質井戸枠 奈良前半
河原城遺跡 (w20・ℓ11) 文献528

中世の井戸から出土したものだが、類似品の例から奈良時代の所産と思われる。L字形に端部が肥厚する形態の須恵質大型品で、内外面に当て具痕や叩き目、端面に布圧痕がみられる。同一品が平城京で組み合わせ式の井戸枠に使用されている。本品も同一機能であろうが、当遺跡では1片のみの出土で、遺跡内で井戸枠として使用されたとは考えにくい。(若林邦)

381



381 鋳型(梵鐘) 平安後期
徳大寺遺跡 (h10.0・w16.2) 文献505

平安時代後期と考えられる梵鐘鑄造土坑内から出土。上左の鋳型は撞座部分と考えられ、凹線の中に推定直径7cmの4弁ないし8弁の花文が見られる。他は、いずれも凹線が刻まれている。平安時代後期は現存する梵鐘および鑄造土坑とも資料のほとんど見られない時期であり、本例はその時期の貴重な資料と考えられる。(廣瀬)

382



382 年号線刻灯明台 平安末
観音寺遺跡 (d17.0・T2.5~3.5) 文献470

溝状の土坑出土。2片は同一個体と思われる瓦質土製品の灯明台受け皿。各々片面に「西城房」「應保」(1161~1163年)と線刻。高山寺聖教類紙背文書の『佐伯景弘持経者卷数注進状』に「西城房 證西 十一部 同國 丹北郡松原法原寺」の記述があり、奥書は承安二年(1172)である。古文書内容と当遺跡の関係を示唆する貴重な資料である。(村上富)

383



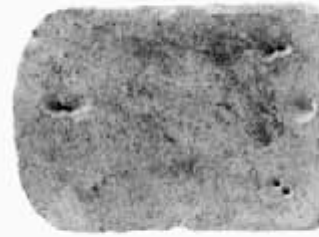
383 文字線刻灯明台 平安末
観音寺遺跡 (d16.0・T2.6) 文献470

土坑より出土。中央に一辺2.3cmの方形の孔を穿った円盤状を呈する灯明台の片面に「寺」の線刻が見られる瓦質土製品である。裏面に孔からのびる幅4mm、現存長1cmの溝がある。表面は表裏・側面ともに丁寧にナデており平滑である。別個体の灯明台である「西城房」「應保」と関連すると思われる古文書記載の法原寺との関係が考えられる。(村上富)

384

384 鉈尾 平安前期
長原遺跡 (W5.75・L4.2・T0.65) 文献.514

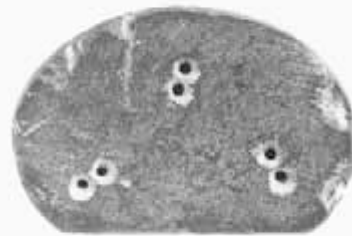
平安時代～中世の建物関連遺構から出土した。革帯の先端に綴じつけるための2孔一対の小孔を裏面の3方にあけている。一対の小孔は潜り孔である。さらに裏面と側面を貫通する小孔を一方にあけている。材質は砂岩である。石帯には玉石帯、瑪瑙帯のような五位以上のものと、六位以下の雑石腰帯の区別があり、当遺物は後者に取り付けたものと思われる。(畑)



385

385 丸軛 平安前期
長原遺跡 (W4.3・L2.8・T0.8) 文献.514

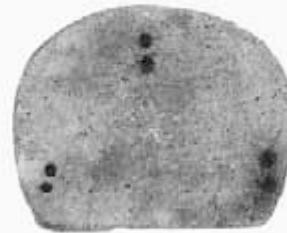
平安時代～中世の建物関連遺構から出土した。楕円の下辺が直線を呈する。裏面を除き各面とも光沢がある。裏面周辺を面取りし、2孔一対の潜り孔を3方にあけている。石材は頁岩で雑石腰帯に取り付けたものと思われるが、黒漆を塗った銅製の銚帯である烏油腰帯を意識したものと思われる。重さ16.5 gを量る。(畑)



386

386 丸軛 平安前期
大坂城跡 (W3.3・L2.7) 文献.593

後世の包含層から出土したものである。長楕円の一辺を直線に落としたもので、裏面の3ヶ所に潜り孔を設けており、帯にとりつけるようになっている。奈良時代には、身分によって材質に制限が設けられていた。石製品であるため、平安時代以降に使用されるようになった雑石腰帯と考えられる。出土地点付近では、平安時代の集落はみつかっていない。(中村淳)

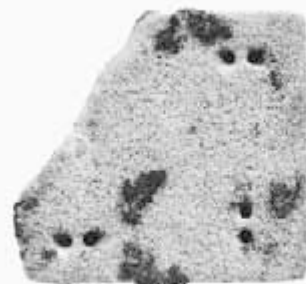


387

387 巡方 平安前期
総持寺遺跡 (L3.65・T0.6) 文献.466

中世の溝から出土した。この溝は古代の溝を切っており、本来はこれに埋まっていた遺物と考えられる。当製品は一部欠損しているが2孔一対の潜り孔を4ヶ所に持つと考えられる。

材質は斑花崗岩であり、雑石腰帯の類である。表面に見える黒褐色で胡麻状の粒は黒雲母の結晶であり、黒漆ではない。(岡本圭)





388 石棺材 飛鳥
田須谷古墳群 (左: ℓ 30・T20) 文献.493

1号墳の主体部から出土。左は石棺中最大の破片であり、かろうじて内面のコーナー部分が遺存している。赤色顔料が塗布される内面は、いずれも非常に平滑に加工されているが、外面には幅2.5cm前後のノミ痕跡が観察される。当該石棺材の遺存する面は、徳楽山古墳の石棺を参考にすれば、その側面に当たると推定される。(河端)



389 凝灰岩切石 奈良
駒ヶ谷遺跡 (W29・T18) 文献.491

井戸から出土。4面が残存しているうちの1面は、緩やかな弧を描いており、断面形は蒲鉾形をなしている。工具痕は弧を描く面には明瞭であるが、水平な面にはほとんど残存していない。3面が焼成を受けており、煤が多量に付着している。全体に丁寧に加工されていることから、構築物の一部で人の目に触れやすい部材であった可能性が高い。(河端)



390 凝灰岩未製品 古代
椋谷石切場遺跡 (w29.0・t14.2) 文献.534

平安時代もしくはそれ以前の採石坑から出土。両端が欠損しているため本来の形状は不明であるが、一面に明瞭な段を有する未製品である。この採石坑では主として長方形の石材を採石しており、伴出遺物の年代が五輪塔出現以前であることから、寺院等の建築部材である可能性が高く、本資料もその形状から建物基壇の地覆石の可能性が考えられる。(中村ま)



391 温石 平安後期
粟生間谷遺跡 (W7.8・L12.2・T2.2) 文献.578

近世の耕作土層から出土した。縦長のこぶ状把手のつく滑石製石鍋の破片で、その形式から平安時代のものと考えられる。把手の上部には切り込みが見られ、把手を切り離そうとしたことが想定される。穿孔もあることから石鍋をリサイクルした温石、またはその未製品であると思われる。石鍋のリサイクルの過程を具体的に知る事ができる貴重な資料である。(信田)

392 祭祀関連の木製品 飛鳥
難波宮跡 (左: W2.5・ℓ23.5) 文献.512

難波宮跡北西で検出した谷部から出土。形状が分かるものとして、齊串・男根状木製品・マリオネット式側面全身人形代・独楽・横櫛がある。谷から祭祀的色彩の濃い遺物が出土し、廃棄物を投棄するような場所であったことから、調査地付近を前期難波宮の宮域北限と推定する見解と呼応する。

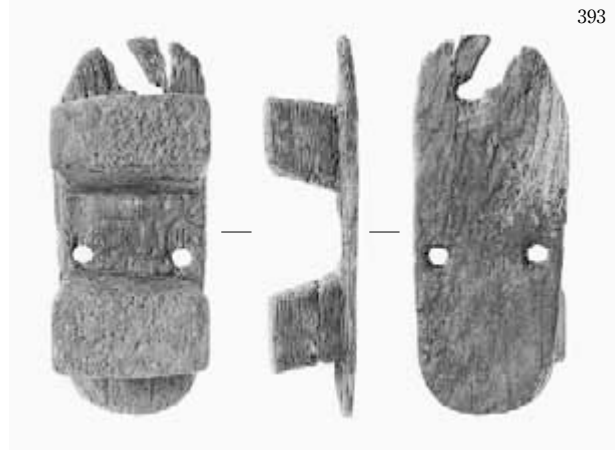
(河端)



393 下駄 飛鳥
尺度遺跡 (W6.7・L16.3) 文献.504

流路下層の砂層から出土。流路の出土遺物は6世紀を中心に、下限が飛鳥時代である。台の平面形が小判形をしており、台と歯を一木から作り出す連歯下駄である。鼻緒の前孔が内側によっていることや、歯が削りだして「ハ」の字状の裾広がりであることから、古い段階のものと推定される。小柄な下駄であり、4、5歳の幼児が履いた可能性がある。

(河端)



394 柄杓 奈良
駒ヶ谷遺跡 (D14・H10) 文献.491

井戸から出土。全面に柿渋を塗布した柄杓であり、杓の中に柄が残存している。柄は杓の側板に突き刺すような形で残存しており、特別に留め具を用いてはいないが、持ち手側ほど径が大きくなり、抜けにくい構造になっている。側板は桜の樹皮で二重に綴じられ、木釘を5ヶ所等間隔に打つことで、底板に留められている。

(河端)



395 横櫛 平安前期
総持寺遺跡 (w7.0・L3.8) 文献.466

井戸から出土した。樹種はイスノキ。

当時の櫛はツゲやイスノキなど硬くて丈夫な材質のものが比較的良く使われた。

平安時代以降女性の髪型が結髪から垂髪になり、櫛は装飾用の挿櫛から実用的な解櫛へと変化する。

当品は簡素で実用的な作りの横櫛であり、解櫛の古い資料といえるであろう。

(岡本圭)



396



396 人形 平安中期
玉櫛遺跡 (W10.4・ℓ63.0・T0.5) 文献589

10世紀前半から中頃の流路の左岸肩部付近から出土。
頭部長12.5cm、体部長50.5cmを測る。下方は欠損するが大形品であり、復原すると1m以上になるか。等身大の人形として水辺の祭祀の一環で祓などに使われた可能性がある。なお顔などの墨書表現はみられない。

(鈴木)

397



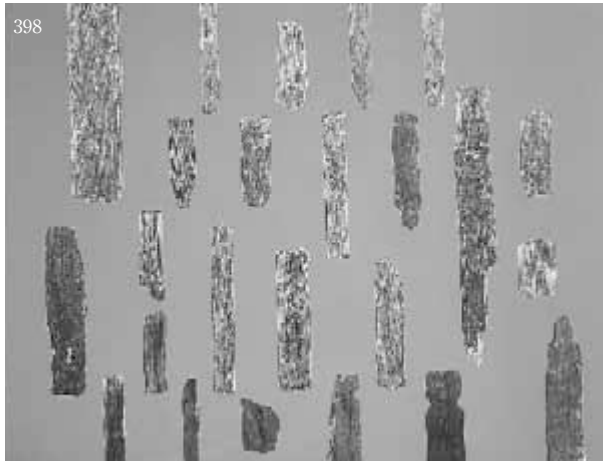
397 絵馬 飛鳥
難波宮跡 (w11.5・ℓ5.7・T0.5) 文献512

難波宮跡北西で検出した谷部から出土。全体の約1/4が残る。後肢のほかに胴部、尻尾、陰囊が墨書で表現される。現在のところ国内最古の絵馬。

平城京二条大路S D5300出土絵馬と意匠が酷似し、雌雄一对の絵馬であった可能性もあり重要である。

(江浦)

398



398 難波宮跡16層出土木簡 飛鳥
難波宮跡 (左端:W3.0・L12.5・T0.4) 文献512

難波宮跡北西で検出した谷部の16層と呼ばれる古代遺物包含層から出土した33点の木簡。

食品の付札、人名を記したもの、宛先の可能性がある「王母前」と書かれた木簡が出土。648年の紀年銘木簡(No.399)を含む上に、前期難波宮跡段階のまとまった形での木簡群として重要な位置を占める。

(江浦)

399



399 難波宮跡11号木簡 飛鳥
難波宮跡 (W2.7・L20.2) 文献512

難波宮跡北西の谷部より出土。右側面の上端以外は欠損するが、文字の配列から本来は大型品であったと思われる。墨書は表裏にあり、表面には「戊申年」の干支表記がある。これは伴出した土器から西暦648年にあたと推定され、孝徳朝の長柄豊碕宮との関連が注目される。樹種はヒノキ。

(黒須)

400

400 難波宮跡 1 号木簡 飛鳥
難波宮跡 (ℓ10.4) 文献.512

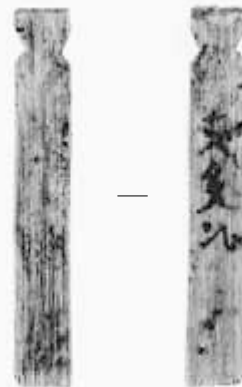
難波宮跡北西部から出土した木簡群の1枚。上部を欠損するが、「秦人凡国評」の5文字が残存する。「秦人」はウジ名、「凡国評」は地名と解釈しうる。文末にウジ名、地名の順に表記する例は、柏原市の高井田廃寺出土刻字瓦に認められる。本木簡は孝徳朝のものと考えられるところから、「日本書紀」大化二年(646)の建郡(評)記事を支持する史料といえる。(福岡)



401

401 難波宮跡 2 号木簡 飛鳥
難波宮跡 (W1.7・L10.7) 文献.512

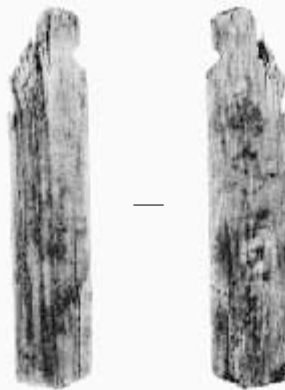
谷部から出土。上端の両側に切り込みを入れており、表裏両面からの平面ケズリによる整形を行い、上端の断面は山形を呈する。付札木簡と考えられている。表面に「支多比」と記されている。「支多比」は「きたひ」と読むことができ、腊(きたひ)(まるごと乾かした肉・ほじし)の可能性が考えられる。樹種はヒノキ。(中村ま)



402

402 難波宮跡 4 号木簡 飛鳥
難波宮跡 (W2.0・L9.6) 文献.512

谷部から出土。右肩上辺を欠損するが、ほぼ完存する。上端は圭頭に整形、切り込みは斜下方向から刀子を入れた後、斜上方向から抉り取る手法をとる。墨書は表面のみであり、裏面はやや調整が雑である。文字は「委尔部栗□」もしくは「委尔部西木□」と読める。「ワニ部○○」と解釈すれば、人名と推測される。樹種はヒノキ。(黒須)



403

403 難波宮跡 19 号木簡 飛鳥
難波宮跡 (W1.9・ℓ12.8) 文献.512

谷部から出土。直接的には接合しない2片からなる刻書木簡である。上端は表裏両側から平面ケズリで方頭に整形され山形を呈し、下端は左右両側から側面ケズリで方頭に整形している。釈文は表「□ア在□□・・□」裏「□止你乃止・・□□」であるが、全体としては意味をとりにくい状況にある。樹種はヒノキ。(中村ま)



404



404 墨書土器 奈良
駒ヶ谷遺跡 (RD18.0・H2.2) 文献.491

古墳時代から中世にかけて存続した流路の下層から出土した土師器の杯である。底部外面中央に「古厨」と墨書する。「古」の意味は不明だが、「厨」は官衙施設を示す。しかしながら古市郡に隣接する安宿郡の竹内街道沿いに立地することを考えると、「古厨」とは古市郡衙の厨の略号であろうか。

(鈴木)

405



405 墨書土器 平安前期
駒ヶ谷遺跡 (bd10.4・h2.0) 文献.491

古墳時代から中世にかけて存続した流路の下層から出土した。9世紀の有高台の土師器碗である。土器は底部のみ残存し、内面に暗文は見られない。底部外面中央に「大林宅」と墨書する。「大林」は個人名と考えられるが、『新撰姓氏録』にその姓は見られず、在地の有力氏族であろうか。「宅」は個人の邸宅を示すもので、9世紀以降多くみられる。

(鈴木)

406



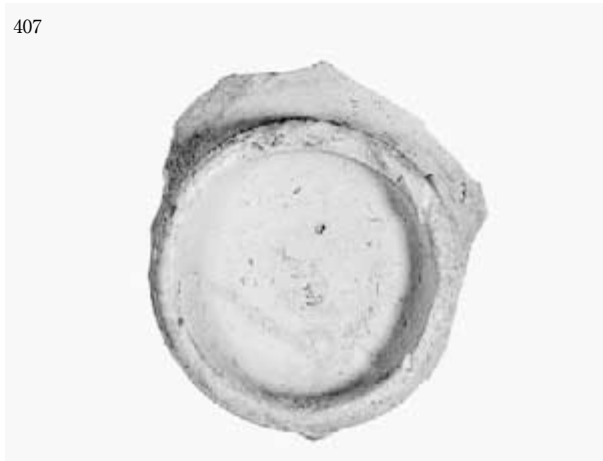
406 墨書土器 平安前期
総持寺遺跡 (RD14.0・H3.8) 文献.466

井戸から出土した土師器杯である。外面底部中央に「周防」と墨書されている。口縁部は横ナデされ、内面は丁寧にハケが施される。口縁部の一部には煤が付着する。9世紀中頃の在地産の形態を呈する。

「周防」は山口県の旧国名の一つであるが、百人一首で有名な歌人「周防内侍」のように人名とも考えられる。個人専用の灯明具の杯であろうか。

(岡本圭)

407



407 墨書土器(灰釉陶器) 平安中期
吹田操車場遺跡 (BD4.5) 文献.492

埋没浅谷に堆積した粘土を基盤とした耕作土(古代・中世遺物包含層)から出土。

灰釉陶器碗底部に行書体で「令」1字のみを墨書。土器は底部と外反気味の高台部のみ残存。底部の内外面以外には灰釉がかかる。

府内で、同時期の「令」墨書では初見。当地域の開発に識字層の関与を示す資料。

(阪田)

408 墨書土器 平安前期
郡戸遺跡 (BD8.0・h2.4) 文献.582

東西方向に並列する掘立柱建物群の東端で検出された井戸から出土。須恵器・土師器・平瓦などとともに、井戸の廃絶時に廃棄された。須恵器の杯身で、底部外面上左に「甲」の墨書がある。当遺跡は古くから丹比郡衙の推定地として指摘されていることや、近くから円面硯が出土したことなどから、当地の開発に携わった公的な施設の可能性が考えられる。(後藤)



408

409 墨書土器群 奈良～平安
小阪合遺跡 (中央:RD15.4・H4.2) 文献.511

8世紀～10世紀にかけての自然河川・井戸・土坑等から、100点近い墨書土器が出土した。これらは、須恵器・土師器・黒色土器・灰釉陶器の杯・椀・皿に文字あるいは記号を記し、土師器甕には人面を描いた。

墨書土器の出土量は府内有数であるが、地方官衙などの公的施設を示すような資料はなかった。

(駒井)



409

410 墨書土器 平安
小阪合遺跡 (RD12.2・H3.6) 文献.511

10世紀後半の井戸から出土。粗雑な高台を有する土師器椀の底部外面に「長門」を墨書する。この井戸から、「長門」と墨書した無高台の土師器椀と、「大」を記した黒色土器A類椀と土師器椀が出土した。いずれも完形品あるいはそれに近い状態で出土していることから、何らかの祭祀行為に伴う可能性がある。

(駒井)



410

411 墨書土器 平安
小阪合遺跡 (左:ℓ8.6,右:ℓ5.4) 文献.511

9世紀後半の井戸から出土。左は黒色土器A類椀、右は土師器椀の底部外面に、「長」を墨書する。双方の筆跡は微妙に異なり、No.410とは全く異なる。

No.410の「長門」に通じるものか、あるいは吉祥句を示すものか定かではない。

(駒井)



411

412



412 墨書土器 平安
小阪合遺跡 (RD13.0・H3.7) 文献511

No.410と同じ10世紀後半の井戸からの出土。痕跡的な高台の付く土師器碗の体部外面に、「大」を横位に墨書する。「大」と墨書した土器は他に2点出土したが、筆跡は全て異なり、体部に墨書されたものは本例だけである。また、刻書の「大」が見られる土器も1点ある。

(駒井)

413



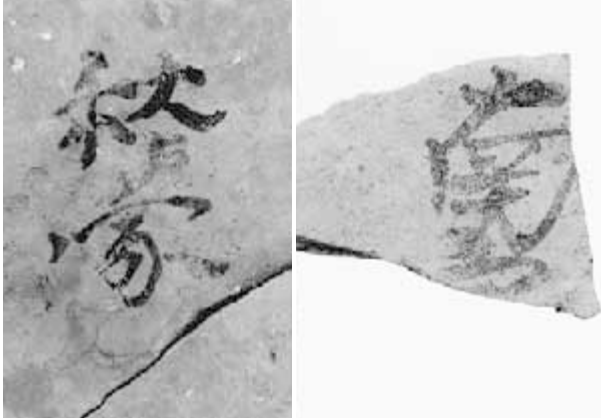
413 墨書土器 奈良
小阪合遺跡 (RD12.7・H3.8) 文献511

奈良～平安時代の自然河川から出土した。高台を持つ須恵器杯の底部外面に、「大川」と墨書するが、文字はややにじむ。

No.412のように、「大」を墨書するものは数点あるが、「大川」はこの1点のみである。

(駒井)

414



414 墨書土器 奈良
小阪合遺跡 (左:RD14.5・H3.5) 文献511

奈良～平安時代の自然河川から出土。左は有高台の土師器皿の底部外面に「秋家」を、右は土師器杯あるいは皿の底部外面片に「南家カ」を墨書する。このほかにも自然河川あるいは井戸から、「家」を記した土器片が出土した。これらは、複数の名称を持った施設が存在したことを示している。

(駒井)

415



415 墨書土器 奈良～平安
小阪合遺跡 (左:RD12.8・H3.8,右:RD20.4・H6.1) 文献511

奈良～平安時代の自然河川から出土。左は無高台の土師器碗の底部外面に「根の」を、右は有高台の須恵器杯の底部外面に「□佐〔依カ〕女」をそれぞれ墨書する。ともに個人名を記したもので、「根の」ののは、後世の花押に類するものという。

(駒井)

416 墨書土器 奈良～平安
小阪合遺跡 (左:ℓ6.0,右:ℓ5.8) 文献.511

奈良～平安時代の自然河川から出土。左は土師器の底部外面に「義」を、右は土師器の底部外面に「方吉」をそれぞれ墨書する。

これらは一般的に吉祥句と呼ばれるもので、ほかにも「福」「祐」「榮」といった吉祥句を記した土器片が出土した。

(駒井)



417 墨書土器 平安
小阪合遺跡 (RD15.4・H4.2) 文献.511

9世紀後半の井戸から出土した黒色土器A類椀で、唯一の完形品である。底部外面に「子龍カ」を墨書する。ただ「龍」と見なすには、偏のくずし方に問題が残る。

このほかに、No.375の黒色土器B類の風字硯、No.411の墨書土器が出土した。

(駒井)



418 墨書土器 奈良
小阪合遺跡 (RD13.6・H4.6) 文献.511

奈良～平安時代の自然河川から出土した。須恵器杯である。底部外面に「++」と墨書するが、筆使いからみると文字というよりは記号である可能性が高い。

他にも「+」一文字のみ墨書した土器片が数点見られるが、これらも同様に、文字ではなく記号であると考えられる。

(鈴木)



419 墨書土器・人面墨書土器 奈良
大坂城跡 (左:w7.6・ℓ7.2,右:w7.6・ℓ5.8) 文献.593

どちらも開析谷に堆積する奈良～中世の包含層から出土。左は須恵器杯蓋で、扁平な擬宝珠様つまみの上面に墨書がみられ、「服部」と読める。右は土師器甕の体部片である。柔らかな筆触で描かれた墨書がみられる。人面の一部を表現したものと考えられる。これらの資料は難波宮に関連のある集落の存在を示唆する。

(後藤)



420



420 人面墨書土器 奈良前期
西大井遺跡 (RD12.6・h9.6) 文献406

奈良時代の自然河川から出土。甕体部の四方向に目と眉がそれぞれ表現されていた。人面墨書土器は穢れを祓ったり、避邪等の思想にかかわる祭祀行為に使用したとされ、悪い霊や身の中の穢れを土器の中にとじこめ川や溝に流してそれを祓うのに使用したと考えられている。都城や官衙などから多く出土し、土馬や人形などととも重要な祭祀具であった。(後川)

421



421 人面墨書土器 奈良末期
小阪合遺跡 (RD13.5・H9.6) 文献511

奈良時代末期の木組井戸からほぼ完形の杯や皿や転用硯、製塩土器など多くの遺物とともに出土した、完形の土師器の甕である。

体部には黒斑が見られ、人面を墨書する。鼻・口はなく、目のみを描く。3面分を表現するものの、目は5つしかみられない。

(鈴木)

422



422 人面墨書土器 奈良～平安
小阪合遺跡 (ℓ5.8) 文献511

奈良～平安時代の自然河川から出土した、多くの墨書土器片・人面墨書土器片の中の1点である。土師器の甕で頸部直下に人面を描く。小片であるが、繋がった左右の眉と筋のおった鼻、切れ長の目、にこやかな口元を滑らかな筆つかいでコンパクトに表現し、その整った目鼻立ちは貴人を彷彿とさせる。

(鈴木)

423



423 人面墨書土器 平安初頭
大和川今池遺跡 (rd15.7・h9.2) 文献588

平安時代初頭の河川から出土。甕の頸部に横一条と体部外面に丸を墨書で描いている。眉と目であろうか。人面墨書土器は罪穢を氣息とともに土器に封じ込めて水に流す祭祀具であり、宮都や官衙を中心に分布する。当地は「難波の大道」周辺地域にあたり、都文化に親しんだ人々の居住域や公的施設の存在が想起される。

(松尾実)

424 中世土器一括 平安末～鎌倉
大和川今池遺跡 (中央鉢:RD29.5・H12.2) 文献.529

井戸の上層から出土。須恵質こね鉢を中心として瓦器碗等が重なって出土した。瓦器碗は完形に近い個体が15点出土し、その内1点は被熱で外面が炭化していた。脚を有する土師器皿は5点出土し、内4点は白色を呈して、精良な胎土を用いる。屋敷地の南側で確認したこの資料は当時の祭祀形態を知る上で貴重な資料である。(後川)



424

425 木棺墓副葬品 鎌倉
余部遺跡 (上右:RD15.6・H4.8) 文献.413

長方形の土坑内に長さ約1.75 mの組合式木棺が設置されており、棺内より瓦器碗・瓦器皿・砥石が出土した。人骨は遺存していなかったが、残存脂肪の分析結果から若年男性が埋葬されたと考えられる。周辺では方形の区画溝や建物、井戸等を検出しており、大量の鑄造関連遺物も出土している。当時の河内鑄物師の生活や風習を考える上で貴重な資料である。(亀井)



425

426 中世土器一括(瓦器・土師器・陶器) 鎌倉後期
玉櫛遺跡 (摺鉢:rd30.4・h12.7) 文献.467

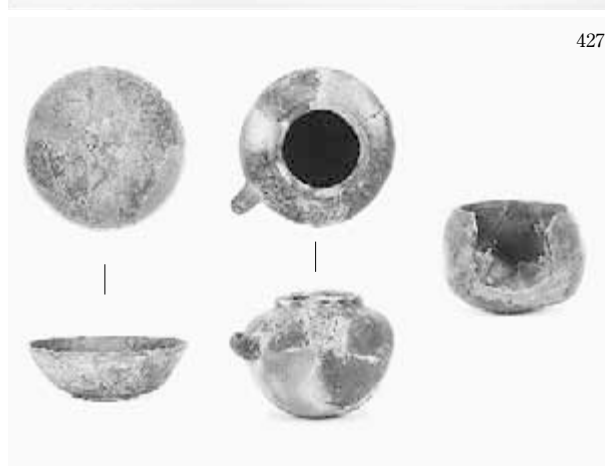
集落の大溝より出土。この溝からは大量の中世土器や漆器・箸などが出土した。一括性も高く、当時の日常食器類を示す良好な資料である。瓦器碗は高台がなくミガキが退化した終末期の様相を呈し、土師皿も底部がへこんだ14世紀半ばの資料である。東播系のこね鉢や3本の足がついた瓦質の羽釜も、この時期北摂地域で広く流通していた。(川瀬)



426

427 瓦質土器集合(鉢・壺・風炉?) 鎌倉末期以降
玉櫛遺跡 (鉢:rd17.6・H6.5) 文献.467

瓦質製品のなかでも特殊なものが数点、土器廃棄土坑や溝から出土した。鉢は内面見込みと、体部から見込みにかけて放射状にらせん状のミガキを施す。壺は口縁部がすぼまり、注口をもつ小壺で、肩部に三段の波状ミガキと花文状ミガキをもつ。もう一点は球状の体部の前方1/4が窓のように切り抜かれ、小形の風炉のような用途をもつ器種と推測する。(川瀬)



427

428



428 瓦質土器（鍋） 室町
粟生間谷遺跡 (RD21.1・h8.0) 文献578

井戸から出土。土師器皿・瓦器椀・青磁碗・備前焼・瀬戸焼・常滑焼・瓦・硯などとともに、非常に多くの瓦質土器が出土している。瓦質土器は、羽釜が量・種類ともに群を抜いて多いが、火鉢・茶釜・鍋などもみられる。中でも、両口と片手をもつこの鍋は、他に類例がない。北摂地域の瓦質土器を知るうえで貴重なものである。(信田)

429



429 墨書土器 戦国
栗栖山南墳墓群 (RD13.9・H2.6) 文献533

包含層から出土。土師器皿で底部と体部の境目に凸線状圏線が巡る。外面四方に中心に向けて、墨書が認められる。判読できる文字は、二方向に「一切有□□」、「□作□是□」で、他方向に「如」が残存していた。これらから金剛般若波羅密経を出典とする偈頌の「一切有為法 如夢幻泡影 如露亦如電 応作如是観」が左回りに書かれているものと考えられる。(森屋美)

430



430 備前（壺） 室町
栗栖山南墳墓群 (RD12.4・H24.8) 文献533

火葬墓の煙道部分に据えられていた。壺の内部には2名分の焼骨が収められており、蔵骨器として使用されたものである。考古地磁気測定では15世紀前半の年代が得られている。玉縁状の口縁を持ち、体部の肩はあまり張らず、4条の櫛描き波状文と直線文が施される。当遺跡では他にも瓦質の羽釜が蔵骨器として使用されている。(小野重)

431



431 備前（播鉢） 室町後期
佐保栗栖山砦遺跡 (D27.5・H14.5) 文献532

曲輪の落込みから出土。ほぼ完形の片口播鉢。口縁部は内傾気味に直立させ、幅広の縁帯は室町後期の典型である。外周に浅い凹線が入る。おろし目は7本櫛目で8本放射状に刻む。左回り轆轤水挽成形の重ね焼。良く焼き締まって赤褐色を呈し、黄胡麻が被る。15～16世紀代は重ね焼法が生まれた事で多量生産され、遠隔地へ商圏が拡張されていく時期である。(小野久)

432 瀬戸（水注） 鎌倉
粟生間谷遺跡 (RD6.3・h19.0) 文献.578

土坑から出土。外面は淡黄色の灰釉が全体に認められる。器壁はやや厚ぼったりとした平底の水注である。取手部分は欠損しているが、肩部から頸部に丸みをもって付くタイプである。印花文は、菊の花を象ったものを沈線の上に6ヶ所配したものである。当時の流行した意匠である。

(服部)



432

433 瀬戸（瓶子） 鎌倉
粟生間谷遺跡 (h24.7) 文献.578

石組遺構下層から出土。他に瓦質の播鉢や羽釜が出土しており、鎌倉時代の所産と考えられる。やや張り出した肩部から底部にかけて、直線的なラインを醸し出す梅瓶型である。外面に文様は施されていないが、釉条が幾筋も認められ古瀬戸の様相を呈している。

(服部)



433

434 瀬戸（仏花瓶） 室町
粟生間谷遺跡 (BD4.0・h6.1) 文献.578

土坑から出土。仏前に用いる花瓶である。鉄釉を廻し掛けしており、底部は糸切りが認められる。体部に沈線を巡らしているため、印花文は付さないものと思われる。当時の仏花瓶の多くは、長頸で左右に不遊環を装飾として貼り付けるものが多い。

(服部)



434

435 瀬戸（水滴） 室町
粟生間谷遺跡 (RD2.0・H3.0) 文献.578

ピットから出土。口縁の一部を欠損しているがほぼ完形である。底部に糸切りが認められる。水滴は、鎌倉時代後半から大量に生産され、全国に流通する。本例は、特に文様などは認められず、当時の大量生産された文具と考えられる。

(服部)



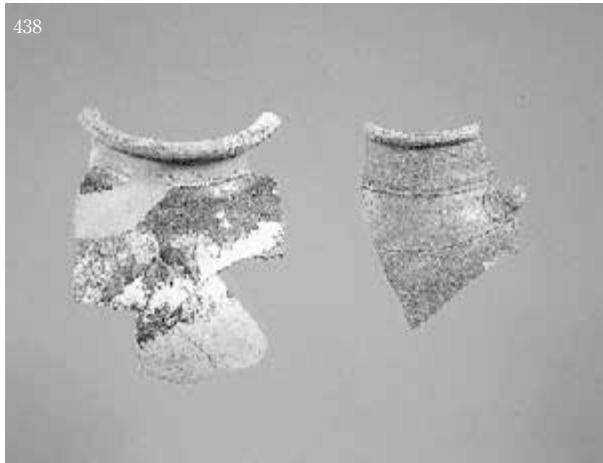
435



436 瀬戸美濃系鉄釉（鳥形水滴） 室町後期
佐保栗栖山砦遺跡 (D3.6・h3.8) 文献532
曲輪での出土。底部を除く外面に鉄釉が施釉される。
水滴は硯滴、水注とも言われ、硯に使う水を入れる容
器である。背中と眼の下に小孔を穿つ。水は背中の孔
に入れられ、指で押さえて調節し、嘴に伝って注がれ
る。底部の後側脚部は器を安定させるもの。瀬戸美濃
窯では14世紀代から小壺の水滴とともに鳥形など多く
作られ、小物にも様々な工夫が見られる。 (小野久)



437 青磁（碗） 鎌倉後期
総持寺遺跡 (RD16.3・H6.6) 文献466
土坑墓から出土。中国龍泉窯系劃花文青磁碗である。
完形品であるが、死者のための器とするため、口縁部
の2ヶ所が打ち欠かれている。見込みには細かい線状
の傷痕があり、使用されていたことがわかる。
内面の片切り彫りの文様は美しく、釉調は淡い青緑
色を呈し、優品である。当遺跡では別の土坑墓で、も
う1例出土している。 (岡本圭)



438 輸入陶器（四耳壺） 平安後期～室町
粟生間谷遺跡 (左:rd10.8・h10.7) 文献578
崖際の斜面に土器が大量に集積していた中に含まれ
ていた。左は、肩部に草花の印文をもつ。釉は黄褐色
から茶褐色で、頸部と口縁端部では掻きとっている。
右は、波状沈線がめぐり、頸部と体部の屈曲部に段が
つく。釉は灰緑色系である。いずれも福建省、浙江省
などの中国南部産のもので、輸入陶器の流通を知るう
えで貴重な資料である。 (信田)



439 景德鎮窯系青花（盤） 室町
大和川今池遺跡 (BD9.1) 文献588
中世の区画溝より出土。高台部を含む底部残存。輪
高台下部以外、全面に透明の釉がかかる。高台内面に
四角く囲んだ「大明年造」を記す。外面には高台およ
びその直上に2条一単位の圏線、体部に文様が施され
ている。見込み中央には十字状の文様、花や葉であし
らわれたアラベスク文がある。この文様が施された青
花の出土は稀である。 (村上富)

440

440 巴文軒丸瓦 平安末～鎌倉初頭
大和川今池遺跡 (D15.4・T3.0) 文献.529

ピットから出土。巴の中房部分が全体に隆起しており、珠文帯の内側には二重の圈線、外側には一重の圈線が巡る。珠文帯周辺に幾つかの範傷が観察される。外縁の大きさは小さいながらも高さを有する。巴文様の瓦の中でも古い様相を呈する。調査地に「観音堂」の字名があり、また、瓦の多量の出土とともに中世寺院の存在が想定される。(森屋直)



441

441 梵字文軒丸瓦 鎌倉前葉
大和川今池遺跡 (D15.4・T3.8) 文献.529

溝から出土。中房部分にはやや文様化の傾向がある梵字のキリークを配する。珠文帯の内外には圈線が巡るが、中房部分は段差を付けて窪ませているため、内側圈線が二重のように見える。文様の隆起ははっきりとしており、圈線の断面は半円状を呈する。(森屋直)



(森屋直)

442

442 複弁八弁蓮華文軒丸瓦 平安末～鎌倉初頭
伽羅橋遺跡 (D15.6・T2.5) 文献.539

砂堆に形成された、中世土坑上層から出土。複弁は肉厚で外区内縁には33の珠文を巡らす。破片ではあるが調査区から7点の同範瓦が確認されている。この時期の瓦を伴う遺構は、当該地からは検出されていないことから、転用か復古調の瓦かと考えられる。このタイプは、和泉地方に多数同範瓦が報告されている。

(服部)



443

443 火焰宝珠文軒丸瓦 鎌倉～室町
伽羅橋遺跡 (d15.0・T2.2) 文献.539

溝埋土から出土した遺物である。外区内縁にやや大きめの珠文を巡らす。蓮台の上に3つの宝珠を配し、周辺を火焰で装飾する。この様式は鎌倉時代以降の仏舎利容器に多く見られる形式で、瓦に施された文様としては和泉地域では数例しかなく、希少な例である。寺院遺構は検出されないものの、付近に密教系寺院が存在したことを窺わせる遺物である。(服部)



444



444 文字軒丸瓦 鎌倉
伽羅橋遺跡 (d15.2・T2.2) 文献.539

No.443と同じ溝埋土からの出土。わずかに外区の意識が読みとれる。文字瓦の破片で、台座の上に「□陀佛」の文字が読みとれる。字体と蓮弁端部が外反せず、直線的に伸びる形状から、鎌倉時代に属するものと考えられる。同時期の瓦も多数出土しているが、直接寺院伽藍を示す遺構は検出されていない。

(服部)

445



445 唐草文軒平瓦 平安後期～鎌倉
大和川今池遺跡 (W26.0・T4.5) 文献.529

溝から出土。平瓦部右側面をカットした隅切瓦である。中心飾りに1+6?の蓮子を配し、唐草が右側に4回、左側に5回反転する。顎凸面、顎裏面はヘラナデにより区別できるが、段顎は呈していない。平瓦凹面にはコビキ痕と布目圧痕、凸面にはコビキ痕がみられる。

(森屋直)

446



446 唐草文軒平瓦 平安後期～鎌倉
大和川今池遺跡 (W25.4・T4.1) 文献.529

溝から出土。中心飾りに半載花文を配し、唐草が左右に4回反転する。顎凸面、顎裏面はヘラナデにより区別できるが、断面形態は直線顎を呈する。平瓦凹面には布目圧痕、凸面には縄叩き痕がみられる。

(森屋直)

447



447 文字線刻瓦 中世
太井遺跡 (法量不明) 文献.415

溝から出土。丸瓦の小片であるが、凸面側に「□稔」の文字がヘラ描きされている。縦方向に2文字のみ確認され、その前後の有無は不明である。

凸面は縦位に磨かれ、凹面には布目圧痕がみられる。溝からは古代から室町時代の瓦が多量に出土しているが、この瓦は鎌倉時代から室町時代のものと思われる。

(市本)

448

448 「建曆」紀年銘平瓦 鎌倉
観音寺遺跡 (w8.8・ℓ8.4・T2.8) 文献.470

土坑より出土。平瓦凹面に「建曆」とヘラ描きがある。一辺のみ残り、凹面の側縁は丸く仕上げる。凸面は叩きの後ナデ、凹面は微かに布目が残るがナデである。両面ともに離れ砂が少しみられる。曆の字の下部は一部欠損する。「建曆」は西暦1211～1213年の間にあたる。両面ナデ、離れ砂の技法がこの時代に存在したことを示す良い資料である。(村上富)



449

449 文字線刻瓦 鎌倉～室町
観音寺遺跡 (w7.6・ℓ7.6・T2.4) 文献.470

溝状の土坑より出土。丸瓦破片の凹面側に「□鳥郡」と線刻されている。凸面は叩き後ナデ、凹面はナデられているが、布目が一部残る。鳥の字の上に大の下部が残り、「大鳥郡」と読める。当時の瓦大工の名前が続けて線刻されていた可能性が高い、貴重な資料である。

(村上富)



450

450 五輪塔スタンプ文のある平瓦 平安末～鎌倉
観音寺遺跡 (w8.8・ℓ12・T3.2) 文献.470

井戸より出土。平瓦凹面に五輪塔のスタンプ文が施されたもの。水輪内に梵字があるかどうか不明。2つ目の五輪塔の上部がみられ、下部が欠損していることから、五輪塔文は単体では無く、縦方向に数基を1単位としたスタンプ文である。凸面は縄叩きの後ナデ、凹面は布目の後ナデであり、両面ともに離れ砂がみられる。出土例の少ない貴重な資料である。(村上富)



451

451 スタンプ文字のある平瓦 鎌倉～室町
観音寺遺跡 (w16.0・ℓ18.0・T2.8) 文献.470

No.448と同じ土坑より出土。片側縁と広端縁の二辺が残る。平瓦凸面の側縁寄りに「南无阿弥陀佛」の字が浮き出るようにスタンプ文が施されている。凹凸面ともにナデ、離れ砂がみられる。

ヘラによる線刻ではなく、陽刻のスタンプ文である点が珍しい。

(村上富)



452



452 和鏡 平安末～鎌倉
粟生間谷遺跡 (D11.3・T0.8) 文献578

墓の副葬品。長方形の墓坑の底面近くで、背面を上にした状態で出土。ほかに土師器大・小皿があるが、遺構の削平が著しいことから副葬品の全容は不明である。双鶴と松が配される松鶴文鏡で、両鶴は中心より向かって左方向に内向する。集落内の墓から出土しており、当時の鏡の具体的な使用を考える上で重要な資料である。(信田)

453



453 和鏡 鎌倉前期
玉櫛遺跡 (D8.7・T0.4) 文献467

13世紀後半から14世紀初めの土器が大量に廃棄された中から出土したが、形式的には平安時代からある鏡である。背面中央に木の幹と、枝に五弁の花と葉が茂る様子が表現されており、類例より山吹の木と考えられる。その下に鈕を挟んで向かい合う形で二羽の尾の長い鳥がいる。下方の三点模様は洲浜を表現したものか。わずかに繊維質が付着していた。(川瀬)

454



454 懸仏 鎌倉～室町
真福寺遺跡 (H6.2・W3.3) 文献560

室町時代前半期頃までの遺物を含む包含層より出土。合わせ型による铸造品で、表面には部分的に鍍金が遺存していることから、元来は金銅製であっただろう。薬壺とみられる持物を左手仰掌上に載せる契印と施無畏印を結ぶ手印が表現されることから、像容は薬師如来座像と考えられる。なお、台座には毛彫による蓮弁が加えられ、頭部裏面には初殻が遺存する。(三好)

455



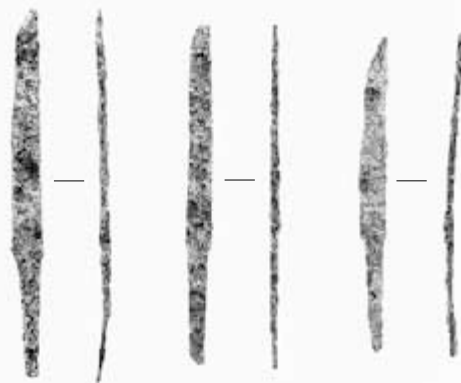
455 銅鈴 古代～中世
溝咋遺跡 (MD2.1・H2.4) 文献509

金銅製の鈴である。奈良時代から中世の遺物を含む包含層より出土した。球状を呈し、頂部に鈕と胴部に稜を設ける。押圧のため下半部は歪む。鈕は方形で、円孔をもつ。内部は空洞、玉は残存していなかった。全体的に銅が露出し、緑青が付着するが、上半部の一部に金メッキを施した箇所が認められる。このため、金銅鈴であった可能性が高い。(黒須)

456 短刀 鎌倉
栗栖山南墳墓群 (左端:W2.6・L22.1) 文献.533

土葬墓から、各1点ずつ出土。両端の2点は、烏帽子とともに出土。いずれも、刀身は顕著な反りがなく、造り込みが平造である。右端のものには、木質が切っ先と茎尻にわずかに残存し、鞘と柄が装着されていたと思われる。この時期の男性が烏帽子とともに肌身に付けていたものを、埋納したと考えられる。

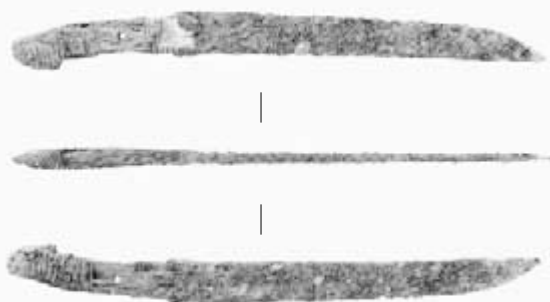
(森屋美)



456

457 短刀 南北朝前期
小畑遺跡 (W2.4・L21.2) 文献.486

火葬墓より鞘を払われた状態で出土。長さ七寸弱、反り僅か、平造り、庵棟の短刀。茎には柄の木質が錆付する。表面には黒漆が塗布され、後世の鞘巻あるいは刻鞘と呼ばれるような装飾が加えられる。区から刀身にかけては半月形の薄い有機質が付着するため、呑口式の拵となる印象を受けるが、実際は鞘の中に隠れるため、鋸の用をなしていたものであろう。(三好)



457

458 小柄 室町後期
佐保栗栖山砦遺跡 (w1.4・ℓ18.8・t0.5) 文献.532

1辺約1.5mを測る方形土坑より出土。小柄は腰刀や小き刀などの刀子・短刀の鞘の鯉口に差し添える小刀、もしくはその柄である。小柄および目貫・筭を合わせて三所物と言う。刀を差した場合、外側に筭が位置し、内側に小柄が位置するので副子或いは裏差とも言う。本例は茎に銅板を巻き、地板に繊維質のものが、刀身に木質のものが残存している。(小野久)



458

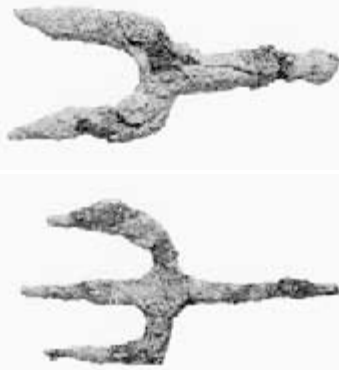
459 筭 南北朝前期
真福寺遺跡 (W1.4・ℓ12.2) 文献.560

室町時代前半頃までの遺物を含む包含層より出土。筭が表側に向かって大きく折れ曲がっている。胴上方には蕨手・眉形、下方には木瓜形の代わりに眉形を反転させたような文様を毛彫で表しているが、小縁の表現はない。表面には肉眼では一羽しか確認できないが、X線撮影により群鳥が一行をなして飛翔しているような文様が毛彫されていることが判明した。(三好)



459

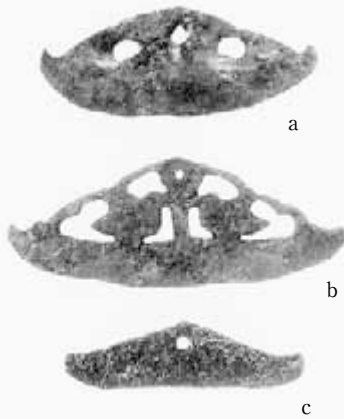
460



460 鉄鍬 室町後期
佐保栗栖山砦遺跡 (上:L7.3,下:ℓ7.85) 文献532

上は曲輪の石積裏込、下は円形土坑より出土。鍬身は上が二又、下が三又である。いずれも雁(狩)股(又)鍬に類する。通常の雁股鍬であれば鍬身の内側に刃が付き、断面形が偏平な菱形か三角形であるが、本例は棒状で方形である。類例では本遺跡に近接する粟生間谷遺跡に二又のものが出土している。なお本遺跡では鑿根の鉄鍬も2点出土している。(小野久)

461



461 火打ち金 鎌倉～室町
粟生間谷遺跡 (b:W3.7・L10.1・T0.6) 文献578

a・bが包含層、cは土坑から出土。鉄製で平面は山形を呈する。前者は装飾性に富み、逆ハートや水鳥の文様がみられ、後者はシンプルな作りとなっている。前者は発火作業の打撃に対しては弱いと考えられ、さらに経塚からの出土例が多いことから非実用的なものと推定される。いずれも、紐孔が穿たれているため、携帯用であったと思われる。(新海)

462



462 錠前 戦国
栗栖山南墳墓群 (W3.0・ℓ5.5) 文献533

火葬場の炭盛土から出土。組合式の錠前の牝金具と思われる。厚さ1mm前後の鉄板を折り曲げ、方形の囲い状になるものと、弦部の一部と思われるクランク状のものがある。いずれも被熱している。これと対になる牡金具は出土していない。同様の形態をとる錠前の出土例が無く、錠前の歴史や形態を知る上で、貴重なものと考えられる。(森屋美)

463



463 手斧 鎌倉後期
土井の木遺跡 (W7.2・L10.3・T2.4) 文献429

土坑から出土。土坑底からやや離れた状態で出土した。柄袋は断面長方形である。刃先の一部は欠損している。手斧は振り下ろすことにより刃先を木材に喰い込ませ、表面を整えていく大工道具である。この土坑の南側で確認した掘立柱建物には完形の瓦器碗を出土した柱穴があり、手斧の出土も地鎮等の祭祀の可能性がある。(後川)

464

464 鋳型（鈴） 鎌倉～室町
粟生間谷遺跡 (W4.3・L5.0) 文献.578

河岸段丘上の包含層から出土。周辺からは鋳造や鍛冶関連の遺物が出土するが、遺構は確認されなかった。鋳型はほぼ完形で、湯口が上方に設けられている。これから作られる鈴は径が2.8 cmを測る。

概して、鋳型は破碎されて出土することが多く、生産される製品の推定が困難な場合が多い。本例は生産物を特定出来る貴重な資料といえる。(新海)



465

465 羽釜鋳型（復原） 鎌倉
余部遺跡 (h46・ℓ65) 文献.413

羽釜の鋳型は不定形土坑から大量に出土した。その周辺の土坑やピット、方形の区画溝等からも出土しており、かなり広い範囲に散乱していた。同時に、大量のスラグや羽口が出土していることから、実際に使用された後に廃棄されたものと考えられる。その性質上、接合可能な資料は皆無に等しく、同規模・同型品を用いて復原したものである。(亀井)



466

466 鋳型（磬） 鎌倉
余部遺跡 (h5.9・ℓ8.9) 文献.413

仏具の一種「磬」鋳型の破片であり、類品が日置荘遺跡にある。山形の下辺中央に相当し、粘土製の合わせ型の片方である。内側凹部は還元、凸部は酸化しており、使用後に廃棄されたものと推測される。欠損と摩滅のため、文様の詳細は不明であるが、凹部平坦面にわずかな窪みが認められることから、撞座等が存在した可能性も考えられる。(亀井)



467

467 鋳型（仏具） 鎌倉
余部遺跡 (h6.7・ℓ8.0) 文献.413

粘土製の合わせ型の片方であり、湯口等が残存することから、片側としてはほぼ完形である。湯口には鋳込みの際に生じた溶解金属やガラス質が付着しており、使用後に廃棄されたものであろう。内側凹部は浅い卵形と深い円形の2段で構成され、製品は仏具等に取り付ける小型の装飾品と推測される。前述の鋳型とともに、河内鋳物の一端を示す貴重な資料である。(亀井)



468



468 石臼（茶臼） 室町後期
瓜生堂遺跡 (rd19.0・H11.6) 文献583

中世大溝より出土。石材は砂岩。上臼部分で、目のパターンは八分画。挽き木を差し込む正方形の孔が側面にあり、その周囲を装飾する。茶臼は中国宋代に出現し、留学僧によって日本にもたらされた。南北朝・室町時代に武士の間で珍重されたことから、近接地に居館等の存在も考えられる。また、当遺跡に南接する若江遺跡・若江城跡との関連性も注目される。(朝田)

469



469 石臼 鎌倉前期
総持寺遺跡 (w20.4・ℓ40.5) 文献466

井戸から出土。花崗閃緑岩製である。足で踏んで梃子により杵を動かす、踏み臼の類と思われる。半分に割れていた。恐らく投棄する前に、魂を抜くために半裁したのであろう。

踏み臼は近世以降に隆盛するが、このように中世段階の遺物として出土することは珍しい。臼の歴史を語る上で貴重な資料といえる。(岡本^主)

470

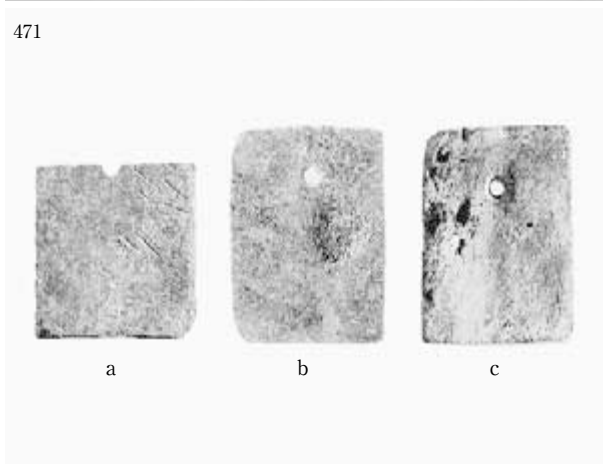


470 石鍋 平安末～鎌倉
粟生間谷遺跡 (rd32.0・bd18.0・H13.4) 文献578

崖際に築かれた石組み遺構の礫間から破片で出土した。大型、小型の2個体が半完形に復原できたが、ともに、断面台形の鏝を削り出したものである。大型の体部には煤が付着している。

石鍋は破損した後も温石などに再利用され、このように大型の破片が、まとまって出土することは稀である。貴重な資料である。(信田)

471



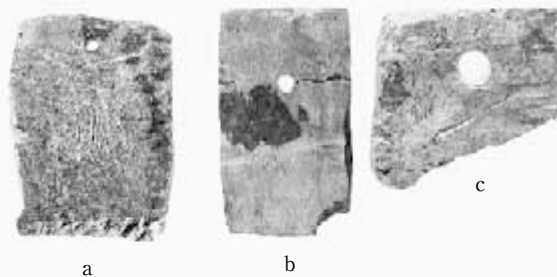
471 温石 室町
栗栖山南墳墓群 (a:W12・L17・T2) 文献533

火葬墓の墓坑内から完形で出土。いずれも彎曲しており、滑石製石鍋を再加工したものか。穿孔が1ヶ所ある。aにはさらに3ヶ所穿孔途中の痕跡がある。aは木棺を想定できる遺構から、被熱した状態で出土しており、木棺の中に副葬されていたことが窺える。一方、bには被熱の痕跡は見られず、火葬後に置かれたと考えられる。(小野^主)

472

472 温石 鎌倉～室町
玉櫛遺跡 (a:W8.7・L12.0・T1.9) 文献.467

aは包含層、b・cは土器溜りから出土。いずれも滑石製で、1ヶ所に穿孔する。aは彎曲しており、石鍋を再加工したものと考えられる。出土地周辺は墓域と想定され、これに関連する可能性がある。b・cは土器や土錘・砥石・宋銭など日常生活具とともに投棄されていた。また、cのような粗製品の存在から、当時の石製品加工技術のあり方が窺える。(小野^画)



473 光背型石仏 室町～戦国
栗栖山南墳墓群 (a:H36.0・W34.5) 文献.533

中世墓群域で出土。破片を含め142点あり、対になって置かれるものもある。石材は花崗閃緑岩で、1面に阿弥陀如来坐像を彫り込む。光背形態と像容表現で分類でき、この中には同一工人(集団)によって製作された一群があることが想定できた。墓坑に伴う遺物から変遷を追うことができる。aは2体彫刻されていた。bには蓮華座が線刻されている。(小野^画)



473

474 板碑型石仏 室町～戦国
栗栖山南墳墓群 (a:H46.6・W17.1) 文献.533

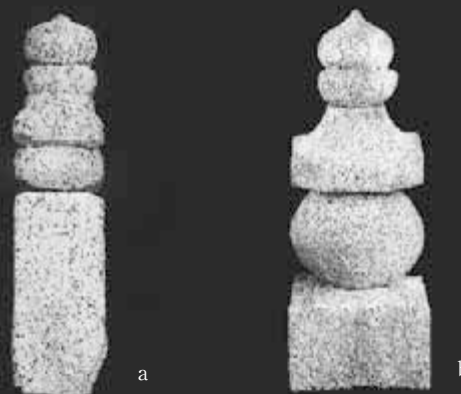
中世墓群域で出土。墓坑・石組を伴うものもある。阿弥陀如来坐像、二尊阿弥陀如来坐像、二尊地藏菩薩立像が簡略化されて彫りこまれている。板碑形態と像容表現から数タイプに分類でき、光背型石仏・五輪塔とあわせて変遷を追うことで、墓群の時期や中世墓の様相の一端を明らかにすることが出来るだろう。両者とも、左腕に衣文の垂れが表現されている。(小野^画)



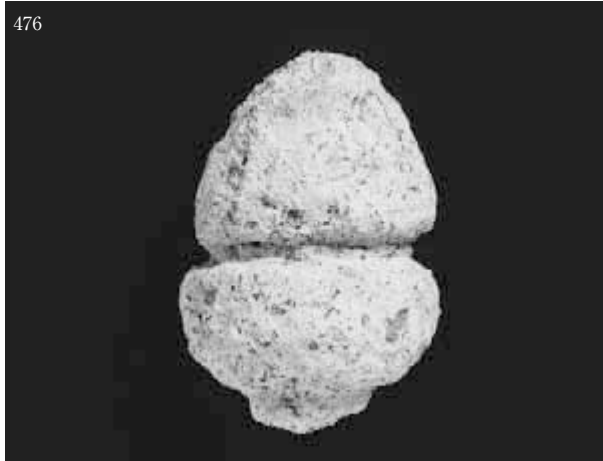
474

475 五輪塔 室町
栗栖山南墳墓群 (a:H55.1・W14.2) 文献.533

五輪塔は破片を含め116点出土した。地輪部分が設置された状態で出土したものもあるが、倒壊後散乱したものが多。aは一石五輪塔で、角柱状を呈し、地輪部分の下半部は地中に埋めるために整形を行っていない。bの組み合わせ式のものも含め、設置された状態で出土したものは石組みや墓坑を伴っており、出土した土器から実年代が推定できる。(小野^画)



475

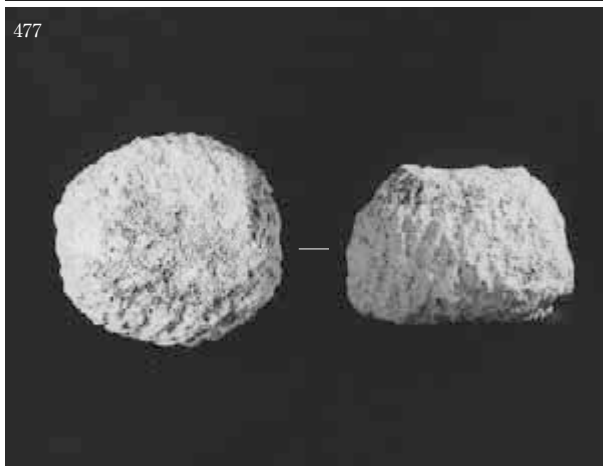


476 凝灰岩製五輪塔(空風輪)未製品 鎌倉
楠木石切場遺跡 (L19.0・MD13.5) 文献.487

採石坑から出土。裏面と下のほぞ部分が破損している。工具痕が明瞭に残っており、その幅は1.5 cmである。下から上に向かって加工している。他の部分に比べてほぞ部分は加工が進んでいる。裏面を成形中に破損し、廃棄されたと考えられる。

空輪と風輪を一石で加工した未製品である。

(河端)



477 凝灰岩製五輪塔(水輪)未製品 鎌倉
椋谷石切場遺跡 (D32・H20) 文献.534

採石坑から出土。側面の一部分が大きく破損している。縦方向に工具痕が明瞭に残っており、上から下に向かって加工していると考えられる。工具痕は、幅が1.5 cmである。形はほぼ完成しているが、どの面の表面も粗削りで、工具痕の単位をはっきり確認することができる。

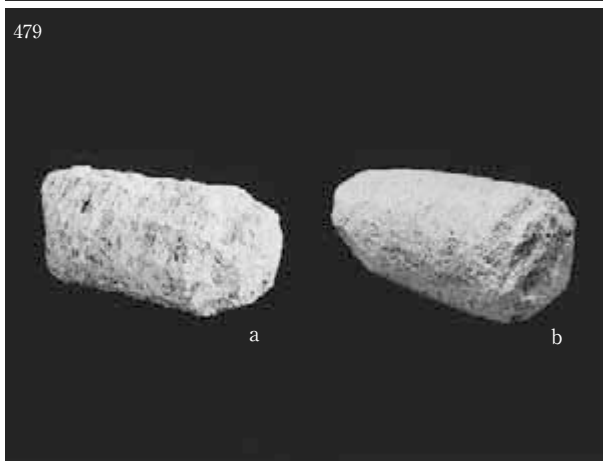
(河端)



478 凝灰岩製五輪塔(地輪)未製品 鎌倉
楠木石切場遺跡 (W24.0・T11.5) 文献.487

採石坑から出土。6面全面に工具痕が残る。工具痕の幅は1.5 cmである。工具痕の断面が緩やかにカーブしているため、刃先の断面が彎曲した工具であると推定できる。形はほぼ完成しているが、どの面の表面も粗削りで、工具痕の単位をはっきり確認することができる。

(河端)



479 凝灰岩製円柱状未製品 鎌倉
楠木石切場遺跡 (a:MD11.1・ℓ23.0) 文献.487

aは調査時の排土中から出土。写真右端は先細りに加工され、ほぞと考えられる。工具痕は幅1.5 cmである。bは採石坑から出土した。左側を球状に加工しようとしたと思われる。右端はほぞを作り出す途中である。いずれも径が10cm程度のものであり、相輪等の一部に当たると推定される。

(河端)

480 権 鎌倉
余部遺跡 (h10.3・ℓ7.8) 文献.413

包含層から出土。全体は駒形を呈し、上方に直径約2.2cmの円形の窪みを設ける。重さは約233gを量り、和尺に換算すると約62匁となる。類品から秤の錘の一種である「権」と考えられる。しかし、本例は未穿孔のために吊り下げられず、また土製で重さが一定しない等、不可解な点も多い。河内鑄物師との関連を考える上で重要な資料である。(亀井)



480

481 錘形土製品 中世以降
郡戸遺跡 (W4.5・L5.8) 文献.582

近世大溝から出土。やや丸みを帯びた台形の上端部に小円孔を穿っており、ここに紐を通して下げた錘と思われる。須恵質平瓦を転用し全面を丹念に研磨調整するが、所々縄目痕が残存している。現存で101.5g、30匁近くあり、平面の形状から棹秤の権(錘)とも類似するが、瓦の転用例はなく、孔も斜め方向に穿つことなどから他の用途の可能性もある。(大庭)



481

482 土人形 戦国
栗栖山南墳墓群 (H4.8・W2.8) 文献.533

火葬場から出土。土師質のもので、頭部のみの作りである。冑を被り、目を釣り上げ、口をへへの字に曲げているところから、勇壮な武者と思われる。

首の中央には、後頭部に至る径6mmの孔が穿たれており、棒状のものを指し、胴部に装着したと考えられる。全体に被熱しており、橙褐色である。

(森屋美)



482

483 土製小地藏菩薩像 室町
伽羅橋遺跡 (H9.8) 文献.539

旧芦田川と考えられる溝から出土。型造りで、連続する複数の型枠を用いて造られている。質素な納衣姿の地藏立像で、左手には宝珠を持ち右手は与願印を結んでいる。台座は簡略化されているものの、胸には朱が施され、額には白豪を意識した窪みも認められる。千駄佛の一種と考えられ、戦乱の世に様々な願望が叶う地藏信仰の一端を窺わせる遺物である。(服部)



483

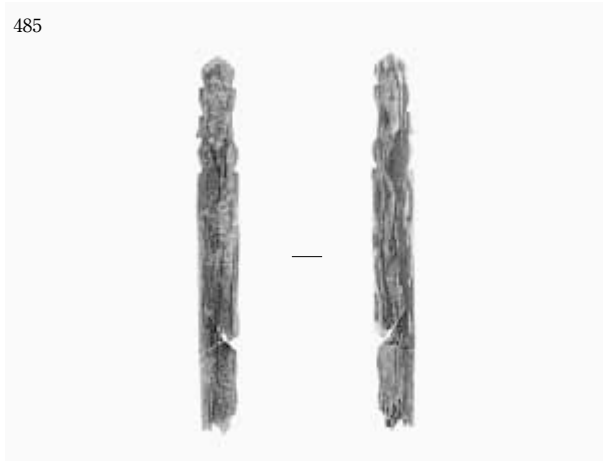
484



484 卒塔婆 室町
溝咋遺跡 (W3.2・L30.3) 文献509

調査地内を南北に縦貫する坪境の大溝に設けられた堰にひっかかった状態で出土。上流から流れてきたものと思われる。五輪塔形を呈し、下端部に穿孔がある。表裏面に梵字・偈文・真言・戒名を記す。墨書から道春の供養に用いられたものとわかる。表面の「南無三曼多没駄南□」の句は現在の施餓鬼会で唱えられる文句である。 (伊藤)

485



485 卒塔婆 室町
玉櫛遺跡 (W5.5・ℓ48.0) 文献467

墓域に伴う水路と考えられる溝から出土。五輪塔形で「**𑖀**南無阿弥陀佛右趣者为性□□三七日追善」との墨書がある。判読不明の二字には戒名が入り、没後七日毎の追善供養の三七日、つまり没後二十一日の追善供養で使用された七本塔婆と考えられる。溝に沿って桶棺墓が2基検出されていることから、これらに伴っていたものが流れ込んだと考えられる。 (中尾)

486



486 卒塔婆 鎌倉～室町
池島・福万寺遺跡 (右:W5.5・ℓ18.6) 文献567

14世紀頃と考えられる耕作土層中からの出土。右は五輪塔形で水輪までの残存。「**𑖀𑖀𑖀𑖀**」の梵字が墨痕として確認される。おそらく「**𑖀**」の字以下が欠失したのであろう。左は同一地点から出土した木簡で、上端を山形に加工し、下部を欠失している。「生滅」の二字が墨痕として確認され、経文の一部を墨書した木簡であろうと考えられる。 (中尾)






487



487 卒塔婆 室町前期
池島・福万寺遺跡 (塔婆平均:W3.5・L34.0) 文献566

中世水田面を覆う洪水砂層最下部から出土。表には文明十三年(1481)の年号の他、**𑖀𑖀𑖀𑖀𑖀**の梵字と「延命地藏経」が墨書されており、密教儀式の「流れ灌頂」に使用されたものと考えられる。本来は中央に一回り大きな卒塔婆を加えて七枚を組み合わせるが、本例では失われている。上の横木中央には大塔婆を留めていた木釘の孔が残る。 (中尾)

488 卒塔婆 室町
池島・福万寺遺跡 (W5.1・L48.9) 文献.565

中世後半と考えられる耕作土層中から出土。五輪塔形で下端は尖り、地面に立てたものであろう。表裏面ともに墨書があったと考えられるが、残存状態は非常に悪く、ほとんど読むことができない。片面には胎藏五大種子の「    」が書かれていると推定され、その下にも文字が続くと思われるが、解読できない。

(中尾)



488

489 こけら経 室町
池島・福万寺遺跡 (右:W2.1・ℓ9.7) 文献.404・438







中世後期と考えられる洪水砂層中からの出土。板材は薄く平滑で、いずれも上端が失われている。左は「故然」「得成菩」、右には「不可為譬喩」の墨書が見え、法華経を写したものであることがわかる。こけら経は平安時代末頃から江戸時代末頃まで行われた一種の写経形態である。供養時には川などに流すことがあり、当資料もそうしたものであろう。

(中尾)



489

490 木簡 室町
池島・福万寺遺跡 (W1.8・ℓ14.1) 文献.567

中世末頃と考えられる耕作土層中から出土。短冊形を呈する木簡で下端は失われている。表裏面ともに墨書が確認され、表には「     南□□□」の文字が見られ、金剛界大日真言の下に南（無阿弥）と続くと考えられる。裏には上端に「」の一字が見える。納棺した死者の胸元に置く札であるとする説もあるが、定かではない。

(中尾)



490

491 呪符木簡 鎌倉
玉櫛遺跡 (W3.5・ℓ16.7・T0.4) 文献.589

13世紀の井戸から出土。疫病除けのまじなひ札で「菴民将来之子孫宅」と記す。下部欠損のため呪言が続く可能性がある。墨書部分は周囲の腐食から守られ浮き字状に残存する。なお茨木市では初例となる。

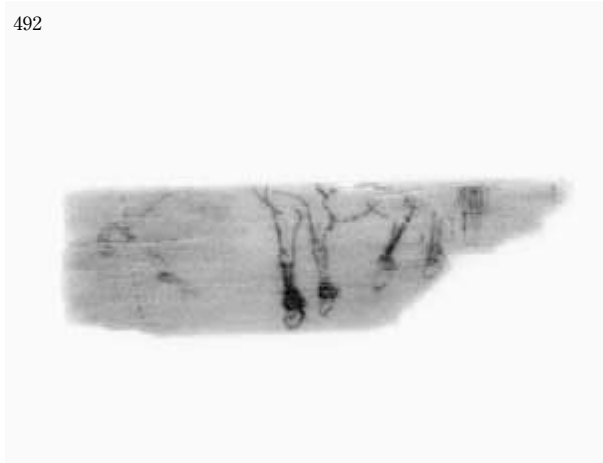
また15世紀の溝からも「九々八十一」「菴民将来子孫□」「八九七十二（逆字）」と3行墨書する木簡が出土した。

(鈴木)



491

492



492 絵馬 室町後期
巨摩遺跡 (h4.8・w16.0) 文献373

中世大溝より出土。薄いスギの板材で、上半部を欠く。馬の四肢および蹄は写実的で、軽妙に描かれている。文献によると、絵馬の起源は、河川など水辺で行なう生馬献上の儀式にあるとされ、水神に対して祈雨、又は止雨を願ったとされる。奈良時代以降、儀式の簡略化とともに一般へと普及し、土馬や絵馬で代用して祈願するようになったと考えられている。(朝田)

493



493 草履芯 室町前半
玉櫛遺跡 (右:w10.7・L24.1・T0.3) 文献467

いずれも大溝や河川より出土。薄くそいだ板は中心を線対称として二枚に分かれ、つなぎ合わせるための小さな穴をもつ例もある。前方は隅丸に加工し、下方は方形やV字状に尖らすものが多い。この板を芯として藁を横に巻いていたようで、藁の痕跡が板に残る。同遺構からは連歯下駄も出土しており、下駄と草履が併用されていたことがうかがえる。(川瀬)

494



494 漆器(碗) 鎌倉
玉櫛遺跡 (MD17.0・H5.1) 文献589

かつての茨木川と想定される13世紀代の自然流路から出土。土圧による歪みが大きいため、最小径との差を約3cm測るものの、ほぼ完形である。外面底部はやや漆がはがれる部分もみられるが、黒漆地に赤漆で体部内外面に笹の葉もしくは竹と思しき植物文を手描きする。なお当遺跡では溝や自然流路から他にも多くの漆器片が出土した。(鈴木)

495



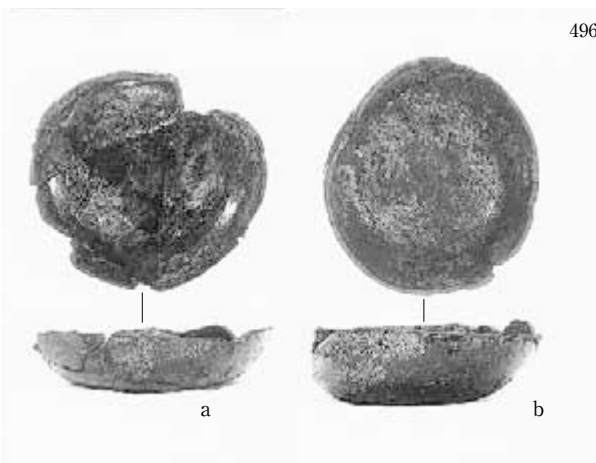
495 漆器(碗) 室町
玉櫛遺跡 (BD3.3・h4.5) 文献467

西側に開く幅2m、深さ1mの溝より大量の土器・木製品とともに出土。黒漆地に赤漆で内面の見込みと外面に楓状や、他2種類の植物意匠のスタンプ文が施される。単純な構図の中に緊張感を漂わせる優品で、構図が秀逸である。14世紀中頃。

(入江)

496 漆器 (椀) 鎌倉～室町
玉櫛遺跡 (a:RD13.1・H4.0) 文献.467

aは南北に流れる幅2m以上の溝から出土。黒漆地に、赤漆で口縁部内外面と見込みに楓状のスタンプ文が見られる。14世紀中頃。bは直径2.8m、深さ0.7mの井戸から出土した。黒漆地に赤漆で口縁部内外面と見込みに羊歯状植物のスタンプ文が見られる。大量の木製品や瓦器椀等とともに出土した。14世紀初め頃。
(入江)



496

497 漆器 (椀) 室町
玉櫛遺跡 (RD10.2・H4.2) 文献.467

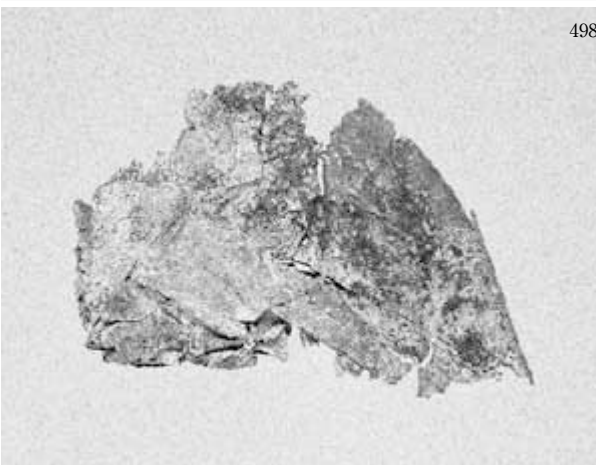
箱棺墓の内部、中央やや西寄りから正置に出土。内外面とも黒漆塗りで、底部外面に「聖」の文字が手書きされた小ぶりの椀で、口径に比べて大きな底径を持つ。15世紀以降のものである。
(入江)



497

498 烏帽子 鎌倉
栗栖山南墳墓群 (w10.0・ℓ11.2) 文献.533

土葬墓から出土。土圧により押し潰されていたが、全形が復原できる程残存状況が良い。烏帽子は閉じた状態で検出された。左側部で裏面側に折り込まれ、縁が表側に折れている。黒褐色をしており、麻布に漆を何度も塗布している。布は平織りである。残存状況から、折烏帽子である。短刀とともに出土しており、愛用品を埋納したと考えられる。
(森屋美)

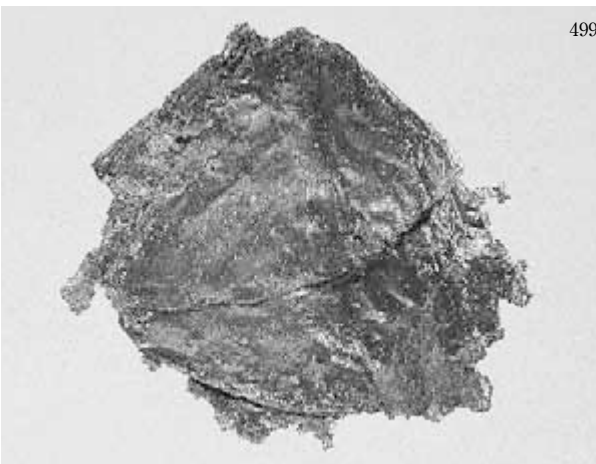


498

499 烏帽子 鎌倉
栗栖山南墳墓群 (w22.0・ℓ12.9) 文献.533

土葬墓から短刀とともに出土。ほぼ残存しており、縫い合わせ部分も観察できる。No.498と同様に、絹布と麻布を何枚も重ね、漆を塗布して仕上げている。

烏帽子は折烏帽子で、その折方が前方を右側頭部に向けて折り、さらに後方を左側頭部に向かって折っている。烏帽子は、当時、一般男性が日常的に被っており、墓からは5件の出土例がある。
(森屋美)



499



500 肥前磁器染付皿（鍋島） 江戸前期
麻田藩陣屋跡 (rd15.4・H4.4) 文献.579

落込みから出土。器形や高台に描かれた櫛目文などの特徴から、鍋島製品であると思われる。鍋島製品は、公家や大名などへの献上・贈答品として焼成されたもので、江戸遺跡の大名・旗本屋敷跡や京都公家屋敷跡から多く出土している。皿に描かれているのは松竹梅文で、18世紀中葉頃のものである。

(市本)



501 京焼「仁清」銘碗 江戸中期
麻田藩陣屋跡 (BD4.4・h2.7) 文献.579

土坑から出土。器高が低く、見込み部が広いことから平碗と思われる。文様は外面に鉄絵で若松葉文が描かれている。また、高台内には「仁清」の刻印がみられ、野々村仁清の製品と考えられる。

仁清の製品は、江戸遺跡の大名屋敷跡や京都の公家屋敷跡からは出土しているが、その他での出土例は少ない。

(市本)



502 京焼「帶山」銘鉢 江戸後期
麻田藩陣屋跡 (H7.3・W10.7) 文献.579

溝から出土。器形は筒型を呈し、体部内外面に呉須錆絵で雀竹文を描いている。高台畳付部に「帶山」の銘がみられる。「帶山」は、京都栗田東町に延宝年間（1673～1680）に開窯した陶工帶山九兵衛の銘である。遺跡での出土例は少なく、江戸遺跡や京都御所東方公家屋敷群跡で数例みられる程度であり、貴重な資料である。

(市本)



503 ヨーロッパ製転写磁器皿 江戸後期
麻田藩陣屋跡 (RD25.5・h1.9) 文献.579

溝から出土。ストーンチャイナといわれる軟質磁器である。ウィロウパターンといわれた柳に唐子・楼閣などの東洋風の文様を題材にモチーフされた製品であり、大量に生産され輸出されたものである。しかしながら、日本国内での出土例は少ない。鏝部の裏側に目跡がみられる。伝世品との照合の結果、オランダ製と考えられる。破片を漆継ぎしている。

(市本)

504 近世土器一括 江戸前期
麻田藩陣屋跡 (土師皿:RD11.0) 文献.579

溝から出土。溝の方位が現在残存する陣屋跡の地割方向と異なり、大坂夏の陣、元和元年（1615）直後に陣屋形成に伴って埋められたと考えられる一括資料である。遺物は、唐津焼胎土目積皿・中国製磁器鉄釉端反碗・丹波焼播鉢・土師質土器皿が出土。土師質土器皿の胎土は乳白色系であり、口縁部に煤が付着しているので灯明具の使用が考えられる。 (市本)



504

505 近世土器一括 江戸中期
麻田藩陣屋跡 (京焼風陶器碗:RD8.8・H5.5) 文献.579

落込みから出土。肥前陶磁器が中心で、染付碗が多く出土している。中には有田で焼かれた染付小瓶もみられる。肥前陶器は、京焼風陶器碗・唐津系陶器刷毛目碗がみられた。これらの出土遺物は、兵庫県伊丹郷町遺跡の享保十四年（1729）大火層出土遺物と特徴が共通するところが多く、下限をこの頃におくことができると思われる。 (市本)



505

506 近世土器一括 江戸後期
麻田藩陣屋跡 (染付中皿:RD21.4・H2.8) 文献.579

幕末期の遺構に切られた土坑から出土。主な遺物は肥前磁器染付製品で、碗、皿等の食膳具が多くみられ、水滴や鬢水入れ等の調度具も出土している。肥前磁器以外には、京・信楽系焼灯明具や丹波焼播鉢、備前焼小型製品がみられ、他に少量ではあるが瀬戸・美濃磁器が出土している。幕末期より一時期古い19世紀前半の年代観が与えられる一括資料である。 (市本)



506

507 近世土器一括 幕末期
麻田藩陣屋跡 (尿瓶:RD18.0・h13.5) 文献.579

落込みから出土。明治四年（1871）の廃藩置県に伴う遺構であり、下限がわかる一括資料である。主な遺物は、京・信楽製品、肥前磁器である。大坂城下町跡の文久三年（1863）大火の焼土下層資料や天満本願寺遺跡の明治四年の造幣局開設層下層資料と共通性があり、大坂城下町以外で幕末期の陶磁器の様相を知る上で貴重な一括資料である。 (市本)



507

508



508 墨書土師器皿 安土・桃山
大坂城跡 (RD10.6・H2.6) 文献.557

府警本部地点で検出した谷部の包含層から出土。
見込み部分に大きく円を描き、その中に円と三角と平行線で人物を表現する。行方不明者や失踪者が遠くに行かないようにするための呪いに用いられたものである可能性も指摘される。

(江浦)

509



509 陶器（花押？） 安土・桃山
大坂城跡 (ℓ6.0・T0.9) 文献.557

三の丸造成時の客土下層に属する豊臣前期に包括される包含層より出土。大型の壺または瓶の底部中央の破片であり、外面には墨書によって花押と考えられる文様が記されている。本資料は胎土・焼成よりみておそらく備前産であり、花押が記されていることから武将の所有品であることが想定される。

(小暮)

510



510 六器 安土・桃山
大坂城跡 (RD7.3・BD3.8・H4.6) 文献.557

三の丸北半部地区の前期豊臣時代に属する溝より出土。六器と言われる碗と皿より1セットとなる密教具の一つであり、本資料は金属製品である。溝の掘方と護岸板材の間より備前壺、青花皿と伴出し、祭祀に使用されたものと考えられる。大規模造成の護岸工事の際、祈祷に用いたものであろうか。

(小暮)

511



511 志野（灯明具） 安土・桃山
大坂城跡 (RD5.1・BD4.7・H3.6) 文献.557

三の丸南半部地区の豊臣後期に属する包含層より出土。志野は16世紀に操業され、向付や鉢・茶碗などを生産したが、本資料は志野産の中では珍しい灯明具で本来は蓋と身と皿で1セットとなる。白濁した長石釉が内外面に掛けられており、外面には菱垣文が絵付けされている。夜半における特別な宴会・茶会で使用されたものと考えられる。

(小暮)

512

512 匣鉢（青磁溶着） 江戸後期
麻田藩陣屋跡 (h4.7・w13.0) 文献.579

土坑から出土。匣鉢の底部に青磁鉢が歪んだ状態で溶着している。匣鉢は円筒状を成し、器厚は厚く、外面底部は回転糸切り痕が観察される。青磁は原型を留めておらず、口縁が内側に折れ曲がっている。匣鉢の底部に付着している釉は発泡している。

麻田藩陣屋跡内、あるいは周辺において窯業生産が行われていたことが明らかになった。(手島)



513

513 匣鉢（青磁溶着） 江戸後期
麻田藩陣屋跡 (RD21.0・H13.7) 文献.579

溝から出土。匣鉢底部に青磁が歪んだ状態で溶着している。匣鉢は円筒状を呈しており、器壁は厚い。外面底部には糸切り痕と匣鉢の重ね合わせの痕跡が観察される。麻田藩陣屋内、あるいは周辺において窯業生産が行われていたことが明らかになった。麻田藩主青木氏は三田にも領地を有しており、三田青磁との関連も想定される。(手島)

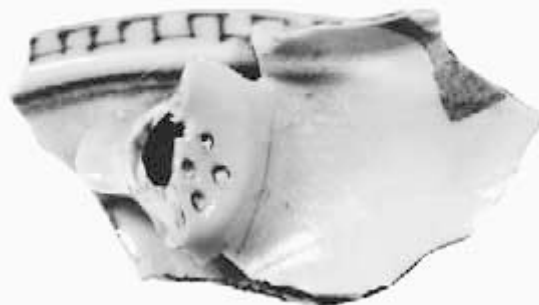


514

514 染付磁器急須・瓶溶着破片 江戸後期
麻田藩陣屋跡 (w7.2・ℓ4.0) 文献.579

溝から出土。歪んだ染付磁器急須と染付磁器瓶の破片が溶着している。

麻田藩陣屋内、あるいは周辺において窯業生産が行われ、また、No.512・513のような青磁製品の他に染付磁器も生産されていたことがわかった。肥前系磁器と見間違えるものであり、出土染付磁器の再検討が必要となってくる。(手島)



515

515 窯道具（カワセ） 江戸後期
麻田藩陣屋跡 (h6.8・w4.9) 文献.579

窯での焼成時、特に天秤積み・棚板積みの場合、製品に高低差をつけ、各々が密着しないようにする道具である。陶質のものが一般的であるというが、当資料もその例にもれない。上端が剥落しており、使用されていたことが窺える。

麻田藩陣屋内、あるいは周辺において窯業生産が行われていたことが明らかになった。(手島)



516



516 家紋隅瓦 江戸
麻田藩陣屋跡 (MD8.0・ℓ13.3) 文献.579

包含層から出土。麻田藩主青木氏の裏紋である「洲浜」を瓦当文様に採用している。周縁の内側は面取りを施す。丸瓦部凸面は大きく反り上げ、縦位にみがく。両側面には稜を有する。

出土地点は、江戸時代末の絵図によれば、分家家老青木邸敷地内の北端に位置している。

(市本)

517



517 軒丸瓦（徳大禅寺） 江戸
徳大寺遺跡 (D14.9) 文献.505

集石土坑などから標記銘瓦当が数点出土。杉植林による削平のため建物配置確定には至らなかったが、大阪国際文化公園都市周辺地域の歴史・文化総合調査によって地元粟生村庄屋の池上家文書が分析され、親寺の宇治黄檗山萬福寺の教示を得ることが出来、当寺は元禄十一年（1698）に黄檗宗の了翁禅師が再興し、明治四年（1871）に閉山したとわかった。（井藤暁）

518



518 金箔瓦 安土・桃山
大坂城跡 (W31.1・T5.4) 文献.334

豊臣前期の屋敷内の瓦敷きから出土。唐草文軒平瓦で中心飾りの三葉に縦2.6cm・横0.9cmの金箔が押されている。外周は粗雑な作りでへらなでが多く残っている。金箔瓦は、織田信長の安土城に始まるもので、豊臣期には大名屋敷などに多用された。権威の象徴として城郭や特定階層の屋敷の人目につく中心的な建物にのみ用いられている。（廣瀬）

519



519 金箔瓦 安土・桃山
大坂城跡 (W29.4・T7.5) 文献.334

豊臣前期の屋敷内の円形ピットから出土。唐草文軒平瓦であるが、瓦当面の上下の幅が大きく、中央部で山形に屈曲し、もっとも広がっている。瓦当面の大きさに比例して大ぶりの文様である。日本古来の系譜には見られない形状の瓦であることから、文禄・慶長の役で朝鮮半島の滴水瓦を模倣した可能性が高い。

(廣瀬)

520 鎧兜部品 安土・桃山
大坂城跡 (上左:W1.7・L4.4・T0.9) 文献.557

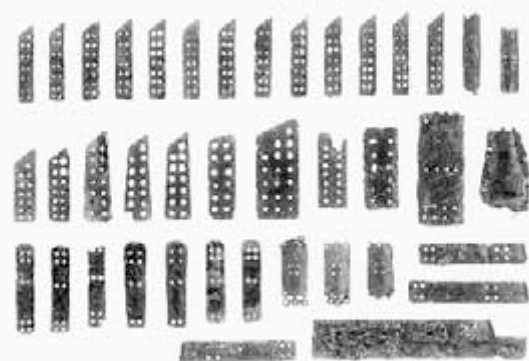
豊臣大坂城時代の包含層から出土。写真上段左は袖や胸板の化粧板を胴に固定するための押付金具で魚々に唐草文を毛彫りしている。その下3点は、胴の肩部分をつなぐ高紐をかける笠袴である。写真右側の環状の金具は兜鉢の後正中に取り付く環台で丸頭の環台に楕円の環が取り付けられている。いずれも形態からみて、室町時代以降の遺物である。(野口)



520

521 鎧兜部品(小札) 安土・桃山
大坂城跡 (上左:W1.1・L5.3・T0.2) 文献.557

豊臣大坂城時代の包含層より出土。鎧兜を構成する小札で、数枚をずらし重ねてセットにし、穿孔に紐などを通して固定する。小札の形状、穿孔の数は製作年代やどの部分の使用したかによって異なる。2段目中央の大型で横3列に穿孔されている小札は平安時代のもので出土品の中で最も古い。2段目右側の台形のもの手甲の左親指部分の小札である。(野口)



521

522 装剣金具 室町後期～桃山
大坂城跡 (下:W1.9・ℓ19.9) 文献.557

本丸築造から三ノ丸築造開始以前の包含層や遺構より出土。素材には赤銅・山金・素銅などの金属が用いられる。製品には目貫・筭・小柄のほか、縁・切羽・縁、鴟目があり、拵を形作る各種部品がほぼ揃う。文様は簡素なものが多いが、左列下側から2番目の筭のように、後藤光・徳乗いずれかの作品と考えられる魚々子地に動物を容彫とした製品も含まれる。(三好)



522

523 目貫 室町後期～桃山
大坂城跡 (上左:W1.2・L4.1) 文献.557

No.522と同様、豊臣前期の包含層や遺構より出土。赤銅などを用いた金属製で、家紋や草花などを図案化し容彫で表す。3段目右端の駒図のような鍔目貫から上段左2点のような金銀の色絵やウツトリ色絵を加え、精緻で華麗な図柄を持つ例までがある。中でも3段目左端の家紋図の例は、良質の赤銅を用いた後藤家上三代の作品とみられ、簡素ながら精彩を放つ。(三好)



523

524



524 煙管 安土・桃山
大坂城跡 (L13.0) 文献.557

豊臣大坂城跡に関わる調査で豊臣前期段階の包含層から出土した雁首。

脂返しが下方に彎曲する古い段階の特徴的な形態をもつ。火皿には十字形の透かし、肩部には猪目透かしが穿たれ、魚々子仕上げ。初期段階の煙管の良好な事例の一つとして重要である。

(江浦)

525



525 トリベ 安土・桃山
大坂城跡 (前列中央左:RD5.7・H2.2) 文献.557

豊臣前期段階のトリベ集積遺構から出土。同遺構からは100点以上のトリベのほか、鞆羽口等も出土している。

トリベの多くは口径7～8cm前後の小型品である。一部には純度の高い金粒の付着が確認される点できわめて重要な位置を占めている。

(江浦)

526



526 犬形土製品 安土・桃山
大坂城跡 (前列左端:H3.8・W2.3・L4.5) 文献.557

豊臣大坂城段階の包含層等から100点以上が出土。過去の調査事例中、群を抜いて出土点数が多い。

手づくねによって成形され、形態と法量から3群に分かれる。安産・多産の象徴である犬をモチーフとすることなどから、安産のお守りとする説もある。

(江浦)

527



527 瓦質土管 江戸
津田城遺跡 (上左:MD12.2・H45.9) 文献.556

津田城遺跡における導水施設において使用されたものである。形状には大小様々なものが存在するが、大別すると円筒形の胴部に玉縁をつけて接続するタイプのものと円筒形の胴部にソケットをつけて接続するタイプのものにわかれる。内部には布目痕、筵痕が残されており、木型を使用する瓦生産を応用した製法であることが推定される。

(小暮)

528 漆器（椀） 安土・桃山 大坂城跡 (RD11.4・H4.8) 文献.557

三の丸南半部の豊臣後期に属する井戸より土器や陶磁器類とともにまとまって出土。17世紀前半より出現する器形で非常に高い高台から浅く外彎気味に口縁が立ち上がる。内外面に黒漆を塗り、脚部から身部の外面一体に朱漆の線描きで笹や草花の絵付けを施す。漆器は食器として一般化していたが、本資料は一般的なものではなく高級食器に位置付けられる。（小暮）



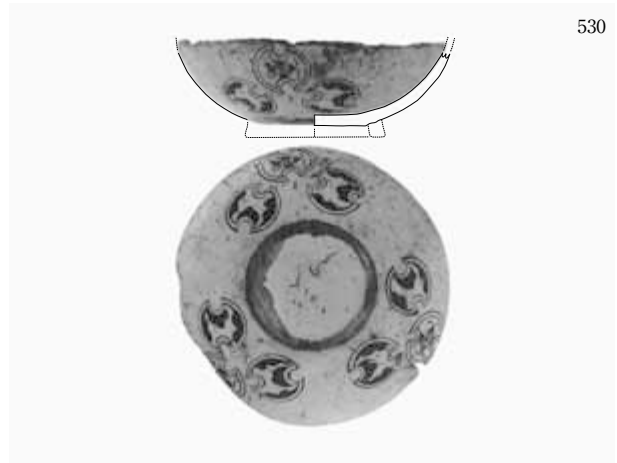
529 漆器（椀） 安土・桃山 大坂城跡 (rd6.0・h4.5) 文献.557

No.528と同じく豊臣後期に属する井戸より、土器や陶磁器類とともに出土した資料の一つ。胴部は低めの高台（推定）からやや高めに深く立ち上がり、器壁は薄い。内外面に黒漆を塗り、外面には朱漆で同心円状と縦方向の曲線状の線描を網目のように施し、さらに花文を配す。底部は中央部が欠損しているが、外面に花文を施しているのがわかる。（小暮）



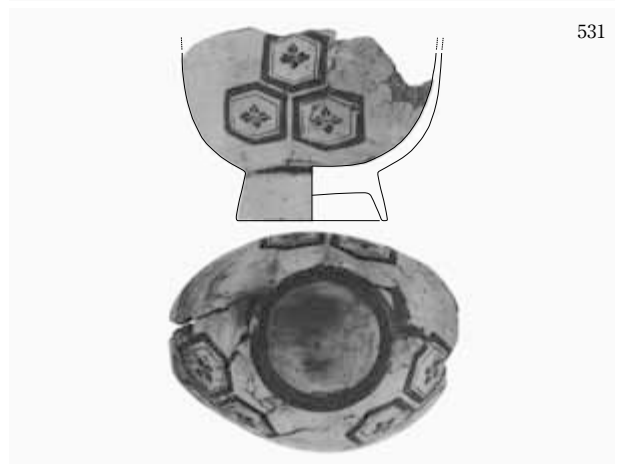
530 漆器（椀） 安土・桃山 大坂城跡 (RD12.9・BD6.6) 文献.557

三の丸北半部地区の豊臣後期に属する遺構面より出土。胴部は低い高台からやや浅めに立ち上がり、全体的に器壁は厚い。内外面に赤漆を塗り、外面には「三つ盛り変わり分銅」を描く。1615年大坂城落城時に一括投棄された漆器群と器形、文様とも同じ特徴を持ち、当時の一般的な漆器といえよう。（小暮）



531 漆器（椀） 安土・桃山 大坂城跡 (RD14.0・BD4.4) 文献.557

三の丸北半部地区の豊臣前期に属する土坑より出土。高い高台を有し、胴部は深めに高く立ち上がる。器厚は口縁部が薄く底部に近づくにつれ厚くなる。このような高い高台をもつ椀は16世紀以降に出現し、その背景に青磁碗の影響を説く意見もある。内外面に赤漆を塗り、外面には「三つ盛り亀甲に花菱文様」を描く。（小暮）



532



532 漆ヘラ 安土・桃山
大坂城跡 (右端:W6.2・L20.8・T0.2) 文献557

大坂城三の丸の西端、慶長三年(1598)の三の丸築造以前の地層で出土した。この一画は三の丸築造の際に船場方面に移された町屋があったと考えられており、鋳物屋や大工、商家もあった。日本列島の漆製品は縄文時代から知られているが、漆を塗布する際のヘラの出土は、7世紀頃が上限のようで、形態的にも大きな変化はみられないようである。(藤田)

533



533 軽子(カルコ) 安土・桃山
大坂城跡 (L4.3・T0.6) 文献557

No.532と同じく、三の丸築造以前に町屋があった地区で出土した。大工道具の一つで、木材に直線的に墨入れをする際に墨壺から繰り出す墨糸の一端を木に固定する錐状の部品。墨壺の本体は見つかっていない。墨壺は遅くとも奈良時代には用いられており、正倉院宝物の伝世品のほかに発掘出土例では、奈良県平城京や兵庫県猪名寺などがある。(藤田)

534



534 墨書のある木蓋 安土・桃山
大坂城跡 (D9.8・T0.5) 文献334

三の丸の西端には佐竹義宣の家紋瓦をとまなう武家屋敷があり、その一画で検出された石垣つきの池状湿地の中から箸や下駄、陶磁器、漆器など多くの廃棄物とともに出土した。木蓋には「生玉 観音院 白砂糖 進上」と4行書きの墨書がある。木蓋の大きさからだけでは献上された容量は推測しがたいが、大名へのよしみを頼んだ品であろうか。(藤田)

535

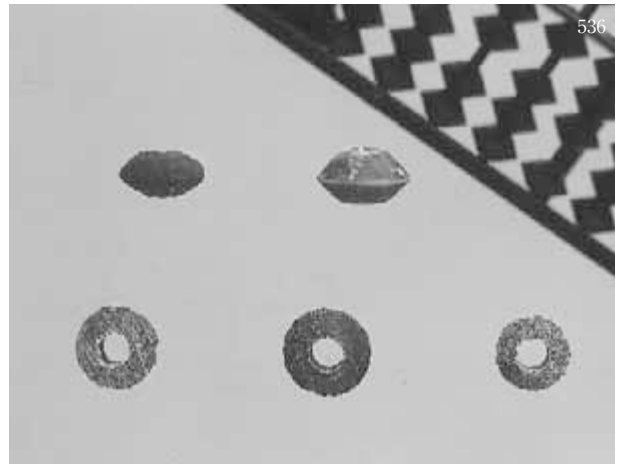


535 荷札木筒 安土・桃山
大坂城跡 (W2.8・L10.6・T0.4) 文献334

墨書のある蓋と同じ三の丸築造後に作られた池状湿地堆積物中から出土。荷札木筒は木の札に文字どおり荷造りされた品の内容物や送り元などを記したもので、表に「すし ミののおせノ」、裏に「三拾入□た」と墨書されている。小瀬郷=岐阜県関市辺りで作られた鮎のなれ鮎のことと思われる。江戸時代には將軍家にも送られた記録がある。(藤田)

536 算盤玉 安土・桃山
大坂城跡 (下左:W1.9・T1.1) 文献.557

大坂城三の丸築造以前にあった町屋が取り壊された整地層から出土。算盤の原理は西アジアから伝わり、中国でその原形が発明されて、16世紀 (=戦国時代)頃に日本に伝わったという。三の丸跡出土例のように断面形が稜線をもつ菱形の玉形は、日本で工夫されたものらしい。伝世品は知られているが、出土品としては時代的にも古く稀少例である。(藤田)



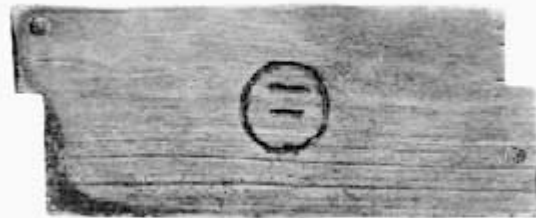
536

537 枡 安土・桃山
大坂城跡 (H3.4・W8.3・T0.5) 文献.557

豊臣大坂城段階の包含層等から出土した8点の枡の側板のうちの1点。材質はヒノキ。

側面および底面には竹釘もしくは釘穴が残る。推定容量は182 cm³であり、液体用の一合枡と考えられる。豊臣期の度量衡を知る上においてきわめて重要な資料である。

(江浦)



537

538 桿秤と分銅 安土・桃山
大坂城跡 (中段の棹:W0.6・L20.0) 文献.557

豊臣大坂城段階の遺構・包含層から出土。桿秤は桿のみが箱に収められた状態で出土した。その他、桿秤では木瓜、天秤関連では繭形分銅などが出土している。とくに、桿秤については当該期の資料が少なく、きわめて重要な位置を占めている。

(江浦)



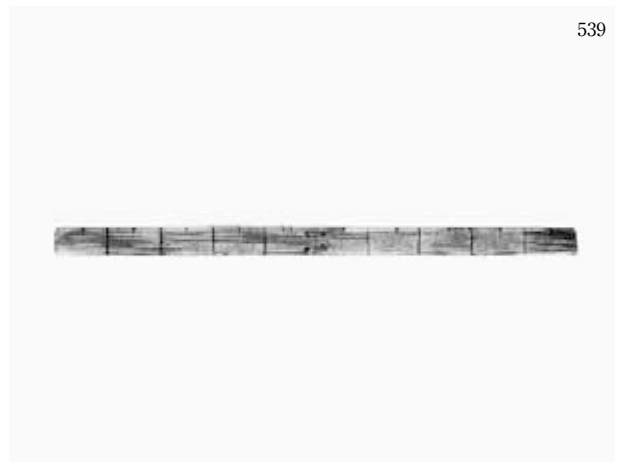
538

539 尺度 安土・桃山
大坂城跡 (W2.1・L36.7・T0.9) 文献.557

豊臣前期の包含層から出土。材質はスギ。1寸と5分の目盛を線刻し、5寸の部分は「×」状の刻みがある。

この尺度は当時の標準尺である曲尺の1.2倍を測り、裁衣尺のうちの呉服尺と呼ばれるものであり、計量史を考える上で貴重な資料である。

(江浦)



539

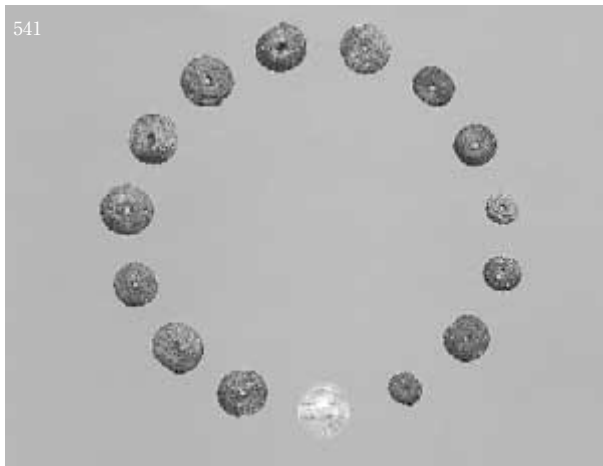
540



540 櫛 安土・桃山
大坂城跡 (下中: W5.4・L9.8・T1.6) 文献557

豊臣大坂城時代の井戸・土坑・包含層より出土した。いずれも挽歯技法による木製の櫛である。歯の間隔が密で髪の毛の汚れをとるための「梳櫛」と歯が粗い髪を梳くための「解櫛」がある。持ち手にあたる棟は丸みを帯びたものと直線的なものがある。漆塗りの櫛の点数は少ない。長さ3寸(約9cm)前後、2寸(約6cm)前後が多く、一定の規格で作られているようだ。(野口)

541



541 数珠玉 安土・桃山
大坂城跡 (水晶母珠: D1.0) 文献557

豊臣大坂城時代の包含層から出土。一括して出土したのではなく、一綴りの数珠ではないと考えられる。下段中央のものは水晶製の母珠である。球形で幅0.2cmの穿孔がT字状に施されている。他は木製で直径1.0cm弱と母珠ともほぼ同じ大きさである。横から見るとやや扁平な楕円形になる。

(野口)

542

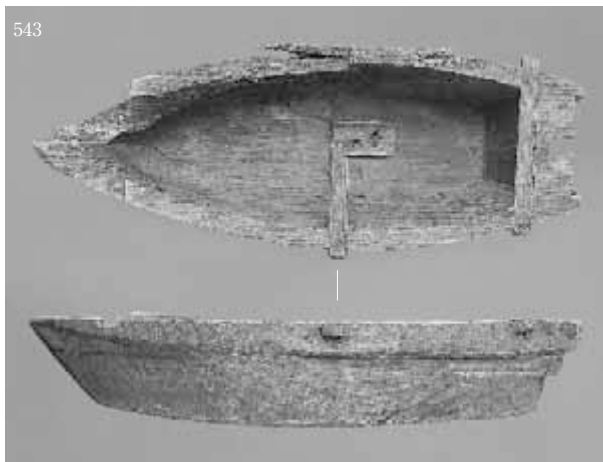


542 人形 安土・桃山
大坂城跡 (H8.8・W2.9・T3.3) 文献557

豊臣大坂城時代前期の包含層より出土。烏帽子をかぶった男性のカシラである。一木作りで立体的な烏帽子、笑ったような表情の目鼻口、側面には耳を丁寧に表現している。左側面には烏帽子から底部に至るまで細かい刻みが施されている。直径1.8cm、深さ3.3cmの円錐形のカマ穴が穿たれており、この部分に棒を差し込み、胴串と合体させる。

(野口)

543



543 舟形木製品 安土・桃山
大坂城跡 (H3.9・W8.4・L21.0) 文献557

土坑から出土。船体は柾目の木材を削り抜いた一木作りで、船梁は別体で作られ、木釘で固定されている。後方の船梁には舵を設置するためのものと考えられる削り込みがあり、内底面には長方形の薄板が固定されている。船体、船底の厚さは0.95cm。右舷前方を欠く。用途は不明だが、大きさから玩具などと考えられる。

(野口)

544 羽子板 安土・桃山
大坂城跡 (手前:W6.8・L28.0) 文献.557

土坑、井戸、包含層から出土。現代では、正月でさえも羽子板遊びに興じる子供の姿を見かけることが少なくなりましたが、豊臣時代には羽子板は胡鬼板とも呼ばれ、胡鬼の子(羽子)を打ち合うことで病気や災難をもたらす鬼を打ち払う魔除けの意味があった。

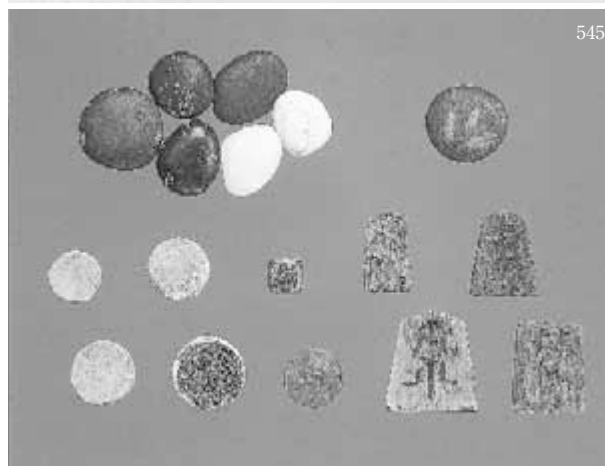
出土した羽子板はスギとヒノキで作られており、うち2本には赤い彩色が施されている。(國乘)



544

545 碁石・雙六駒・サイコロ・将棋駒 安土・桃山
大坂城跡 (右下飛車:W2.8・L3.2) 文献.557

土坑、包含層からの出土。上半は碁石。黒石は那智黒を用い、右上の黒石には金泥の印がつく。左下の5点は絵雙六とは異なり、将棋のように盤上で駒を進める盤雙六の駒。梅鉢状に小孔を開けている。中央の1点はサイコロで、材質は動物牙の可能性がある。右下は将棋の駒。駒尻がたいへん厚く漆で文字が書かれており、水無瀬駒系とよばれる高級品が多い。(國乘)



545

546 墨書のある貝(貝合せの貝) 安土・桃山
大坂城跡 (W5.8・L4.8) 文献.557

包含層から出土。ハマグリの内面に大きく「百」と墨書されている。

貝合せは、平安時代に貴族の遊びとして始まった、二枚貝の貝殻を合わせる遊びである。平安時代末期からは庶民の間にも広まった。その後、貝の裏面に絵や歌が書かれるようになり、近世には嫁入り時の持参品にもなった。(國乘)

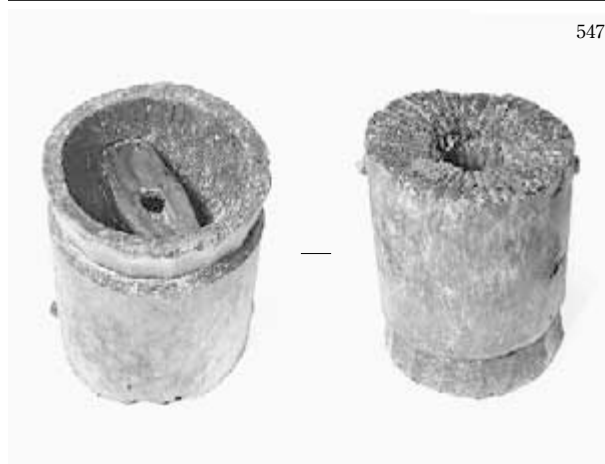


546

547 木製搗臼 近世
太井遺跡 (D33.6・h41.0) 文献.415

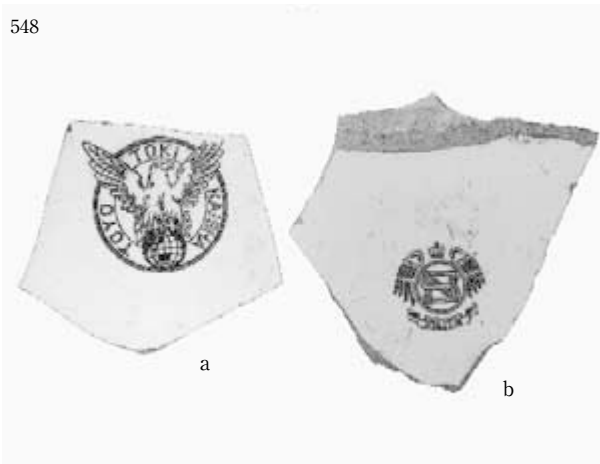
灌漑用の素掘り井戸の底面から出土。搗臼は上臼と下臼からなり、上臼を回転させて使用する脱穀用の農具である。当資料はその上臼にあたる。

下臼と接する下面には44条の刻み目が放射状に付けられており、使用のためかなり摩滅している。また、上面には栈木がはめ込まれており、その隙間には籾殻が遺存している。(清水)



547

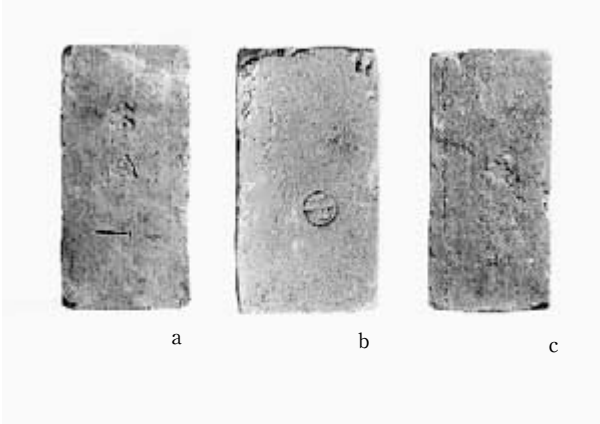
548



548 東洋陶器製衛生陶器片 昭和
大坂城跡 (a:w5.3・ℓ4.5,b:w9.7・ℓ8.7) 文献557

a はし尿浄化槽出土の小便器片。戦時中の敵国語規制により、商標の「C O L T D」が「K A I S H A」に差し替えられたもので昭和18～23年に限定される。b は表土層出土の大便器片。類例は、旧日本郵船小樽支店支店長専用トイレや福島県天鏡閣にも見られるが、表現をやや異にし、模倣品の可能性がある。遺構の使用開始期を知る上での貴重な資料である。(市村)

549



549 煉瓦 明治～昭和
大坂城跡 (a:W22.5・L10.8・T5.8) 文献557

a は包含層出土。「○」は大阪窯業株式会社の工場印(社印)、「⊔」「⊓」は職人の作業量を確認する職人印(責任印)。大正元年以前。b は積まれた状態で出土。「⊕」がいずれの工場印かは不明。だが、小口面への刻印のため明治のものとして推定される。c も積まれた状態で出土。「☆」がいずれの工場印かは不明。これらの印からは供給体制や使用法が窺える。(市村)

550



550 旧日本陸軍九〇式鉄帽 昭和
志紀遺跡 (D27～28/23～24・H15) 文献558

土坑などから出土。3点の内面縁には「大」「藤原」「高木」の記銘がそれぞれ見られ、後二者は使用者を示すものと思われる。そのうち「高木」銘は書き直されており、複数回の使用があったと思われる。鉄帽の使用状況を知る上で興味深い資料といえる。なお周辺一帯には戦時中旧陸軍第十六飛行師団がおかれており、これに関わる戦後の廃棄品と思われる。(市村)

551

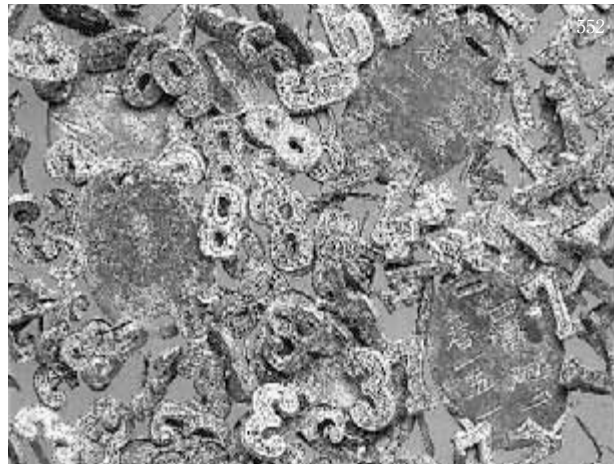


551 鉄帽・防毒面吸収缶 昭和
大坂城跡 (右端吸収缶:BD13/6.6・H18.7) 文献557

いずれも埋桶から出土。左3点はNo.550と同様の旧日本陸軍九〇式鉄帽であり、いずれも頂部を意図的に穿孔、土坑内に並置している。一部の後方内面には神戸製鋼製であることを示す「⊠」の刻印がある。水筒のような右3点は藤倉ゴム工業製の陸軍九一式防毒面吸収缶。土坑中からはこれに付随する防毒面のレンズ等の出土も見られ、いずれも戦後の廃棄品。(市村)

552 認識票・襟徽章 昭和
大坂城跡 (認識票：W3.4・L4.6) 文献.557

埋桶から出土。認識票はいずれも真鍮製で打ち抜きである。右側が部隊号、左側が個人番号を示すと思われる。素材・製法等から昭和10～16年に使用されたもの。襟徽章は3,177点出土し、1が1,577点、3が49点、4が13点、6が1,445点、7が54点、8が32点で、第四師団隷下歩兵第八聯隊、同三七聯隊、同六一聯隊の各聯隊番号に関するものであろう。(市村)



553

553 米軍認識票 昭和
大坂城跡 (W2.8・L5.1) 文献.557

土坑から出土。212枚が銅線で束ねられ、方向を合わせて出土。表記方法は、名前・階級・所属・国籍・死亡年月日を記すものと、名前と階級・認識番号のみを記すものに大別される。2枚を1組とし、少なくとも102名分が確認された。なお、認識票に記された名前のおお半が横浜の英連邦戦没者墓地における英軍将兵の墓碑銘と一致する。(市村)



554

554 L型フラッシュライト他 昭和
大坂城跡 (a:L19.0) 文献.557

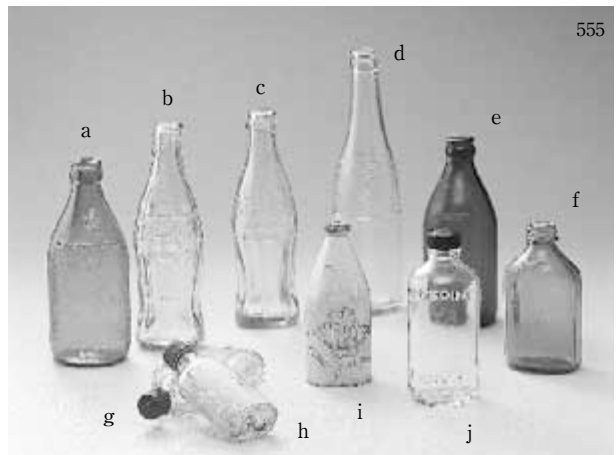
土坑から出土。aはL型フラッシュライト。TL-122-Cの刻印が見られる。C呼称は材質がプラスチックになってからであり、本品もこれに矛盾しないが、フラッシュライトに本来見られる点滅灯部分がないため、軍装品ではない可能性もある。bは「☆」印入りのジープ形の鉛筆削り。cは防水マッチケース。いずれも、戦後の進駐軍によるものと考えられる。(市村)



555

555 硝子瓶各種 昭和
大坂城跡 (i:H13.0) 文献.557

土坑から出土。a・eはビール瓶で、eは茶色だがaは緑色でビール瓶としては珍しい。b・cはココロアの、dはペプシコーラの瓶。fはSQIBB社のおそらく薬瓶。g・hは内面に顔料の付着が見られるおそらく化粧瓶、iはアフターシェーブローションの瓶、jはリステリンの瓶。瓶はOWENS社製が多い。いずれも進駐軍の日常的な廃棄品と考えられる。(市村)



文 献 目 録

(財)大阪文化財センター、(財)大阪府埋蔵文化財協会、(財)大阪府文化財調査研究センター、および(財)大阪府文化財センターが発行した文献もしくは発行を予定する文献を年次順に配列。ただし、現地説明会資料等のパンフレット類は除外した。

(セ)：(財)大阪文化財センター発行、(協)：(財)大阪府埋蔵文化財協会発行、(調セ)：(財)大阪府文化財調査研究センター発行、(新セ)：(財)大阪府文化財センター発行

1972年度		【逐次刊行物】	
【報告書類】		036 大阪文化誌 第5号	(セ)
001 大阪府泉南郡阪南町自然田地区埋蔵文化財分布調査報告書	(セ)	037 大阪文化誌 第6号	(セ)
002 主要地方道枚方・富田林線・泉佐野線バイパス(大阪外環状線)予道路線内埋蔵文化財分布調査報告書	(セ)	1977年度	
003 柏原市本堂所在亀の瀬本堂地区内埋蔵文化財分布調査報告書	(セ)	【報告書類】	
1973年度		038 藤井寺市立道明寺中学校L教室新設工事に伴う	
【報告書類】		林遺跡発掘調査報告書	(セ)
004 大阪府和泉市内田町及び唐国町所在埋蔵文化財試掘調査報告書	(セ)	039 南河内道路に関する第3回埋蔵文化財予察調査報告書	(セ)
005 大阪府柏原市内高井田所在村本建設株式会社開発計画地区内埋蔵文化財分布調査概要報告書	(セ)	040 寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事に伴う	
006 亀の瀬地すべり対策工事に伴う柏原市雁戸尾畑地区埋蔵文化財分布調査報告書	(セ)	亀井遺跡発掘調査報告書	(セ)
007 近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内亀井遺跡他2遺跡第1次発掘調査報告書	(セ)	041 大阪府管水道事業第6次拡張事業揚送水管布設工事に伴う	
008 大阪府柏原市高井田所在遺跡試掘調査報告書	(セ)	埋蔵文化財発掘調査報告書	
【逐次刊行物】		－高槻市二子山古墳・土保山古墳周濠確認のための調査－	(セ)
009 大阪文化誌 第1号	(セ)	042 応神陵茶山遺跡発掘調査報告書	(セ)
【その他】		【逐次刊行物】	
010 和泉の古代生活	(セ)	043 大阪文化誌 第7号	(セ)
1974年度		044 大阪文化誌 第8号	(セ)
【報告書類】		045 大阪文化誌 第9号	(セ)
011 大阪府池田市伏尾地区埋蔵文化財分布調査報告書	(セ)	046 大阪文化誌 第10号	(セ)
012 中央環状線内埋蔵文化財試掘調査報告書	(セ)	1978年度	
013 泉南郡熊取町埋蔵文化財分布調査報告書	(セ)	【報告書類】	
014 近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内瓜生堂遺跡他5遺跡第1次発掘調査中間報告書	(セ)	047 長原	(セ)
015 近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内遺跡第1次発掘調査報告書	(セ)	048 池上遺跡 土器編	(セ)
016 近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内瓜生堂遺跡他5遺跡第1次発掘調査報告書	(セ)	049 池上遺跡 石器編Ⅰ	(セ)
017 都市計画道路松原～泉大津線建設予定地内遺跡試掘分布調査報告書	(セ)	050 池上遺跡 石器編Ⅱ	(セ)
【逐次刊行物】		051 池上遺跡 木器編Ⅰ	(セ)
018 大阪文化誌 第2号	(セ)	052 池上遺跡 木器編Ⅱ	(セ)
019 大阪文化誌 第3号	(セ)	053 淡輪・箱作海岸地区海岸環境整備事業に伴う	
【その他】		田山遺跡試掘調査報告書	(セ)
020 文化財写真集－大阪の文化財(南部)	(セ)	054 太子町西山地区特定土地地区画整理事業予定地内埋蔵文化財試掘調査報告書	(セ)
1975年度		055 富田林市市道伏見堂東西線新設工事予定地内明八塚周濠部試掘調査報告書	(セ)
【報告書類】		【逐次刊行物】	
021 大阪瓦斯河内ラインガス導管埋設予定地内久宝寺遺跡、城山遺跡試掘調査報告書	(セ)	056 大阪文化誌11号	(セ)
022 日本住宅公団鈴の宮団地開発計画に伴う蜂田鈴の宮遺跡発掘調査報告書	(セ)	1979年度	
023 寺門団地他3団地開発予定地内埋蔵文化財試掘調査報告書	(セ)	【報告書類】	
024 美原町真福寺所在遺跡試掘調査報告書	(セ)	057 大阪府都市計画街路貝塚中央線新設工事予定地内	
025 国道166号線バイパスに関する第2回埋蔵文化財予察調査報告書	(セ)	脇浜・畠中・石才近義堂遺跡試掘調査報告書	(セ)
026 大阪府道高速大阪松原線建設に伴う瓜破遺跡試掘調査報告書	(セ)	058 池上・四ツ池遺跡 自然遺物編	(セ)
027 都市計画道路貝塚中央線建設予定地内埋蔵文化財試掘調査報告書	(セ)	059 瓜生堂	(セ)
028 大和川環境整備事業柏原地区高水敷整正工事に伴う船橋遺跡試掘調査報告書	(セ)	【逐次刊行物】	
029 泉南郡阪南町鳥取地区埋蔵文化財分布調査報告書	(セ)	060 大阪文化誌 第12号	(セ)
【逐次刊行物】		061 大阪文化誌 第13号	(セ)
030 大阪文化誌 第4号	(セ)	【その他】	
1976年度		062 大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第1回	(セ)
【報告書類】		1980年度	
031 大和川環境整備事業柏原地区高水敷整正工事に伴う船橋遺跡試掘調査報告書Ⅱ	(セ)	【報告書類】	
032 泉大津助松団地開発予定地内埋蔵文化財試掘調査報告書	(セ)	063 亀井・城山	(セ)
033 猪名川流域下水道原田処理場拡張用地内埋蔵文化財試掘調査報告書	(セ)	064 巨摩・瓜生堂	(セ)
034 如意谷(2)事業地区における埋蔵文化財発掘調査概略報告書	(セ)	【その他】	
035 みどり山古墳群試掘調査報告書	(セ)	065 大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第2回	(セ)
		066 大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第3回	(セ)
		1981年度	
		【報告書類】	
		067 亀井遺跡	(セ)
		【逐次刊行物】	
		068 大阪文化誌 第14号	(セ)
		【その他】	
		069 大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第4回	(セ)
		070 大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第5回	(セ)
		071 図録 考古展「河内平野を掘る」	(セ)
		1982年度	
		【報告書類】	
		072 大堀城跡発掘調査報告書	(セ)

073	田山遺跡 【逐次刊行物】	(セ)	137	大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第12回	(セ)
074	大阪文化誌 第15号 【その他】	(セ)	138	大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第13回	(セ)
075	大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第6回	(セ)	139	近畿地方埋蔵文化財研究会資料 第3回	(セ)
076	大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第7回	(セ)	140	文化財講座資料集 1985年度	(セ)
077	シンポジウム 邪馬台国の謎を解く	(セ)	141	河内の遺宝	(セ)
078	10年のあゆみ	(セ)	142	泉州の遺跡－(財)大阪府埋蔵文化財昭和60年度発掘調査成果展	(協)
1983年度			1986年度		
【報告書類】			【報告書類】		
079	大堀城	(セ)	143	新家 (その1)	(セ)
080	西岩田	(セ)	144	久宝寺北 (その1～3)	(セ)
081	若江北	(セ)	145	久宝寺南 (その1)	(セ)
082	山賀 (その1)	(セ)	146	久宝寺南 (その2)	(セ)
083	山賀 (その2)	(セ)	147	亀井 (その3)	(セ)
084	山賀 (その3)	(セ)	148	丹上遺跡 (その4・6)	(セ)
085	山賀 (その4)	(セ)	149	太井遺跡 (その1)	(セ)
086	友井東 (その2)	(セ)	150	太井遺跡 (その2)	(セ)
087	亀井	(セ)	151	太井遺跡 (その3)	(セ)
088	新家 (その2)	(セ)	152	福田遺跡 (その1)	(セ)
089	新家 (その3)	(セ)	153	小阪遺跡 (その2)	(セ)
090	巨摩・若江北 (その2)	(セ)	154	小阪遺跡 (その3)	(セ)
091	佐堂 (その2) I	(セ)	155	小阪遺跡 (その4)	(セ)
092	三田市地区特定土地区画整理事業施工地区内 片添遺跡第1次発掘調査報告書	(セ)	156	河内平野遺跡群の動態 I	(セ)
093	府道松原泉大津関連遺跡発掘調査報告書 I	(セ)	157	福瀬遺跡・仏並遺跡 事業報告 2	(協)
094	府道松原泉大津関連遺跡発掘調査報告書 II	(セ)	158	脇浜遺跡 報告書第6輯	(協)
095	観音寺遺跡第一次発掘調査概要報告書	(セ)	159	畠中遺跡 報告書第7輯	(協)
096	成合遺跡第1次発掘調査概要	(セ)	160	芝ノ垣外遺跡 報告書第8輯	(協)
【逐次刊行物】			161	阪南丘陵埋蔵文化財 報告書第9輯	(協)
097	大阪文化誌 第16号	(セ)	162	滑瀬遺跡 報告書第10輯	(協)
098	大阪文化誌 第17号	(セ)	163	軽部地西遺跡 報告書第11輯	(協)
【その他】			164	信太山遺跡 報告書第12輯	(協)
099	大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第8回	(セ)	165	大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第14回	(セ)
100	大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第9回	(セ)	166	大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第15回	(セ)
101	近畿地方埋蔵文化財研究会資料 第1回	(セ)	167	近畿地方埋蔵文化財研究会資料 第4回	(セ)
1984年度			168	文化財講座資料集 1986年度	(セ)
【報告書類】			169	発掘速報展 河内鑄物師の周辺	(セ)
102	亀井遺跡 II	(セ)	170	第2回 泉州の遺跡－昭和61年度発掘調査成果展－	(協)
103	友井東 (その1)	(セ)	1987年度		
104	佐堂 (その1)	(セ)	【報告書類】		
105	美園	(セ)	171	福田遺跡 (その2)	(セ)
106	成合寺	(セ)	172	丹上遺跡 (その3・5)	(セ)
【逐次刊行物】			173	日置荘遺跡 (その1)	(セ)
107	大阪文化誌 第18号	(セ)	174	日置荘遺跡 (その2)	(セ)
【その他】			175	日置荘遺跡 (その3)	(セ)
108	大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第10回	(セ)	176	日置荘遺跡 (その4)	(セ)
109	大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第11回	(セ)	177	小阪遺跡 (その5)	(セ)
110	近畿地方埋蔵文化財研究会資料 第2回	(セ)	178	小阪遺跡 (その6・6-2)	(セ)
111	文化財講座資料集 1984年度	(セ)	179	小阪遺跡 (その7・7-2)	(セ)
112	近畿自動車道大阪線遺物整理事業基本マニュアル	(セ)	180	箕土路遺跡 報告書第13輯	(協)
1985年度			181	向井代遺跡 報告書第14輯	(協)
【報告書類】			182	三田遺跡 報告書第15輯	(協)
113	上原地区区画整理事業予定地内分布調査報告書	(セ)	183	金剛寺遺跡 報告書第16輯	(協)
114	佐堂 (その2) - II 他	(セ)	184	脇浜遺跡 II 報告書第17輯	(協)
115	長原 (その2)	(セ)	185	箱作ミノバ石切場跡 報告書第18輯	(協)
116	大堀城跡 II・III	(セ)	186	貝掛遺跡 報告書第19輯	(協)
117	山賀 (その5・6)	(セ)	187	井山城跡 報告書第20輯	(協)
118	久宝寺南 (その3)	(セ)	188	平井遺跡 報告書第21輯	(協)
119	亀井北 (その1)	(セ)	189	山直中遺跡 報告書第22輯	(協)
120	亀井北 (その2)	(セ)	190	西大路遺跡 報告書第23輯	(協)
121	亀井北 (その3)	(セ)	191	山ノ内遺跡 B・山直北遺跡 報告書第24輯	(協)
122	亀井 (その2)	(セ)	192	上フジ遺跡 報告書第25輯	(協)
123	城山 (その1)	(セ)	193	石才南遺跡 報告書第26輯	(協)
124	城山 (その2)	(セ)	194	仏並遺跡 II 報告書第27輯	(協)
125	城山 (その3)	(セ)	【その他】		
126	松原市観音寺遺跡第2次発掘調査概要	(セ)	195	大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第16回	(セ)
127	丹上遺跡 (その1)	(セ)	196	大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第17回	(セ)
128	丹上遺跡 (その2)	(セ)	197	近畿地方埋蔵文化財研究会資料 第5回	(セ)
129	真福寺遺跡	(セ)	198	文化財講座資料集 1987年度	(セ)
130	小阪遺跡 (その1)	(セ)	199	遺跡調査基本マニュアル	(セ)
131	向井池遺跡 報告書第1輯	(協)	200	山直郷とその周辺	(協)
132	別所遺跡 報告書第2輯	(協)	201	第3回 泉州の遺跡－昭和62年度発掘調査成果展－	(協)
133	阪南町内埋蔵文化財 報告書第3輯	(協)	1988年度		
134	西大路遺跡・今木庵寺遺跡 事業報告 1	(協)	【報告書類】		
135	堺砲台 報告書第4輯	(協)	202	小阪遺跡 (その6-3)	(セ)
136	仏並遺跡 報告書第5輯	(協)	203	小阪遺跡 (その7-3)	(セ)
【その他】			204	小阪遺跡 (その8・8-2)	(セ)
			205	小阪遺跡 (その9)	(セ)
			206	小阪遺跡 (南その1)	(セ)

207	日置荘遺跡 (その5)	(七)	279	母山遺跡	報告書第67輯	(協)	
208	虫取遺跡	報告書第28輯	(協)	280	中間遺跡	報告書第68輯	(協)
209	和泉寺遺跡	報告書第29輯	(協)	281	脇浜遺跡Ⅲ	報告書第69輯	(協)
210	橋本遺跡	報告書第30輯	(協)		【逐次刊行物】		
211	清見遺跡	報告書第31輯	(協)	282	（助）大阪文化財センター通信 No.4・5	(セ)	
212	湊海岸遺跡	報告書第32輯	(協)	283	（助）大阪文化財センター通信 No.6	(セ)	
213	岡中西遺跡	報告書第33輯	(協)		【その他】		
214	山ノ内遺跡A	報告書第34輯	(協)	284	大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第22回	(セ)	
215	滑瀬遺跡Ⅱ	報告書第35輯	(協)	285	大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第23回	(セ)	
216	今木遺跡	報告書第36輯	(協)	286	近畿地方埋蔵文化財研究会資料 第8回	(セ)	
217	山田海岸遺跡	報告書第37輯	(協)	287	文化財講座資料集 1990年度	(セ)	
218	羽倉崎遺跡	報告書第38輯	(協)	288	（助）大阪文化財センター考古学ブックス-考古学者の考古学	(セ)	
219	福瀬遺跡	報告書第39輯	(協)		1991年度		
220	高向遺跡	報告書第40輯	(協)		【報告書類】		
221	陶邑・大庭寺遺跡	報告書第41輯	(協)	289	小阪遺跡	(セ)	
	【逐次刊行物】			290	大坂城跡の発掘調査 2	(セ)	
222	（助）大阪文化財センター通信 No.1	(セ)	291	池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅵ	(セ)		
223	（助）大阪文化財センター通信 No.2	(セ)	292	池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅶ	(セ)		
224	（助）大阪文化財センター通信 No.3	(セ)	293	池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅷ	(セ)		
225	大阪府埋蔵文化財協会研究紀要 1	(協)	294	河内平野遺跡群の動態Ⅴ	(セ)		
	【その他】		295	軽部池西遺跡Ⅲ	報告書第70輯	(協)	
226	大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第18回	(セ)	296	池田寺遺跡Ⅳ	報告書第71輯	(協)	
227	大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第19回	(セ)	297	陶邑・伏尾遺跡AⅡ	報告書第72輯	(協)	
228	近畿地方埋蔵文化財研究会資料 第6回	(セ)	298	吉井遺跡	報告書第73輯	(協)	
229	文化財講座資料集 1988年度	(セ)	299	兵主廃寺跡	報告書第74輯	(協)	
230	大阪文化財論集	(セ)		【逐次刊行物】			
231	第4回 泉州の遺跡-昭和63年度発掘調査成果展-	(協)	300	（助）大阪文化財センター通信 No.7	(セ)		
	1989年度		301	大阪文化財研究 創刊号	(セ)		
	【報告書類】		302	大阪文化財研究 第2号	(セ)		
232	太井遺跡 (その4ほか)・日置荘遺跡 (その1-2)	(セ)		【その他】			
233	日置荘遺跡 (その2-2, その6)	(セ)	303	第4回 池島・福万寺遺跡	(セ)		
234	小阪遺跡 (南その2)	(セ)	304	大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第24回	(セ)		
235	貝の池遺跡	事業報告 3	(協)	305	大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第25回	(セ)	
236	池園遺跡	報告書第42輯	(協)	306	近畿地方埋蔵文化財研究会資料 第9回	(セ)	
237	池田寺遺跡	報告書第43輯	(協)	307	文化財講座資料集 1991年度	(セ)	
238	伏尾遺跡B	報告書第44輯	(協)	308	図録 大坂城跡の調査 1	(セ)	
239	二俣池北遺跡・上フジ遺跡	報告書第45輯	(協)	309	第6回 泉州の遺跡-平成2年度発掘調査成果展-	(協)	
240	平井遺跡Ⅱ	報告書第46輯	(協)	310	日根荘とその周辺-空港関連事業の調査から-	(協)	
241	三軒屋遺跡	報告書第47輯	(協)	311	シンポジウム日根荘総合調査が語るもの	(協)	
242	高向遺跡Ⅱ	報告書第48輯	(協)		-中世荘園世界の解明をめざして-	(協)	
243	福瀬遺跡Ⅱ	報告書第49輯	(協)		1992年度		
244	陶邑・大庭寺遺跡Ⅱ	報告書第50輯	(協)		【報告書類】		
245	軽部池西遺跡Ⅱ	報告書第51輯	(協)	312	巨摩・若江北 (その3)	(セ)	
246	山直中遺跡Ⅱ	報告書第52輯	(協)	313	新家 (その5)	(セ)	
247	小田遺跡	報告書第53輯	(協)	314	河合遺跡	(セ)	
248	池田寺遺跡Ⅱ	報告書第54輯	(協)	315	伏尾遺跡Ⅱ	(セ)	
249	唐国泉谷遺跡	報告書第55輯	(協)	316	都市計画道路大阪モノレール建設に伴う	(セ)	
250	大場遺跡	報告書第56輯	(協)		和道遺跡発掘調査概要報告書	(セ)	
251	上町遺跡	報告書第57輯	(協)	317	一般府道本堂高井田線改良工事に伴う	(セ)	
252	水込遺跡	報告書第58輯	(協)		青谷地区埋蔵文化財分布調査報告書	(セ)	
	【その他】			318	池島・福万寺遺跡発掘調査概要ⅩⅢ	(セ)	
253	大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第20回	(セ)	319	河内平野遺跡群の動態Ⅵ	(セ)		
254	大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第21回	(セ)		【逐次刊行物】			
255	近畿地方埋蔵文化財研究会資料 第7回	(セ)	320	（助）大阪文化財センター通信 No.8	(セ)		
256	文化財講座資料集 1989年度	(セ)	321	（助）大阪文化財センター通信 No.9	(セ)		
257	第5回 泉州の遺跡-昭和63年度発掘調査成果展-	(協)	322	大阪文化財研究 第3号	(セ)		
258	企画展 第2回発掘速報展-堺市日置荘・福田・小阪遺跡-	(セ)	323	大阪文化財研究 第4号	(セ)		
259	埴輪窯の検討・発表会資料 大阪の埴輪窯	(セ)	324	大阪文化財研究 20周年記念増刊号	(セ)		
	1990年度			【その他】			
	【報告書類】		325	大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第26回	(セ)		
260	日置荘遺跡 (その2-3, その6-2)	(セ)	326	大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第27回	(セ)		
261	小阪遺跡 (南その2-2)	(セ)	327	近畿地方埋蔵文化財研究会資料 第10回	(セ)		
262	大庭寺遺跡Ⅰ	(セ)	328	文化財講座資料集 1992年度	(セ)		
263	大庭寺遺跡Ⅱ・伏尾遺跡	(セ)	329	図録 大坂城跡の発掘調査 2	(セ)		
264	大坂城跡の発掘調査 1	(セ)	330	みる・きく・ふれる原始・古代のコメ作り	(セ)		
265	池島・福万寺遺跡発掘調査概要	(セ)		-農耕の技術とまつり-			
266	池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅱ	(セ)	331	図録 農耕の技術とまつり -池島・福万寺遺跡の調査から-	(セ)		
267	池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅲ	(セ)	332	20年のあゆみ	(セ)		
268	池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅳ	(セ)	333	第7回 泉州の遺跡-平成3年度発掘調査成果から-	(協)		
269	池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅴ	(セ)		1993年度			
270	河内平野の遺跡群の動態Ⅱ	(セ)		【報告書類】			
	-北遺跡群 旧石器・縄文・弥生時代前期編-	(セ)	334	大坂城跡の発掘調査 3	(セ)		
271	黒石遺跡	報告書第59輯	(協)	335	瓜生堂遺跡発掘調査報告	(セ)	
272	陶邑・伏尾遺跡A	報告書第60輯	(協)	336	清堂遺跡	(セ)	
273	山ノ内遺跡Ⅱ・山直北遺跡	報告書第61輯	(協)	337	丹上遺跡 (その8)	(セ)	
274	三ヶ山西遺跡	報告書第62輯	(協)	338	新金岡更池遺跡	(セ)	
275	石才南遺跡Ⅱ・清見遺跡Ⅱ	報告書第63輯	(協)	339	宮の前遺跡・蛭池東遺跡・蛭池西遺跡	(セ)	
276	池園遺跡Ⅱ	報告書第64輯	(協)	340	陶邑・大庭寺遺跡Ⅲ	報告書第75輯	(協)
277	池田寺遺跡Ⅱ	報告書第65輯	(協)				
278	加治・神前・畠中遺跡	報告書第66輯	(協)				

341	大西・中間遺跡Ⅱ	報告書第76輯	(協)	412	陶邑・大庭寺遺跡Ⅴ	(調七)
342	仏並遺跡Ⅲ	報告書第77輯	(協)	413	余部遺跡	(調七)
343	芝ノ垣外遺跡Ⅱ	報告書第78輯	(協)	414	深井清水町遺跡	(調七)
344	日根野遺跡	報告書第79輯	(協)	415	太井遺跡	(調七)
345	上フジ遺跡Ⅲ・三田古墳	報告書第80輯	(協)		【逐次刊行物】	
346	三ヶ山山西遺跡Ⅱ	報告書第81輯	(協)	416	大阪文化財研究 統合記念第9号	(調七)
347	中間遺跡Ⅲ・上町東遺跡	報告書第82輯	(協)	417	O C C H 大文研通信 No.1	(調七)
348	男里遺跡	報告書第83輯	(協)	418	O C C H 大文研通信 No.2	(調七)
349	上町遺跡Ⅱ	報告書第84輯	(協)	419	O C C H 大文研通信 No.3	(調七)
350	日根荘総合調査報告書		(協)		【その他】	
	【逐次刊行物】			420	大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第32回	(調七)
351	（財）大阪文化財センター通信 No.10		(七)	421	大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第33回	(調七)
352	（財）大阪文化財センター通信 No.11		(七)	422	文化財講座資料集 1995年度	(調七)
353	大阪文化財研究 第5号		(七)	423	摂河泉発掘資料精選	(調七)
354	大阪文化財研究 第6号		(七)	424	考古学から災害と復興を考える	(調七)
355	研究紀要 Vol.1		(七)	425	図録 大坂城跡の調査 5	(調七)
356	大阪府埋蔵文化財協会研究紀要 2		(協)	426	発掘速報展 大阪96	(調七)
	【その他】				1996年度	
357	大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第28回		(七)		【報告書類】	
358	大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第29回		(七)	427	粟生岩阪遺跡	(調七)
359	近畿地方埋蔵文化財研究会資料 第11回		(七)	428	安威川総合開発事業に伴う文化財等総合調査中間報告書	(調七)
360	文化財講座資料集 1993年度		(七)	429	土井の木遺跡発掘調査報告書	(調七)
361	図録 大坂城跡の発掘調査 3		(七)	430	箱作今池遺跡発掘調査報告書	(調七)
362	第8回 泉州の遺跡-須臾の始まりをさぐる-		(協)	431	巨摩・若江北遺跡発掘調査報告-第5次-	(調七)
	1994年度			432	日根野遺跡	(調七)
	【報告書類】			433	浜寺元町遺跡	(調七)
363	大坂城跡の発掘調査 4		(七)	434	下田遺跡	(調七)
364	福田遺跡		(七)	435	陶邑・伏尾遺跡Ⅲ A地区	(調七)
365	日置荘遺跡		(七)	436	野々井遺跡Ⅱ	(調七)
366	池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅸ		(七)	437	加治・神前・畠中遺跡Ⅱ	(調七)
367	池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅹ		(七)	438	池島・福万寺遺跡発掘調査概要ⅩⅤ	(調七)
368	池島・福万寺遺跡発掘調査概要ⅩⅠ		(七)	439	池島・福万寺遺跡発掘調査概要ⅩⅧ	(調七)
369	池島・福万寺遺跡発掘調査概要ⅩⅡ		(七)	440	池島・福万寺遺跡発掘調査概要ⅩⅩⅡ	(調七)
370	池島・福万寺遺跡発掘調査概要ⅩⅢ		(七)	441	池島・福万寺遺跡発掘調査概要ⅩⅩⅢ	(調七)
371	丹上(その7)・観音寺(その3)		(七)	442	池島・福万寺遺跡発掘調査概要ⅩⅩⅣ	(調七)
372	丹上遺跡(その9)・観音寺遺跡(その4)		(七)	443	三ツ島遺跡	(調七)
373	巨摩・若江北遺跡発掘調査報告-第4次-(その4)		(七)	444	箕面北部丘陵地区埋蔵文化財発掘調査報告書	(調七)
374	野々井遺跡 報告書第85輯		(協)	445	真福寺遺跡	(調七)
375	野々井西遺跡・ON231号窯跡 報告書第86輯		(協)		【逐次刊行物】	
376	三軒屋遺跡Ⅱ 報告書第87輯		(協)	446	大阪文化財研究 第10号	(調七)
377	棚原遺跡 空連道Ⅰ 報告書第88輯		(協)	447	大阪文化財研究 第11号	(調七)
378	末廣遺跡・中間遺跡・松原遺跡 空連道Ⅱ 報告書第89輯		(協)	448	O C C H 大文研通信 No.4	(調七)
379	陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ 報告書第90輯		(協)	449	O C C H 大文研通信 No.5	(調七)
380	志紀遺跡 報告書第91輯		(協)	450	O C C H 大文研通信 No.6	(調七)
381	東奈良遺跡 報告書第92輯		(協)		【その他】	
	【逐次刊行物】			451	大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第34回	(調七)
382	（財）大阪文化財センター通信 No.12		(七)	452	大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第35回	(調七)
383	（財）大阪文化財センター通信 No.13		(七)	453	文化財講座資料集 1996年度	(調七)
384	大阪文化財研究 第7号		(七)	454	発掘速報展 大阪97	(調七)
385	大阪文化財研究 第8号		(七)	455	年報1 平成7年度	(調七)
386	研究紀要 Vol.2		(七)		1997年度	
387	大阪府埋蔵文化財協会研究紀要 3		(協)		【報告書類】	
388	（財）大阪文化財センター考古学アックス2-大阪考古学文献目録		(七)	456	史跡池上曾根 96	(調七)
389	（財）大阪文化財センター考古学アックス3-酔古雑録		(七)	457	宮の前遺跡・蛭池東遺跡・麻田藩陣屋跡・蛭池遺跡・蛭池南地区・蛭池西遺跡	(調七)
	【その他】			458	蛭池遺跡(その3-2) 発掘調査報告書	(調七)
390	大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第30回		(七)	459	田井中遺跡(1~3次)・志紀遺跡(防1次)	(調七)
391	大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第31回		(七)	460	蔵塚古墳	(調七)
392	近畿地方埋蔵文化財研究会資料 第12回		(七)	461	志紀遺跡(その4)	(調七)
393	文化財講座資料集 1994年度		(七)	462	久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅱ	(調七)
394	図録 大坂城跡の発掘調査 4		(七)	463	大庭寺・伏尾遺跡	(調七)
395	古代の木の道具展		(七)	464	丹上遺跡	(調七)
396	図書目録		(七)	465	船橋遺跡	(調七)
397	第9回 泉州の遺跡展		(協)	466	総持寺遺跡	(調七)
	-平成5年度発掘調査成果・堺市下田遺跡の銅鐸と木製品-		(協)	467	玉櫛遺跡	(調七)
398	研究紀要 Vol.3		(協)	468	東奈良遺跡	(調七)
399	10年のあゆみ		(協)	469	山直中遺跡Ⅲ	(調七)
	1995年度			470	観音寺遺跡	(調七)
	【報告書類】			471	池島・福万寺遺跡発掘調査概要ⅩⅨ	(調七)
400	史跡池上曾根 95		(調七)	472	池島・福万寺遺跡発掘調査概要ⅩⅩ	(調七)
401	大坂城跡の発掘調査 5		(調七)	473	池島・福万寺遺跡発掘調査概要ⅩⅩⅠ	(調七)
402	大坂城跡の発掘調査 6		(調七)	474	河内平野遺跡群の動態Ⅳ	(調七)
403	池島・福万寺遺跡発掘調査概要ⅩⅣ		(調七)		【逐次刊行物】	
404	池島・福万寺遺跡発掘調査概要ⅩⅥ		(調七)	475	大阪文化財研究 第12号	(調七)
405	河内平野遺跡群の動態Ⅲ		(調七)	476	大阪文化財研究 第13号	(調七)
406	西大井遺跡		(調七)	477	O C C H 大文研通信 No.7・8合併号	(調七)
407	新家遺跡 第6次発掘調査報告書		(調七)	478	O C C H 大文研通信 No.9	(調七)
408	中嶋遺跡 他 3区・8~13区		(調七)		【その他】	
409	久宝寺遺跡・竜華地区 試掘調査報告書		(調七)	479	大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第35回	(調七)
410	久宝寺遺跡・竜華地区(その1) 発掘調査報告書		(調七)	480	大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第36回	(調七)
411	植田池・長滝・安松遺跡		(調七)			

481	文化財講座資料集 1997年度	(調七)	546	O C C H 大文研通信 No17	(調七)
482	発掘速報展 大阪98	(調七)	547	O C C H 大文研通信 No18	(調七)
483	年報2 平成8年度	(調七)		【その他】	
484	研究調査報告 第1集	(調七)	548	大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第41回	(調七)
	1998年度		549	大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第42回	(調七)
	【報告書類】		550	文化財講座資料集 2000年度	(調七)
485	貝塚市東山丘陵遺跡群	(調七)	551	発掘速報展 大阪2001-難波宮と大坂城-	(調七)
486	小畑遺跡	(調七)	552	年報 平成11年度	(調七)
487	楠木石切場跡	(調七)		2001年度	
488	庄田遺跡	(調七)		【報告書類】	
489	中之社遺跡他発掘調査報告書	(調七)	553	大和川今池遺跡 (その3・4)	(調七)
490	彩都 (国際文化公園都市) 周辺地域の 歴史・文化総合調査報告書	(調七)	554	吹田操車場遺跡・吹田操車場遺跡B地点	(調七)
491	駒ヶ谷遺跡	(調七)	555	駒ヶ谷遺跡II	(調七)
492	吹田操車場遺跡	(調七)	556	津田城遺跡	(調七)
493	田須谷古墳群	(調七)	557	大坂城跡II	(調七)
	【逐次刊行物】		558	志紀遺跡 (その2・3・5・6)	(調七)
494	大阪文化財研究 第14号	(調七)	559	西浦東遺跡	(調七)
495	大阪文化財研究 第15号	(調七)	560	丹上・真福寺遺跡	(調七)
496	O C C H 大文研通信 No10	(調七)	561	伽羅橋遺跡II	(調七)
497	O C C H 大文研通信 No11	(調七)	562	向山遺跡	(調七)
498	O C C H 大文研通信 No12	(調七)	563	亀川遺跡	(調七)
	【その他】		564	河原城遺跡II	(調七)
499	大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第37回	(調七)	565	池島・福万寺遺跡発掘調査概要 X X VI	(調七)
500	大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第38回	(調七)	566	池島・福万寺遺跡発掘調査概要 X X VII	(調七)
501	文化財講座資料集 1998年度	(調七)	567	池島・福万寺遺跡発掘調査概要 X X VIII	(調七)
502	年報 平成9年度	(調七)	568	池島・福万寺遺跡発掘調査概要 X X IX	(調七)
503	大陸文化へのまなざし-発掘速報展大阪-	(調七)		【逐次刊行物】	
	1999年度		569	大阪文化財研究 第20号	(調七)
	【報告書類】		570	大阪文化財研究 第21号	(調七)
504	尺度遺跡I	(調七)	571	O C C H 大文研通信 No19	(調七)
505	徳大寺遺跡	(調七)	572	O C C H 大文研通信 No20	(調七)
506	井関・亀川遺跡発掘調査報告書	(調七)		【その他】	
507	久保田遺跡発掘調査報告書	(調七)	573	大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第43回	(調七)
508	池島福万寺遺跡I	(調七)	574	大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第44回	(調七)
509	溝昨遺跡 (その1・2)	(調七)	575	文化財講座資料集 2001年度	(調七)
510	溝昨遺跡 (その3・4)	(調七)	576	発掘速報展大阪 大河内展	(調七)
511	小阪台遺跡	(調七)		2002年度以降刊行予定 (既刊行分も含む)	
512	難波宮跡北西の発掘調査	(調七)	577	讚良郡条里ほか報告書	(新七)
513	河内平野遺跡群の動態Ⅶ	(調七)	578	粟生間谷遺跡	(新七)
514	河内平野遺跡群の動態Ⅷ	(調七)	579	麻田藩陣屋跡	(新七)
	【逐次刊行物】		580	宿久庄西遺跡	(新七)
515	大阪文化財研究 第16号	(調七)	581	池島・福万寺遺跡発掘調査概要 X X X	(新七)
516	大阪文化財研究 第17号	(調七)	582	郡戸遺跡	(新七)
517	O C C H 大文研通信 No13	(調七)	583	瓜生堂遺跡	(新七)
518	O C C H 大文研通信 No14	(調七)	584	史跡池上曾根 99	(新七)
519	O C C H 大文研通信 No15	(調七)	585	久宝寺遺跡	(新七)
	【その他】		586	男里遺跡	(新七)
520	大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第39回	(調七)	587	湊・若宮遺跡	(新七)
521	大阪府下埋蔵文化財研究会資料 第40回	(調七)	588	大和川今池遺跡 (その5・6・7)	(新七)
522	文化財講座資料集 1999年度	(調七)	589	玉飾遺跡	(新七)
523	発掘速報展 大阪2000	(調七)	590	池島・福万寺遺跡報告書 (福万寺I期)	(新七)
524	発掘!!あおまでに	(調七)	591	耳原遺跡	(新七)
525	年報 平成10年度	(調七)	592	上小阪遺跡	(新七)
526	研究調査報告 第2集	(調七)	593	大坂城跡I	(新七)
	2000年度		594	伽羅橋遺跡	(新七)
	【報告書類】		595	船橋遺跡	(新七)
527	史跡池上曾根 97・98	(調七)	596	駒ヶ谷遺跡	(新七)
528	河原城遺跡I	(調七)	597	尺度遺跡II	(新七)
529	大和川今池遺跡 (その1・2)	(調七)	598	勝部遺跡	(新七)
530	小島北織遺跡	(調七)			
531	向出遺跡	(調七)			
532	佐保栗栖山砦跡	(調七)			
533	栗栖山南墳墓群	(調七)			
534	棕谷石切場跡	(調七)			
535	住吉宮の前遺跡	(調七)			
536	久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅲ	(調七)			
537	長尾台地区、杉・氷室地区、津田城遺跡、 有池遺跡、門真遺跡群	(調七)			
538	小阪遺跡II	(調七)			
539	伽羅橋遺跡発掘調査報告書	(調七)			
540	伯太北遺跡	(調七)			
541	池島・福万寺遺跡発掘調査概要 X X V	(調七)			
542	男里遺跡発掘調査資料集	(調七)			
	【逐次刊行物】				
543	大阪文化財研究 第18号	(調七)			
544	大阪文化財研究 第19号	(調七)			
545	O C C H 大文研通信 No16	(調七)			

遺跡索引 | Index for each site

site name	Location in Osaka prefecture	relic No. (※)
粟生間谷遺跡 Aomadani	箕面市粟生間谷東ほか Mino C.	(旧石器：Pa.) 001～007・009、(縄文：Jo.) 024・026～028・036、(古代：An.) 295・297・298・300・301・308・327・391、(中世：Me.) 428・432～435・438・452・461・464・470
麻田藩陣屋跡 Asada han residence	豊中市蛸池中町 Toyonaka C.	(近世以降：Mo.-) 500～507・512～516
余部遺跡 Amabe	南河内郡美原町南余部・北余部 Mihara T.	(中世：Me.) 425・465～467・480
池上曾根遺跡 Ikegami-sone	和泉市池上町、泉大津市曾根町ほか Izumi C., Izumiotsu C.	(弥生：Ya.) 064～067・076～078・090～092・094～096・116～120・125・127～130・132・143～145
池島・福万寺遺跡 Ikejima-Fukumanji	東大阪市池島町、八尾市福万寺町 Higashiosaka C., Yao C.	(縄文：Jo.) 012～014・025・040、(弥生：Ya.) 061～063・084・085・101・105～107・109・114・134・137～139・142、(古墳：Ko.) 151～154・193・194・233・240・248・266、(古代：An.) 362、(中世：Me.) 486～490
瓜生堂遺跡 Uryudo	東大阪市若江西新町ほか Higashiosaka C.	(弥生：Ya.) 060・072・083・133、(古墳：Ko.) 224・264、(中世：Me.) 468
大坂城跡 Osaka Castle	大阪市中央区大手前ほか Osaka C.	(古墳：Ko.) 222・247・249・263、(古代：An.) 358・367・368・386・419、(近世以降：Mo.-) 508～511・518～526・528～546・548・549・551～555
男里遺跡 Onosato	泉南市男里 Sennan C.	(弥生：Ya.) 079・122、(古墳：Ko.) 236
大庭寺遺跡 Obadera	堺市大庭寺・小代 Sakai C.	(弥生：Ya.) 115・123、(古墳：Ko.) 262、(古代：An.) 319
亀井北遺跡 Kamei-kita	八尾市亀井町、大阪市平野区加美南 Yao C., Osaka C.	(古代：An.) 293・343・344
亀川遺跡 Kamekawa	阪南市自然田 Hannan C.	(古墳：Ko.) 218～220・238・245・246・257
河原城遺跡 Kawarajo	羽曳野市河原城 Habikino C.	(縄文：Jo.) 030、(古墳：Ko.) 251、(古代：An.) 312・335・369・370・380
観音寺遺跡 Kan'nonji	松原市西大塚・立部 Matsubara C.	(古代：An.) 340～342・345～347・382・383、(中世：Me.) 448～451
伽羅橋遺跡 Kyarabashi	高石市高師浜 Takaishi C.	(中世：Me.) 442～444・483
久宝寺遺跡 Kyuhoji	東大阪市大蓮東・北久宝寺、八尾市神武町・久宝寺緑地ほか Higashiosaka C., Yao C.	(弥生：Ya.) 102、(古墳：Ko.) 163～174・203～206・265・270・271、(古代：An.) 331・349
久宝寺七ツ門古墳 Kyuhoji-nanatumon tumulus	八尾市渋川 Yao C.	(古墳：Ko.) 242・261
楠木石切場跡 Kusunoki quarry	南河内郡太子町太子 Taishi T.	(中世：Me.) 476・478・479
蔵塚古墳 Kurazuka tumulus	羽曳野市飛鳥 Habikino C.	(古墳：Ko.) 259
栗栖山南墳墓群 Kurusuyama-minami burial ground	茨木市佐保 Ibaraki C.	(縄文：Jo.) 031、(古墳：Ko.) 244、(古代：An.) 316、(中世：Me.) 429・430・456・462・471・473～475・482・498・499

郡戸遺跡 Kozu	羽曳野市郡戸 Habikino C.	(古代：An.) 408、(中世：Me.) 481
小阪遺跡 Kosaka	堺市平井ほか Sakai C.	(縄文：Jo.) 037、(古墳：Ko.) 191・192・223
小阪合遺跡 Kozakaai	八尾市南小阪合・青山 Yao C.	(古墳：Ko.) 189・190・195～202・231、 (古代：An.) 302・303・309・310・320・321・330・ 339・357・364・374・375・409～418・421・422
小島北磯遺跡 Kojima-kitaiso	岬町多奈川小島 Misaki T.	(弥生：Ya.) 093、(古代：An.) 329
小畑遺跡 Kobatake	箕面市下止々呂美 Mino C.	(中世：Me.) 457
巨摩遺跡 Koma	東大阪市若江西新町 Higashiosaka C.	(弥生：Ya.) 121・148～150、(古代：An.) 356・365、 (中世：Me.) 492
駒ヶ谷遺跡 Komagatani	羽曳野市飛鳥・大黒 Habikino C.	(古代：An.) 291・305・311・314・317・328・353・ 371～373・389・394・404・405
佐保栗栖山砦跡遺跡 Sahokurusuyama fort	茨木市佐保 Ibaraki C.	(中世：Me.) 431・436・458・460
讃良郡条里遺跡 Saragun-jori	寝屋川市高宮、四条畷市砂 Neyagawa C., Shijonawate C.	(縄文：Jo.) 010・011
志紀遺跡 Shiki	八尾市志紀町西ほか Yao C.	(弥生：Ya.) 103・104・109・110・111・141・146、 (近世以降：Mo.-) 550
信太寺跡 (観音寺跡) Shinodadera Temple	和泉市上代町 Izumi C.	(古代：An.) 336・350
下田遺跡 Shimoda	堺市下田町 Sakai C.	(古墳：Ko.) 155～162・272～276
尺度遺跡 Shakudo	羽曳野市尺度 Habikino C.	(古墳：Ko.) 183～186、(古代：An.) 393
庄田遺跡 Shoda	箕面市粟生間谷東 Mino C.	(縄文：Jo.) 029
新家遺跡 Shinke	東大阪市荒本西 Higashiosaka C.	(古墳：Ko.) 268・269
真福寺遺跡 Shinpukuji	南河内郡美原町真福寺・下黒山 Mihara T.	(古代：An.) 290・324・325・355、 (中世：Me.) 454・459
吹田操車場遺跡 Suita marshalling yard	吹田市芝田町 Suita C.	(弥生：Ya.) 108、(古墳：Ko.) 283、 (古代：An.) 318・378・407
宿久庄西遺跡 Sukunosho-nishi	茨木市宿久庄 Ibaraki C.	(古代：An.) 379
総持寺遺跡 Soujiji	茨木市三島丘・三島町・総持寺 Ibaraki C.	(古代：An.) 294・306・323・387・395・406、 (中世：Me.) 437・469
太井遺跡 Tai	南河内郡美原町太井・下黒山 Mihara T.	(古墳：Ko.) 225、(古代：An.) 289・304・337・ 338・351・352・359、(中世：Me.) 447、 (近世以降：Mo.-) 547
田井中遺跡 Tainaka	八尾市田井中・志紀町西 Yao C.	(弥生：Ya.) 057～059・086・099・112・113・140、 (古墳：Ko.) 228
田須谷古墳群 Dasudan tumuli	南河内郡太子町春日 Taishi T.	(古代：An.) 288・315・354・360・388
玉櫛遺跡 Tamakushi	茨木市玉櫛 Ibaraki C.	(古代：An.) 299・396、(中世：Me.) 426・427・ 453・472・485・491・493～497

丹上遺跡 Tanjo	南河内郡美原町丹上 Mihara T.	(縄文：Jo.) 029、(古墳：Ko.) 226、(古代：An.) 313
津田城遺跡 Tsudajo	枚方市津田山手 Hirakata C.	(近世以降：Mo-) 527
土井の木遺跡 Doinoki	岸和田市稲葉町 Kishiwada C.	(中世：Me.) 463
徳大寺遺跡 Tokudaiji	箕面市粟生間谷 Mino C.	(縄文：Jo.) 039、(古代：An.) 381、 (近世以降：Mo-) 517
友井東遺跡 Tomoi-higashi	東大阪市金物町、八尾市新家町ほか Higashiosaka C., Yao C.	(古代：An.) 363
長原遺跡 Nagahara	大阪市平野区長吉長原東・長吉川辺 Osaka C.	(古代：An.) 296・322・326・384・385
難波宮跡 Naniwanomiya palace	大阪市中央区法円坂ほか Osaka C.	(古代：An.) 284~287・376・392・397~403
西浦東遺跡 Nishiura-higashi	羽曳野市西浦・古市 Habikino C.	(縄文：Jo.) 015・016・040
西大井遺跡 Nishi'oi	藤井寺市西大井 Hujidera C.	(古墳：Ko.) 277、(古代：An.) 420
野々井遺跡 Nonoi	堺市野々井・菱木 Sakai C.	(弥生：Ya.) 124・131・135
東奈良遺跡 Higashinara	茨木市東奈良・若草町ほか Ibaraki C.	(弥生：Ya.) 068~070・088・097・098・126・136
深井清水町遺跡 Hukaishimizu-cho	堺市深井清水町 Sakai C.	(古墳：Ko.) 227
船橋遺跡 Hunahashi	藤井寺市船橋 Hujidera C.	(弥生：Ya.) 073~075・087、(古墳：Ko.) 175~ 182・230・250、(古代：An.) 307・332~334・361・ 366・377
蛸池遺跡 Hotarugaiké	豊中市蛸池中町 Toyonaka C.	(旧石器：Pa.) 008、(縄文：Jo.) 034
蛸池東遺跡 Hotarugaiké-higashi	豊中市蛸池東町ほか Toyonaka C.	(古墳：Ko.) 207
溝咋遺跡 Mizokui	茨木市学園町 Ibaraki C.	(弥生：Ya.) 071・080~082・089・100・147、 (古墳：Ko.) 187・188・208~210・229・234・235・ 239・241・243・252~256・258・267・278~281、 (古代：An.) 292・348、(中世：Me.) 455・484
湊遺跡 Minato	泉佐野市中庄・湊 Izumisano C.	(古墳：Ko.) 237
向出遺跡 Mukaide	阪南市自然田 Hannan C.	(縄文：Jo.) 017~023・032・033・038・042~048、 (古墳：Ko.) 232
棕谷石切場跡 Mukudan quarry	南河内郡太子町春日 Taishi T.	(古代：An.) 390、(中世：Me.) 477
大和川今池遺跡 Yamatogawa-imaiké	大阪市東住吉区矢田、堺市常盤町・花 田町、松原市天美西・天美我堂 Osaka C., Sakai C., Matsubara C.	(縄文：Jo.) 035、(古墳：Ko.) 211~217・221・260・ 282、(古代：An.) 423、(中世：Me.) 424・439~ 441・445・446
若江北遺跡 Wakae-kita	東大阪市若江西新町 Higashiosaka C.	(弥生：Ya.) 049~056

※ Pa.: Palaeolithic , Jo.: Jomon period , Ya.: Yayoi period , Ko.: Kohun period , An.: Ancient time (Asuka,Nara and Heian period)
Me.: Medieval time (Kamakura and Muromati period) , Mo-: Modern time- (since Azuti/Momoyama period and Edo period)

INDEX (Page16~155)

- 001 backed blades; Palaeolithic period; Aomadani site
002 backed blades; Palaeolithic period; Aomadani site
003 backed blades; Palaeolithic period; Aomadani site
004 backed blades; Palaeolithic period; Aomadani site
005 awl, end scrapers, side scrapers; Palaeolithic period;
Aomadani site
006 boot-shaped keeled point, round scraper, flake;
Palaeolithic period; Aomadani site
007 hammer; Palaeolithic period; Aomadani site
008 backed blade; Palaeolithic period; Hotarugaike site
009 scraper; Palaeolithic period; Aomadani site
010 Jomon potteries (Deep bowls) ; Middle Jomon period;
Saragun-jori site
011 Jomon potteries; Middle Jomon period; Saragun-jori site
012 Jomon pottery (Deep bowl) ; Late Jomon period;
Ikejima-Fukumanji site
013 Jomon pottery (Deep bowl) ; Late Jomon period;
Ikejima-Fukumanji site
014 Jomon pottery (Deep bowl) ; Late Jomon period;
Ikejima-Fukumanji site
015 Jomon pottery; Late Jomon period;
Nishiura-higashi site
016 Jomon pottery (boat-shaped pottery) ; Late Jomon period;
Nishiura-higashi site
017 Jomon potteries (Miyataki type) ; Late Jomon period;
Mukaide site
018 Jomon potteries (Shigasato I type) ; Late Jomon period;
Mukaide site
019 Jomon pottery (Miyataki type) ; Late Jomon period;
Mukaide site
020 Jomon pottery (deep bowl with scalloped rim) ;
Late Jomon period; Mukaide site
021 Jomon pottery (spouted vessel) ; Late Jomon period;
Mukaide site
022 Jomon pottery (deep bowl) ; Late Jomon period;
Mukaide site
023 Jomon pottery (Shigasato I type) ; Late Jomon period;
Mukaide site
024 Jomon pottery (Funahashi/Nagahara type) ;
Final Jomon period; Aomadani site
025 Jomon potteries (Nagahara type) ; Final Jomon period;
Ikejima-Fukumanji site
026 tool blanks; Jomon period; Aomadani site
027 polished stone object (toro-toro sekki) ;
Late Jomon period; Aomadani site
028 tanged points; Incipient/Initial Jomon period;
Aomadani site
029 tanged points; Incipient/Initial Jomon period;
Shoda site, Tanjo site
030 refitting material of flakes; Initial Jomon period;
Kawarajo site
031 stone arrowheads; Initial Jomon period;
Kurusuyama-minami burial site
032 stone arrowheads; Late/Final Jomon period; Mukaide site
033 stone awls; Late/Final Jomon period; Mukaide site
034 tanged stone scraper; Early Jomon period;
Hotarugaike site
035 tanged stone scraper; Early Jomon period;
Yamatogawa-Imaike site
036 scrapers; Jomon period; Aomadani site
037 stone axe-head; Middle/Late Jomon period; Kosaka site
038 globular bead; Late Jomon period; Mukaide site
039 pendant; Jomon period; Tokudaiji site
040 stone ornament; Final Jomon period;
Ikejima-Fukumanji site
041 stone rod; Late Jomon period; Nishiura-higashi site
042 stone rod; Late Jomon period; Mukaide site
043 stone rod; Late Jomon period; Mukaide site
044 sword-shaped stone object; Late/Final Jomon period;
Mukaide site
045 sword-shaped stone object; Late/Final Jomon period;
Mukaide site
046 sword-shaped stone object; Late/Final Jomon period;
Mukaide site
047 sword-shaped stone object; Late/Final Jomon period;
Mukaide site
048 stone rod, sword-shaped stone objects;
Late/Final Jomon period; Mukaide site
049 Yayoi potteries; Early Yayoi period; Wakae-kita site
050 Yayoi potteries (jar) ; Early Yayoi period;
Wakae-kita site
051 Yayoi potteries (pot) ; Early Yayoi period;
Wakae-kita site
052 Yayoi potteries (bowl) ; Early Yayoi period;
Wakae-kita site
053 Yayoi pottery (pot) ; Early Yayoi period; Wakae-kita site
054 Yayoi pottery (jar) ; Early Yayoi period; Wakae-kita site
055 Yayoi pottery (jar) ; Early Yayoi period; Wakae-kita site
056 Yayoi pottery (Kori I type deep bowl) ;
Early Yayoi period; Wakae-kita site
057 Yayoi potteries; Early Yayoi period; Tainaka site
058 Yayoi pottery (jar) ; Early Yayoi period; Tainaka site
059 Yayoi pottery (jar) ; Early Yayoi period; Tainaka site
060 Yayoi potteries (jar, pot) ; Early Yayoi period;
Uriudo site
061 Yayoi potteries (the first style) ; Early Yayoi period;

- Ikejima-Fukumanji site
062 Yayoi pottery (jar) ; Early Yayoi period;
Ikejima-Fukumanji site
- 063 Yayoi pottery (jar) ; Early Yayoi period;
Ikejima-Fukumanji site
- 064 Yayoi pottery (Setouchi type pot) ; Early Yayoi period;
Ikegamisone site
- 065 heat distorted potteries; Early Yayoi period;
Ikegamisone site
- 066 similar Korean Mumon style potteries;
Early Yayoi period; Ikegamisone site
- 067 Yayoi pottery with complex decoration;
Early Yayoi period; Ikegamisone site
- 068 Settsu type pitcher; Middle Yayoi period;
Higashinara site
- 069 neckless jar with foot; Middle Yayoi period;
Higashinara site
- 070 miniature potteries; Middle Yayoi period;
Higashinara site
- 071 Yayoi potteries; Middle Yayoi period; Mizokui site
- 072 Yayoi potteries; Middle Yayoi period; Uriudo site
- 073 Yayoi potteries; Middle Yayoi period;
Funahashi site
- 074 Yayoi potteries; Middle Yayoi period;
Funahashi site
- 075 Yayoi potteries; Early/Middle Yayoi period;
Funahashi site
- 076 Yayoi potteries; Middle Yayoi period; Ikegamisone site
- 077 Yayoi pottery unearthed from a posthole of the building
provided tree-ring date of 52BC; Middle Yayoi period;
Ikegamisone site
- 078 Yayoi pottery with perforated rim; Middle Yayoi period;
Ikegamisone site
- 079 Yayoi potteries; Middle Yayoi period;
Onosato site
- 080 Yayoi potteries (Eastern Setouchi style potteries) ;
Late Yayoi period; Mizokui site
- 081 Yayoi potteries (red-painted potteries) ;
Late Yayoi Period; Mizokui site
- 082 Yayoi potteries (potteries brought from other regions or
imitated other regions style) ; Late Yayoi/Early Kofun
period; Mizokui site
- 083 Yayoi potteries; Late Yayoi period;
Uriudo site
- 084 Yayoi potteries; Late Yayoi period;
Ikejima-Fukumanji site
- 085 hand-warmer-shaped pottery; Late Yayoi period;
Ikejima-Fukumanji site
- 086 Yayoi pottery (long-necked jar) ; Late Yayoi period;
- Tainaka site
087 long-necked jar made of two types of clay paste;
Late Yayoi period; Funahashi site
- 088 pottery with incised deer picture; Middle Yayoi period;
Higashinara site
- 089 potteries with incised picture; Middle and Late Yayoi
period; Early Kohun period; Mizokui site
- 090 pottery with incised raised floor building picture;
Middle Yayoi period; Ikegamisone site
- 091 pottery with incised deer picture;
Middle Yayoi period; Ikegamisone site
- 092 heat distorted pottery; Middle Yayoi period;
Ikegamisone site
- 093 salt-making pottery (originally made for pedestaled
bowl) ; Middle Yayoi period; Kojima-kitaiso site
- 094 octopus traps, stone weights; Middle Yayoi period;
Ikegamisone site
- 095 clay weights; Middle Yayoi period; Ikegamisone site
- 096 burnt clay; Middle Yayoi period; Ikegamisone site
- 097 clay imitation of bronze bell; Middle Yayoi period;
Higashinara site
- 098 caps for ritual sticks (clay object) ; Middle Yayoi
period; Higashinara site
- 099 imitative mirror (mirror with papillae pattern) ;
Late Yayoi/Kofun period; Tainaka site
- 100 bronze bracelet; Late Yayoi period; Mizokui site
- 101 bronze arrowheads; Late Yayoi period;
Ikejima-Fukumanji site
- 102 willow leaf shaped bronze arrowhead;
Final Yayoi period; Kyuhoji site
- 103 blunt missiles; Early Yayoi period; Shiki site
- 104 stone dagger; Early Yayoi period; Shiki site
- 105 stone dagger; Early/Middle Yayoi period;
Ikejima-Fukumanji site
- 106 stone dagger; Early Yayoi period;
Ikejima-Fukumanji site
- 107 stone dagger; Early/Middle Yayoi period;
Ikejima-Fukumanji site
- 108 stone dagger; Yayoi period; Suita marshalling yard site
- 109 stone arrowhead; Early Yayoi period;
Ikejima-Fukumanji site
- 110 large stone points; Early/Middle Yayoi period; Shiki site
- 111 stone knives; Early/Middle Yayoi period; Shiki site
- 112 polished stone spearhead ; Yayoi period; Tainaka site
- 113 stone sickle; Yayoi period; Tainaka site
- 114 stone reaping knives; Early/Middle Yayoi period;
Ikejima-Fukumanji site
- 115 large stone reaping knife; Yayoi period; Obadera site
- 116 raw materials of stone reaping knives;

- Middle Yayoi period; Ikegamisone site
- 117 unfinished stone reaping knives; Middle Yayoi period;
Ikegamisone site
- 118 unfinished stone reaping knives; Middle Yayoi period;
Ikegamisone site
- 119 unfinished stone reaping knives; Middle Yayoi period;
Ikegamisone site
- 120 unfinished stone reaping knives; Middle Yayoi period;
Ikegamisone site
- 121 quadrangular polished stone axe with unifacially
bevelled edge; Middle Yayoi period; Koma site
- 122 quadrangular polished stone axes with unifacially
bevelled edge, large bifacially bevelled felling axe;
Middle Yayoi period; Onosato site
- 123 quadrangular polished stone axe with unifacially
bevelled edge; Yayoi period; Obadera site
- 124 stone spindle; Middle Yayoi period; Nonoi site
- 125 whetstones; Middle Yayoi Period; Ikegamisone site
- 126 blanks of stone object; Yayoi period; Higashinara site
- 127 stone-made mold for bronze bell; Middle Yayoi period;
Ikegamisone site
- 128 stone weights; Middle Yayoi period; Ikegamisone site
- 129 stone rod; Early Yayoi period?; Ikegamisone site
- 130 stone rod; Early Yayoi period; Ikegamisone site
- 131 stone rod; Late Yayoi period; Nonoi site
- 132 cylindrical jasper bead; Yayoi period; Ikegamisone site
- 133 wooden wide-edged hoe; Early Yayoi period; Uriudo site
- 134 unfinished wooden spade; Yayoi period;
Ikejima-Fukumanji site
- 135 unfinished wooden wide-edged hoe; Middle Yayoi period;
Nonoi site
- 136 unfinished wooden splash guard; Middle Yayoi period;
Higashinara site
- 137 wooden platter; Late Yayoi period;
Ikejima-Fukumanji site
- 138 wooden tub; Middle Yayoi period; Ikejima-Fukumanji site
- 139 wooden box with four legs; Yayoi period;
Ikejima-Fukumanji site
- 140 wooden box with four legs; Middle Yayoi period;
Tainaka site
- 141 carved wooden figurine; Middle Yayoi period; Shiki site
- 142 wooden shield; Late Yayoi period;
Ikejima-Fukumanji site
- 143 parts of wooden door; Middle Yayoi Period;
Ikegamisone site
- 144 wooden post (tree-ring date of 52BC) ;
Middle Yayoi period; Ikegamisone site
- 145 wooden supporting frame of well; Middle Yayoi period;
Ikegamisone site
- 146 wooden conduit; Early Yayoi period; Shiki site
- 147 part of wooden coffin; Middle Yayoi period;
Mizokui site
- 148 wooden coffin; Middle Yayoi period; Koma site
- 149 wooden coffin; Middle Yayoi period; Koma site
- 150 wooden coffin; Middle Yayoi period; Koma site
- 151 Haji wares; Early Kofun period; Ikejima-Fukumanji site
- 152 Haji wares; Early Kofun period; Ikejima-Fukumanji site
- 153 Haji wares; Early Kofun period; Ikejima-Fukumanji site
- 154 Haji wares; Late Yayoi/Early Kofun period;
Ikejima-Fukumanji site
- 155 Haji ware (decorated jar with composite rim) ;
Early Kofun period; Shimoda site
- 156 Haji ware (slender-necked jar) ; Early Kofun period;
Shimoda site
- 157 Haji ware (pedestaled dish) ; Early Kofun period;
Shimoda site
- 158 Haji ware (Yayoi form pot) ;
Early Kofun period; Shimoda site
- 159 Haji ware (small jar stand) ; Early Kofun period;
Shimoda site
- 160 Haji ware (large jar stand) ; Early Kofun period;
Shimoda site
- 161 Haji ware (spouted vessel) ; Early Kofun period;
Shimoda site
- 162 salt-making pottery; Early Kofun period; Shimoda site
- 163 Haji ware (jar vase) ; Early Kofun period; Kyuhoji site
- 164 Haji ware (jar with flaring rim) ; Early Kofun period;
Kyuhoji site
- 165 Haji ware (jar with basket impression) ;
Early Kofun period; Kyuhoji site
- 166 Haji ware (small jar stand) ;
Early Kofun period; Kyuhoji site
- 167 Haji ware (Yayoi form pot) ;
Early Kofun period; Kyuhoji site
- 168 Haji ware (irregular form pot) ;
Early Kofun period; Kyuhoji site
- 169 Haji ware (irregular form pot) ;
Early Kofun period; Kyuhoji site
- 170 Haji ware (Shonai style pot) ;
Early Kofun period; Kyuhoji site
- 171 Haji ware (lipped bowl) ; Early Kofun period;
Kyuhoji site
- 172 Haji ware (pedestaled dish) ; Early Kofun period;
Kyuhoji site
- 173 Shonai style pedestaled dish; Early Kofun period;
Kyuhoji site
- 174 Kibi style pedestaled dish; Early Kofun period;
Kyuhoji site

- 175 Haji ware (small jar with flaring rim) ;
Early Kofun period; Funahashi site
- 176 Haji ware (jar vase) ; Early Kofun period; Funahashi site
- 177 Haji ware (jar with composite rim) ; Early Kofun period;
Funahashi site
- 178 Haji ware (pot) ; Early Kofun period; Funahashi site
- 179 Haji ware (pot) ; Early Kofun period; Funahashi site
- 180 Haji ware (pot) ; Early Kofun period; Funahashi site
- 181 Haji ware (pot) ; Early Kofun period; Funahashi site
- 182 Haji ware (pot) ; Early Kofun period; Funahashi site
- 183 Haji ware (pot) ; Early Kofun period; Syakudo site
- 184 Haji wares; Early Kofun period; Syakudo site
- 185 Haji wares; Early Kofun period; Syakudo site
- 186 Haji wares; Early Kofun period; Syakudo site
- 187 Haji wares; Early Kofun period; Mizokui site
- 188 Haji wares; Early Kofun period; Mizokui site
- 189 Haji ware (jar with composite rim) ; Early Kofun period;
Kozakaai site
- 190 Kibi style pot; Early Kofun period; Kozakaai site
- 191 Sue ware (wine server) ; Middle Kofun period; Kosaka site
- 192 Sue ware (bird-shaped wine server) ; Middle Kofun period;
Kosaka site
- 193 stoneware with pattern like footprint of bird;
Middle Kofun period; Ikejima-Fukumanji site
- 194 Sue ware (jar stand) ; Middle Kofun period;
Ikejima-Fukumanji
- 195 Sue ware (jar, wine server) ; Middle Kofun period;
Kozakaai site
- 196 Sue ware (bowl) ; Middle Kofun period; Kozakaai site
- 197 Sue ware (pedestaled dish with lid) ;
Middle Kofun period; Kozakaai site
- 198 Sue ware (pedestaled dish without lid) ;
Middle Kofun period; Kozakaai site
- 199 Haji ware (pedestaled dish) ; Middle Kofun period;
Kozakaai site
- 200 Haji ware (pedestaled dish) ; Middle Kofun period;
Kozakaai site
- 201 Korean style potteries; Middle Kofun period;
Kozakaai site
- 202 Sue wares; Middle Kofun period; Kozakaai site
- 203 Korean style pottery (flat-bottomed bowl) ;
Middle Kofun period; Kyuhoji site
- 204 Sue ware (dish) ; Middle Kofun period; Kyuhoji site
- 205 Sue ware (pedestaled dish without lid) ;
Middle Kofun period; Kyuhoji site
- 206 Sue ware (cask-shaped wine server) ; Middle Kofun period;
Kyuhoji site
- 207 Haji wares; Middle Kofun period;
Hotarugaik-higashi site
- 208 Haji ware (cask-shaped wine server) ;
Middle Kofun period; Mizokui site
- 209 Korean style potteries (bowl) ; Middle Kofun period;
Mizokui site
- 210 Haji ware (stove) ; Late Kofun period; Mizokui site
- 211 Sue wares (jar stand) ; Middle Kofun period;
Yamatogawa-imaik site
- 212 Sue ware (cask shaped wine server) ; Middle Kofun period;
Yamatogawa-imaik site
- 213 Sue ware (jar) ; Middle Kofun period;
Yamatogawa-imaik site
- 214 Sue ware (pedestaled dish with lid) ;
Middle Kofun period; Yamatogawa-imaik site
- 215 Sue ware (cylindrical jar stand) ; Middle Kofun period;
Yamatogawa-imaik site
- 216 Sue wares (jar) ; Middle Kofun period;
Yamatogawa-imaik site
- 217 Haji wares, Sue wares; Middle Kofun period;
Yamatogawa-imaik site
- 218 Haji ware (stove) ; Late Kofun period; Kamekawa site
- 219 Sue ware (pedestaled dish) ; Middle Kofun period;
Kamekawa site
- 220 Sue ware (cylindrical jar stand) ; Middle Kofun period;
Kamekawa site
- 221 quiver-shaped haniwa; Middle Kofun period;
Yamatogawa-imaik site
- 222 haniwa cylinder; Late Kofun period; Osaka Castle site
- 223 haniwa cylinder; Middle Kofun period; Kosaka site
- 224 haniwa cylinder, domestic fowl-shaped haniwa;
Middle Kofun period; Uriudo site
- 225 haniwa cylinder; Late Kofun period; Tai site
- 226 haniwa cylinder; Middle Kofun period; Tanjo site
- 227 boat-shaped baked clay object made of Sue ware;
Middle Kofun period; Fukaishimizu-cho site
- 228 boat-shaped baked clay object made of Haji ware;
Early Kofun period; Tainaka site
- 229 bird-shaped baked clay object made of Haji ware;
Late Yayoi/Early Kofun period; Mizokui site
- 230 bird-shaped baked clay object made of Haji ware;
Early Kofun period; Funahashi site
- 231 bird-shaped baked clay object made of Sue ware;
Middle Kofun period; Kozakaai site
- 232 abacus bead-shaped spindle made of Sue ware;
Middle Kofun period; Mukaide site
- 233 jar stand made of Haji ware; Early Kofun period;
Ikejima-Fukumanji site
- 234 basket wear pottery; Early Kofun period; Mizokui site
- 235 pottery with incised human face; Early Kofun period;
Mizokui site

- 236 salt-making pottery; Late Yayoi/Early Kofun period;
Onosato site
- 237 salt-making pottery; Late Yayoi/Early Kofun period;
Minato site
- 238 salt-making pottery; Middle/Late Kofun period;
Kamekawa site
- 239 salt-making pottery; Middle/Late Kofun period;
Mizokui site
- 240 bronze arrowhead; Early Kofun period;
Ikejima-Fukumanji site
- 241 earring; Late Kofun period; Mizokui site
- 242 earrings; Late Kofun period; Kyuhoji-Nanatsumon tumulus
- 243 small imitative mirror; Early Kofun period;
Mizokui site
- 244 iron axe-head, iron arrowhead; Late Kofun period;
Kurusuyama-minami burial site
- 245 iron fish hook, iron arrowhead; Late Kofun period;
Kamekawa site
- 246 iron ingots; Late Kofun period; Kamekawa site
- 247 iron axe-head; Late Kofun period; Osaka Castle site
- 248 comma-shaped beads,cylindrical beads,globular beads;
Early Kofun period; Ikejima-Fukumanji site
- 249 compound magatama; Late Kofun period; Osaka Castle site
- 250 compound magatama; Late Kofun period; Funahashi site
- 251 compound magatama; Late Kofun period; Kawarajo site
- 252 imitative articles made of talc (cylindrical beads,small
mortar-shaped beads) ;Middle Kofun period; Mizokui site
- 253 imitative articles made of talc (swords) ;
Middle Kofun period; Mizokui site
- 254 imitative articles made of talc (perforated disc) ;
Middle Kofun period; Mizokui site
- 255 imitative articles made of talc (comma-shaped beads) ;
Middle Kofun period; Mizokui site
- 256 imitative articles made of talc (perforated disc?) ;
Middle Kofun period; Mizokui site
- 257 imitative articles made of talc; Early Kofun period;
Kamekawa site
- 258 spindles made of talc; Late Kofun period; Mizokui site
- 259 spindle made of talc; Late Kofun period;
Kurazuka tumulus
- 260 spindle made of talc; Kofun period;
Yamatogawa-imaike site
- 261 spindle made of talc; Late Kofun period;
Kyuhoji-Nanatsumon tumulus
- 262 spindle made of talc; Late Kofun period; Obadera site
- 263 spindle made of talc; Late Kofun period;
Osaka Castle site
- 264 ring-shaped steatite bracelet; Early Kofun period;
Uriudo site
- 265 wheel-shaped steatite bracelet; Early Kofun period;
Kyuhoji site
- 266 stone pestle; Early Kofun period;
Ikejima-Fukumanji site
- 267 stone mortar, stone pestle; Early Kofun period;
Mizokui site
- 268 wooden ladder; Late Yayoi/Early Kofun period;
Shinke site
- 269 wooden doors; Middle Kofun period; Shinke site
- 270 wooden split-log coffin; Early Kofun period;
Kyuhoji site
- 271 part of planked boat; Early/Middle Kofun period;
Kyuhoji site
- 272 wooden ladder; Early Kofun period; Shimoda site
- 273 wooden bailing pail?; Early Kofun period; Shimoda site
- 274 wooden oar; Early Kofun period; Shimoda site
- 275 wooden axe shaft; Early Kofun period; Shimoda site
- 276 wooden pounding stick; Early Kofun period; Shimoda site
- 277 wooden bailing pail; Early Kofun period; Nishi'oi site
- 278 wooden shoe boards worn in wet paddy;
Late Kofun period; Mizokui site
- 279 forked hoe blades; Late Kofun period; Mizokui site
- 280 part of wooden chair; Early Kofun period; Mizokui site
- 281 wooden harp; Kofun period; Mizokui site
- 282 part of harp-shaped wooden object ;Middle Kofun period;
Yamatogawa-imaike site
- 283 part of shoe board worn in wet paddy;
Middle Kofun period; Suita marshalling yard site
- 284 Ancient potteries; Asuka period;
Naniwanomiya palace site
- 285 Ancient potteries (Sue ware dish with lid) ;
Asuka period; Naniwanomiya palace site
- 286 Ancient pottery (Sue ware flat jug) ; Asuka period;
Naniwanomiya palace site
- 287 Ancient pottery (Sue ware hanging jug) ; Asuka period;
Naniwanomiya palace site
- 288 Sue wares, Haji wares; Asuka/Nara period;
Dasudan tumulus No.1
- 289 Ancient potteries; Asuka period; Tai site
- 290 Ancient potteries; Asuka period; Shinpukuji site
- 291 Ancient potteries; Nara period; Komagatani site
- 292 Ancient potteries; Middle Nara period; Mizokui site
- 293 Ancient potteries; Nara period; Kamei-kita site
- 294 Ancient potteries unearthed from wells;
Asuka/Early Heian period; Sojiji site
- 295 smoke Haji wares A type; Middle Heian period;
Aomadani site
- 296 Ancient potteries; Middle Heian period; Nagahara site
- 297 smoke Haji wares B type, Haji wares; Late Heian period;

- Aomadani site
- 298 fumed grey-black potteries (Kuzuha type) ,Haji wares;
Late Heian period; Aomadani site
- 299 Ancient potteries; Middle/Late Heian period;
Tamakushi site
- 300 grave goods; Late Heian/Kamakura period; Aomadani site
- 301 grave goods; Late Heian/Kamakura period; Aomadani site
- 302 Haji wares (dish, plate) ; Nara period; Kozakaai site
- 303 Haji ware (flanged kettle) ; Nara period; Kozakaai site
- 304 Haji ware (pot;well bucket) ; Asuka period; Tai site
- 305 Haji ware (pot;well bucket) ; Nara period;
Komagatani site
- 306 Haji ware (pot;well bucket) ; Early Heian period;
Sojiji site
- 307 Haji ware (octopus trap) ; Late Heian/Kamakura period;
Funahashi site
- 308 smoked Haji ware A type (bowl) ; Middle Heian period;
Aomadani site
- 309 Sue ware (dish, lid) ; Nara period; Kozakaai site
- 310 Sue ware (jar) ; Nara period; Kozakaai site
- 311 Sue ware (jar;well bucket) ; Nara period; Komagatani site
- 312 Sue ware (jar contained lacquer) ; Nara period;
Kawarajo site
- 313 Sue ware (pot) ; Nara period; Tanjo site
- 314 Sue ware (incised pot) ; Nara period; Komagatani site
- 315 Sue ware (jar for cremated) ; Nara period;
Dasudan tumulus group
- 316 Sue ware (jar for cremated) ; Late Nara period;
Kurusuyama-minami burial site
- 317 three color glazed ceramic (small jar) ;
Nara period; Komagatani site
- 318 three color glazed ceramic (small jar) ; Nara period;
Suita marshalling yard site
- 319 Integrated Shilla type pottery; Nara period;
Obadera site
- 320 green glazed ceramics; Heian period; Kozakaai site
- 321 green glazed ceramics; Heian period; Kozakaai site
- 322 green glazed ceramics; Heian period; Nagahara site
- 323 green glazed ceramic; Early Heian period; Sojiji site
- 324 Yueh porcelain celadon (cup) ; Early Heian period;
Shinpukuji site
- 325 Yueh porcelain celadon (cup) ; Late Heian period;
Shinpukuji site
- 326 Yueh porcelain celadon (cup) ; Early Heian period;
Nagahara site
- 327 Korean celadon (plate) ; Heian period; Aomadani site
- 328 salt-making potteries; Middle Nara period;
Komagatani site
- 329 salt-making potteries; Nara period; Kojima-kitaiso site
- 330 salt-making pottery; Nara period; Kozakaai site
- 331 round eave tile; Hakuho period; Kyuhoji site
- 332 round eave tile; Nara period; Funahashi site
- 333 round eave tile; Nara period; Funahashi site
- 334 round eave tile; Nara period; Funahashi site
- 335 round eave tile; Early Nara period; Kawarajo site
- 336 round eave tile; Early Nara period;
Shinodadera Temple site
- 337 round eave tile; Hakuho period; Tai site
- 338 round eave tile; Nara period; Tai site
- 339 round eave tile; Hakuho period; Kozakaai site
- 340 round eave tile; Late Heian/Early Kamakura period;
Kan'nonji site
- 341 round eave tile; Late Heian/Early Kamakura period;
Kan'nonji site
- 342 round eave tile; Late Heian/Early Kamakura period;
Kan'nonji site
- 343 round eave tile; Late Heian period; Kamei-kita site
- 344 round eave tile; Late Heian period; Kamei-kita site
- 345 flat eave tile; Late Heian/Early Kamakura period;
Kan'nonji site
- 346 flat eave tile; Late Heian/Early Kamakura period;
Kan'nonji site
- 347 flat eave tile; Late Heian/Early Kamakura period;
Kan'nonji site
- 348 flat eave tile; Late Heian period; Mizokui site
- 349 roof tile with incised characters; Nara period;
Kyuhoji site
- 350 roof tile with stamped writing; Late Nara period;
Shinodadera Temple site
- 351 acroterion; Nara period; Tai site
- 352 tile; Asuka period; Tai site
- 353 tile; Nara period; Komagatani site
- 354 Wado Kaichin coin; Nara period; Dasudan tumulus group
- 355 Wado Kaichin coin; Nara period; Shinpukuji site
- 356 Wado Kaichin coin; Nara period; Koma site
- 357 coins; Nara/Heian Period; Kozakaai site
- 358 Ryuhei eiho coin; Heian period; Osaka Castle site
- 359 Engi Tsuho coin; Heian period; Tai site
- 360 iron nails; Asuka Period; Dasudan tumulus group
- 361 bronze ferring for sword; Early Heian period;
Funahashi site
- 362 bronze bell; Heian period; Ikejima-Fukumanji site
- 363 bronze weight; Nara/Heian period; Tomoi-higashi site
- 364 bronze rectangular-shaped belt plaque;
Early Heian period; Kozakaai site
- 365 bronze strap end; Nara/Heian period; Koma site
- 366 unfinished strap end; Nara/Heian period; Funahashi site
- 367 mirror decorated with marine mammals and grapevines;

- Nara period; Osaka Castle site
- 368 inkslab with animal legs; Late Nara period;
Osaka Castle site
- 369 inkslab with a flat, round grinding surface;
Early Nara period; Kawarajo site
- 370 inkslab with outward-sloping projections;
Early Nara period; Kawarajo site
- 371 inkslab with a flat, round grinding surface;
Early Nara period; Komagatani site
- 372 inkslab with a flat, round grinding surface;
Early Nara period; Komagatani site
- 373 inkslab with a flat, round grinding surface;
Early Nara period; Komagatani site
- 374 pedestaled, oval inkslab; Nara period; Kozakaai site
- 375 inkslab shaped like the character “風”; Heian period;
Kozakaai site
- 376 clay horse; Asuka period; Naniwanomiya palace site
- 377 clay horse; Asuka/Nara period; Funahashi site
- 378 clay horses; Ancient Age?; Suita marshalling yard site
- 379 clay horse; Nara/Heian period; Syukunosyo-nishi site
- 380 flame of well made of Sue ware; Early Nara period;
Kawarajo site
- 381 mold of bell of a Buddhist temple; Late Heian period;
Tokudaiji site
- 382 lamp stand incised with era name; Late Heian period;
Kan'onji site
- 383 lamp stand incised with characters; Late Heian period;
Kan'onji site
- 384 strap end; Early Heian period; Nagahara site
- 385 roundish belt fitting; Early Heian period; Nagahara site
- 386 roundish belt fitting; Early Heian period;
Osaka Castle site
- 387 rectangular-shaped belt plaque; Early Heian period;
Sojiji site
- 388 red-painted stone coffin; Asuka period;
Dasudan tumulus No.1
- 389 dressed-stone of tuff; Nara period; Komagatani
- 390 failed stone object; Ancient Age; Mukudan quarry site
- 391 stone body warmer; Late Heian period; Aomadani site
- 392 wooden ritual paraphernalia; Asuka period;
Naniwanomiya palace site
- 393 wooden clog; Asuka period; Syakudo site
- 394 wooden ladle; Nara period; Komagatani site
- 395 wooden comb; Early Heian period; Sojiji site
- 396 wooden human-shaped effigy; Middle Heian period;
Tamakushi site
- 397 votive tablet picturing a horse; Asuka period;
Naniwanomiya palace site
- 398 wooden writing tablet unearthed from layer No.16;
- Asuka period; Naniwanomiya palace site
- 399 wooden writing tablet No.11; Asuka period;
Naniwanomiya palace site
- 400 wooden writing tablet No.1; Asuka period;
Naniwanomiya palace site
- 401 wooden writing tablet No.2; Asuka period;
Naniwanomiya palace site
- 402 wooden writing tablet No.4; Asuka period;
Naniwanomiya palace site
- 403 wooden writing tablet No.19; Asuka period;
Naniwanomiya palace site
- 404 pottery with inscriptions in black ink; Nara period;
Komagatani site
- 405 pottery with inscriptions in black ink;
Early Heian period; Komagatani site
- 406 pottery with inscriptions in black ink;
Early Heian period; Sojiji site
- 407 ash-glazed pottery with inscription in black ink;
Middle Heian period; Suita marshalling yard site
- 408 pottery with inscription in black ink;
Early Heian period; Koze site
- 409 potteries with inscriptions in black ink;
Nara/Heian period; Kozakaai site
- 410 pottery with inscriptions in black ink; Heian period;
Kozakaai site
- 411 potteries with inscriptions in black ink; Heian period;
Kozakaai site
- 412 pottery with inscription in black ink; Heian period;
Kozakaai site
- 413 pottery with inscriptions in black ink; Nara period;
Kozakaai site
- 414 potteries with inscriptions in black ink; Nara period;
Kozakaai site
- 415 potteries with inscriptions in black ink;
Nara/Heian period; Kozakaai site
- 416 potteries with inscriptions in black ink;
Nara/Heian period; Kozakaai site
- 417 pottery with inscriptions in black ink; Heian period;
Kozakaai site
- 418 pottery with inscriptions in black ink; Nara period;
Kozakaai site
- 419 pottery with inscriptions in black ink,
pottery with human face in black ink; Nara period;
Osaka Castle site
- 420 pottery with human face in black ink; Nara period;
Nishi'oi site
- 421 pottery with human face in black ink; Late Nara period;
Kozakaai site
- 422 pottery with human face in black ink;

- Nara/Heian period; Kozakaai site
- 423 pottery with human face in black ink;
Early Heian period; Yamatogawa-imaike site
- 424 Medieval potteries; Late Heian/ Kamakura period;
Yamatogawa-imaike site
- 425 grave goods from wooden coffin;
Kamakura/Muromachi period; Amabe site
- 426 Medieval potteries; Late Kamakura period;
Tamakushi site
- 427 vessels made of tile-clay (bowl, small jar, incense
burner?) ; after Late Kamakura period; Tamakushi site
- 428 vessels made of tile-clay (cooking pot) ;
Muromachi period; Aomadani site
- 429 pottery with inscriptions in black ink; Sengoku period;
Kurusuyama-minami burial site
- 430 Bizen cinerary urn; Muromachi period;
Kurusuyama-minami burial site
- 431 Bizen earthenware bowl with inner textured surface,
used as a mortar; Muromachi period;
Saho-Kurusuyama fort site
- 432 Seto water holder; Kamakura period; Aomadani site
- 433 Seto bottle; Kamakura period; Aomadani site
- 434 Seto flower bottle for Buddhist ceremony;
Muromachi period; Aomadani site
- 435 Seto water dropper; Muromachi period; Aomadani site
- 436 Seto-Mino bird-shaped water dropper;
Late Muromachi period; Saho-Kurusuyama fort site
- 437 celadon (cup) ; Late Kamakura period; Sojiji site
- 438 imported glazed ware (pot with four loops) ;
Late Heian/Muromachi period; Aomadani site
- 439 imported glazed ware (plate with arabesque pattern) ;
Muromachi Period; Yamatogawa-imaike site
- 440 comma pattern round eave tile; Late Heian period/
Early Kamakura period; Yamatogawa-imaike site
- 441 round eave tile with Sanskrit character;
Early Kamakura period; Yamatogawa-imaike site
- 442 round eave tile with lotus motif;
Late Heian/Early Kamakura period; Kyarahashi site
- 443 round eave tile with pattern of jewels in flame;
Kamakura/Muromachi period; Kyarahashi
- 444 round eave tile with incised characters;
Kamakura period; Kyarahashi site
- 445 flat eave tile with vine scroll; Late Heian period/
Kamakura period; Yamatogawa-imaike site
- 446 flat eave tile with vine scroll; Late Heian period/
Kamakura period; Yamatogawa-imaike site
- 447 round tile incised characters; Medieval Age; Tai site
- 448 flat tile incised era name; Kamakura period;
Kan'nonji site
- 449 round tile incised characters;
Kamakura/Muromachi period; Kan'nonji site
- 450 flat tile with stamp pattern for Five Elements Stupa;
Late Heian/Kamakura period; Kan'nonji site
- 451 flat tile with stamp pattern;
Kamakura/Muromachi period; Kan'nonji site
- 452 Japanese mirror; Late Heian/Kamakura period;
Aomadani site
- 453 Japanese mirror; Early Kamakura period; Tamakushi site
- 454 Buddha image plaque hung on a wall;
Kamakura/Muromachi period; Shinpukuji site
- 455 bronze bell; Ancient/Medieval Age; Mizokui site
- 456 iron daggers; Kamakura period;
Kurusuyama-minami burial site
- 457 iron dagger; Early Muromachi period; Kobatake site
- 458 knife attached to a sword sheath;
Late Muromachi period; Saho-Kurusuyama fort site
- 459 ornamental bodkin; Early Nanbokucho period;
Shinpukuji site
- 460 iron arrowhead; Late Muromachi period;
Saho-Kurusuyama fort site
- 461 strike-a-light; Kamakura/Muromachi period;
Aomadani site
- 462 lock; Sengoku period; Kurusuyama-minami burial site
- 463 adze; Late Kamakura period; Doinoki site
- 464 mold of bell; Kamakura/Muromachi period; Aomadani site
- 465 replica of mold of flanged kettle; Kamakura period;
Amabe site
- 466 mold of a type of Buddhist ritual implement used as a
signal gong for sutra chanting; Kamakura period;
Amabe site
- 467 mold of Buddhist altar paraphernalia; Kamakura period;
Amabe site
- 468 hand mill; Late Muromachi period; Uriudo site
- 469 hand mill; Early Kamakura period; Sojiji site
- 470 stone cooking vessel made of talc;
Late Heian/Kamakura period; Aomadani site
- 471 hand warmer; Muromachi period;
Kurusuyama-minami burial site
- 472 hand warmer; Kamakura/Muromachi period; Tamakushi site
- 473 stone Buddha image behind halo;
Muromachi/Sengoku period; Kurusuyama-minami burial site
- 474 Buddhist stele with Buddha relief;
Muromachi/Sengoku period; Kurusuyama-minami burial site
- 475 Five Elements Stupa; Muromachi period;
Kurusuyama-minami burial site
- 476 unfinished part of Five Elements Stupa;
Kamakura period; Kusunoki quarry site
- 477 unfinished part of Five Elements Stupa;

- Kamakura period; Mukudan quarry site
- 478 unfinished part of Five Elements Stupa;
Kamakura period; Kusunoki quarry site
- 479 unfinished stone objects; Kamakura period;
Kusunoki quarry site
- 480 clay weight; Kamakura period; Amabe site
- 481 roof tile shard converted to weight;
After Medieval Age; Koze site
- 482 clay figure; Sengoku period;
Kurusuyama-minami burial site
- 483 clay Buddha image; Muromachi period; Kyarahashi site
- 484 stupa-shaped wooden board; Muromachi period;
Mizokui site
- 485 stupa-shaped wooden board; Muromachi period;
Tamakushi site
- 486 stupa-shaped wooden boards; Kamakura/Muromachi period;
Ikejima-Fukumanji site
- 487 stupa-shaped wooden boards; Early Muromachi period;
Ikejima-Fukumanji site
- 488 stupa-shaped wooden board; Muromachi period;
Ikejima-Fukumanji site
- 489 shingles with sutra inscription; Muromachi period;
Ikejima-Fukumanji site
- 490 wooden writing tablet; Muromachi period;
Ikejima-Fukumanji site
- 491 wooden writing tablet; Kamakura period; Tamakushi site
- 492 votive tablet picturing a horse; Late Muromachi period;
Koma site
- 493 straw slippers; Early Muromachi period; Tamakushi site
- 494 lacquer ware (cup) ; Kamakura period; Tamakushi site
- 495 lacquer ware (cup) ; Muromachi period; Tamakushi site
- 496 lacquer wares (cup) ; Kamakura/Muromachi period;
Tamakushi site
- 497 lacquer ware (cup) ; Muromachi period; Tamakushi site
- 498 headgear worn by nobles in court dress;
Kamakura period; Kurusuyama-minami burial site
- 499 headgear worn by nobles in court dress;
Kamakura period; Kurusuyama-minami burial site
- 500 Hizen blue-and-white porcelain (plate) ;
Early Edo period; Asada Han residence site
- 501 Kyo-yaki glazed stoneware with stamped characters (cup) ;
Middle Edo period; Asada Han residence site
- 502 Kyo-yaki glazed stoneware with stamped
characters (bowl) ; Late Edo period;
Asada Han residence site
- 503 stone china with willow pattern made in Europe (plate) ;
Late Edo period; Asada Han residence site
- 504 Premodern potteries; Early Edo period;
Asada Han residence site
- 505 Premodern potteries; Middle Edo period;
Asada Han residence site
- 506 Premodern potteries; Late Edo period;
Asada Han residence site
- 507 Premodern potteries; Final Edo period;
Asada Han residence site
- 508 ink-inscribed Haji ware (plate) ; Azuchi-Momoyama period;
Osaka Castle site
- 509 glazed stoneware with signature written in ink;
Azuchi-Momoyama period; Osaka Castle site
- 510 bronze cup for the ceremony of the esoteric Buddhism;
Azuchi-Momoyama period; Osaka Castle site
- 511 Shino glazed stoneware (lamp dish) ;
Azuchi-Momoyama period; Osaka Castle site
- 512 kiln furniture (sagger) ; Late Edo period;
Asada Han residence site
- 513 kiln furniture (sagger) ; Late Edo period;
Asada Han residence site
- 514 failed blue-and-white porcelain; Late Edo period;
Asada Han residence site
- 515 kiln furniture; Late Edo period;
Asada Han residence site
- 516 roof tile with crest; Edo period;
Asada Han residence site
- 517 round eave tile with Chinese characters; Edo period;
Tokudaiji site
- 518 roof tile with gold leaf; Azuchi-Momoyama period;
Osaka Castle site
- 519 roof tile with gold leaf; Azuchi-Momoyama period;
Osaka Castle site
- 520 parts of body armors and helmets;
Azuchi-Momoyama period; Osaka Castle site
- 521 parts of body armors and helmets (scales) ;
Azuchi-Momoyama period; Osaka Castle site
- 522 decorative accessories for swords;
Late Muromachi/Momoyama period; Osaka Castle site
- 523 decorative accessories for swords;
Late Muromachi/Momoyama period; Osaka Castle site
- 524 bronze pipe; Azuchi-Momoyama period; Osaka Castle site
- 525 sprue-cups; Azuchi-Momoyama period; Osaka Castle site
- 526 clay objects of dog; Azuchi-Momoyama period;
Osaka Castle site
- 527 clay drainage pipes made of tile-clay; Edo period;
Tsudajo site
- 528 lacquer ware (cup) ; Azuchi-Momoyama period;
Osaka Castle site
- 529 lacquer ware (cup) ; Azuchi-Momoyama period;
Osaka Castle site
- 530 lacquer ware (cup) ; Azuchi-Momoyama period;

	Size codes of relics (cm)	
Osaka Castle site		
531 lacquer ware (cup) ; Azuchi-Momoyama period; Osaka Castle site	RD : rim diameter D : diameter	r d : estimated rim diameter d : estimated diameter
532 spatulas for lacquer painting; Azuchi-Momoyama period; Osaka Castle site	MD : maximal diameter BD : bottom diameter	md : estimated maximal diameter b d : estimated bottom diameter
533 part of carpenter' s inkpot; Azuchi-Momoyama period; Osaka Castle site	H : height W : width	h : estimated height w : estimated width
534 wooden lid with characters written in ink; Azuchi-Momoyama period; Osaka Castle site	L : length	ℓ : estimated length
535 wooden shipping tag; Azuchi-Momoyama period; Osaka Castle site		
536 abacus beads; Azuchi-Momoyama period; Osaka Castle site		
537 wooden measuring cup; Azuchi-Momoyama period; Osaka Castle site		
538 balance and weights; Azuchi-Momoyama period; Osaka Castle site		
539 wooden measure; Azuchi-Momoyama period; Osaka Castle site		
540 wooden combs; Azuchi-Momoyama period; Osaka Castle site		
541 beads of Buddhist rosary; Azuchi-Momoyama period; Osaka Castle site		
542 wooden human-shaped effigy; Azuchi-Momoyama period; Osaka Castle site		
543 boat model; Azuchi-Momoyama period; Osaka Castle site		
544 wooden battledore; Azuchi-Momoyama period; Osaka Castle site		
545 go piece, sugoroku piece, dice, shogi piece; Azuchi-Momoyama period; Osaka Castle site		
546 shell with characters written in ink (piece of shell- matching game) ; Azuchi-Momoyama period; Osaka Castle site		
547 wooden mill; Premodern Age; Tai site		
548 pieces of a toilet; Showa period; Osaka Castle site		
549 bricks; Meiji/Showa period; Osaka castle site		
550 iron helmets of Japan Army; Showa Period; Shiki site		
551 iron helmets and parts of gas masks of Japan Army; Showa period; Osaka Castle site		
552 identification tags and neck badges of Japan Army; Showa period; Osaka Castle site		
553 identification tags of US Army; Showa period; Osaka Castle site		
554 flashlights, pencil sharpener, match case; Showa period; Osaka Castle site		
555 glass bottles; Showa period; Osaka Castle site		

あ と が き

本書は、(財)大阪府文化財センターの設立30周年記念事業の一つとして刊行された。

センター設立の1972年は、札幌冬季オリンピックに始まり、田中内閣による「日本列島改造論」発表や日中国交正常化、グアム島での横井庄一元軍曹保護、浅間山荘事件、沖縄返還、岡本公三のテルアビブ空港乱射事件、川端康成自殺といった数多くの社会的出来事が起こった。加えて、考古の世界では奈良県高松塚古墳、同纏向遺跡、愛媛県古照遺跡の発掘というように、いま人生半ばを過ぎた文化財関係者にとっては脳裏に刻銘された1年であったといえる。またその前後、岡本おさみや吉田拓郎が、それまでの音楽人と違った、人格としての個と社会・政治的事象とのバランスを模索した唄づくりを展開しつつあった。まさにこの激動の時期ともいえる頃に産声をあげたわけだが、当センターの誕生こそ、本業界における特筆すべき事項に含めてよいであろう。以降、幾度かの統合と組織名変更をくり返し、いまや総勢120人を越える大所帯となっている。

さて、本書は、1995年刊行本に続く第2冊目の『発掘資料精選』にあたる。いわば、センターにおける本格的な“財産目録・遺物編”の第二弾となる。幸いにも、既刊先書は内外ともに至便な書物として好評を博し、とりわけ対外的には各種展覧会の遺物借用等で頻繁に重用される事実がこれを証明している。今回は、主として(財)大阪府文化財調査研究センター時代の7年間の遺物特選になっているが、それ以前の20余年間の資料を盛り込んだ第1冊目に引けを取らない多彩な内容になった。この事実は、一面では近年の当組織の健全ぶりを顕示しているとするには不遜であろうか。このように加速度的に累積しつつある“財産”を、真に直截的で有効的に活用・考究できるのは、当センターに属する我々自身である。そして、それこそが本来的責務・業務の一端であるという原点を、これまでの内省と自戒をこめ真摯にあらためて認識すべきであろう。

ともあれ、本書も先回と同様に幅広く活用されんことを唯々願うばかりである。

2002年11月11日

(財)大阪府文化財センター設立 30周年記念
『撰河泉発掘資料精選Ⅱ』刊行委員会

執筆	赤木克視	阿河大介	秋山浩三	朝田公年	後川恵太郎	新垣香苗
	石神幸子	一瀬和夫	市村慎太郎	市本芳三	井藤暁子	伊藤 武
	井藤 徹	井上智博	入江正則	植村 悟	江浦 洋	大庭みゆき
	岡戸哲紀	岡本圭司	岡本茂史	奥村茂輝	小野亜由美	小野久隆
	金光正裕	亀井 聡	川瀬貴子	河端 智	河村恵理	木嶋崇晴
	國乗和雄	黒須亜希子	合田幸美	小暮律子	後藤信義	駒井正明
	佐伯博光	阪田育功	三宮昌弘	鹿野 墨	信田真美世	島崎久恵
	清水 哲	新海正博	鈴木雅美	瀬川 健	田中一廣	田中龍男
	田之上裕子	手島美香	寺川史郎	中尾智行	永野 仁	中村淳磯
	中村ますみ	南條直子	西村 歩	仁田恵子	野口 舞	橋本高明
	畑 暢子	服部みどり	廣瀬時習	福岡澄男	藤田憲司	本間元樹
	松尾 実	松尾洋次郎	三好孝一	村上富喜子	村上年生	森本 徹
	森屋直樹	森屋美佐子	山口誠治	山元 建	若林邦彦	若林幸子
写真	上野貞子	片山彰一	立花正治			
編集	福岡 秋山	三好 伊藤	中尾			

撰河泉発掘資料精選Ⅱ

発行 財団法人 大阪府文化財センター ©

2002.11.27 〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁21番4号

TEL 072-299-8791/FAX 072-299-8905

印刷・製本 株式会社 中島弘文堂印刷所

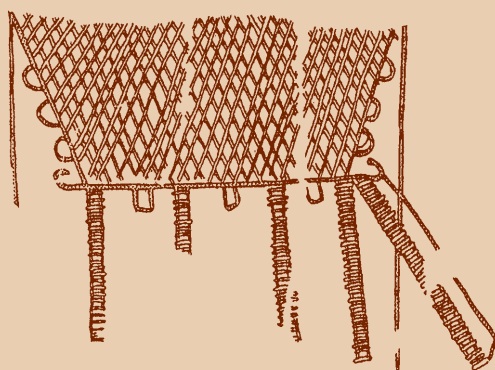
表紙 シンボルマーク：美園古墳家形埴輪

裏表紙 カット：池上曾根遺跡建物絵画土器（本書Ⅱ部090参照）

Selections of Archaeological Relics in Osaka II

-In the Possession of Osaka Center for Cultural Heritage-

2002



OCCH

Osaka Center for Cultural Heritage